

覆刻 正宗敦夫「穂浪だより」「ふぐらにこもりて」  
(金光図書館報『土』掲載) 付、索引

小川 剛生

\*キーワード

書誌学 岡山県郷土文学 湯浅常山 小原大丈軒 木下幸文 香川景樹

ここに紙面を借りて全文を覆刻するのは、正宗敦夫晩年の随筆である。

敦夫は、一八八一年(明治十四年。以下西暦とする)十一月十五日、岡山県和気郡伊里村(現・備前市)大字穂浪の旧家に生れた(戸籍上は同月三十日)。二歳上の兄に忠夫(白鳥)がいる。高等小学校を卒えると家業を継ぐが、国史国文に親しみ作歌に励んだ。若い敦夫は桂園派に惹かれ、当時岡山医専教授であった歌人井上通泰の弟子となり、生涯にわたり師事した。

敦夫は郷土の儒者・歌人の事績を明らかにすることに最も意を用いた。たとえば通泰とともに岡山藩儒、熊沢蕃山の著作を集成し、『蕃山全集』の編纂に当たった。また同地の桂園派歌人たちの詠草・日記・書簡などを蒐集し、研究した。こうして集積された膨大な資料の保存と活用につき熟慮し、一九三六年、生地に財団法人正宗文庫を創立する。文庫に所蔵される典籍は、最終的に約七千点二万冊にのぼった。

地方にあり、書物の閲覧の不便に抗して学問を続けた敦夫は、資料の覆製・影印・翻刻による恩恵の大きさも痛感していたようである。みずからも未刊の作品を出版することに熱心であった。それはいくつかの予約出版事業の企てを経て、与謝野寛・晶子夫妻との共編たる『日本古典全集(一九二五〜四四年)』へと発展した。同じく索引の研究上の効用にも自覚的であった。集中すべての表記と訓とを明らかにすべく、独力で『万葉集総索引』(日本古典全集刊行会、一九二九〜三一年)を編纂、刊行している。

戦後は経済混乱や眼疾に悩まされつつも、新たに金葉集の研究に着手、五二年四月には岡山に新設されたノートルダム清心女子大学の教授に就任した。五八年十一月十二日、自宅で逝去した。享年七十八。

敦夫の業績は国文学研究史上に不朽のものであるが、余りにも利他の精神に徹していた。書物の校訂や索引の編纂といった手間のかかる仕事

に精力を傾注し、自身の学問上の発見を世に問うことにはほとんど関心がなかったように見える。著作は没後にまとめられた『金葉和歌集講義』（自治日報社、一九六八年）を除けば、まとまった論文集として一書となることはなく、典籍の解題、雑誌への依頼原稿、新聞記事などの小文が主である。吉崎志保子による、驚異的な完成度を持つ書誌もあり、著作集刊行も一度ならず企てられたと仄聞するが、それも実現しないままであった。

幸い、敦夫は晩年、金光図書館報『土』に、文庫所蔵の貴重古典籍の資料価値、岡山の儒者・歌人の生涯や作品など、関心のある話題について、自由なスタイルの考証随筆を連載している。まず一九四九年二月、『土』二号に「愛書二三」を執筆し、五〇年四月の九号からは「穂浪だより」および「ふぐらにこもりて」との副題を冠して連載を開始、計四一回に及んだ。「穂浪」は住居と文庫の建つ地、「ふぐら」はもちろん文庫を指す。今回、これらを一連のものとして覆刻し、隠れていた敦夫の学問に光が当たるようにしたいと思う。

掲載誌『土』は金光教の教義に基づく命名である。第四代教祖の金光鑑太郎（一九〇九〜九一。号は碧水。窪田空穂門下の歌人でもある）は、図書館建設を推進、二十二年四月、教団本部の地に金光図書館を開館させた。『土』はその翌年十二月に創刊されている。B5判、毎号二四頁、七五〇部を隔月に発行している。紙面は縦書き四段組、敦夫の随筆は一編につき二〜三頁を占める。

県立図書館の戦災による焼失、書物の欠乏の中で、金光図書館は県下

有数の文化的拠点となっていたらしい。『土』も単に信者や地域住民のためのPR誌にとどまらず、有山松・小野則秋・竹林熊彦といった、図書館学の大家の文章を毎号のように掲載し、すぐれた読書文化雑誌として異彩を放っている。編集・発行は、司書の山縣二雄が創刊以来三十年にわたり担当した（編集後記の（Y）がその人である）。

なお、敦夫と金光図書館との関係は、息甫一によれば、「戦争のため県済世顧問に推挙せられ、再々出岡す。為に歌人金光鑑太郎氏と意気相投じ、死するまで厚き友情を受けし事」に始まるという。発足したばかりの金光図書館の人々が、郷土文学研究の第一人者である敦夫を敬愛し、随筆の内容に注文を付けることもほとんどなく、自由に執筆させていたことは容易に窺える。とくに山縣は敦夫の功績を称美してやまなかった。一九五五年十月、正宗文庫設立二〇年を祝し、金光図書館で「万葉展と万葉講演会」が開催され、『土』四〇号の編集後記は、「日本古典全集、萬葉集総索引、類聚名義抄漢字索引など古典学の上のうちたてられた正宗先生の業績は図書館人の一人として敬仰の極であります。正宗文庫二十年を共に慶賀させていただきます。」と讃えている。没後一年、『土』六〇号（一九五九年十一月）は、「正宗敦夫翁『土』寄稿目録」を編んで捧げている。晩年の敦夫がこのような理解者と発表の場を得ていたことは、後人にとっても幸いであった。

それでは、全四一回にわたった随筆の内容について触れたい（四三四〜五頁に目次を掲げた）。主要な話題としては、熊沢蕃山、湯浅常山、小原大丈軒（元義）など岡山藩に仕えた儒学者の伝記考証、同じく土肥

経平、野村尚房、藤井鉄石といった国学者の著作や旧蔵書の紹介、木下幸文、菅沼斐雄、高橋正澄など備前・備中出身の桂園派歌人の家集詠草、日記、古典注釈書などの書誌的研究が主柱であろう。そこに井上通泰・山田孝雄など師友の回想、そして文庫蒐集の貴重資料の紹介が挟まれ、また当時取り組んでいた金葉集や節用集の研究についても触れることがある。稀には自作の短歌を寄せている。

文人・儒者の伝記は、人物の書簡を縦横に引用し、それをして語らしめるスタイルであり、これは何度か親しく面晤する機会があった森鷗外の史伝の方法が念頭にあった。

元來幸文は我が縣下隨一の歌人で有ると私は信じてゐたので、くはしい傳を書きたかつた。森鷗外博士筆で、傳記伊澤蘭軒、澁江抽斎、北條霞亭などが出たが、あの形で書きたかつたので、鷗外博士に資料の整理はどう云ふ風にしてゐられますかと教を乞うた事もあつた。いよ／＼の段で、小野の名家の方にある書翰の巻物の写しを取る事が出來ず、(其頃は無論節君(注・小野。敦夫友人)はとつくに故人であつた)其が私の手許になければ書けない。(四五四頁)

読者が飽きるだろう、と行って話題を転じたり、あるいは論文ではなく、研究的な内容ではない、と再三断っているが、実際には漢文を含めた原文の引用も多く、かなり専門的である(さすがに途中からは漢文には返り点を付けるようになってゐる)。その意味でもやはり新聞紙朝刊に掲載され続けた鷗外の史伝を思わせる。なお、面白い資料に言及すると、それを契機に話題が脱線することも多く、そのため一回では終わら

ず、次号へ次号へと続いていくのもご愛敬である。

もとより、敦夫が取り上げた人物の伝記、あるいは数々の資料についての書誌的な見解は、多くその後の研究でも進展していない。もし、敦夫が光を当てることがなければ、人物はそのまま放置され続け、資料は散逸の憂き目に遭つたこともまた容易に察せられるのである。いまだ学問的な意義を失っていないのであるが、対象への私的な共感が迸ることもままある。

高橋正澄が目を病で、晩年はほとんど盲に近かつた。大きな字で著述をしてゐる。短冊は行もゆがみて乱れがちであつた。私達は「さぐり書だ」など云つて嬉んで愛蔵したりした。自らが今此原稿もさぐり書であるが、悲惨である。しかし何時失明するか知れぬと思ふと、さぐり書でなりと書きつけて置きたい事が多い。(四九四頁)

健康の衰えをも自覚しての語り口は、やはり鷗外最後の隨筆「古い手帳から」(一九二二年十一月～二二年七月、『明星』に連載)を何となく想起させるところもある。

また、歌人の伝記では、自身の見識を随所に挿むのも有益である。

井上(注・通泰)先生が常に云つてゐられた事であるが、古歌を解釈せんには自らが作歌に苦勞せねば眞の解釈は出來ない。景樹が歌の講釈のすぐれてゐる点があるのは、彼が作歌の力量が多分に有つたが爲である。自ら作歌せずして古歌を評釈しても、其れでは其の歌の眞を發揮する事は難い。(四六四頁)

(景樹が門人の説を徴した事を紹介して)かゝる事は師も弟子も

学問の進むことで、弟子の質問が元になつて新説を得る事もあり、在來の説を改めねばならぬ事も出来てくる。篤実なる門人、秀才たる弟子を多くもつてゐる人は現代でも学問上に大に益のある事である。(四七〇頁)

何より、敦夫の文章に共通して横溢するのは書物への愛情である。

私が或時さる岡山市の古本屋へ立寄ると経平関係の本本もが少々有つた。まだ何か無いかと聞くと備前名所記等が有りましたが先日東京のさる本屋へ売りましたと云ふ。其は惜しい事をしたが、あの祭ではだめだなど残念がると、本屋は平気なもので何いづれ目録に出ますよと云ふ。其もさうだが、其内に誰かにさらはれねばよいが、と氣に成る物の売主から交渉させてもうまく行くかどうか知れぬ。とにかく運は天まかせとして目録を待つ事にした。餘り月も経ないで目録が来た。東京の本屋さんは自筆とも何とも考へなかつたと見えて、大した口銭も取つて居らず無論高値では無い。電注にしようかと思つたが、安い本を電報などで騒ぐとスツコメられる例があるので、平氣を無理によそほつてハガキで注文して又天運任せとした。若い時の事で有るから実に心配でたまらなかつたが、日ならずして手に入つた。之は私としては大成功の方で有る。珍籍良書は中々田舎者の手に落ちるものではない。若い時から今以て実に一生懸命の努力をしてゐる。(五〇四頁)

こういった飾らない告白に、書物好きは深い共感を覚えるのではないか。このほか、稀書蒐集にまつわる成功譚失敗譚、随所に語られるが、

敦夫は決して単なる本道楽ではない。その蒐書は、本というものはともかく失われやすく、敬愛する郷土の歌人・学者たちが生涯かけてものした著作を何としても後世に伝えたい、という使命感から出ているのである。それにしても同じ明治中期生まれの蔵書家や書誌学者に随想の筆を振つた人は何名かいるが、敦夫の文章はまことに自然体で恬淡、自慢も銜いもなく、妙に飄々としているのは人徳なのであろう。その味わいは、兄の忠夫(白鳥)の冷笑毒舌とはまったく異なる。

ところで、いくつかの証言によれば、敦夫は白内障の進行に悩まされつつ、『土』毎号の原稿を苦勞して執筆していたという。

此の稿は書けば限りも無く長くなる、伝ふべき事、面白い事がとても満ちてゐる。然し此の辺でとめたいと思ふ。全部は何とかして世に出したく、研究もしたい。(四八三頁)

此書に就ては云ふ事、書く事多いが余り専門的に成るから略する。其処で一応筆をおきたいが、今一つ談を添へたい。是れは貧乏な私の心持をさらけ出す様で恥ぢ入るが老日に加はり目もうすいので思つた事は書いて置き度い。談つて置きたい。(五二三頁)

などと告白し、情熱さえ感じられる。決して寡黙な人ではなかつたこと、語つても尽きることのない豊富な話題と、高い学識はもちろん、随筆としてみても魅力的である。

一九五八年一月の、『土』五五号では、紙面が正宗敦夫追悼に宛てられる。「あのときこのこと」を寄稿した友人鈴鹿三七はこのように記した。

尚最後に一言お願いしたいことは貴誌「土」に連載された郷土資料の記事は一冊にまとめて翁の追福として頂き度い。翁も「土」の原稿を書かねばならぬとよく話して居られた。恐らく貴誌の原稿が最後であったであらう。

六十五年を経てこのことが実現できた。敦夫の再評価を期待したい。

#### 附記

覆刻にあたっては、著作権継承者である令孫正宗千春氏の御許可をいただいた。また金光図書館では、次長の金光研治氏・岡田清華氏より数々の御教示をいただき、かつ金光図書館における正宗敦夫の貴重な写真を示され、掲載を快諾いただいた。かたがた深謝申し上げる次第である。

なお、本稿は二〇二二年度国文学研究資料館共同研究【特定研究（地域資料）】「正宗文庫の研究」（代表 川崎剛志）の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 井上通泰 『南天莊歌話』 日本古典全集刊行会、一九二六年
- 井上通泰 『南天莊雜筆』 春陽堂、一九三〇年
- 岡山県医師会編 『備作医人伝』 岡山県医師会、一九五九年
- 桂又三郎・横山章 『片上町史』 片上町史編纂委員会、一九五一年
- 東條文規 『私立図書館探訪記』 金光教が作った図書館―「生きてお役に立つ」図書館を掲げた金光鑑太郎の志― ず・ほん編集委員会編 『ず・ほん 図書館とメディアの本』 一六、ポット出版、二〇一一年一月
- 深井紀夫編 『正宗文庫所蔵典籍分類目録』 郷土資料編』 私家版  
一九九五年
- 正宗文庫調査班編 『正宗文庫目録（五十音順、典籍編）』 国文学研究資料館『調査研究報告』 二九号、二〇〇九年三月
- 正宗甫一 『正宗敦夫伝』 『古典研究』 九号、一九八二年三月
- 山縣二雄 『図書館をめぐる日本の近世あわせて岡山県図書館の歴史と年表および金光図書館史稿本』 私家版、一九八一年
- 吉崎志保子 『正宗敦夫の世界 階上階下すべて書にして』 私家版、  
一九八九年

## 凡例

以下は正宗敦夫が『土』に執筆した随筆四一篇の、目次・本文・索引からなる。原文を忠実に覆刻したが、読みやすくするため、以下のような処置を加えた。

### (1) 目次

一、タイトルと『土』の掲載号、刊行年月を一覧した。「穂浪だより」は1〜23、「ふぐらにこもりて」は1〜18まで連載の通番が附されているが、混乱が見られる。「穂浪だより」2に相当する篇には番号がなく、「ふぐらにこもりて」は：3・6・7・8・6・9：となっている（ゆえに実質は一七回となる）。そこで、改めて両者あわせて通し番号の1〜41を冠した。その他、アラビア数字と漢数字、「（ ）」と「（ ）」とが混在したりと、表記の不統一も見られるが、これはそのままとした。

一、通し番号25〜27にのみ、具体的な内容を示すタイトルがない。吉崎志保子著の「著作目録」に従って、その内容を「（ ）」で補った。

### (2) 本文

一、文頭の署名の「正宗敦夫」、末尾の肩書き「正宗文庫理事長」「正宗文庫館長」は略した。

一、和歌二行書きは一行とした。

一、引用は二字下げ、和歌・連歌・俳諧などの詞書はさらに二字下げとした。

一、文中文末の句読点がまま附されないが、これはそのままとした。

一、引用の前後に空行を設けたり設けなかったりするので削除に従った。

一、必要最低限の改行を加えた。「因云」以下はポイント下げで示した。

一、本文の誤りと思われる箇所、説明が必要な箇所は、（ ）に入れて傍書した。

一、引用される典籍・資料で、正宗文庫現蔵のものについては、可能な限り原文との照合を行った。明らかな字句の誤脱は訂正した。また同時期に執筆していた『備作医人伝』と記述内容が重なるものについては、こちらも参照した。

### (3) 索引

一、本文に登場する人名・書名・作品名を主たる対象とし、所在は通し番号1〜41により示した。資料引用中のものは原則省いた（敦夫が解説を加えたものは採った）。

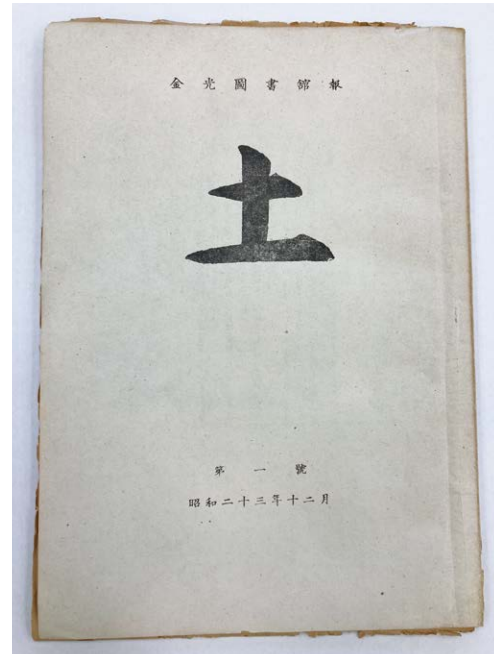
一、人名は本文に用いられるか、通行する呼称により姓名で立項し、主たる異称を（ ）に入れて示した。書名では著者を（ ）で示し、個別の伝本に解説が及ぶ場合は枝項目によって示した。近代の著作は『 』に入れて区別した。

一、適宜見よ項目を立てた。

一、特に詳しい説明がある場合は番号をゴチックで示した。



旧金光図書館玄関の正宗敦夫（1951年5月12日）。  
金光鑑太郎（金光図書館長）、山縣二雄（図書館司書）、  
佐藤金造（元金光中学〔現金光学園〕校長）・さく夫妻と共に。



『土』創刊号（1948年12月刊）  
表紙



金光図書館主催萬葉講演会にて  
（1955年10月30日）



金光図書館館長室にて  
（1955年7月12日）

## 目次

- No. 題 『土』の号数 年(西暦下二桁)・月
- 1 愛書二三(正宗文庫収蔵) 2号 49・2
- 2 穂浪だより(二) 長流の歌仙抄―出版屋のいたづら 9号 50・4
- 3 穂浪だより 南條淡庵の應兵記 10号 50・6
- 4 穂浪だより(三) 焚餘稿と常山樓集 11号 50・8
- 5 穂浪だより(四) 先君子與仲龍書(一) 12号 50・10
- 6 穂浪だより(五) 吉備和歌集 13号 50・12
- 7 穂浪だより(六) 木下幸文物語(一)―著書を中心に― 14号 51・2
- 8 穂浪だより(七) 木下幸文物語(二) 著書を中心に―万葉集の註 15号 51・4
- 9 穂浪だより(八) 木下幸文物語(三) 著書を中心に―万葉集の註 16号 51・6
- 10 穂浪だより(九) 木下幸文物語(四) 著書を中心に―万葉集の註 17号 51・8
- 11 穂浪だより(10) 木下幸文物語(五) 著書を中心に―古今集愚案 18号 51・10
- 12 穂浪だより(11) 木下幸文物語(六) 著書を中心に―百人一首註 19号 51・12
- 13 穂浪だより(12) 木下幸文物語(七) 著書を中心に―土佐日記 20号 52・2
- 14 穂浪だより(13) 吉備和歌打聞 21号 52・4
- 15 穂浪だより(14) 先君子與仲龍書(二) 22号 52・6
- 16 穂浪だより(15) 先君子寄仲龍書(三) 23号 52・8
- 17 穂浪だより(16) 先君子寄仲龍書(四) 24号 52・10
- 18 穂浪だより(17) 幼悟家書 25号 52・12
- 19 穂浪だより(18) 菅沼斐雄歌集に就て 26号 53・2
- 20 穂浪だより(19) 僧澄月の家集と高橋正澄の家集 27号 53・4
- 21 穂浪だより(20) 高橋正澄の家集(続き) 28号 53・8
- 22 穂浪だより(21) 井上通泰先生をしのぶ 29号 53・10
- 23 穂浪だより(22) 土肥経平の著書ども(一) 30号 53・12
- 24 穂浪だより(23) 土肥経平の著書ども(二) 32号 54・5
- 25 ぶぐらにこもりて(1) 「雪の下芽」・玄賓上人の泥仏 35号 55・1
- 26 ぶぐらにこもりて(2) 「俊休夜話・学窓劄記・名所百首(鳥居小路経厚)の解題」 36号 55・3
- 27 ぶぐらにこもりて(3) 「蕃山先生の集義外書の残簡その他」 37号 55・5
- 28 ぶぐらにこもりて(6) 正宗文庫設立二十周年に因みて 39号 55・9
- 29 ぶぐらにこもりて(7) 正宗文庫設立二十周年にあたりて(2)



- 40号 55・11
- 30 ぶぐらにこもりて (8) 池田綱政公筆の卜養狂歌 41号 56・1
- 31 ぶぐらにこもりて (6) 本といふもの 胡沙ふく千両 42号
- 56・3
- 32 ぶぐらにこもりて (9) 大文軒譜は談る (一) 43号 56・7
- 33 ぶぐらにこもりて (10) 大文軒譜は談る (二) 44号 56・9
- 34 ぶぐらにこもりて (11) 大文軒譜は談る (三) 45号 56・11
- 35 ぶぐらにこもりて (12) 「金葉集の研究」について 46号 57・1
- 36 ぶぐらにこもりて (13) 大文軒譜は談る (四) 47号 57・3
- 37 ぶぐらにこもりて (14) 大文軒譜は談る (五) 49号 57・7
- 38 ぶぐらにこもりて (15) 清園詞草獲得 50号 57・9
- 39 ぶぐらにこもりて (16) 閑話雑録 51号 58・1
- 40 ぶぐらにこもりて (17) 傷寒論圓機 53号 58・7
- 41 ぶぐらにこもりて (18) 画賛二川相近今様歌絵巻 54号 58・9

※〔 〕内は一覧のために補ったもの。

1 愛書二三（正宗文庫收藏）

正宗文庫藏書の二三に就ていさゝか解説を試みようと思ふ。ある人が正宗文庫は正宗氏の書齋の延長であると云はれた事がある。實に其の通りであつて藏書が圖書館の形を整えていない。或種の本は全く缺けているが、其れは致し方がない。私が研究外の書籍はほとんど收藏されてないから、文庫利用者に取つては、實に役立たない文庫であるとも云ひ得る。元來が圖書保存が目的で設立せられたのであつて、現代的、普遍的ではないからである。したがつて私にしては此の文庫の本は一冊毎に愛執の煩惱離れ難きものであるとも云ひ得る。今其の内郷士書の二三を取り出でて愛玩しよう。

○

西山梅翁<sup>点</sup>兩吟集 美濃横 半切一冊  
嵐及定直<sup>口</sup>

延寶五曆<sup>巳</sup>五月吉日

深江屋太郎兵衛<sup>粹</sup>

岡本胤及はわが里近き片上の人である。谷口重以の編纂せる「百人一句」に「備州片上住岡本胤及、一ふしに千代をこめたりうたひそめ」と出ている。此百人一句は寛文七年の刊本で斯かるたぐひの本の嚆矢として尊重せられる本である。我が縣下で此の集に掲載せられたのは此の人のみである。縣下俳諧の先輩であつて、鉤屑等の著者である。此の胤及の傳記の参考になるのは此の書の定直の序文と宗因の跋であるが長くな

るから今は掲げない。此の書は胤及と定直の連句であるが、胤及が途中で歿して功を終えなかつた。其を宗因に見せて点を乞うた。宗因は卷末に七句ばかり自からの句を加え、跋を添えたのである。此の書は希觀書中の希觀書である、

○

神典皇摸 半紙形木活本 壹冊

藤本鉄石の著である。羽田野敬雄（三河國人）が小野正邇に木活版で出版させた本である。其跋に

此一巻は吉備人鉄石藤本眞金主がものしてすり卷となし先 朝廷にさゝげ奉り諸人にもひろくほどこしてんとはかれるなるをゆくりなく都辺にこと有て刊板もやき失ひ其身も十津川にていさぎよく身まかりしはいともうれたき事になんざるを其教子都人伊藤祐光といふがひそかに写持來ておのが文庫に納めたるを吾友小野正邇が活字板をつくれるをりにあへればそをいやはじめに物して文庫に奉り同志の人にもしめさんとすなるはいとくいさをしきまめ業にこそそを悦び思ふ心のをろを聊しりへにかくなん。

明らかにをさまると改まる霜月のうの日、

七十余一の翁羽田野たか雄

とあるにて此の書、版になれる故由も、其前に整板のなりて有りし事も知らるゝが、其の整板本を得てしがと思うがまだ見る事も得ないが、此木活本もたやすくは見る事も出来ない本である。私が愛翫おくあたはざる本の一つである。此の書の事は敬雄ぬしが机上日記に

こは備前人藤本津之介眞金<sup>〔附資料〕</sup>鉄石<sup>〔附資料〕</sup>が作れるにて豊岡君によりて學習所より民間に弘めんと板行して一千卷出来るを癸亥（○文久三年）八月十八日京都の騒動に焼失われ同人も同九月廿四日大和國鷲家村にて討死して失けるをこたび其門人京人伊藤<sup>〔下〕</sup>が人に写させて文庫に納めたる也

とある。

○

藤本鉄石の著書の事を云つた序に正宗文庫收藏の鉄石自筆写本類の事を少々述べて筆をとめる事とする、

澹齋先生畧譜附佐枝氏傳 壹册

澹齋は申迄もないが長沼宗敬で兵要録の著者である（此の書の事は後に云ふ）其の書の内に蕃山先生の事が出ている、

澹齋明石ニ於テ暇ヲ乞候節若狹守殿ニ對シ少モ御恨無之御家老中間四人ノ輩トカツテ不和ノ儀無之尤立身ノ望ニテ御暇不申候趣誓書以申達候但シ若狹守殿其頃滋山見遊（眞金按ニ蕃山息游ナルベシ是則了芥先生ナリ○頭註）ヲ明石へ御招儒學ヲ御勤候見遊若狹殿へ申候ハ武術ハ長沼外記罷在候間御聞可然候儒術ハ拙老御相談仕ルヘキ由ノ處ニ外記見遊學術相違ニ附存念モ有之御暇申候ヤト其以後人々推量仕候臨終ニ若狹守殿へ書置存念ノ義モ有之内ニ御學問如此有之タキト申上タル趣若狹守殿御承引ナサレ其後明石へ熊澤モ（○頭書不カ）被參候

とあるのは蕃山傳資料として注意に値する、

兵要録 二十二卷 十一本

此の書は木活版（天保十五年）もあつて世に流布している。とにかく鉄石が兵學を研究すとて骨折つて筆写した處に私は大に價値を認めて愛翫かないのである。八卷の終に嘉永七年甲寅十月写源眞金と書いている餘白に蘭の花など樂書をしているのも面白い。此書に添えて兵要續録、兵要録補直などがある。其他に、家大人手写之書也可寶愛 眞金拜志と書いた「有斐録」や、先考手澤書也藤本眞金識と書いた「堀内傳右衛門覺書」など種々收藏している。總て私の愛翫本である

（昭和二十三年十二月二十八日病中執筆。思うにまかせぬ点がある）

## 2 糖浪たより（一） 長流の歌仙抄―出版屋のいたづら

下河邊長流の著述に「歌仙抄」上下二卷の刊本がある。佐々木信綱博士はかつて契沖と長流と云ふ文を書かれて

歌仙抄は、三十六歌仙の歌に詳註を加へたものでこれは萬治二年の刊本であるが、京都市上賀茂神社の今井似閑納本中に唯一部あるのみである

と云はれた位の希觀本であるが、我が正宗文庫には友人彌富破摩雄君所藏の秘本を譲り受けた内に此の本がある。此の書は版下は長流の自筆であつて、朝日新聞社刊の長流全集の解題にも

本書の自筆本は、その存在が明かでないが、著者の自筆版下によつ

て開板した刊本がある

と云つてある。當時の註解としては實に出色のものたるを失はない。其の事に就ては後に少しく研究的に述べる事とするが、彌富君は「よぶこ鳥の條にては古傳の笑ふべきを説破しながら『誰をかもしる人にせん』の條にては『秘藏のをしへ侍るなり口傳をうくべし』など云ひて五十歩して百歩を笑へるなどは全く當時の弊風を脱却し得ざるの証、彼れと契沖との間には少からざる徑庭のあるを知らざるべからず」と云はれたのは尤千萬な事である。契沖の研究は實に堂上方の傳授學問とは根本的に異なり、古文獻に基礎を置いて歸納的に結論している点は實に偉觀であるが、契沖が長流に私淑して其の御かげを蒙つた事は大きい。長流に源を發して契沖が大成したと云つてもよいのである。傳授破壊は色々の人々によつて大成したのであるが、傳授と云ふ事が非常の勢力を持つていて、今日からは想像する事も出来ない位である。(例へば細川幽齋、田邊籠城の時、古今傳授の亡びん事をなげかせ給ひ、叡慮によりて開城せしめられしなど)自然一朝一夕で其を脱却する事は出来なかつたのである。尤も本居宣長ですら字音假名用格に才をア行音に屬する考證をした末に「是は予が始めて考へ出せるところなり。可秘々々」と云つている。つまり學問や書籍が秘密的に取扱われるのは我が國はもとより、東洋の習慣かも知れない。但し長流が「誰をかもしる人にせん」云々の歌の註に「秘藏のおしへ侍る也。口傳をうくべし」と云つているが、此の秘説、而して「口傳」は在來の秘説口傳の意ではないので、自己胸中に猶秘藏の説あり、筆紙に盡し難い、口授に譲ると云ふ位の事を斯くの如くに云

つたのと見るべきではあるまいか。誰をかもの歌を評釋して

是れは興風老後によめる述懐のうた也。歌の心は壯年の時よりなれたる友は、いくらばかりか有けん。皆世上のうつりかはるならひにて、今老後に及ぶまで、其ちぎりかはらずしていひかはすは壹人もなし。殊に老者は人にいとほる、物なれば、亦今さら友をもとむるによしなし。よつて誰をかもしる人にせんとよめる也。さてたか砂の松は見來りてかはらず久しきものなれ共、是もわが友としてむかしをかたらむものにあらねばうちわびて思ふやう、かやうにわれと、もに年をつみたる松さへ、むかしの友にあらねば、其外誰をか友とはせんと也。世の人の心の皆時めくにうつろひてかはり行ものなれば、まことの心友と頼むべきは終になかりけりといふことを、老て後に思ひしる心なり。感情かぎり有べからず。……猶々此うたには別して秘藏のおしへ侍る也。口傳をうくべし。

紀のつらゆきがうたに

いたつらに世にふるものとたか砂の松も我をや友とみるらん。

又藤原爲頼

いつくにか身をはよせまし世中に老をいとはぬ人しなれば」

と老後の感慨共鳴限りなき事を云つたので、類歌もよく似合へるを引き出で實に名評釋である。長流の晩年の心境、人の歌を釋して己をあらはしたものと云つてもよい。我々ども年老いはてたる身に此の長流の言葉は共鳴胸をうつものがある。猶此書の評釋は余程うまく出來ている。敏行の「秋きぬと目にはさやかに見えね共」云々を註して「目にはさやか

に見えぬといへる尤おもしろし。眼にそれと見とめらるゝ色はなけれど風声の思の外におどろかすよといふ心なり」と解き、紀友則の「夕さればさほの河原の川風に友まとはしてちどりなく也」を釋して「其所にのぞみて千鳥のこゑをきく時節のていをひたてたるばかりにて、をのづから感情はこもれるもの也。よく心にしめて吟味すべしとぞ」と云へるなど其當時の評釋として實にすぐれていると思ふ。坂上是則の「みよしの、山の白雪つもるらしふる郷さむくなりまさる也」の註に「故郷寒くとよめる詞何となく舊都のあはれをふくみて感情ふかきうた也。聞えたるまゝなりとて浅く思ふべからず。よくく味ふべしとぞ」なども其の觀賞眼のするどさを顯はしている。右はほんの一二例を擧げたに過ぎぬが大體この調子でよほど進んでいる。以上は本書の内容に少し觸れて見たに過ぎぬが、本書に

寛文六<sup>丙</sup>年稔九月吉日 西村三郎兵衛開刊

と奥書した後刷本のある事は誰もまだ云つていない。私が或る書店で求めた本、是れは田ステ女（六歳にして彼の人口に膾炙せる「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」の吟をなした著名の俳人）が舊藏本で「田氏文庫」の朱印が押してある。尤もこの印は或はあとから押したのかも知れないが、柿本人丸の歌（巻頭）の上に「左」と墨書し、次の貫之の歌の處に「右」と書いているのはステ女であらう。其れはどうでもよいとして、此本は西村氏が求版再刷の折にとつても心ないたづらをしている。「いさ、か管見の趣をもかきくはへおはんぬ。さらに外見有べからず」の次に

萬治<sup>己亥</sup>巳亥八月下旬 下河邊氏注

の一行を削り取つて「寛文六」云々の一行を加へたのであるが、其を削り取ると長流の著と云ふ事が不明になる。下河邊氏註の五字を何の氣もとめずに削りさるのは求版たる事を不明にする爲に萬治云々から削つたのではあらうが、心ないしわざである。幸に初版本が傳はつていればこそ長流の著たる事が明らかであるものゝ、もし後刷本のみが傳はつたら中々著者の確証を得るに困難すべきであらう。此後刷本も余り見かけぬが、著者不明にて田ステ女にも此本は読まれたのだと思ふと出版者のいたづらも恐るべきである。

3 穂浪<sup>たより</sup> 南條淡庵の應兵記

これから正宗文庫珍藏本の事を書きたいと思ふが、なるべくは我が縣下の本を中心として書いて行きたい。

先づ第一に南條淡庵著の應兵記二巻のことから物語る事とせう。淡庵は武將感狀記十巻の著者として人々によく知られてゐる。湯浅元禎の著、文會雜記附録に

熊沢七郎父を八郎と云。八郎は猪太夫が子也。猪太夫は幼名を權八と云。もと松浦侯の士なるが故ありて十五のとき出奔して烈公に事ふ。其後松浦侯大郎に至らせたまひて烈公に相見あり。權八茶を持て出たり。松浦侯熟視ありて烈公にかれは吾がもとにありし者なり。

國を出る時吾あたへたる折紙をひきさきて此折紙を他國に持ちきてそれをたより祿を求る志にあらずと云たりき。無礼の一言なれどもそれは年若くて短慮の故なり。おひさき一志あるわか者なり。懇にさせたまへ。との玉ひたると也。猪太夫和歌を好めり。

湖水。さす棹に氷くだけて行舟の浪に跡ある志賀のから崎

舟。世の中は思へばやすきうきかな枕ながる、淀の川ぶね

千鳥。同じ江にねぶる鷗の心をもしらで千鳥の立さわぐらん

など猪太夫の詠歌也。應兵記。碎玉話等の数部の書を著。碎玉話は今刊行せり。八郎は大藩の執法にて國政を只一人にて擅しき。又才氣もあり。中院通茂公門人にて和歌も能よみたり

とある。折紙をひきさきたとは、いかさまみなみの人ではなかつたと思はれる。此の文會雜記附録の記事には誤があるとのことで我が師井上通泰先生が考證せられて、正興の勤書によつて「平戸を出でしは二十歳の時、池田家に仕へしは二十二歳の時なり。されば十五の時出奔して烈公に事ふとあるは誤なること論なし」と云はれた（因云。井上先生が此の記事を日本文庫本によられて「七郎父を八郎と云ふとあるはいぶかし。正修は八郎、父なる正興は權八郎とこそ他のものには見えなれ」と云はれたが日本文庫本は「八郎は猪太夫」の下に「が子也。猪太夫は」の七文字を脱してゐる。正宗文庫本によつて訂正して引用した。熊沢七郎の父が八郎（即正修）で其の八郎は猪太夫（即正興）の子である。其の猪太夫の幼名が權八と云つたと云ふのである。正宗文庫本の一本の方には「八郎は大藩の執法云々」以下は削除してある。）序に淡庵の傳を井上先生の「南天莊雜筆」から書抜いておいて其から本題に入る事としよう。

熊沢權八郎後伊太夫ト云フ。名ハ正興。號ハ淡庵。蕃山先生ノ妹萬女ノ夫ナリ。寛永六年五月十三日肥前國平戸ニ生ル。慶安元年二十歳ノ時松浦家ヲ辞シ同三年十月池田光政ニ仕フ。元祿三年三月氏ヲ南條ト改ム。同四年四月三日江戸ニテ歿ス。年六十三。浅草新寺町本智院ニ葬ラル。著書ハ武將感狀記十巻版ニ上レリ。其外應兵記ト云フモアリトゾ

と云つてゐられる。應兵記はつひに見ることが出来ないといふ事もあつた。ゆくりなくも我が文庫にあがなひ得たるは湯浅元禎の自筆写本で、紙は美濃形である。常山藏書の四角の印がおされてゐる。表紙は常山の著、左逸の表紙をばづして用ゐるのも昔人のことそぎたるさまが見えてゆかしい。上下二巻で、上巻百十枚下巻九十五枚の厚冊で、行は十二行細字で認めてある。先づざつと感狀記十巻と同じ位の量であらう。人名には右傍に線を引いてある。表紙の裏面に目録が上下巻ともに細字でした、められてゐる。上巻七十條下巻五十二條「秀吉有日域」にはじまりて軍役式目で終つてゐる。

本朝人皇百八十代ノ帝後陽成院ノ御宇ニ方テ慶長五年於美濃國安八郡関原東西ニ合兵ノ濫觴ヲ尋ニ、前関白太政大臣豊臣秀吉公ノ寵臣石田治部少輔三成が姦邪兇惡ノ所作也

に始まつて、つまり関原合戦の折の諸將の行動、心持などを詳述し、かつ評論を加へたものである。而して文章は武將感狀記とほゞ同じやうな形であるが、少しこの書の方が漢文様になつてゐる処が多いやうである。淡庵を知らんとすれば此の書は必ず読まねばならぬ。彼若年にして主君

が與へし折紙を破棄した程の見識を持つてゐた程あるとうなづかる、処が多い。本書の結びとも見るべき列侯賜封の條の終に

今般西党ハ箭ニ串レ鏢ニ髻レタルノミナラズ、縲繼ノ恥ヲ受、剔劉ノ刑ニ遭。カ、リケレハ子ニ後ル、老母愛慕ノ情ニ不堪、夫ニハナル、枕牀ノ思ヲ不忘、髮ヲ剃、容ヲ変モアリ。ワキテ切ナルハ深淵断崖ニ身ヲ投モアリ。愴悲限ナク、涕泣乾サル中に、東党ハ新賜縣邑彌倍俸祿、戎服ヲ解テ礼衣ヲ垂、行枚ヲ擲テ祝盃ヲ銜ム。此散ノ氓モ本土に帰靴政峭法ノ極慘、重賦濫稅ノ至虐ナシ。黃雲畝ニ鋪、綠浪野ニ充テ家々聞謠聲、人々視懽色。古ヨリ天下ヲ制御スル人、頼朝ハ擅也。北條ハ佞也。尊氏ハ昧也。秀吉ハ傲也。只此源公春育ノ德、海涵ノ量、盛勸華夷ニ亘、隆業古今ニ秀。壽ハ難波津ノ鶴ノ齡ニ可准、世ハ有磯ノ海ノ砂ノ数ニナヲ増ント景仰セサル人ソナキとある。家康に対する讃辞は其時代として論の外におく。天下の覇者を痛烈に一言のもとにこきおろしざる処なぞを其の一つと見てよからう。

本書の自跋とも見ゆる文に

天下雖乱好戰嗜殺者ハ必亡、四方雖緩忽武忘者必危シ。凡國家ノ事不豫則不可以適變應猝也。時絲紊糜沸ニ及テ箭ハ蠹、弓ハ枉、甲ハ曠、刃ハ鏽テ、其物アレトモ其用ナク、俄ニ廢棄ノ武書ヲ索、疏逖ノ策臣ヲ訪者ハ穿井救焚造舟拯溺ノ說ナリ。古人ノ言ニ曰、目アリテ無視者、此ヲ瞶ト云、耳アリテ無聽者、此ヲ聵ト云。其皮肉ナキニハ非ス、耳目ノ官ヲ失フカ故ナリ。爲武士者不辨武職居、武耽者不設備、譬諸瘡膿膏腴ノ旨ニ飽香輕ノ煖ニ足者宜省焉。夏日ニ製冬衣、晴天

二造雨簑、所以禦冽、避濡霑也。今番二軍役ヲ條陳シテ則ヲ貽ハ、武ヲ無虞ノ世ニ肆、用ヲ有警ノ時ニ達スルノ一端、前定素練ノ道也。

淡庵子彙輯姓氏紀氏 熊沢、名 百介、字正興

と書して筆を擱いてゐる。其の識見の尋常にあらざるを見るべきである。かゝる珍籍がしかも常山自筆写本が我が文庫に收藏せられてある事は、文庫のほこりたるのみならず、淡庵の爲めにも実に幸とせねばならぬ。淡庵を研究せんとする人には缺ぐべからざる書である。名が百介とあるは他書には見えぬやうである。其の缺けたるを補ふに足る、珍とすべしと云はねばならぬ。そこで先づ第一に此の書を取りあげて読書子に報ずる事としたのである。其れ講和問題、武裝非武裝と國論が沸騰せんとする現時、頂門の金推たるかの感がする跋文ではあるまいか。

因に云。常山の文會雜記は文壇の消息なども沢山傳へて極めて有益にしてかつ趣味豊かなる書であるが其の当時は版に上らず、明治に至つて日本文庫にて始めて世に出たのであるが、写本にて世間に流布してゐる本に二様あるやうである。誰もまだ云つてゐないと思ふから序にこゝに述べて置きたい。文字が平假名の分と片假名の分と兩様になつてゐるが、其れは或は写すが自らのこのむ処に従つて書くともあるから（例に引くのはどうかと思ふが、我が師井上先生は皆片假名に直して写本し、させもせられた）其は其でよろしいが、初稿本と訂正本とが流布してゐると見える（常山紀談なども初稿本が人々に写されてゐた。此の事は何れ述べる事とするが、此の文會雜記もその如くである。）四冊本と五冊本とあつて、四冊本は卷三の終に卷三大尾としてあつて卷四は文會雜記拾遺となつてゐる。五冊の方は一・二上下・三・四で五は文會雜記附録となつてゐる。さて四冊本と五冊本とはかなり

出入りがある。四冊本は六百八十條ばかり、五冊本は五百八十條ばかりとなつてゐる。尤一條が二條に分れたりなどしてゐる処もあり、あながち條数を以ては論ぜられぬ。今直ちにどちらが初稿本と定められぬが私は五冊本が初稿本ではあるまいかと考へてゐるが、今こゝで其考證をしるすと大変長くなるしかつ確證もとらへかねてゐるから省略する。たゞ二種の本が傳はつてゐると云ふ事を一言して筆を擱く事とする。

4 穂浪だより(3)  
焚餘稿と常山樓集

私は引続いて常山関係の書籍の事を申し上げたい。其に先立つて常山の傳を述べるべきであるが、常山の傳は赤松勲(蘭室)が書いた「湯常山先生傳略」と云ふ数葉の写本がある。其を見ると、先づ文通をしだして十余年、親しく御目に懸つて談をした事も数次ある。常山先生は三十餘歳の年上であつて、私が先生に傾倒する事も数多い。其の先生が書信で傳を書けよと命ぜられて、さて云はるゝに、傳だ墓誌だと云つて、死後に書く溢美の辞は吾が願でもなく、又自身が見る事も出来ない、其れよりは親しい君に書いてもらつて、自らの樂しみにしたいと云はれるから書くと言ふやうな前書して、其先祖の事から書きだして大略を盡している。また井上四明が書いた先生行狀が五弓久文編の事美文編三十九卷(國書刊行會本第二の四百二十三頁)に出ているから其等に譲つて今は書かぬ事とする。

常山の著書では何と云つても焚餘稿が稀觀本中の稀觀本とせられてゐる。我が師井上先生も焚餘稿は珍書である。余は故塚本吉彦翁から見せられたが、其外に見た事が無い。余が自写しておいた本は大火の時に人の許で焼失した、と云はれてゐる。先生が見られた塚本翁藏本が我が手に入つたのである。其時先生は身の事のやうに喜んでくださった。紙数は七枚、半紙本である。奥書に

先君子嗜好和歌、自幼至老所賦數千百首、一旦廻讎然取而火之、此稿即其焚餘、因以名稿、大抵先君子和歌出自然而不事巧逞麗、讀者勿以和歌之法度議之「天明癸卯(○三年)孟春」男湯明善謹識

とあつて、終に「備藩湯淺故新兵衛元禎著」。新兵衛明善藏としてあり、後表紙の内がはに張り付けし紙に「和漢御書物処新本古本賣買」として岡山紙屋町西南角、瀬良、美延堂、中嶋屋益太郎の廣告が刷つてあり、「朱雀圓」と云う藥の取次所の廣告もしてある。以上は何かの参考になるかも知れぬから書とめておく。卷頭は「早春霞」百首中

さほ姫の春のにしきも青柳のかつらき山や霞初らし  
である。百首中、歌会などあるを思ふと随分盛んに歌を詠んだ、作歌に精進した事が想像されてゆかしい

石川や花田の帯は中絶てむすふ水にさゆる朝かせ(水)  
歌がよいと云ふのではないが、催馬樂、石川、いしかはんの、こまうどに、おびをとられて、からきくひする、いかななる、いかななるおびぞ、はなだの帯の、なかは絶えたる。によつた処が漢學者の歌として面白い。

眞萩ちり尾花みたる、秋の野にあわれそへたるものすの一聲(鶉)



こよゐわかやとりやとらん天の川くる、かた野の花の木かけに（花留人）

古今集の業平の「かりくらししたなばたづめに宿からん天の川原にわれは來にけり」を下にふまへて、たくみな詠み振りである。

ちり始る桐の一葉の朝風に秋をあらそふ露の浅ちふ（初秋朝露）  
新古今調の詠みぶり

花とりのいろにも香にも名をとけてしりそく時と春やくれゆく（暮春）

儒者めいた考が面白い

ふることのむかしをしのふ世語りはなみだの外に聞ぞまれなる（懷舊）

秀逸であろう。常山をしのぶに十分である。

染ぬべき秋をやいそく空せみのなく音しくる、もりの下かけ（杜蟬）  
かち枕あら磯波の聲よりもふけてしつけき月そねられぬ（旅泊）

昔の日本人の風雅の心持（今の世の人がさほど氣にとめぬ風流人の心持）がよく現はれている。

うきことに堪てすむ身は中々に袖もぬらさし秋の夕くれ（秋夕）

古武士の心境、否常山の心境のある面、蟄居中年七十を過ぎてもなほ時々園中にて馬を乗りまはし、鎗劍をすてなかつた彼常山の心の表現として心をうたる、ものがある。因云。明和六年に蟄居を命ぜられたので、この書の編せられし五年前であるから編輯に近い時の歌であろう。

さてこの書の奥書として

過にし童の比よりそこはかとなくつらね侍し歌の二千餘首なん有けるを享保の中比にや書あつめて五卷となし一葉草と名つけたりしを思ふこゝろありて寛延二年の冬焚すてにしに近比思ひかけず此歌ともを故昏の中よりとり出てすんし見るに懷舊の感なきにあらすからるおす道を学ひたりしことは奥の國筑紫の浦の遠きまでも聞しる人のありもこそすれ浅香山の深き浅きをきわむるにあらす難波津のよしあし露斗もしらねと和歌の浦わに棹さしてよるへをたどりしことを吾家の子孫にも傳へはやと思ひて焚餘稿と名つけつれ／＼の時々聊もてあそひ侍るにもたやすく人に見すへきにもあらず又よみ人しらぬ歌も故昏の中よりとり出したるをかたへに書つけぬ

さよ千鳥誰にしへのと和歌の浦の磯の波わけ音には鳴けん

明和九年（○六十五歳） 壬辰の秋 二元禎

と奥書し、其から「君公に侍座せし時述懐といふ題を下したまわりて歌奉れと仰られしかはよそとせあまりわすれぬるよしを申せしにしみてよむへきよし仰によりてよみて奉りける」とはし書きして

今はかくことしけき身に物のふの箭たけこゝろのよはりもやせん  
の歌をのせ、次に「題しらす、よみ人しらす」十二首の歌と、菅公のみやしろによみて奉りし、日本武のみことのみやしろによみて奉りし、三月十日よみ侍りし、の三首の歌を掲げてゐる。よみ人しらすとはしてあるが是れは無論常山の歌であつて、蟄居中の歌であらうと私は推察するのである。

ことしけき世をはのかれつ中／＼に何ゆへにかは人もうらみん

かくて世に身は消ぬとも物のふのふみはまよわぬ道芝の露

かねてより思ひしことよ濁る世の波のぬれ衣身にかけんとは

時にわかあはての浦にやく塩のいつまてからき世を過すらん

世の中のあらし波路に立わかれば友もなきさになく千鳥かな

しるや人上箭のかふら一筋に君をわすれぬこゝろならひは

など此の一群の歌は何れも秀れた作品であつて、常山の心境を率直に写し出して餘蘊なしと評すべきである

思へ只世に朽せぬ名とり川八十瀬の波にしつむ埋れ木

と云ふのもあるが、此二の句「世に」は「世々に」の誤脱であらう。然らずば「よゝに」と読まず積りであらう。とにかく「よゝに」と読むべきである。此の歌は古今集の「名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひみそめけむ」によつてゐるのは申すまでもない。菅公、日本武尊のみやしるに奉りし歌も述懐である。菅公、日本武尊が何れも王命に殉じた処、身につまされて詠んで奉つたのであらう。三月十日は宝暦十四年であつて、池田宗政が逝去した日である。其で

かけまくも君かかたみとふし拜む袖はぬれけり水くきのあと

と詠んだので、是れが卷末になつてゐる。この時は常山五十七歳で蟄居中の作ではないが、君公の逝去を記念する歌で此の書のむすびとしたのである。余談ではあるが宗政公は画が中々にうまかつた。

常山の一葉草が残つてゐたら、よしや秀歌が有るなしに閑はらず色々の史料ともなるべきであらうが惜しい事だ、其れでも其の片鱗たる此の焚餘稿の残存せるは大なる幸である。其れで私は此の書に接する人は少

なからうと思ひ、数々の歌どもを掲げたのである。此の書は其の後一部出て来て某氏の手に入つたと聞き及んだ。今は岡山市の書店の吉田某と云ふ人の手許に珍藏せられてゐると傳聞した。何分一部でも多くあつてほしい。いかなる事で何時亡ぶかも知れぬ。天下の孤本などと嬉しがつてゐるべきでない。

因云。元禎の歌は吉備國歌集に九首ばかり撰入せられてゐるが、すべて焚餘稿所載の歌であるから、撰者は焚餘稿によつたものであらう。又二三歌句が異つてゐるが、其れは撰者の訂正であらう。又私が撰び出して掲げた歌は吉備國歌集には一首も入つて居ぬ。巻頭の歌は別として私が抜き出した歌と一首も合はぬ処を見ると趣味の相違か、其れとも時代の相違か、私はひそかに面白い現象だと思つた。もとよりに吉備國歌集は此の原稿案を書いて後に調査したのである

又云。元禎の筆蹟のうち手に入り易かつたのは書簡であつた。歌にしろ詩にしろ極めて稀である。短冊は私は四五十年近くも熱心にさがし続けてゐるがまだ手に入らぬ。井上先生が京都で屑短冊の中から見附けられて経平のと同時に得られた事があつた。題は経平の筆であつた。歌会の当座の歌でもあつたかと思はれる。これは先年東都の震災の大火の時に経平のと同時に焼けたとの事で先生も「再び獲られようとは思はぬ」と云つてゐられる。外に島村鐵彦君が一葉得られた。今は多分倉敷の原澄治君の処にあるかと思ふ。詩の半切を私は珍藏してゐる。

層樓百尺俯江尋、蘋末風清白水深、恒嶽流霞搖日色、石門寒雨散秋陰、不關王粲悽愴盛、欲問元龍湖海心、早晚登臨明月夕、憑欄佳興賦披襟。

右寄題清風樓

とある。恒嶽即ち常山である。吉田博士の地名辞書の兒島郡賀茂郷の條に、「用吉、

今下加茂村と云ふ兒島灣の南岸とす。用吉の西南嶺を常山と云ふ。江上に特立するを以て眺望よろし」とある。備前八景の一つであつて、元禎の号の出で來し山である。

常山暮雪 三宅 可三

惨淡天涯雲欲<sup>トササト</sup>崩、雪埋<sup>トササト</sup>三山色。映<sup>トササト</sup>林<sup>トササト</sup>桐<sup>トササト</sup>、晚來忽轉半家眼、遙對翠屏作<sup>トササト</sup>玉屏<sup>トササト</sup>。

左少將源綱政公

夕されば汐風までも寒さへてまづ常山にふれる白雪

今は備前八景も誰にも云はれまいと思ふから常山<sup>ツネヤマ</sup>のを序に書き添へたが、八景には三宅可三の詩と綱政の歌とが添つてゐる。三宅可三は姓清原、氏三宅、諱可三、字伯省、別号衝雪、初名尙三、三郎其小字也云々と碑陰にある、彼の有名なる亡羊は其の祖父であり、父は道乙で芳烈公に仕へた。新井白石の蟲明八景と共に縣下の珍しいものであらう。

猶云、此の焚餘稿の版下は多分明善の筆蹟であらう。明善の書は父常山よりは余程読み難い字体である。

○ 常山樓集の自筆原本の殘缺

正宗文庫の珍藏中に常山自筆の常山樓集の殘缺巻首より七葉が有つて「常山叢談序。予嘗件事之焚々若滅若亡傳於今者何寥寥哉」まで、あとは散佚してしまつてゐる。常山樓集と云ふ本は私は池田家の事務所で見したに過ぎない。ありさうな本で中々に傳本がすくないと見える。私は四五十年心懸けてゐるがまだ手に入らない。井上先生も遂に見られなかつた。岡山市の古本屋で私の蒐書に協力を惜しまなかつた人に秋山と

云ふ商人があつた。其の人の談に一部だけ取扱つた事があつたが其後つひぞ見かけぬと言はれた。

此本は徳川光圀の常山文集とよく混同せられる本である。現に佐村八郎氏の<sup>マヤ</sup>圖書解題にも「常山文集、二十卷、湯浅元禎」として解説してある。これは即ち水戸の光圀の著の方である。別に「常山樓集、五卷、湯浅元禎」として解説されてゐるのが我が常山著の方である。東條耕著の「諸藩藏版書目筆記」に岡山藩として常山樓筆餘五卷三本と、常山樓文集十卷五本同上を掲げ、「右も其後版本は書肆へ賜しとなり」と出てゐる。筆餘の方もさらに在る本ではないが、其れでもぼつ／＼市場に出現する。もとより当文庫には一部を藏してゐる。又明治になつても日本文庫や日本隨筆全集等に活版で翻刻もせられてゐるが、文集の方は今だに活字になつてはゐない。

餘談であるが類似の名で紛るゝ事は稀ではないが、短冊位同名異人で惱まざるゝ事は、少しでも蒐集した事のある人は誰もが感ずる事である。姓を書かない例になつてゐるからである。書籍の方は注意すればめつたに間違ふことはないが、文庫に郷土書の蒐書を盛にやつた時に著者の名だけで集めて備中の高橋正澄(桂門の高弟)の子に正純と云ふ人がゐる、外に同姓同名の人が有つて間違つた事があつた。これ<sup>カ</sup>は其とは少しちがふが過般「近世漢学者著述目錄大成」を見てゐると我が縣下備中小田郡大江村の川合元が紀藩に仕へて文学たりとして出してゐる。是れなぞも姓の川合と云ふより川合春川と混じたか、此人の何ぞと思つたのであらう。此の人の傳は岡山縣人名辭典<sup>キョウカ</sup>にも洩れてゐるが中々の学者である。私は此の人の著書を集めるのに大に骨を折つてゐるがまだ何ばかりも集まらない。傳は此の程高田馬治君の骨

折りで大分明らかになった。備中國ではまさに誇るにたるべき学者であるが、從來一通りの傳も知れかねてゐた。紀藩の文学になつた事などはもとより無い。念の爲に南紀徳川史など調べて見たがそんな事は出てはゐない。其の内此人の事も顯彰したいと思つてゐる。事の序に一筆書き添へて置くのである。

5 穂浪だより(4)  
先君子與仲龍書

常山の著書に就ては常山紀談をはじめ猶書きたい事が多いが、同じ人の事を続々と書く読者諸君も厭いてうるさいと云ふ感を持たれると思ふから此度は常山の書簡集の「先君子與仲龍書」の事を述べる事とする。此の書は巻頭に「男明善子誠謹輯」とあり、そして明善の自筆で二冊本である。我が正宗文庫珍藏中の珍本である。常山が仲龍即ち井上四明に寄せた書簡集である。常山の書簡は長文のものが多く、殊に此の仲龍に與へた書簡は頗る長文のものが多く、常山研究資料として非常に有益なものであり、読んで趣味津津たるものが少なくない。此の書のほんの一部は「常山先生聞書」と云ふ写本に出てゐるが、外に傳本ある事を聞かない。これを其のまゝ戴せたり、節略して掲げなどして読者諸君にすゝめる事とする。全部を今直ちにと云ふ訳には行かぬが、行く／＼は出版しておきたいと思つてゐる。

第一信は宝曆十年六月と朱注がある。

未通音問候へども子叔老兄〔○井上通熙、即蘭臺〕通家之御事故一

筆致啓上候。先以子叔老兄長逝早々吊慰も得御意度御座候処吏務不違啓処段々及延引候誠いまだ御老年と申候にも無御座起復に可有御座と存候処、俄爾長逝残念至極御座候。去々年秋老君公使事を以東都に至り日緩々可得御意と存候処、使事相濟急復命申候故発軻不遂相見、只今に至り候而ハ終天永決に相成東望長吁仕候事に御座候

と吊詞を述べてゐる。さて此の書簡を宝曆十年六月と明善が朱書の註をしてゐるのは誤である。時山彌八著関八州名墓誌に「井上蘭臺、宝曆十一年十一月廿七日歿、年五十七。天王寺墓地。名通熙、江戸人ニシテ岡山侯ニ仕フ。元墓石は豊多摩郡落合村上落合泰雲寺ニ在リシガ、同寺廢滅ノ爲其所在知レザリシガ、鶴田勢湖氏当所（○即ち天王寺墓地）五重塔東側ニ発見セルコト新聞紙上ニテ見シヲ以テ編者モ種々探査セシガ未ダ発見スル能ハズ、或ハ新聞紙ノ傳フル所誤ニテ次ニ掲グル井上蘭臺（○名湛、字子存、通称新藏、井上金峨養子）ノ事ニアラズヤ」と云つてゐる。或は時山氏の云はる、やうな事かも知れない。南臺と蘭臺とふと混同したのかも知れぬ。養子井上四明の撰文、井上蘭亭先生行狀（事実文編第二による）「宝曆辛巳夏患者瘧、……十一月二十七日易簣」とあつて本人の遺命で泰雲寺に葬つた由をしるしてゐる。辛巳は十一年である。されば十一年十一月の死のくやみ狀を十二年六月に出したのである。我が師の元禎略傳に宝曆十年（常山五十三歳）江戸に下つた事が出てゐる。即ち去々年秋と云へる此狀の文面と合致する。明善が宝曆十年の狀と断じたのは、どこで此の誤を生じたのか不思議である。

來年は朝鮮信使聘も可有御座候。学士應酬必牛渚〔○牛窓町〕御出

可被成左候ば露命も御座候は於御当地可得御意候……此度以書狀御意候□兼々子叔と御心安く御座候而、子叔も吉備五子詩選と申もの御編候而刊行も有度由御座候。右五子之内、田子漢（○八田憲章である。字子漢號龍谿山人と三備詩選に出てゐる）田子厚父子長逝二而其儀無御座候。何卒子叔遺卬御刊行被成候様にと所希御座候。本藩ハ文献之國と世人も存居申候五六十年已前に松井七右衛門（○河樂）と申人御座候而文法要略、詩法要略、東行日記、西婦紀行、長律集（○餘齡長律集）など刊行たわゐもなき事に御座候。其後誰も著述之物刊行致候人も無御座候。子叔之遺稿は餘ほど可有御座と存候。國華ヲ壯にせん爲にも可然事御座候。子叔常に私ヲ藝苑ノ高峽と御申候而御たわむれ二候。是は詩文の評論甚嚴に御座候故に御座候。遺稿御吟味も候は是ほど忙しき間にも御座候へども御吟味御手傳は致度存る事に御座候。輓歌も志申候得とも甚多用二而日夜少之暇も有かね申候故得致し不申兼々太平山之凶南子ヲ御藏可被成と御咄も候故空留遺藻太平山と申一句斗致し申候。知己寥落甚心細被存候事に御座候。於其御地春臺南郭子式等相統淪沒文章の火ハ消申候二似申候。隨分御精學可被成候。子叔之故ヲ以て乍慮外御心安く存候故々々布字不恭之罪宥恕是幸」六月廿九日 湯淺新兵衛 井上多仲様」猶以刀筆之吏日夜之多用ニ責られ困苦之体品懷も不別具無礼之段恐入候へども如此御座候其段宥恕被下鴈魚往來ニも及候は別而可爲本望候 頓首

蘭臺の遺稿は版になつてゐるが我が文庫にはまだ零本一卷（卷三）を

藏せるのみである。松井河樂の著書を「たわゐもなき」と一言に評されるなど其の鋭鋒あたるべからざるものがある。尤河樂の著書はや、啓蒙的に出来てゐるから常山なぞには氣に入らなかつたので有らう。河樂の著書で当文庫に收藏してゐるのは詩法要略、文法要略、語助訳辞、東行日記、東山日記、山道紀行、餘齡長律集、和歌題百首詩、大和源始論鈔、臨泉野草である。この書簡に見えたる西婦紀行はまだ見ぬ。但山道紀行は武藏より岡山に帰つた折の紀行であるから是れかも知れない。東行日記には三韓東郭（李重叔の号）の序の有る本と無い本とがある。今は可樂（河）の著書ども、少なくなつたやうだ。

八日望（○宝曆十年十月と朱註せれど、是も前の手簡と同様十二年であらう）之華簡踰月即至拜誦案上乃知起居清福恭喜之至御座候。辞義麗至且尊翁河山之感存出し泣數行下候。尊翁博文妙比恬淡寡慾古人ニ不慚事ども折節御嚙のみ申事に御座候。遺稿之事御仰聞候旨も承知此事は書面ニ盡しがたく存候。何卒刊行被成様ニ致度御座候。そろ／＼編輯被成御覽可被成候歟。來秋ハ韓使聘ニ付足下必此地へ御出可被成候。其節緩々御物語御談しも致度事に御座候。御著述並外ニも可被下物有之候へ共、馭使発不不容日故後便可被下由忝矯首相待申候。東都名家之文も一覽致度事共に御座候、南郭、護洲相次淪沒都下々々と存候……十月十三日 湯淺新兵衛 井上仲様

尙々隨分御堅固御自愛可被成候。來年ハ岡山ニ御越可被成候。

病懶之狂夫も露命も御座候ば可得御意と樂居申候。且四大家雋

之中韓柳雋者刊本世ニ出申由松崎君脩（○常山の最も親しく交

りたる人で丹波龜山の士である。名は惟時、通称才藏号は観海。此人の写した蕃山著の源氏外傳を常山が自から写した本が太田南畝が三十軸編に収めた原本であり、世間にも流布したのである。此の常山筆写本は今わが文庫に收藏されてゐる。」分申來候。何とも御世話之至御座候へども一部御取被成御遣被下候は千萬辱可奉存候。價先達而尊大人在世之日進置申候。即御手簡切ぬき致進上候。もし有之候は、御拂せ可被下候。致紛失候は御仰聞可被下候。吏用重り申之内急ニ認御覽被成がたく御座候半、書物は山田一左衛門方迄包御封し被成御遣可被下候。便二同人分指越可申候

一尊大人之墓碣有之候は御見せ被成可被下候奉願候

四家雋は荻徂徠の著で、韓退之、柳子厚、李子鱗、王元美で韓、柳の分が出版になつた事を云つてゐるのである。この本は常山のもとへとゞけられたと見えて常山が四家雋全部へ大に書入れをしたらしい。河本立軒が滄溟集に張紙をして、「常山舊藏禮記集說補正三本、滄溟集四本、四家雋六本、文化己巳三月購藏不出闕不借人」と書し「不出闕不借人」の朱印と立軒と署名して「河本儼印」を捺して経誼堂文庫に秘藏せられた。此の経誼堂文庫は縣下隨一の文庫である。橘春暉の北窓瑣談に、「近年世上に珍書を好む人多く、無用の書にても希なる書は甚高價に求むることなり」と云つて諸侯が價を不論して求めるから高くなる「庶人にては備前の鴻本氏（○即ち河本氏の事である）など甚書に富めりと云」と評判になる程であつた。其文庫に珍藏した不出闕、不借人の印を捺した

程の本も賣られて四散したのもすくなくないと聞き及んだが、礼記集說補正はどうなつたか知る処がないが滄溟集四本、細字で眞朱になる程の書入本はわが文庫にあり、この書簡に見えた四家雋は本春であつたか東京の古書展の目録に現はれたが、惜しや我が手には入らなかつた。誰の手に帰したか知らぬが現存せることはたしかである。あはれ此の書亡びずして好書家の愛護を受けよかしと冥福を祈るやうな心地するのはたゞに私のみではあるまい。この張紙をした立軒、河本儼は字を子恭と云ひ通称は初め忠五郎、後又七郎と云つた。珍籍蒐集に大にとめたのである。経誼堂文庫は此人によつて一段と書籍の数が増加し内容が充實したのである。文化六年八月に六十一歳で歿した。常山書入れの珍籍を入手してよるこんで「不出闕、不借人」の印まで捺した文化己巳即ち六年三月は彼が歿するに先だつこと五ヶ月であつた。

○蘭臺遺稿は版に成つた事は前に云つた如くであるが、まだ完本を見る事が出来ないからくはしい事は知らぬが、天明六年丙午男潜の序があると云ふから其の頃の出版であらう。靡蕪園の藏版で関脩齡君長、井純卿同校となつてゐる。関松窓名脩齡字君長、永二郎と称し武藏の人で蘭臺の門人である。井純卿は井上金峨である。名は立元、文平と称し蘭臺に学んだ。江戸の人である。藏版の靡蕪園は井上四明であらうか、私はまだつまびらかにすることを得ぬ。

○一筆致啓達候。先以道途暑中御別條無御座御帰着被成候由珍重存候。御家内様方御無事御待請被成御大慶奉存候。合歡之諸君子從游之

人々御寄合此度牛渚之事ども御物語可有之と風雅之道娛樂之程致察候。帰途遊覽之佳篇共多く可有御座候。諸名勝之作拜見仕度御座候間御書記し御見せ可被下候。拜見仕度御座候間御書記し御見せ可被下候。山川之勝候詩ハとりわき面白物に御座候。爰元は何之佳致可有之様も無御座候。此日私之詩

梁園脩竹雁池開。誰愛風流牧叔才。直置秋聲腸已斷。蕭々月影滿平臺。

とかく腸断と泣数行下候外無御座候。又一首

吹臺秋冷鎖層陰。竹裏紅泉暮色深。欲問當年洗盃処。月明簫管有遺音。

秋冷月明同じ様之事にて御座候。追而相改可申候（下略）

八月十二日 湯浅新兵衛。

井上仲様

別に注する程の事もないが韓使を牛窓に迎へて唱和し其を出版してゐる。牛渚唱和集二巻がそれである。が私はまだ見る事を得ない。此の書簡は常山の詩が二首あるから抄出した。

6 穂浪だより(5)  
吉備和歌集

常山の「先君子與仲龍書」の続稿を物すべきであり、其後直ちに研究をかさねてゐるが材料不足で猶調査研究を用する事が多いので此度は外

の事を書く事とした。前稿に「四家雋」の事に及んで此の常山書入れ本の現存せる事、而して私の手に帰せざりし事、誰の文庫に收まつたか知れぬが、其の書完全に保存せられん事を祈る旨を申し添へて置いたが、其が廻り廻はつて私の手に入った。河本立軒が「文化己巳三月購」と墨書して印を二個捺してゐる。常山が朱・墨・藍の三色を以て細かに書入れをなし、頭註の文には朱の句読点をほどこし、人名には本文にも頭註にも横線を加へ、段落に「印を加へ、本文に朱の半点・九点・二重九点の批點を加へ、文の題の上に○・○○など点を加へて其の作の品位を定むるなど、又黄粉で塗抹して文字、返點などを訂正せる、実に到れり盡せりと云ふべく、欄外の註の細字にて紙面に満ちてゐる。常山が如何に本書を精読せるかは一見して知られる、眞に貴重すべき書である。

四家雋の事に就ては常山の書簡に、明和二年五月四日に「四家雋、点ノ校誤りと存候事子迪子綽如何申候哉。是は極て点ノ誤と存候」と云ひ、又同年九月廿八日に「日外四家雋ノ点ノ誤申進候。子迪へ御達し被下候哉。極て禎か説近是と存罷有候。返事承度存候」と云ひ、同三年十月二日に「子迪トハ近比御疎濶ニ候哉。四家雋ノ中に点誤り所見申候。申遣度存候」などしばしば出てゐる皆四明宛である。四家雋は「宝曆辛巳春餐霞館藏版」と奥に印刷してある。餐霞館は土屋秀明の館名と思はれるが、其の土屋秀明と云ふ人の事は私はまだつまびらかにする事を得ない。校者は宇佐美恵、字は子迪、恵助と称して上總の人で往來の門人である。松江藩の儒官となつて政事に參與した。安永五年八月九日六十七歳で歿した。

浅野由隆の著はす処であるが、由隆の傳はたゞ岡山の藩士である事と、通称が本左エ門と云ふ事（これは本書の作者部類に出てゐる）香川宣阿の門人であらうと思はるる事（これは本書の自序の趣にて推測する）秀通朝臣に「てにをは」の傳授を受けたる事（これは本集の内のはし書による）が知らるゝのみである。しかし是は猶研究すれば分明する道はあると思はれるが他日を期するの外はない。元祿十一年に歳が六十五歳であつた事も本書の自序で明かであるが歿年は今知る事を得ぬ。大藤高雅の「類題吉備國歌集」のはし書のうちに

（前畧）これよりさきに吉備歌集といへる一卷なむ有ける。これはも、よ草百とせあまり五十年のむかし、朝つく日影さす岡山の殿人に、くれなるの浅野由隆といひける人の、玉鉾の道のくちのかきりをとをかきあつめたるを、さす竹の都わたりの梅月堂何かしにあつらへてえらせたりしよしなれば、春の夜のおほろけにてはあらざりけむを、ます鏡きよく物せしはいつこのくまにかくれたるにかあらむ、おち髪のみたりかはしうづせるのみこそこのこれりけりと云ひ、奥書に

かの由隆か物しつる吉備和歌集のうつしあやまれる所や、すくなきをさへえにたればつきて今一編物せんかし云々

と云へる、此の吉備和歌集（序文に吉備歌集と云へるは誤）を今こゝで述べんとするのであるが、是れが我縣下で初めに出來た類題の歌集であ

る。其の序文に本書の成立の事はつまびらかであるうへに、本書は傳本極めて稀であるから其の全文を掲載する

やまと歌は我國のことわざにして、ちはやふる神代のむかしよりおこり今につたはりて、高きいやしきおとこ女をわかす、みなもてあそふことになん有ける。上古の歌はかの萬葉集におほくのせられたれと、心詞ともに玄妙にして、末の世の人うか、ひ知ることかたくなむ侍る。貫之の古今集をえらはれし時より、其詞やはらき、其心さとしやすくなりて六義十躰はしめて備るといへとも、中比の世にいたりて倭臣威をあらそひ世をみたりては其声いかり、忠臣身をゆたねて國をおさむれはその声よるこふ。歌の風情も世々にかはりもてきぬれば、いつれをさしてなにはよしあしも計知かたし。撰集こそ絶て久しくなりたれと、歌の道世にとまりて、ふみまよふ人もあらざりけらし。ことに元和の初より四の海波しつかにして風も枝をならさぬ御代あひつゝき、國くのみこともちも家を代々に傳へて其民たのしむ声たえず。爰に備前の國の守四位少將綱政朝臣は前參議正三位輝政卿よりあひつひて四代國を治め給ふ。かみに文を好みて武を懈りたまはされは、國のうち寛にして藝にあそふ傍、やまと歌をよむものおほかり。其中に一ふしありておもしろく心ある歌共寛永の末よりつたへ聞しをひとつふたつ五首十首など書と、めければすてに三百首にあまれり。これををのかめひとつに見んこともほろなく覚えけるまゝに、部を分てかき写し、人にもみせ所にもつたへをかんとおもひて、この比の歌ともをもたつね求めければ、



ことをこのむ若人、此集にいらんことを思ひて、我もくとかきつらねておこせたり。ちかきとし都より関の藤河のなかれを汲て影をうつせる梅月堂宣阿上人としくこの國にくたれるを待て、此集の言葉の林に斧をめぐらして、たらぬをそへ、あまれるをけつり給ふへきよしを申しかは、みすしらぬ人の歌を添削せむことは、身をはかりの関守もゆるさざるへし、と秋の田面のいなみ給へと、椎柴のしみていひしにやむことをえず、さらは作者の名をかくして引なをさは、其人うらみさらましやとありしまゝに、其名をしるさすし出しぬれば、引なをされし歌あまたいれ侍り。またこの國に生れし人の歌のみにあらず、よその國よりきて、一とせふたとせ住ける人の、こゝにてよめる歌あればこれをもいれつ。又おのこの歌のみにあらず、女の歌よむはまれなれば、聞及見およふにしたかひて、これをも集めいれ侍る。寛永中よりこのかた五十とせはかりの間にあつめし歌、やうく千うたに餘まり、これをはた巻となし、名つけて吉備和歌集といふ。元祿九年の秋より思ひ立て、同じく十一年十月廿七日にしるし終りぬ。由隆か命、嵐の誘ふ木の葉と共に散うせなは、この歌世に傳ふる人もあらしを、つれなく六十あまり五とせのけふまでなからへてほむをとけぬること、老らくのさいはひ身にあまれり。もし此集世にと、まれば、この國の歌よむ人のおもひ出ともなりなんかし

此の書はわが文庫に、「元文二」三月中旬写之、石丸定良」と奥書ある本と、十卷迄の一冊の零本が有る。石丸本は誤が少くない。もとより石

丸氏の筆ではない。石丸氏の写した本をまた写したものと認むべきである。石丸氏の筆蹟は当文庫に自著自筆の「備陽記」が收藏せられてゐるから明かである。零本の方は由隆の筆蹟を知らないから直ちに著者自筆の原本であるとは云へぬが其の時代頃の筆写本であることは確かで、誤字は先づ無いやうであり、文字も相應に書けてゐる。たゞ卷十一より終までが缺けてゐる事が惜しい。元來吉備和歌集は余程傳本が稀であるらしく、私はまだ外に藏せられてゐる事を聞かない。其につけてもこの良い方の本が完本でない事を惜しみてやまないのである。石丸本によつた完本の方も歌の誤字は大方は推測にかたくはないが、作者名を書き落としたのが有ると思はれる。是れが甚だ困る問題であつて卷末の「作者姓名人数歌数並巻頭部分之次第」と打ち合はぬ点がある。例へば初丁の土肥氏義平の次が石丸系本の方は作者名が無いから前と同人の作と見ねばならぬ。つまり義平の歌となつてゐるわけである。処が作者部類によると義平の歌の次に「郷司氏妻椋子」と出て春上一とある。処が此の外に椋子の歌は出てゐない。つまり名を書き落したのであつて、これなどは零本の方がなくても推測も出来るが、そんな誤が外にもかなりある。是が実に困る問題である。良本の出現を待たねばならぬ。或る程度までは推測して誤脱を知り得るとしても、確かな事はきまらない。かつ推測出来る難い処もある。然し全く類本が無いとすれば、私は私案を書き添へて校訂本を作製して置かねばならぬと考へてゐる。作者合百十三人、歌数合千四百四十七首と注記せられてゐる。大躰は岡山の人であらうが、片上の住と註せられて此集に入つてゐる人が二十一人あるやうである。斯

く多数の人が入撰してゐる点を考ふると、香川宣阿が岡山へ下る道中、(井上先生の南天莊雜筆に香川宣阿自傳と云ふのがある。其に「岡山に香川氏あり。若狭の香川の後にて宣阿の家即安藝の香川の支流なり。其家の祖香川景長といふもの宣阿と交はりしことありといふ。」云々とある。斯かる関係で岡山へは年々下つたのであらう) 片上に宿を取る関係かなぞで其の弟子が多数あつた爲かと考へてゐる。岡西惟中の歌が六首撰入せられてゐるのも面白い。尤此の人はしばらく我が吉備の國に住んで書や俳諧の師匠をしてゐた事があつた。鴨方の姫井氏には惟中が虫明の曙を見に行いた折の紀行虫明紀行と云ふ絵巻物が藏せられてゐる。絵も書いたらしい。沙門可木に「他國ノ人、備前暫住」と註し、遠藤常清、本國濃州とある類を除けば大抵岡山の人と思はれる。南條正修(正興の子)百三十四首で最も多く入撰してゐる。次が水野宗直九十五首、浅野由隆九十四首と云ふ処である。彼の應兵記や武將感狀記の著者として有名な南條正興の歌も七十七首も收められてゐる。世間に蕃山の作と誤り傳へられたる

おなし江に眠るかもめの心をもしらて衝や立る鳴らん

の歌も載せられてゐる。とにかく備前の和歌の最古の集として保存せねばならぬ。後に出來た類題吉備國歌集に熊沢伯繼(即ち蕃山先生)の神樂のうた

笛竹のしらへかはらて千早振神代の袖をかへす舞人

の歌と、寛文六年吉野山にすみ始めける時深草の元政がもとに遣しける

此春はよしの、山の山人となりてこれしはなのいろ香を

の二首は和歌集の方にも出てゐる。或は此和歌集によつて載せたのかもしれぬがはし書が和歌集の方は「寛文六年」の四字がない。井上先生の蕃山年譜には寛文七年の條に「吉野ニ移リシハ此年ノ春カ」とある。寛文六年の四字は或は尙澄か高雅が加へたのかも知れぬ。作者名は蕃山伯繼となつてゐる。寛文六年の頃は蕃山シヤマと姓を云はれた筈であるから蕃山伯繼とあるのが正しいわけである。

吉備和歌集と吉備國歌集との関係は高雅の序文に見えたる如く尙澄が誤字などのないのは抜き出でて取り入れたと云つてあるが、歌は尙澄か高雅か手を入れたと見える。其れは吉備國歌集の巻頭の歌、水野宗直

立春 ほのくくと霞たな引天つ空雲の通路はるやきぬらん

とあるが、和歌集の方は初句「明るより」結句「春やたつらん」となつてゐる。今両方に出てゐる歌を検するに多少の相異がある。けだし尙澄か高雅の加筆改作であらう。正興や正修の歌もさう沢山は後者には撰入せられてゐない。とにかく我が縣下の歌を知るには和歌集は缺くべからざる書籍であるから何とか保存の法を講ぜねばなるまい。

7 穂浪たより(6) 木下幸文物語(一) — 著書を中心に —

松村緑女史が「木下幸文の生涯」と云ふ論文の抜刷を送つてくださった。直ちに拜読して古い事など思ひ出して懐しくもあり、益も得た。幸文に就ては色々と思ひ出さる、事もあり、其の著述に就ても書いて置き

たいと思ふこともあるので筆をとる。

私が木下幸文の傳を調べたいと思つたのは古い事で今から云ふと五十年も前のことで、井上通泰先生の桂園叢書第二集が岡山で版になつてから程近い頃の事である。先生から一應の御談も聞いた。何でも野口寧齋が先生の処に立ち寄つた、何処へ行つたと聞いたら長尾の帰りだと答へた。長尾は木下幸文の出生地だから、其の紹介状を書かせて小野節君をたづねて、大体の事を聞き猶いろ／＼調査したと云ふ御はなしであつた。私も其の後小野節君と親しく交るやうになつて、行つては宿つたり、來ても宿られたりと云ふやうな間柄となつた。木下幸文の日記全部、節君所藏の分を筆写し、同家に缺けてゐる分は本家のを借用して写した。元來幸文の日記は世間一般には文化四年の「いさらぬ日記」を始めとするのであるが、其の前が薄くはあるが十一冊傳はつてゐる。私は其れを首巻と名づけて六冊に合冊してゐる。これは今の小野久彦君の家のみにあつたのでもとより幸文自筆のもので美濃紙である。綠さんが「更に筆者が新しく発見したものは廿歳以前の某年の四月、五月と推定し得る日記と、文化元年七月より文化二年六月までの日記である」と云はるゝに相当するのである。文化三年十二月まで有つて「いさらぬ日記」に続くのである。煩瑣にわたるが、すこしこまかに述る。文化元、甲子と表紙にあつた筈なので、巻頭は「甲子春元日」「たらちねの母も子とももゑみさかえなみゐてあらん家しおもほゆ」の歌で始まつてゐる。甲子は文化元年である。其の頃は幸文は京にゐたのである。二月三日は岡崎に移居した。「十年も昔に(○寛政七年とすれば幸文十七歳)方ぬし(○小野襟翁)

とともに久しくすみわたりける家のあたりにて」とある。四日に近わたりの香川景樹が「去年よりもいできてなやめるが、このほどはひたふしにふして、大かたは人にもたいめせずなどきくをとぶらひて」「うめの花さきてうつろひちる迄にたれこめてのみいます君かな」の歌を詠みなどしてゐる。景樹と親しく歌談に日を時を過した事であらう。此日記は三月廿三日迄で一冊である。四月いつかむゆかの頃にやありけんて第二冊は始まつてゐるが、移山亭にて云々とある。けだし、三月廿三日に國人の小野正雄が上京してゐるから、其れと伴つて帰國した位の事であらう。どう云ふものか松村さんの発見になつた幸文が妻帯の資料とせられた文化元年四月二日の條の日記は私の筆写本は缺けてゐる。

因云。歌を主とした日記を書くのが桂園中間でははやつてゐたと見える。つまり景樹がもとであらうか。真好も、正澄も、傳はつてゐる。斐雄のは雅俗両様有る筈だが傳はつてゐない。幸文日記も景樹のを学んだものであらう。

四月から五月、六月つものりの日迄の日記である。卷三が七月朔日で始まつてゐる。廿一日におもふ所有てたはふれに人にいへる「わがせことみてし秋ののはつ尾花君がむすばんわがまくらかむ」又は「きみむすはぬか人しらぬとに」又「きみむすばすはわれむすびてな」又「君をおきつ、われはむすはし」などありて「君も吾もむすばず置てよの中の人のむすばゝあたらその花」などよんでゐる。此の頃戀心になやみけむとをかし廿二日に心地のむつかしくて云々世の中のまじらひばかり面白からぬものはなし云々ある人のもとへあからさまに行たるにをかしきさうしの有りけるを見つけてあるしにも云はずもてきて枕ごとにしつゝくら

す。これにぞすこし世の中思ひのどめられぬ」とある。幸文も若いから神経衰弱であつたかも知れぬ。それでも務の虫ほしに「ます鏡」を見て其を読み暮し歌の上の論もある。幸文は其の頃相当の学問が出来てゐたと見える。廿七日にみそかに逢はんと契つた人があつて夜中迄待つたが來なかつた「昔よりならひきぬれど人を待つ心は今も苦しかりけり」と詠んでゐる。八月になつて上京したく祖母が幸文を激励した事などは松村さんが書いてゐられる。しはすの廿六日で此卷は終つてゐるが、死ぬばかりわびしなど書きつけてゐる。卷四は乙丑春（文化二年）元日から始まつて三月廿九日に終る。祖母の死などの事は松村さんが書いてゐられる。卷五、四月朔日より卷六は「ひとりね」うしの秋冬と表紙にある。卷七「むつき」これからが文化三年、卷八「たびころも」二月十七日上京の心がまへに筆をそめて十八日に出発、廿五日伏見につき、其から先づ岡崎にと心ざした。卷九は「このくれ」四月に始まる。卷十「すゝむし」七月十七日に始まる。卷十一「はつみゆき」十一月十一日に始まり、除夜東鳩亭当座四首で終つてゐる。以上が私の云ふ首卷であつて、あまり世間にしられぬ分である。談はずつと後の事となるが東京の「日本女子高等学院」で文学遺跡巡礼と云ふ計画を立てられて昭和十六年十月に國学篇第三輯を發刊せられた。其の四輯にあたる分位であつたらう。同院の某女子が來られて、幸文の遺跡巡礼を心懸けて來たとの事で、私の友人の京都の鈴鹿三七君の紹介状など持参せられた。今は年も忘れたが昭和十九年（？）の夏であつたかと思ふ。私は幸文の日記全部を新築の閱覽室へ持出して御目に懸けた。もとより其の首卷も添へて、世間に傳

はつてゐるのは「いさらる日記」からですなど申添へた。何れ出直して來て調査するとの事で歸られた。其折に小野の名家の方へも紹介状を認めた。其を持つて行かれて墓参もし、色々御談も聞いたとの事であつた。其後戦争が激しく成つた爲か、後の調査には來られず、巡礼記が出来たかどうかは知らない。

元來幸文は我が縣下隨一の歌人で有ると私は信じてゐたので、くはしい傳を書きたかつた。森鷗外博士筆で、傳記伊澤蘭軒、澁江抽斎、北條霞亭などが出たが、あの形で書きたかつたので、鷗外博士に資料の整理はどう云ふ風にしてゐられますかと教を乞うた事もあつた。いよゝの段で、小野の名家の方にある書翰の卷物の写しを取る事が出來ず、（其頃は無論節君はとづくに故人であつた）其が私の手許になければ書けない。

又其他備中に散在する書翰もなるたけ集めたいと考へた。処が案外に幸文の手紙が集まらない。又遺言狀がある筈だが（節君在世中は知られてゐた）見る事が出來ないと云つたやうな事でぐゞ／＼してゐる中に世の中も変り私も老いはつたのである。東京の松村英一君が短歌雜誌に幸文傳を日記を種に書かれた事が有つた。完了せられたかどうか、今記憶にない。同君は余程幸文びいきで有つたと思ふ。先づ我が縣下の歌人では幸文と云はれたのであるが、平賀元義の登場より第一位を此人に譲らざるを得ざる感がある。元義の宣傳には私も一役つとめたので、此人の作歌にすぐれてゐる点は今更彼は云ふの必要は無いが、幸文もさう捨てる、作家ではないと私は信ずる。丁度世中の流行が萬葉調流行になつ

たのに反比例に桂園派の歌は全く捨てられてかへり見る人も無く成つた  
それで幸文も今では誰も問題にする人も無く成つたのである。此際松村  
さんが取あげられたのは実に嬉しい

さて前置きが長くなつたが幸文の著書に就て松村さんは岡山縣人物傳  
に「幸文の著述としてこの他に百人一首註釈、土佐日記註釈の名を擧げ  
てゐるが、これは講義筆記、書物の書入れを誤認したものではないかと  
筆者は考へてゐる」と云はれた。然しさうも云はれぬので、私はこゝに  
幸文の著述全体に就て少し書いて見たいと思ふ。

「亮々草紙」是れは松村さんの文で別に申す用もないが、此の著述は  
師匠の景樹には大に氣に入らなかつたので、隨所師説に菅沼斐雄への文  
のうち

(前略) 幸文など我に勝つ事を忘れ候故、五十年の勤学夢に相なり、  
さや／＼草紙に汚名を残し候。没前差越候書翰は眞面目にて、少し  
く酔も覚め候様に被存候。再び東塙塾に入りて執行致し度など申越  
候。死なんとする時、いふことよしにや候はん、其書翰に歌数首有之、  
幸文にあらず、東塙の眼目にて、面目候に付、表具致し常にかけ置  
け形見と見申し候。吳々痛惜、時に思ひいで申しいで候也(下略)  
又ある法師の詠草にのうち

(前略) 幸文其辺を教へたるに似はぬ事多くきこえ候。久しくあは  
ず疎々しかりしより、例の了簡違有之とみえ申し候。遺憾此事に候。  
死去前の文通に再び東塙に入塾して正したき由申し越候。其文かた  
みと成候故一軸に致し忌日には拜し候。歌もよほど書人御座候。吳々

もをしきものは彼子也。其辺には似たる人もなく候。さや／＼草紙  
など近來見候処、けしからぬ事に御座候。世上景樹にも示しあはせ  
て著はせしやうに心得たる人少からず。ともに誹謗し、あるは難じ  
こし候門人も御座候。迷惑に候。吳々もあはで別れし事、彼子の心  
がらとは申しながら、残念今にやまず候。あなかしこ

とある。何様にも亮々草紙が師匠の氣に入らなかつた事は是れ等よく  
知れるが、どう氣に入らなかつたかと云ふ問題になると知る由もない。  
景樹に宛た幸文の書翰の一軸、これは見度いのであるがどうも見る事  
が出来ない。何分「亮々草紙」が師匠と連絡なしに出版せられた事は前  
掲の書状で明かである。「久しくあはず疎々しかりし」とも見えるから、  
京大阪の間で余り遠くもないが疎遠ではあつた事は察せられる。

何分幸文も自立して一家をかまへて宗匠渡世をしようと思ふと師匠の  
氣に入らぬ事も出来るわけであらう。とにかく「さや／＼草紙に汚名を  
残し」など随分ひどい沙汰である。しかし考へて見ると幸文と景樹とは  
つまり作歌の態度は相違してゐる。少くも相違して行く素質が有つたか  
も知れぬ。此の点は余程研究する必要がある。然しさや／＼草紙は歌論、  
作歌上さう問題になるやうには思はれぬ。つまり何か感情のもつれが有  
つたのであらうか。

因云。此の書は「さ、のした柴」と改題せられて賣り出された。内容の相違はない。  
たゞ書名を版木を直したのみである。何で其の必要があつたか。本屋のさがしらで  
ある事は申す迄もない。昔はかゝる事をよくしてゐる。序に云ひ添へると、幸文と  
關係の深い小野家の出版物に「招月亭詩鈔」二冊がある。達、泉藏の詩集で務、伯

本校で天保十一庚子新刻（或本には十二辛丑新刻）であるが。これが「竹雨齋詩鈔」と改題せられ、もとより版木は同じいので、書名のみをうめ木で改め、松翁と池内奉時の跋を添へて出版したり、吉備國歌集が吉備眞金集（前掲歌集）と改題出版せられてゐる。新板めかせて賣るのが流行したのか。湯浅常山の著「備前孝子傳」が「本朝孝子傳」とせられてゐるなどは随分ひどい方である。

8 穂浪（より） 木下幸文物語（二） 著書を中心に―萬葉集の註釈

是は卷一より卷三、淡海の海夕浪千鳥の歌まで書いて筆をとめてゐる。幸文の萬葉集の積はもとより舊注仙覚説や季吟の拾穂抄も参考してゐるのが主として契沖の代匠記、眞淵の考、千蔭の畧解とを参考して自己の説を立て、ゐる。此の書は松村さんの云はるゝ処によれば移山亭から東京の方へ貸出になつてゐるとの事、我が郷土書として大切な本であるが、其の郷土を離れてゐるのは心細い。今の世はどんな災難で其の本が亡ぶやうな事が無いとは云へぬ。幸に正宗文庫に影写本は收藏してゐるし、其の訓の必要と認めらるゝ分は拙著萬葉集總索引の諸訓説篇に收めては置いたが、其説はくはしく載せてないから、幸文の業績を保存する意味で、少々其の説を引き出でて幸文の学説を世間に紹介しておく事とする。

因云。松村さんは卷五の草稿、最後の一枚には下敷の野紙が挿まれたまゝ、のを移山亭の文反古の中から見出したと云はれてゐる。私は此の草稿は見えてゐないから何と

も云へぬが、幸文がはたして萬葉の積を卷五まで書き進んだのが有りとすれば、其れは別に筆を起したと見ねばならない。然し是れは或は卷五の歌の註を何かの必要上で書いた、其の草稿が残つてゐるのかも知れない。幸文の歿後、其の草稿様の物は全部小野家に引取られたやうに聞き及んでゐるし、卷三迄の草稿も傳はつてゐるし、かつ現存の萬葉の積の草稿本は、十四・十五・十六行と行数も不定であり、高低も定まつてゐない。野の下敷をして書いた様子は全くない。されば全く新たに積を五卷迄書き進んだと見ざる限り、五卷迄注釈が進んだとは一寸考へられぬ。其でさる草稿が現存すれば、それは多分卷五の歌が何かの必要上で其れを書いた物と推測するのである。

幸文の三山（卷一三）の歌の解は「亮々草紙」に出でて萬葉研究史上注意せられる事項の一つとせられてゐた。然し明治になつてからは「ウネビヲラシ」の考に就ては誰が第一に言ひ出でしかと云ふ問題が今日の処決定せぬ事になつてゐる。一と通り「亮々草紙」によつて幸文説となつてゐたのであるが、古義が出版せられてから（古義は明治大帝が御手許金で出版せしめられたので、其れ迄は世間に流布せなかつた本である）大神眞潮翁の説として「雲根火は女山、高山、耳梨の二は男山、然て雲根火雄男志の雄は辞（ユネノヒ）、男志は愛の意にて、高山と耳梨と、雲根火山を愛とて互に諍ふなり」と云つてゐる。そこで是れは幸文説と暗合とみとめねばならぬが、今此の草稿本の解にはどんなになつてゐるのかと見るに

按るに高山波とあるを、かぐ山をばと云意にみん事も強たる事也。又を、しといふ事を下につけてうねびを、しといひてはたらはず、語をなさざる也。おもふにこは猶仙抄のごとく、うねび山の姿雄々

しきに、香山の心うつりたりといふぞすこしやすらかなるべき。しかみる時は三四、耳なしとあひあらそひきといふは、香山と耳梨と、もとの雌雄のあらそひときこゆれども、それもやがて三山のた、かひなるべし

と云ひ、朱書して「但一首の本末且反歌にいたりていさ、かこ、ろよからぬなきにあらざ」と云つてゐる。而して、よりて試にいはずとして一新案を提出してゐる。云く

二の句うねびを愛と、よみて、雲根火を女山とし、香山と耳梨を男山として、かたみにうねびを得んとあらそふにもあらん歟。いづれにも契沖、諸抄の説にはつきがたし

と云つてゐる。契沖をはじめ諸抄を非として二案（一は仙覚の舊説）を立てて迷つてゐる。其の舊説を捨て断然新案に決定して「さや／＼草紙」に発表したのである。元來谷眞潮の説は宮地春樹の萬葉私考に出てゐて

高山波……眞潮云、高山ト耳梨トヲ男山トシ、雲根火ヲ女山トス。雲根火雄ノ「雄」ハテニヲハノ字也。男志ハ愛ノ字ノ義也。反歌ノ相之時ハ相戦し時也ト。今按、（○春樹の説）此説ニヨレバ長歌ノ語モ平カニナリ、反歌ノ相之時トイヘルモ易ラカニ、且風土記ノ説ニモ違フナクテイトヨシ。当從。

と云つてゐる。私考は天明四年五月発端としるされてゐる。

因云。宣長は眞潮説を見て賛成してゐない。「右ノ考ヘニテハ雲根火ヲ愛ト云タイヘル処ノ詞ツツキハヨリ聞ユレトモ然ラジ。雄男ノ字ヲシモ書ル、此字ノ意ニテウネビ山、耳ナシ山タガヒニ我レ雄男シト争ヒシ也。サテ今見ルニモ、ウネビ耳ナシ

ハ誠ニソノ形ヲ、シクシテ男山ト云ツベシ。三ツノ中ニ、カク山ハマコトニ女山ト云ベキ形也。古説ヲ用ベシ。と眞潮説を取らなかつた。雄男の字に迷はされたのであらう。

此の眞潮の愛し説は幸文の説より先に発表せられてゐて、本居翁も見えてゐるのであるが、然し私考は世間に流布せず、本居翁もうけがはなかつた位であるから、世間へ吹聴せなかつたであらうし、幸文は知らなかつたであらうから暗合と認むべきであらう。古義の著者が亮々草紙に言ひ及ばざりしは見なかつたのであらう。処で井上先生の新考に

こゝに又いぶかしき事あり。即幸文の師なる景樹の拮解に

この意は香山は畝火山を愛と思ひかけて、耳梨山と争ひたりと云にて香山を畝火耳梨の争ひしとは見えず

と云へり。暗合にや、然らずやたやすく考ふべからず

と云はれた。実に此の問題はたやすくきめられぬ。景樹の説が幸文に影響せぬとも云へぬし、幸文説が景樹に影響せぬとも云へぬ。景樹が門人に萬葉集の講義をしたのは文化十年春よりであつて、其の筆記が萬葉（集）新考（井上先生の著と同名）として傳へられてゐる。其から第二次開講は一至四、再考で原本は熊谷直好が筆記で文政二年夏と表紙に書いてある。これが拮解として傳へられてゐる。此説を井上先生が引かれたのである。景樹の文化十年の講義の筆記には三山の歌が載つてゐない。文政二年夏からの第二次の講義の時は大躰亮々草紙は出来てゐたであらう。（出版は文政四年五月でも序文は文政三年七月であり、自筆で版下を書いて、其から彫らせなどして本が出来来る迄には相当の日数を要

する事なり、かたゞ景樹の第二次講は関係が無いと断じてもよからう。其上、此の註釈の草稿本を見れば一應は舊註になつむであるが猶落ちつかないからとして新案を提出して、かにかくに迷つてゐる点がある。其の新案が日を経るに従つて確定的になつて来て、いよいよ亮々草紙に三山歌として中巻の巻頭を飾るやうになつたのであるから、師景樹の説を聞いたのであつたら舊説によるなぞの迷は無かつたであらうし、私は先づ暗合と断じて置きたい。眞潮との関係は一通は無い筈であるが、眞潮の弟子の内藤中心は半生を玉島から高梁あたりに過し遂に文化十四年に七十八歳で宇戸谷で死んだのであるから、是れはどう云ふやうに幸文に影響せぬとも断言出来ない。但し幸文と中心とは直接の関係は無いやうである。とにかく今少し資料が出現するを待つ外の外はない。

大問題の三山の歌の事から書き始めたが、其のすこし前の額田王歌

にきたつに船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は許藝乞菜

この歌の結句「今は許藝乞菜」に就て契沖が本集に「乞」の字をイデ又はコンと訓りと云へるによりて幸文は

眞潮はその説によりて「今はこぎこそな」とよまれたれど、こは猶「乞」は「出」にかりたりといふ説にしたがひて「今はこぎでな」と上畧してよめるとやすらかなるべし。畧解に或人の説として「乞」は「豆」の誤にて「こぎてな」ならんといへり。こぎてなは漕てんといふに同じとあれど、しか文字をあらたむるまでもなし

と説いてゐる。「乞」を「豆」の誤字とする事をしりぞけたるもよろしく「乞」を「出」の上畧として「デ」と訓みたるは井上先生が「結句は

燈にコギイデナとよめり。之に基づきてコギデナとよむべし」と云はれしと正に同説となつてゐる。「コギイデナ」又「コギデナ」と訓まん事は今は通説であるやうだ。「乞」を「豆」の誤字とする説は田中道磨説で古義なども其に従つてゐるが是れは幸文の云へる如く改字すべきでない事は今の学者は多く然云つてゐる

吾がほりし野鳥は見世追底深きあこねの浦のたまぞ拾はぬ。或頭曰。  
吾欲子鳥は見遠

この二の句は問題である。幸文は云ふ

此或本をわがほりし嶋はみつるをと今本はあれど、こゝは「わがほりしこじまはみしを」と考代畧よめるぞしかるべき。さて考畧解にも、この或本を用ひられたり。いかにも其方はこともなく聞え侍り、されど上にいへることく、御兄のみこなどにしたがひて遊覽し給へるさまとみる時は、かねてみまくほりせし野嶋をばかくみせ給ひつ、今は名高きあこねのうらに引率ておはせとねたり給へる御心ばへとみて本行のかたもおかしからん歎

と云つてゐる。古義なども考畧と同説であるが、井上先生の新考、山田先生の講義、久保田君の評釈などにも本行の方を採つてゐる。幸文の研究が相当に進んでゐた證據の一つであると思ふ

額田王が春秋の優劣を判ぜし長歌（國歌大観番号一六）の「草深執手母不見、曾許之恨之」に就て幸文は

執手毛を考畧には「手をりてもみず」とよまれたるもさる事ながら、こは「とりてもみず」よむ可然覚ゆ。「とりてもみえず」とよみた



る今本はことわりなし。又畧解に、手をりてもと有からは取。は見の誤にて入ても見ず云々ならんかとあり。さてはしらべおとりぬべしと云つてゐる。可然ことであつて、古義も新考も講義もトリテモミズで幸文と同説である。「曾許之恨之」に就ては諸家の説一定せず、宣長が恨は怜の誤にて「そしおもしろし」ならんと云ふに賛せる人と元のまゝにて恨しであるとする説、其の恨の解き方が色々になるのであるが、幸文は新説を提出してゐる。今私は直ちに賛成もしかねるが一説として考ふるの價值あるものとしてこゝに掲げて置きたい。幸文は契沖、宣長等の説をあげて

みな恨めしといふ事を不足かたにいへるとおほゆるよりの事なるべし。こゝはさにはあらず。もみぢをばとりてぞしぬぶ、青きをば、おきてぞなげく。かくも人の心あくがらす、そこなんうらめしといへるにて遺恨などいふ恨にはあらず、実は執する也。心にくきなどいふ語も常の悪きにはあらぬにむかへて味ふべし。しかみずしては秋山吾者の句へうつりがたく一首の首尾あひがたしと云ひ、考の説を掲げて

彼なげく、うらめしなどの詞をあかぬ事にいへるものと見あやまられたるより一首をさへ説あやまられたるなり。花とりをさへの給ひ出て、先春をあげ給へるは後にいたりていたく秋に勝をつけんとて也けり

と云つてゐる。是はとにかく幸文説として保存して置かねばならぬ。「秋山吾者」に対しても「考に「曾」を補はれたるさる事なめれど、しばら

く今本にしたがひぬべし」と穏健の説を立ててゐる。幸文と同説の人も多し。私も原本通りでアキヤマワレハがよいと信じてゐる。大牀に幸文はあまり改字増減は好まぬやうだ。今の学界の取てゐる態度にひとしい。

9 穂浪だより(8)  
木下幸文物語(三) 著書を中心に―萬葉集の註釈

(一七番)〔國歌大観番号である。以下然心得られたし〕の委曲毛に就ては諸家其説あり。現今は大牀「ツバラニモ」と訓まれてゐるやうであるが幸文は

考に「つばらにも」又「つぶさにも」とよめり。猶思ふに「まつぶさも」とよみてはいかゞあらん

と新訓を提出してゐる。考の「ツブサニモ」より思ひ付いた訓のやうではあるが、とにかく一新訓として保存して置きたい。ツブサニと云ふ詞は万葉集には例は無いが、日本紀の訓読に「具」を訓み、類聚名義抄に「具・曲」を「ツブサニ」と訓んではある

(二二番) 河上乃湯都盤村二草武左受常丹毛冀名常處女煮手

此の歌は何でもないやうな歌ではあるが、訓にも義にも問題が多い。先ず其の問題の要点を摘記すると

- (1) 河上乃の訓義
- (2) 湯都盤村の義
- (3) 草武左受の義

(4) 常丹毛の訓

(5) 常處女煮手は誰か

と云ふやうな点が、各々其々説々があるわけである。

其れで其の説々を幸文はどう解決し、どの説を採用したかと云ふ事を摘記して見ると

(1) 河上乃は古來カハカミノと訓み來つたのであるが僻案抄はカハツラノと改訓し、畧解・古義はカハノベノと訓み、眞淵はカハツラノと訓み、宣長は詞の玉の緒にカハラノと四言に訓んでゐる。さて幸文は「上」に「ノベ」の傍訓を附し、初五は略解に「川のへの」と訓るやすらかなるべしと云つてゐる。宣長の訓は古義にも云へる如く、書紀齊明天皇卷甘櫛丘東之川上とある訓註に、川上此云箇播羅とあるから據はたしかであるが、本集「カハラ」は河原の文字をあてたりと見ゆとやうに古義に云へるに従ふべきであらう。其なら畧解説はどうかと云ふに「カハツラ」「カハノベ」と云ふ語例が見當らぬと山田先生は云つてゐられる。やはり「カハカミ」の古訓の方がよいのではないかと考へられる。これは「カハカミ」と訓むと上流の意と聞えると思つて略解に改訓したのにふと引かれたものか。カハカミと云つても川辺と云ふやうな意に聞くべきである事諸家の云へる如くであらう

(2) 湯都盤村、幸文は盤村にイハムラと旁訓せるのみなれば此詞の語意には觸れてゐない

(3) 草むさず、幸文は契沖が、此いはほどのいくら世をふれども草のおひぬごとくと云へるに賛成してゐる。これは諸家大抵契沖説と同じ

いので、幸文が特別に契沖説によつたと云ふのではないが、古義が磐むらの草生ぬをいふなりといふ説はひがごとなりと云つて、ムサズのみまでの言までは関らずとやうに解いてゐるが、これは僻説であらう。今は賛成する人は余り無いやうである

(4) 常丹毛翼名、幸文はツネと「常」字に傍訓して考に

「ところにもがもな」とよまれたるはいかゞあらん。常世などいへらん時こそあれ、引はなちて「ところに」などいはん例ありやしらず。其うへに「ところにもがもな」ともいひては「常少女にて」といへる語勢かへりてうしなはるやう也

と評してゐる。これは尤な説であると思ふ

(5) 常處女煮手の解

(1) 吹黄刀自が常にもがもなと願へる

(2) 十市の皇女を然願へる

(3) 皇女の上に己をも加へて願へる

の三説があるやうである。幸文は

とこしなへに少女にてましませと也とあるは端詞にあはせて皇女の御上とおほへたる也。しかみん方したしきに似たれども、猶こはさにはあらで刀自のみづからのなげきま、をうち出たる歌とみるこそあはれには侍れ

と評してゐる。契沖、眞淵と幸文は同説であるが、今も(2)説と(3)説の人もあるやうであるが、(1)説の方がよいのではあるまいかと私は思つてゐる。さて一首の意を幸文は契沖の釈を引きて

あはれ此いはほどのいくら世をふれども草のおひぬごとく、われも仙女のごとき壽命をたもち常少女にて、いつとなくこゝながめをらばやと女の歌なればいへる也とあるぞ、このさまみるやうによくもとかれたるものか。但いつとなくこゝにながめをらばやとあるは過たり

と評してゐる。幸文の目はよく光つてゐると思ふ

(三四番) 白浪乃濱松之枝乃手向草幾代左右二賀年乃經去良武

此の歌に對する幸文の説は「さや／＼草紙」中卷に「手向草」と云ふ題で掲げてある。今其の文を引きくらべて見るに説は同じい。三山歌と耳我嶺(二五番)と此の白浪乃と三首の釈は幸文が自信を十分に待つてゐたものと思はれる。しかし耳我嶺の歌を拾穂抄の大事をさまざま思慮せさせ給ふ心なるべしと云ふに賛成して猶彼れはれ言加へたと、此の白浪のよする濱といふべきを言を畧きてと云へる畧解説を否として「荷田・縣居二人のぬしの論ひこそうへこと、はおほゆれ」と云ひてかにかく論じてゐるがこれは私は賛成出来ない。さやさや草紙に出てゐるから其の説を掲げる事は畧しておく

(三六番) 八隅知之……且川渡舟競夕河渡……キホヒ珠水激……イハバンシ

幸文は

夕川渡ヲ略解ニ夕川ワタルトヨミテ是迄ヲ一段トストイヘリ。コハ勢ヒヲ忘レタルニ似タリ。猶夕川ワタリトヨミテ暫切心ニテ此川ノ云々トヨムベキニヤ。此下二句斗脱シタルニヤナドモ思ヒシカド、此次ノ長歌ノ上瀬爾、鵜川乎立、下瀬爾小網刺渡、山川母云々ト有

モシラベオノヅカラ似タル所アリ……珠水激瀧を考にいはいはしる瀧とよまれしはさもありぬべくこそ

と云つてゐる。珠水激の訓、眞淵説イハシルを賛して「さもありぬべくこそ」と云はれたのは穩健であるが、夕川渡の畧解の説のワタルとよみ切つて一段落とする説(此の説は元來宣長が玉の小琴で「ユフカハワタルト訓切ベシ。ワタリト訓テ下へ続ケテハワロシ」と云ふ説を立ててより大方の人はワタルと訓んで舊訓には従はぬやうである。とにかく舊訓をよしとする幸文説のある事を掲げて置く)猶こゝに云つて置きたいのは幸文が此の歌に對して種々考へたと見えて朱にて消してはゐるが「此歌「彌高良之」下もし二句ばかり脱したるにやあらんとおほゆるさましたるはひがおほえにこそあらめ」と云つてゐる。井上先生は新考で「此川ノタユルコトナク此山ノイヤタカカラシ此四句細に見るに不審なる事一にならず」として諸家の説の不一致をとりあげて「いづれの説によりも辞足らず。次にコノ山ノイヤタカカラシといひきりては次なる三句と意に何の相あづかる所もなし歌聖豈さる拙辞を吐かむや。されば此四句には誤脱あるべし。少くとも彌高良之の一句はなほ研究せざるべからず」と云はれた。幸文が此のあたりのに不安があつて解きなやむだ点が有つたのであらうが、熟せなかつた爲に見せけにしたのかと考へられると云ふ事を書き留めて置く

(三七番) 雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久復還見牟

この「常滑乃」は問題である。幸文は云

卷四(○通行本十一) 豊初瀬路は常滑の畏き道ぞてふはよし、こゝ

に「たゆることなく」といはんとて常滑のとあるはいさゝか心ゆかぬやうにはやくよりおもひしみたる、わるく心得たるにや。瀧つせのなど有べき所なれば、「常滑」は「常湍」など義もて書たるにはあらずやなどおもへど、かうやうに文字をかへばいかにも説はつくべし。たゞうたがひて有なん

と云つてゐる。「常湍」の誤字と見て「タキツセノ」と訓みたいが、「滑」を「湍」の誤字とする事もよくないから今は疑を存じて置くと云ふのが幸文の意見である。幸文の云へる如く「常滑」と云へる字面の例もあり、「床奈馬爾」と云ふ言例も本集に存ずるから、幸文説「タキツセノ」ではあるまいが一通疑つてみたのはさすがである。常滑は水底の石に生ずる水苔のごときものだと云ふ説もあるが、井上先生が頂平なる岩の列を成せるを云ふと云ふ説（新考六二頁）に私は従つてゐるが、とにかく幸文が尤なる不審を感じた事をばみとめてよいと思ふ。

以上の如く細かに検討を加ふるとすると長くなり過ぎて讀者も飽かる、事とならうから飛んで藤原宮之役民作歌（五〇番）に及ばう

ものゝふの八十氏河にたまもなす浮倍流禮  
此の「浮倍流禮」に就て幸文は

考畧解に下に者を畧といへるいとわろし。こは隔句にて上の「よりてあれこそ」をむすべる也。田上山の眞木をやがてうぢ川にうかべながすたくみを、しばらく天地のしわざにいひなせる也。人丸の長歌に山川もよりてつかふるとあるがごとし

と云つてゐる。井上先生の新考に

ヨリテアレコソは天神地祇モ依リ從ヒタレバコソなり。契沖以下多くはヨリテアレバコソアラメのアラメを略したるやうに心得たるは非なり。コソの結はナガセレ（御杖景樹同説）古義に

このコソを下のウカベナガセレにてとぢめたるものとせむは非ず。さては宮材を浮べ流すことのみを天神地祇のしろしめし給ふ由にて大宮づくりのなべての上をば神祇のしろしめさぬ意になれば協ひがたし

といへるは却りて非なり。近江の田上山にて伐り出したる材木を大和の藤原に送るに瀬田川に投ずれば自然に流れて宇治河を経て木津川との落合に到るをここに役民が待取りて筏に組みて木津川をさかのぼせ今の木津あたりにて陸に揚げて陸路を藤原に運ぶなり。彼落合よりさきは人力によりて運送する事なれど瀬田川より落合即今の八幡の附近までは天然の力による事なればそれを天神地祇の手傳とは云へるなり。さればウカベナガセレは神祇のわざにて田上の杣人のしわざにあらす

と解かれた。幸文の説は先生の説ほどくはしくは云つてないがコソの結びの点、河川を利用せるを天神地祇のしわざと云へる点など実に「いはれたり」と評すべきではあるまいか。幸文は中々に惘眼である。

穂浪だより(9)  
10 木下幸文物語(四) 著書を中心に―萬葉集の註釋

前回幸文の炯眼をた、へて筆を擱いたが、今又引続いて一例を擧げんに、卷二の

(八五) 君之行けながくなりぬ山多都禰むかへかゆかむ待爾可將待

の歌に対して眞淵が説を非とし、

此うた皇后の御歌にあらずとて考には除たり。古事記を正しとせば是を誤とせん事また論なし。しかれどもまた此集にかくのごとくあれば、是又一説となし置べき歟。記紀の正しきはもとよりなるべけれど、やがてそのふたつの間にもことの外の異説ある事数をしらず。先此うたにつきていはんに、古事記には木梨輕太子奸其伊呂妹輕大郎女云々故其輕太子者流於伊余湯也云々。其衣通王獻歌其歌曰、那都久佐能云云故後亦不堪戀慕而追往時歌曰、君之行氣長久云々、日本紀には二十四年夏六月云云大子是爲儲君不得罪則流輕大娘皇女於伊豫云云と有て今の歌はなし。是等ばかりの事だに後世にはさだめんやうなし。さればかたくなにいふべきにはあらじ。今のうた磐姫皇后の御歌てふ事はなき事ぞとはいかゞいふべき

と眞淵の独断を退けてゐるのは尤千萬である。幸文が四大人論に眞淵の歌文をめでくつがへりながら「此翁の説のやうはかのあざり(○契沖)とはうらうへにて必しかくゝとなん事を切られたる、其が中にはわれもいさ、かおほつかなく覚えられたるふしなどをもおして定めたる、勢ひ

なんある。こは一つの門をたてんとする方よりあるわざなるべし」と其説の無理おしに傾ける点を指摘し、婉曲に批難してゐるなぞ、古学派が跋扈せる時代に彼が巧みなる眞淵攻撃をしてゐる点、幸文はたしかに犀利なる頭腦の持主であつた事を示してゐる。

因云。幸文の四大人論は其論まことに正しく肯綮に中ると思ふが、四大人に契沖をのぞき、平田篤胤を加へるやうになつたのはいつから誰が云ひ出でしか可考である。契沖は法師故古学盛に成り行くにつれて除いて篤胤を加へしものか。

(五九) ナカラフルツマ 流経妻吹風之寒夜爾吾勢能君者獨香宿良武

この初二は難義であるが、山田先生が講義に、「妻」は「衣のツマ」の衣を畧したのであると云ふ説がよいかと思ふが、幸文は「諸抄よるの衣のすそながきよしにはれたり。但いますこし」と云つて在來の説に不満を感じてゐる。久老が「妻」を「雪」の誤字であると云ふ説を評して

久老の説にながらふる雪吹風にて妻は雪の誤字なるべしといはれたるはしひたり。雪吹風なぞ古歌にあるべうとおぼえずと辛辣なる評を加へてゐる。

(六三) 去來子等ハヤク早日本辺大伴乃御津乃浜松待戀奴良武

幸文云く

二の句代匠記、考に「はやくやまとへ」とよめるを、畧解には「はやもやまとへ」とよみて「卷三いさ子ども倭へはやもしらすげの又わきもこははやも(伴也母)こぬかと、又よわたる月ははやも(波夜毛)いでぬかもなどあれば『はやも』とよむ」といへり。こはな

つみたる説也〔頭書ト註シテ、卷三の歌も倭部早とあればはやくとよむべし。やがて畧解にもしかよみてこゝにはかくひかれたるもあやし以上頭書ト朱書シ見セ消チトス〕よわたる月ははやもいでぬかも、又わざも子ははやもこぬかとなどはもとよりしかあるべき所也。今ははや〔〇も脱カ〕とよむそくちをしき。こは他の例もて云べきにはあらず一首くのしらべによりていふべき也。又いさ子ともといふを畧解に、子とは船中の諸人をいへりといへるもわるし。こは猶舟にのりての歌にはあらず、かしこにあるほどの歌なるべし。在大唐時云々とある題のやうもしかきこゆ。いさこどもはやくこと終てやまとへいなんぞといはれたるにて、かのから人の婦去來兮とうめきたるさまなるべし。それはおなじ國のうちにて官途をくるしめる也。こはうまれたる國をさへさかりて、千重の波の外に妻子をおもへるこゝろいかばかりかなしかりけんとなみだこぼるばかりおぼゆ。さて大伴のみつの浜松はまちこひぬらんといはんためなること諸抄にいはれたる、さてありぬべけれど、猶心をやりていはゞ、こはなにはより舟だちしてこぎはなれゆきけんほどの情、かしこにても常わすられず、此はま松のめの前に見ゆるやうに有けんからに、今の序とはなりたるなるべし。かばかりたぐひなくあはれなるかたを大かたにときなしたるがいとをしければ、かくながくといふなり

と評釈してゐる。早をハヤクと訓む事は井上先生の初め山田、窪田、沢瀉の諸先生達もハヤクと訓むでゐられて、先づ定訓と云つてもよからう。

此歌の釈は幸文が歌人として解き去り解き來りて餘蘊なきを称ふべきである。井上先生が常に云つてゐられた事であるが、古歌を解釈せんには自らが作歌に苦勞せねば眞の解釈は出來ない。景樹が歌の講釈のすぐれてゐる点があるのは、彼が作歌の力量が多分に有つたが爲である。自ら作歌せずして古歌を評釈しても、其れでは其の歌の眞を發揮する事は難い。従つて古歌を解かんとするものは第一に自らが作歌に務むべきであると度々教へられた事である。

○

(六六) 大伴乃高師能濱乃松之根乎枕宿抒家之所徳由

幸文は初二の高師に就て

大伴の高師てふつき此歌一首のみなるをもて思ふに〔〇以上朱書〕

こはもし大鳥の高師の浜と有けんが前後に大伴のみつ云々とある歌おほき〔〇傍書ハ朱書、下同ジ〕にまぎれて是もしかあやまりしに  
はあらずや、高師は和泉國大鳥郡なれば也

と云つてゐる。一應当然なる疑問である。今は大伴を難波わたり一帯の地の總名として高師の浜も其内にこもるとやうに云はれてゐるが、然考へざる限り、幸文が疑つたごとき理由は存在すべきである。四の句に対して幸文は云ふ

此歌の四の句諸抄の訓さまぐなれどいづれもしたがひぬべきはなし。試にいはずは者の誤にて枕にぬればならんか。宣長は杼を夜にあらため、まきてぬるよはならんといへり。考略解などまきてしぬれどよみて、面白き浜松がねを枕としてねたれど、故郷の戀し

きと也などあるははやく祇註の趣なれどさるしらべにはあらず。必  
杼は誤とすべし

と云つてゐる。この「杼」とあるはきはめて心得がたい。新考で井上先  
生はマキテシヌレバと訓まれて「杼」を「バ」の誤りとせられた。杼を  
バの誤字とすれば幸文同説である。枕にを先生は「まきてし」とせられ  
たのである。山田先生は「シ」の字がなきに之を加へてよむも穩かなら  
ずとして、マクラギとせられた。そこで「枕」をマクラギと訓む事はよ  
いとして「ド」が解けない。そこで井上先生は幸文同様に「バ」の字の  
誤であるとの説が出て來たのである。山田先生は

さてこゝに「ド」とあるによりて諸家の説区々たり。思ふにこは古  
松が根を枕にして寝ぬるときは故郷に帰りたる夢を見るとかいふ如  
き然るべき傳説ありしなるべく、その傳説の如くして試みたれど、  
その詮なかりきといふ意なるべく、若し然らずとせば勝景にかまけ  
て旅宿する程の意にて「ド」といへりしならむ

と解かれた。傳説有りとなればなる程其れで一應解釈は出來た事となる  
が、現代人が此歌を誦してピンと來ぬうらみが有る。誤字と云ふ事を認  
むとすれば「者」として一應穩であるやうである。近來は誤字説ははや  
らぬやうであつて、大抵は誤字説は持ち出さぬやうに学界一般がなつて  
ゐて、井上先生の新考は其の爲に現下では眞價以下に評價せられてゐる  
傾がある。然し先生は常に私に対して豪語してゐられた。今に萬葉集の  
古写本のよいのが発見せられたならば余の誤と断じて改めた通りになつ  
てゐる処がずん／＼出て來るから云々と。私は思ふ、眞淵が盛んに誤字

説をとなへた。其れは無論よくないがさりとて万葉集には相当の誤字脱  
字も出來てゐて、現存の本のみでは安心して證本が無いからとのみ云つ  
てはゐられないのではあるまいか。試に思へ、天治本の万葉なぞの誤字  
の多き事を。師の新考の誤字説に就ては余としては又思ふ事なきにしも  
あらずであるが、其は今述べるべき場合で無いから云はぬ。こゝで序で  
あるから幸文が此の万葉集の解釈が並々の努力で出來たのでない事の一  
例として、此の註の削除、或は見せ消ちの跡をさながらに示して、推敲  
に推敲をかさねた点を顯現し、其の苦心をくむすがとしたい。幸文は  
云ふ。

大伴のみつといへるは、いにしへ大伴の宿禰の遠つおや道臣命は久  
米部を主とりて名高きこと云々さて神武紀にみつ／＼しくめのこら  
かてふ御ことは多きは久米部のみならずそれつかさとする道臣命を  
もかね給へり。然ればこゝは大伴のみつ／＼してふ意にて御津の浜  
に冠らせたるにやといへり。さて大伴の高師とつ、けたるは今の此  
一首のみなるにつきて右のみつ／＼してふ方より思へはこは健きと  
いひかけたるにや云々又神代紀に天照大神云々臂著稜威之高軻とい  
ふ意にて大軻の高といひかけしにや云々などくさ／＼にいひ試みら  
れたり。げに此一首のみかくあるもおほつかなき事なり

以上除と朱書し、前掲の大伴の高師云々の朱書が続くなり。さて「大鳥  
郡なれば也」に続いて

いつれにも冠辞考の説は高師の方のみならずみづ／＼のかたもお  
ほつかなきこゝ、ちし侍り。

を見せ消ちにし、前掲の「此歌の四の句諸抄の訓さまくなれど」に続いて「猶」は古点にしたがひて枕にぬれどとよみてん、かくおもしろき浜松かねを枕にぬれど猶家のみおもほゆるとならん。今本まくらにぬぬと、いへるはいさ、かむつかし、枕にぬると、よめる代匠記も家ししのばゆといふに猶今少也。考畧解にまきてしぬれと、よめれど、しの助辞いかゞと聞ゆるうへに枕宿杼とあらんを、まきてしとよみつけん事はいさ、かいかゞと思はる、也」を見せ消ちとして前掲の「諸抄の訓さまくなれど」に続けて「いづれも」云々の朱書が続いて書か、れてゐる。「宣長は杼を夜にあらため」の下「られたり。かくてはおだやかにきこゆ」を見せ消ちとしてゐる。斯の如くである。くどくしけれど実例を一つ示して置く。

以上幸文の説をいさ、か取り出でて紹介したに過ぎぬがあまり長くなるのもどうかと考へたからこゝらで筆をとめて次は古今集、土佐日記、百人一首の註等の上を粗々紹介する事にする。

11 穂浪だより(10)  
木下幸文物語(五) 著書を中心に―古今集愚案

古今集愚案は現在知られてゐるのは、冬・賀・離別・驛旅・物名上下・戀一迄であつて正宗文庫本は五冊につゞられてゐる。原本も多分さうであつたと思ふが今記憶が確ではない。何しろ明治三十七年頃に写したのであるから五十年たらずの昔の事である。この書にかぎり影写でないの

は今から思ふと惜い事である。さて此の書はいつ頃の著述であつて終まで草稿が出来てゐたか、ゐなかつたかと云ふ事に就ては何等知る事を得ぬ。しかし無論、春・夏・秋の部は出来てゐたと見てよろしからう。戀の一も終の歌「おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはん戀のしげきに」と云ふ迄、きつちり出来てゐるから、其後も全部はどうか知れぬが出来てゐたと見て差支あるまい。(万葉の註釈の如く卷三の始めて止つてゐると云ふやうな事でないから、多分あとが有つたと思はれる。土佐日記・百人一首など總て完結してゐるから、古今の註も完了して、其から万葉の註に及んだのではあるまいかと推察せられぬでもないが、何分傳本の無い事であるし、記録も無い事であるからどうにもならない。春から秋迄の散佚してゐるのも惜しき事である。)

因云。幸文の註釈書には名が付いてゐない。たゞ土佐日記とあり万葉集とある(百人一首は註釈と名が表紙に書きつけてはあるが、これは後人の題せるものならんと思へる。何れ百首の処で云ふ事とせう)。然るに此の古今に限り愚案と云ふ題号が附せられてゐる点から案ずると一應完成してゐたと見るのが至当と思はれるが、はたして然らば其散佚は実に惜しい極みである。

さて此の古今集愚案は自己の説を先づ述べて、さて契沖の餘材抄、眞淵の打聽、宣長の遠鏡の説を批評してゐる。相当に力のこもつた著述であつて、万葉の註釈よりは形が整つてゐる。何れ万葉の註より前の著であらう。万葉の註は如何にも未定稿と見ゆるが、この分はさうでは無いと思はれる。而して師の景樹の説は表面関係は無いらしい。

いで二三の例を引いて幸文を窺ふ事とせう。先づ第六卷冬の部の巻頭



の歌、題しらず、よみ人しらず

立田川にしきおりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして

此の歌に対して幸文は初句立田川とあるのは古今六帖に「立田山」と有るのが正しいとして

梢おしなべ染わたせるを、錦織たて、かけわたせるに見なしたるなり。川にながる、もみぢならんには、錦織かくと云けしきは有べくもあらず

とし、後撰の「錦おりける」と云ふ歌どもを引きて

織は其本につきて云へるのみにて眼前の用にはあらず。上にわたらば錦中やたえなんとあるこそさる方には似つかはしけれ。よく吟味すべし

と云ひ、此の歌が立田山が立田川に誤られたる原因は

此集紅葉並に落葉をも皆秋部に收めたれば、冬に至りて今更紅葉の歌有べきならずと思ふより、猶落葉の方ぞ少し似つかはしからんとてのしわざならんか。さるはひがごと也。躬恒集「神無月紅葉の時はやまとまでから紅にみゆるさほ山」又昔万「十月しぐれふるらし山里の並木のもみぢ色まさりゆく」などやうに打任せても云るごとく、実に紅葉は九月十月何れにも云べき物にて、藤の春夏にか、れるがごとし。さるを此集にはしばらく秋の部類に入られたるのみ也。此歌は神無月の語あれば猶冬に置くまでにて、させる意有にあらず。深く季節に泥む後世心を止てみれば疑にたらぬこと也

と論じてゐる。此の歌の「織かく」に就ては中々議論が有るので、景樹

は正義で

織かくを織て懸る事とのみ意得んは、本によりて末を辨ぜざる也。大やう錦などの類は、織上ては物にかくべきものなれば、織得し事を打まかせて織かくといひなれたるのみ。織たてなどいふに似たり。闇の小川に錦おりかく。菅の小笠に錦おりかくなどの類皆織といふを主にて懸るに意あるに非ず。

として例どもつらねて論じたり。幸文の説と全く表裏の相違である。おりかくの懸を軽く見るとしても、「しぐれの雨をたてぬきにして」と云へる景色、川に流るる落葉ではふさはしからぬ心地せらる。其の点を幸文は取り上げて山の方がよいと論じたのである。一通り尤な云ひ分であると思ふ。然し景樹は落葉とはみとめてゐない。打聞の説を評して「山にて有ともおりかくがいかで落葉と聞ゆべき。今しも染なす事とこそ見ゆれ」と云つてゐる。私は川ならば水にうつれる景色と見るべきであらうと思ふ。山ならば其のまゝの景色でよく聞える。しかし冬の部に出てゐるのは少し部立から云へば無理であらうが、神無月と詠んでゐるから冬に出したまでだと思へば、其も聞える。さて山か川かの論をする前に一應證本しらすべをする必要があらう。契沖は餘材抄に六帖に山なる由を言ひ、眞淵は打聽に新撰和歌集にも立田山と見えたりと云つてゐる。今古今集の古写本どもを調査するに、元永本、清輔本は山である。俊成筆と云はる、昭和切はか。は。にてや。ま。を。傍。書。してゐる。元永本は古写本中では最も古いものであり、年号も明記せられてゐて、最も信すべきであるが、筆者が意任せに書きなしてはゐないかと思はれる点が存ずる。清輔本は

證本としては最も信を置いてよろしい本であらう。されば山にした方がよろしいのだが、部立にこだはると、落葉と見て冬の歌とする必要がある。とにかく景樹の説の如く川でありとすれば、而して落葉でないとするれば、水に移れる以外はあり得ない筈だと私は信ずる。従つて幸文が山説を取り上げたのは十分に考慮の價値ありとせねばなるまい。

離別歌の巻頭の注を檢してみよう。題しらず。在原行平朝臣。

たちわかれいなばの山のみねに生るまつとしきかばいまかへりこん  
稻羽の山に就いての説どもはさておいて

さて此歌、任果て帰らるゝ時、女にまれ親き友にまれ、かしこの人に別借てよまれたる歌とするぞまさりて聞ゆべき。いかにと云に、いなばの山の峯に生るなど、待を云んの序ながら、景色ありて、いかにも眼前のさまなる所あり。任に趣かざる前にして、未みざる因幡山を云るに似ず。同じことなれど「いなばの山の山松の」などあらんにはたゞ待と云んの序となりて、氣色こもらねば、都を出る程のとしてもいはれぬべし。大方の注、都の別とすれど猶任果ての方とすべし。古來の一説也

と云つてゐる。現今も普通の説は任に趣く時の歌と解釈してゐるやうであるが、幸文が因幡の山の峯に生ると云ふ景色が眼前のさまであつて、待の序で有つても、其がたゞ待の序であるとは云はれない、と序の景色が生きてゐる点を指摘したのは、さすがに作歌に苦勞した人の言として、十分尊重してよいと思ふ。幸文は百人一首の註にも此の通りに云つてゐる。眞淵も景樹も京を立つ時の歌としてゐるし、現代も大方然心得てゐる。

る。細川幽齋説が任はて、帰る折の歌とするのである。此の論は中々決しかぬる問題ではあるが、幸文が古説に據つて然も其の理由を明らかにして、近註諸家の説を説破せるは偉なりと私は思ふ。

因云。此の歌の註の内に、「餘材抄に和名抄を引いて、因幡國法美郡稻羽伊波波とある、その山を云なるべし、とあるぞしかるべき。ことに当時そこに古府有けるよし大人（○景樹）の百人一首解に云れたるが如きには、いよく其方に定むべし。」と云ふ事が見えてゐる。景樹の百首異見の終に「文化の十二年しはすなぬかの日にしるしをはんぬ」と云ふ事が見えてゐる。然らば此古今集愚案は文化十二年より後の著と一應考へてよいのではあるが（尤出版は文政六年癸未七月刻成（幸文の歿後開版である）と奥附にある）、百首異見と云はずに百人一首解にと云へるなど、其説を見たか聞いたかしたのであらうから、景樹が異見を書き上げたよりはや、前かも知れぬ。此百首異見は熊谷直好が改觀抄と初学の二書のよしあしを問しにこたへたのをもと、して書いたと云ふ事が後に書いてあるから、其説は此書が書き上げられぬ先に門人どもは聞き知つてゐたであらう。とにかく此の愚案の成立を考ふる上に参考となるかも知れぬから書とめておく。驛旅歌の部の安倍仲麻呂の「あまのはらふりさけみればかすかなるみかさの山にいでし月かも」の注にも「大人の百人一首に委し」と云ふ事見えてゐる。

12

穂浪だより(11)  
木下幸文物語(六) 著書を中心に―百人一首註釈

百人一首註釈一冊、幸文の自筆にて処々訂正せる処もある原稿本一冊

(完) 傳はれり。而して此の本、題号「百人一首註。釈」とあれど、こは幸文が自から名づけしには有らで後人の書き付けたるならんと思はるのである。其の理由は此の題号のみが自筆で無い事、本文の初めにはたゞ「百人一首」とのみ有る事を以て証とするのである。余今其の題号の文字を熟視するに(尤影写本である)わが友小野節君の手蹟と見ゆ。然らば初めは何も無くたゞちに本文なりしを、さてはよごれ破れなどせん事を案じて上に白紙一葉を添へ、さて何も書かでは打見るにたよりよからねば、百人一首の註積なるからに然書き付けられしものかと思はる。とにかく幸文もまだ上木する考も無かりしなるべく、たゞ註を書きつゞりたる物なれば、題号までは案ぜざりしなるべし。彼の著古今集の註にのみこそ愚案と名づけたれ、土佐日記、万葉集すべて書名は附せず。此の書も其等と同じ形なりしならんと思はる、のである。本文八十五枚、註は片假名にて書き、所々に朱の訂正増補などがある草稿本であるが一應は調つた形をしてゐる。景樹の「百首異見」と同じやうに契沖の改観抄と眞淵の初学の説を批評してゐる。而して景樹の説にも多少ふれてゐる処もあるが、大体は師の説としてあげてゐる処は少ない。契沖、眞淵の説を評するにしても景樹程声を大にしてまくし立てるやうな書きかたではなく、大体あつさりと論じてゐる。其は其の性格にもよるのであらうが、景樹は書名の示すが如く異見を述べるのが其の目的であり、幸文は手短かに註するのが目的であるからでも有つたらふ。例によつて其の意見を聞き、彼の見識をさぐつてみよう。

先づ巻頭、天智天皇

秋の田のかりほの庵の笹をあらみわが衣手はつゆにぬれつ、

の歌に就て、彼の意見を聞くに、彼は、此歌天智の御製でない事は初学より先に年山が既に云つてゐる。実に尤な説である。假庵の中に夜を守りていたづき明す賤民のさまだ。但よく思ふに、万葉中の防人の歌などをはじめ賤民の人の、事にあたりて詠んだ歌は多いが、しかし各其の様子が直写されてゐるが、此歌はさうでない。歌よみの歌めいてゐるといふ点を指摘し、萬葉の歌の中には賤民を歌材として詠んだものも多い。此の歌は其の部類に入るべきで、イラコが島ノ玉藻茹食。ワクラハ二間人アラバスマノ浦ニモシホタレツツ佗トコタヘヨなど、佗しみをきはめたる類である。と云ひ又、今一つの見方は「爲熊凝述其志歌」又「爲防人情陳思作歌」などある類で「彼賤が上にかはりて情を述たるにて、いはゞ其佗の題詠也」と云つてゐる。斯る類は萬葉に既に多いから此歌はや、後の歌であるから無論其んな詠方もあるわけだ。と云つて「ほにも出ぬ山田をもると藤衣いなばの露にぬれぬ日はなし」なども其の類である。と云つて二様の見方が有る由を云つてゐる。(以上は大意を摘録した)是れなぞもたゞ学者の解釈でなく、彼幸文が作歌人としての解釈であると思ふ。又大意を改観・初学は連夜の意に説、師説(景樹説)は一夕の上に見られたり。猶よく味ふべしと云つて事を切つて居らぬ。げに此歌を味ふに何れとも云ひ切れぬ処がある。或は作歌の態度上に不純な点がある爲ではあるまいか。とにかく景樹が「一夜のさまにぞ侍らん」と云へるは一應うべなはる、説であると私は思ふのである。毎夜露にぬれぬ事はないと云つては力がぬけた歌になるやうな氣がする。

喜撰法師

我が庵は都のたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり

の歌を解きて

都の友だちなどの此程はいづこにかなと言傳有つらんに云やられたるなるべし。歌の意は「我庵は都のたつみなる所にかくなん住ひたる。則宇治山と人の呼べる山なり。とのみ云へる意なるを、宇治山と云につきて、世は憂き物なるからに、世を宇治山とは云下せるのみ。畢竟枕詞也。但しか云るしらべにおのづから住ひの侘しき心こもれりとは云もすべし。是を世をうき山と人は云とも云々の意也と云、又世をうしと思ふは喜撰が心也など彼此の論あれど何れももて煩ひたるに似たり

と云つた解は明晰である。「畢竟枕詞なり」と云へるも極めて要領を得てゐる。此の歌を都の友に住所を云ひつかはしたる意に見る事は景樹の説である。其を幸文も賛成したのであるが、景樹が「世ヲウジトシモ皆人ノ云山也。カクウキ山ニ侘ツ、モシカスメリ」とやうに云へるを、「專侘しさをしめす方にはあらで、<sup>(住)</sup>住所を示せる意にみたる方、「人は云なり」などある、さはやかなる調にかなへるやうに覚え侍り。」と云ひ、又「且世をと云事の説ざま猶か、はりていかにぞやと承ぬ」と景樹説を評してゐる。幸文の解はいかにも簡單のやうであるが歌をハツキリと心に攫み得てゐると思ふ。

光孝天皇

君がため春ののに出てわかなつむ我衣手に雪はふりつ、

此の歌の註、幸文の云へりとして景樹が百首異見に引きて賛意を表してゐる。こは幸文の此の著を景樹が直接見たものではあらで幸文が師に談りしか、又は書いて其の新案を見せたのであらう。前回の古今集の所に云ふべきであつたが書きもらしたから、此所に一寸申添へて置く事がある。景樹が門人の説を徴した事は彼の「詠草奥書」に、高橋正澄が詠草の奥に

此頃古今集御ときのよし承り侍り。それよき御稽古なり。しかして古人の意を露もみつけ給はらば、頓に歌ざまかはり侍るべし。又古今に面白き思ひよりも侍らば申しこしきかせ給へ。幸文よりも講案きたりて大きに心えたる事少なからず侍る也、

と云ふ事が見えてゐる。所謂、思ひ得たりとの自慢の説を門人達に徴したので、幸文も其に應じたのであらう。かゝる事は師も弟子も学問の進むことで、弟子の質問が元になつて新説を得る事もあり、在來の説を改めねばならぬ事も出来てくる。篤実なる門人、秀才たる弟子を多くもつてゐる人は現代でも学問上に大に益のある事である。少々余談が過ぎたが、もとにもどつて、こゝに景樹が云へるは幸文の説を摘みて述べてゐるのであるが、此の註釈に幸文は

こはまことは親王の御みづから雪をしのぎて若菜つみ玉へるにはあらず、御前に人の參らせなどしたらむ若菜を人に玉へる折しも、雪の降けんにつきてかくしもよみ玉へるがおもしろき也

と評釈してゐる。万葉四の歌、おきべゆきへにゆきいまやいもがためわがすなだれるもふしつか鮒や、卷廿のあかねさすひるは田たびてぬはた

まのよるのいとまにつめるせりこれ。なぞの歌は景樹も幸文と同じく引用してゐる。幸文はかゝる類を「古へ人のみやび也。今の歌、君が爲の初五は是を贈るとてさしむけたる方の語なるに、若菜つむわが衣手に雪は降りつゝ、などは過去にはあらで、今春の野にての当意なるなど、打あはぬ云ざまに似たる所、やがて彼設なし玉へる方ざまよりのしらべいちじるき也」と云つて明瞭に解きなしてゐるなど、さすがに幸文の作家として歌の鑑賞が行きとゞいてゐる事を知る事が出来ると思ふ。

右近

わすらるゝ身をばおもはずちかひてし人のいのちのをしくも有哉

先づ古説を引き、其から眞淵の説を引き、「わが恨を置いて人をおこなしむ事よとてめづる人あれど（○古説を指す）まこと、も覚えず……古の歌のまこと、は、其云る心はよくまれあしくまれ、思ふ心のまゝ、にのべ出すをこそいへ。此右近の歌はから人の思ひめぐらして作りなしたる文のをしへめきてきこゆ……此比はやく古へとことに成て、言のみまことめく世と成し也」と云へるを引き、眞淵の此の論、古の歌、古の誠てふ故を説きたるはしばらくよしと一應其説を受け入れてゐるが、然し此の歌の趣を解し得ざる事は古抄と同じだとして論を進めてゐる。

こはわが身のなげきを置いてひたぶる人の命を歎きたる歌にはあらず。彼心がはりたる人にかく云ひやりてさばかりの誓を忘れし事を驚かしめ思はしめたる恨歌也。やがて「契りきななたみに袖をしほりつゝ、末の松山波こさじとは」などある、ことの意は同じ。さるが中に「契きな」の歌はさし向て云るさまにてまがふ所なし。今はお

のれ独打歎たるさまに云なしたるとのわかちあり

と云ひて眞淵の論どもは此の歌にとりては無益也。と云ひ、畢竟歌意を解き得ないから起つた論だと云つてゐる。景樹が異見に眞淵の説をとりあげて

按ずるにこはいと浅ましきひが事也。まづ我身をおきて人をいたむは大よそ世によき人の常なるべし。いはんや人の命の失なはれんはいといみじきわざにて、我身のわすらるゝと同日の論ならんや。さればかくなげくべきは大かたことわりのまへにて、さばかりほめやすべき事にもあらじ。これをまこと、もおほえぬ心はいかなる心ぞや

など云へる、実は無用の論で、幸文が古の誠の説を一應受け入れて、さて其の解釈を取らない方が上手であると思ふ。

よき序なれば書き添へ置く。景樹の「百首異見」を批評した書に「百首異見摘評」と云ふ本がある。萩原廣道が天保十一年の春兒嶋の下津井で著はしたので廣道二十六歳の時で、其頃はまだ濱雄と云つていた。世に稀なる書にて我が縣下の人の著述であるからいさゝか解題めくことを云はん、此書は異見の説を三十首ばかりの内の処々取り出で、評論してゐる。喜撰の「わが庵は」の歌に就て

此歌はいかにきけども聞えぬうたなるをさまくに解たる説どもことごとくあたれりともきこえず。かゝる歌をも撰集などに入られたるはその頃は実に聞えしにや。またよくも聞えざりしをおほかたに聞て入られしかしらねど今とくによしのなきをばたゞに聞えずとて

やみぬべきわざなり。後世古歌とだにいへばかうやうの歌もしひてこゝろあるさまにときなすめれど今人のよみいでたるならばあざけり笑ふのみなるべし。

と云つてゐる。若くて元氣な廣道は痛快な言葉を吐いてゐる。幸文も一本くらはされた形だ。異見を評して

さて異見はこの二ツの（○改観と初学）ふみどもを熟く読わしたし、きはめつくして、その解さまのよからぬことどもを深くおもひはかりて書なせるものなればきはめて詳しく懇切にしていとよく整ひたるものから、あまりにくはしくはいひ盡さむとして却てくたくだしく言痛きならはしをのがれず。そがうへにつとめて改観初学の二抄を非也と論ふほどにおほかたは同理なることをもいさ、かおもぶきをかへたるまでにてながくととき或はかの古学する徒の後世の事とだにいへば大く賤しめ詈るを甚しく悪みてそれうちやぶらんとするこゝろくせのありと見えて、何によらず今めきたるかたをよしとさだめて、いひもてゆけば俗意におちいりたるやうの所おほし云々と云つてゐるのは正しい評であらう。廣道も我が吉備の國での才人であつて若い時から勝れてゐたと見える。

穂浪だより(12)  
木下幸文物語(七) 著書を中心に―土佐日記

木下幸文の著書物語もいよく終となつた。土佐日記の註は上下二冊

につゞられてゐて、自筆本が傳はつてゐる。別に幸文著とは書いては無いが幸文の著たる事は何等疑ひ無い。草稿本で半紙形であつて、上巻五十九丁、下巻四十五丁。上巻には朱及び墨の訂正があり、下巻は墨のみの補訂である。表紙にはたゞ土佐日記上（或は下）と記して別に書名は附けて無いが、一應は整つた形になつてゐる。昔の事であるから本文は何本に據つたと云ふ事は書いてない。傍に抄として異同をあげてゐるのは季吟の抄である事は云ふまでもない。素本、附本の異同傍書がある。附本と云へるは人見卜幽の土佐日記附註を指せるものならんと推するが、素本と云ふは寛永版本であらうかと思はれる。そこで以上の三本のうちで取捨して本文を定めて傍へに素・附・抄などと異同を記したのかと思はれる。其とも幸文は何れかの本をもと、し校異を傍註したのかも知れぬが、緒言、凡例やうの註記が無いのではつきりした事は知れない。註には抄の説を批評してゐる処が随分ある。由豆腐の考證の説を引いる処が一二見えたが極めて少い。

元來我が國の古典で著書の自筆本が久しく傳はつてゐて、其の原本から写し傳へられた書は極めて稀であるが土佐日記は幸にも貫之自筆本が蓮華王院の宝藏に傳はつてゐた。（今は亡んでゐるが）其れを文曆二年に轉写した人に定家があつて、其の本は現存して前田家に珍藏せられてあり、私も見せてもらつて校合した事が有る。今は立派な複製も出來てゐる。又多分同じ本であらうと思はれる貫之自筆本によつて爲家が轉写した嘉禎二年本が有るが、此の本は現存しないが其を写した本は現存してゐる。宗綱が轉写した本、これも現存はしてないが、其の轉写本が官

内省と近衛公爵家とに存してゐる。又実隆轉写本があるが、これも現存しないが其の写本は三條西家を始め其他にも傳はつてゐる。三條西家は古典保存会で複製されてゐる。されば土佐日記の本文研究は先づ貫之自筆に近い処まで進んでゐる。今日の眼を以てみると幸文が本文研究は当を得ぬと思はれる事が無いが、然し其れは致し方もない。時世である。我々は幸文が苦勞して本文研究をした事を多とすべきであらう。景樹が創見に季吟の抄の本文を優れたりとし、諸本の訛謬五分ならんには抄本は二分なるべしとして多く此抄によられたるはさすがに紀氏研究の苦勞人程あると感服する。

因云。景樹の創見と幸文の註との關係は、創見は文政六年二月十六日住吉の浦勝間の里なる光福寺にありてしるし畢ぬとあるから一通り連絡は無い筈である。

巻頭まづ「をとこもすなる日記といふ物を」の文字をとらへて

ももし理りもていはゞ、をとこのといふべき所なれど、今われ女にていふ方より、かろく男もとはいはれたるのみ也。深く泥むべからず

と短歌を吟味するやうな調子で筆を取つてゐる。それから本書が女のしわざに書きなされたる事を論じて

そもく此日記女のしほぎにしも書（○云と朱傍書）なされたるは何の故といふ事古來詳らかに云る物なし。あるは女にかはりて書りといひ、あるはひたぶる女子の作といひ、あるは女文字に書るによりていふといひ、あるは女子のなげきを専らいへるがめ、しければやがて女心にやつして書りなどさまくなれど、いづれも盡さぬに

似たり。おのれ按るに、凡寧樂朝より今の京のはじめつかた、延喜

の頃ほひにいたり漢学いよ盛に行はれて詞人才子大方其かたの人なるより、朝廷のもろくの事、私家の記録だつもの、其餘何くれ、たゞ漢風にのみなり來ぬる事久し。紀氏はじめてこゝに憤りありて、吾皇國歌を興したてられたる事、古今集の序もて見つべし。さて此日記もさる心ばへにてかく假字文には書れたる也。されどさばかり何事も漢様なる代に、はじめてかく物し出られたるは、うちつけめいかに物げなく、め、しき心地ぞしたらんかし。さるかたよりしばらく女のしわざにはとりなしたる也。此日記中仲磨の事をいへる所に、事のさまを男文字に云々とあるをもて假字をめ、しき物に覚えし其代のさま思ひやるべし。彼古今序はむねと皇國風をか、くるの文なれば、からのうたにもかくぞ有べき、などよに譲る所なくいへる也。今ははかなき私の日なみなればたゞ當時人情のならばしにつきてものせるぞ中々丈夫の心なるべき。さてさる心ばへによりて女のしわざにいひなせるにつきては、かの女兒のなげきのこちたくめ、しきもいと、似つかはしくかける物とはいひつべし。ひたぶる女兒の故によりてかく書出たりとするはしからず。

と論じて紀氏をた、へてゐる。紀氏を稱譽する事に勉めたるは其師景樹よりの傳統でもあらうが、幸文も本書を註し、古今集を釈し、大に勉め、かつ其で修行した事と思はれる。

廿四日の條の「一文字をだにしらぬものしが」とあるを幸文が「ものらが」と改字してゐるが、これはよくない事云ふまでもない。今は誰も

問題にはせぬが、あまり考へ過ぎた爲であらう。改字説は大概考へ過ぎであるらしい。

廿六日の條「からうたはこれにはえかゝず」素・附に是にはかゝずとあるを捨て「えかゝずとあるは例の女めきていへる也。」と云へるはさすがに味ひ得て、ぬかつてはゐない。

十二月廿七日の條に「あるものとわすれつゝ猶なき人をいづらととふぞかなしかりける」の「いづら」「いづく」に就て幸文は云ふ

四の句素本いづくとあるもきこえぬにはあらねどいつらの方まさるべし。此語の分ちをいはんにいづく、いづこは方所にかゝりていふ詞也。万葉、いづこにか舟はてすらん云々、こゝにしてつくしやいづく云々。古今、春霞たてるやいづこ云々。後撰集いづこにも咲はすらめど云々の類也。いづらは物の所在を失ひるさま也。古今、世中にいづら我身の有てなし云々。いづらは秋の長してふよは云々。伊勢物語に、紅にほふはいづら云々など也。こゝもいづくと、ふぞといふ時は何方にあると問ふ意となり、いづらと問ぞとある時は、いづらゆきしととふ意になるのわかれあり。わびしきをわびしら、べきをべらなどの□□わかちあるがごとし。いづこいづくいづれいづちいづへいづら、何の意は同じき中におのゝ語のわかちあるほどのつかひざま異也云々

と解きたるなど、さすがに歌人として詞の用ゐかたに細心の注意を怠らざりし彼を知る事が出来る。

正月廿日の條の「青うなばらふりさけ見れば」の仲麿の歌の註の処に

「歌の意は百人一首にはやういへり」と云つてゐる。されば此土佐日記の註は百人一首の註より後に筆をとつたのである。傳記資料となるから書き抜いて置く。猶此の書の出來た時の事は次に述べる。

二月五日の條 かれこれくるしければの註に

こゝの「かれこれ」といふ詞こゝにはすこしいぶかし。くるしければといふを考證に帰京をいそぐ故に松原のはるかなるもくるしき也。とあるは、かれこれの詞をしひていへる註ならぬ。猶おだやかならず。此日記かれこれの詞のつかひざまさるかたにはねば也。もし試をいはゞ、「かれこれくるしがればよめる」と有しにはあらじか

と云つてゐる。此の幸文の誤字説は直ちに賛成は出來ないが、其れは問題として保留しておく事として、此の考證と云へるは岸本由豆流の考證の事であるが、此の考證と云ふ本は文化十二年に原稿は出來たが版になつたのは何年であらうか。拙藏の本は後刷の本であるからかも知れないが、出版の年月の奥書が無い。然し文政二年四月の山本明清の序に「この頃すでに板にもゑりはてぬとき」とあるから凡そ此の序の年月より程遠からず世に流布したものと考へて大した誤りはあるまい。処で文政四年十一月二日に幸文は四十三歳で亡くなつたのだから、考證が出來て二ケ年少々である。さうすると此の幸文の著は大躰極晩年の著と見てよいであらう。少なくとも晩年の補訂本である事は間違ない。

こゝの本文「かれこれ」は何本から誤られたか知らぬが確かな證本どもは凡て「是れかれ」である。序に書き添へて置く。



いのりくるかざまと思ふをあやなくもかもめさへだになみと見ゆらむ

この歌の「さへだに」に就て

さへだにといふ事めづらしきいひざまにてたれもくうたがふ事にてさへなぞの誤かと字万伎はいはれたり。こはしからず。猶此ま、なるべし。めづらしけれど語勢動すべからず。且今わが國などの俗言に、夫さへといふを夫さへだ云々われさへといふをわれさへだ云々といふ事あり。これやがて「さへだに」のはぶけ也。鎌倉右府「ものいはぬよものけだものすらだにも」などのあるもちかし。六帖「かもめさへたゞ」とあるもあしからねどしばらく今にしたがひおきてん

と云つてゐる。サへとタニとは一通りは用方に相違がある筈のやうに心得てゐるが、證本ども此の如くあるより幸文が方言まで持ち出し、実朝の「すらだに」も引いて來てゐるのは注意すべきである。考證も、「さへだに」の詞あるべしと思はれず。眞淵も誤字なるべしといはれぬ。この歌、六帖にもいで、六帖には「かもめさへたゞ」とあり。六帖のかたまされりとは思へど、この日記には諸本ともにさへだにとせればたゞ諸本にしたがふのみ。又鎌倉右大臣の集にすらだにといふ詞見えたれば、こ、もさへだにとしてもきこゆべきにや」と云つて事を切つてはるぬ。とも角も珍らしい用例であつて、外にはをさく見かけぬ。何様貫之自筆本が「古代假名猶三科蚪」と定家本の奥書にもあり、定家が臨摸せるを見ても、や、もすれば誤読を生ずるであらう事も推量出来る。とまれ

猶考ふべき事かも知れない。

幸文の著書に就て、つい長物語をしすぎたが、とにかく以上の著書は現存してゐる事を明かにして、縣下の歌人にして又國文學者であつた幸文の業績の一端を報告するのである。幸文や正澄の未刊本は何とかして版にして置きたいものだ。

木下幸文の歌から

淀河を夜舟にのりて我がくればともしび見ゆるひらかたの里  
いかにして我はあるぞと故郷に思ひ出づらむ母しかなしも  
思ふ事はやもならなむけふの日の嬉しき人にむくいせむ爲  
遠く行く人を送りて休らへば堤の柳うちかすみつ、

14 穂浪だより(13)  
吉備和歌打聞

昭和十三年の沖森書店の古本目録に「吉備和歌打聞」と云ふのが出てゐた。直ちに注文したのであつたが惜しや人に先んぜられた。がしかし其れがわが親族の岡田眞君であるとの事が沖森書店の返事にあつたから同君に懇請して文庫へ寄贈してもらつた。此の本は著者自筆の原本であると思はれるが、惜しや第四卷冬の部迄であつて缺本であるが、他に類本のある事を聞かない。かつて本誌に述べた吉備和歌集に続く撰集である。此の本の研究は入手当時、尾山篤二郎君の主宰せる「自然」と云ふ

短歌雜誌に發表したのであるが、其の研究は今一寸私の手許で見ることが出来ないのしかたがない。然し此の本の事は此の穂浪だよりに書いて諸君に知つてゐて貰ひたいのである。どこかから下巻が出現せぬものでもなし、又写本が無いとも限らない。我が縣下の和歌史研究上には大切な本である。

此の本の序文は少し長過ぎるが此書実に天下の孤本と見ゆるからに、さながらに掲ぐる事とする。本書の成立は自らに明らかになる。

四ノ海波しづかに、三笠の山聲高く万代をのみよばひぬれば、今は只たゞむきをふるふたけき物のふも、たてはこの道をおさめて、安き世を樂しむあまりに、古き文を枕にしき、雪螢の光にあたる人おほかる中にも、風雅の道わきて盛に成ぬれば、出雲八雲のかゝらぬ空もなく、ひの川上の流遠く及ばして、市にたてるあき人かの岡に草かるおのこまでも、やまと歌をもてをのがおもひをのぶるなかだちとせずといふ事なし。抑吉備の國ぶりをおもふに其人すくなからず。片糸のよりくゝに其名聞ゆるも有ければ、和歌の浦に年波をかさねてみがかき出せる人々の言の葉汀の玉藻数かさなり、これをひろふにともしからずして、さりし元祿の比はい、何がし此道に心ざし有て、此一國の人のよめる歌千歌あまりを拾ひ集て二十卷となし、なづけて吉備和歌集といへる事あり。それより此かた十年あまり六とせの春秋も行かひぬるを、今も猶此道に心ざす輩絶やらずして、春のあした霞をあはれび花にそひ、夏はつま戀の時鳥に枕をそはだて、ねぬに明ぬる夜をかこち、秋の夕露を悲しび、紅葉を尋

ね、冬の夜のはだれ霜ふりさゆる汀に水鳥の声をきくも、時々につけたる情浅からず。玉はこの道行人をおくりては、手向の神にぬさをさゝげ、あまざる遠きさかひに行わかれては、雲の遠成家地をしたひ、石の火のはかなき光に世をなげき、あるは玉椿八千世の色によせて、人をも身をも祝い樂しび、さかへうれへかなしむことになふれても、心内にうごきぬれば、おもひ外にあらはれて、詠め出せる人々の言の葉、麓のちりかさなり、林の木の葉茂りそひぬ。さるを今みるにしたがひ、聞につけて、鳴の羽がき書とゞめ置ぬるにも、かの吉備集に入ざるいにしへさまの歌共をもたづね加へてしるしをかまほしくおもひ立事ありけるを、かの集なん廣く難波津の流を尋ねて、磯がくれなる波のもくづの中までも、光有をば是をとり、遠く浅香山のおくを求めて、谷陰にむもる、木々のおちばも、すこしき色あるをば是をすつる事なかりき。されば亦今更に春のやなを打ても、こがねのいろくづはえがたく、秋のくるせいたづらにまもりて明くる、事二年斗になりぬ。又秋萩の露のたまゝ尋ね出たる言の葉も、あられみだる、玉笹の、あへかにおかしきふしも有がたければ、かれ是わづかにとりえらべる歌八百余首、四の時くさぐさの部をわかち十卷に定めて吉備和歌打聞とす。かく此度しるしをく事もしるてかの集の跡をつぐの心にあらず。ひだたくみうつ墨なほの一すぢに、わがすける心にまかせ、耳をたふとみ目をいやしみて集をきぬれば、あながちみしまえのよしあしをわかつにもあらず。されば猶あやまりのみぞおほかるべきを、これ只世にひろく我とひと

しき心ざしの人をして、是を翫ぶ事の樂しびを願ひ、かつははま千鳥絶せぬ跡ものこりとゞまらん世には、葉末の露斗だに忍ぶ草つむてふ人もあらざらめやはとて、堪がたき身のはぢ世のそしりをもかへり見ずして正徳二年きさらぎのはじめつるにかくしるしさだむる物ならし

とある。撰者の名は書いてないが岡俊直の日記正徳二年六月九日の條に

一 吉備和歌打聞 飯田正度返し申候

と出てゐる。多分此岡俊直の編輯と思はれる。而して本書は多分編者俊直自筆の原本と見えるが、其の序文のうちに

万一御清書被成候はゞ耳をたふとみ目をいやしみてヲ除テわがすける心にまかせて集置ぬればと仕度候

の小紙片がはさまつて有る。筆蹟は本文と同筆と認められる。従つて本書の編者自筆の原本と考へられるので貴重なる紙片である。岡俊直は岡山の酒折宮の神官であつて、其の日記が数十冊傳はつてゐるが、私はまだ其の内容を調査する機会がないのを残念に思つてゐる。

吉備和歌打聞卷頭の歌は

都立春といへる事をよめる

野村氏源尙房

なにしおふ都のにしき春も世に立ことやすく今朝かすむらん

である。尙房の事は常山の文会雜記附録に出てゐる。諱尙房。俗稱權六郎、號一枝軒、と云つた。和字の文章美麗なりと常山がたゝへてゐる。其の著に三玉桃事抄二冊が正徳五年に著はされ、享保八年に板になつてゐる。

此書の引用書目を見ると尙房の学和漢に通じ佛書にも及んでゐる。其の学びの廣かりし事が知られる。常山の文会雜記附録に

東都火災の時、浅草の内匠頭どの、邸も焼たり。野村先生も侯の供して十町計も出られし時、侯の愛する所の物、居間の床の上にあり、惜き事也と宣ふを聞いて、取て返して邸へ入て見れば、黒煙燃上る。未だ床の上に右の書あり、取て懷にして出る時、門ははや火の中なり。二神三四郎焼死したるは此時の事なり。三四郎が尸の側を通りて外に出る時、野村の客舎に火炎熾なり。この時

あまのたくそれにはあらぬ藻鹽草などかけむりとたちのほりけんと詠ぜり。鬢髪もこげてのがれ出られたり。蒐る際にての詠歌、たれやの人や及べき。今其事を知れる人なきゆへこゝに記す

と云ふやうな逸話もある。尙房の歌どもあまた載せてあり。つきて見給へ。

岡俊直の歌は此の打聞に沢山出てゐる二三を抜き出づると

百首のうたよみ侍りけるに竹鶯といへる事を

をのがすむ宿とさだめて吳竹になをふしなる、鶯の聲

花如雪

みよしの、山風さゆる冬をまた木末に見する花の白雪

寒草

秋風にまねきし袖も霜に今朝くちて色なきしの、小薄

此の俊直は連歌、俳句なども遊んだと見えて、木兎集に、連歌二折に

解そむる水にさくや波の花 経忠

はるかぜわたる谷川の水 俊直

黄鳥の若音ほころび夜は明て 爲直

(以下略)

などある。経忠は太平氏で号は嵐夕と云つた。後更月と号した。翠園堂とも云つた。櫻井兀峯(字は元孟、俗名は夫右工門)につきて学びたる由木兎集の序に見ゆ。兀峯は芭蕉の門人で其著書に「桃の実」がある。此の人和歌をもたのしみたりと見えてこの打聞に和歌が多く撰入せられてゐる。其の二三をしるす

朝雲雀

霞立みどりの空にさしのぼる日影まちえて雲雀鳴也

苗代

豊年とおもひやられて賤の男かせく水ひろき小田の苗代

暮春の歌としてよめる

ちる花をさそひしのちはくれて行春の湊の舟の追風

此の人の俳句は人々のよく知る処であるが和歌はあまり誰も口にせぬ故いさゝか抜き出しておくのである。名は元孟と記されてある。木兎集の事も書きたいのであるが、今少し研究をせねばならぬ事があるから後日の事とする。

15

穂浪だより(14)  
先君子與仲龍書(二)

此の書状は極めて常山としては重要なものである。

御別啓 拜見上封事ノ一事撃節而起申候。タトヘ寸補ナクトモ人臣ノ道カクナクテハカナハザルヲ只今士大夫皆病ニ于夏畦。(○孟子滕文公下篇に、曾子曰、脅レ肩諂笑、病ニ于夏畦)と申輩にて御座候。依之一品至テ密ニ申入候。私義

壽国公(○池田宗政)之御時存寄申上候。則御後園ノ臨瀟亭へ御召被成候ニ付、段々国勢ノ危キヲ先第一貧ヨリ出テ候。其ヨリ起候テ有司ノ内御黜被成候人ヲサシ申随分愚意之通申上候。一旦ハ御容被候様ニ御座候へども傍ヨリいろくくと申人々有之、丹羽登二三百石御加増被下候。それらミダレタチ老君公(○継政)ト御不協ニ御成り被成、御病氣モ漸々御重り被成、遂ニ長逝被遊候(○宝曆十四年三月十日逝去)今ニ存出シ候度毎に残念成事、其時私之諫ヲ御用被成候へハ中々何事もか様ニハ成申間敷と奉存候。此事は段々長き品それら事のやぶれニ成申党議起リ申に今党議の人々残りモ有之、有司皆自分之我意ヲ申したて玄蕃殿三年ノ間それに苦勞し、終に空しく成被申候。左候へば、只今封事を上ルノ一事ハ愚意ニ甚悦申候。随分言を尽し御書たて可被成候。但詩などの事はあまり被仰まじく候。人主ノ学問ヲ見申ニ道学ニカタマリ候人ハもとより流レ毒申事しれたる事、又風雅ニ過候へば実を失候ゆく甚あしくと存候。こ、

の処可被仰候。南郭も此事ハ被申候。南北朝之様子ヲ見申に、南朝ハ文雅ニも見へ申候へども、人物ハ北朝ニ有之と存候。又趙武靈王ノ胡服も中々ワラハレ申問敷候。武靈王モ終りあしく御座候。故人とやかく申候へ共実ハ英傑之人にて御座候。大事ハ本ニツイテ論セヨト南郭被申候事名言と存候。依之愚意ニハ戦国ノ諸將達ノ人ヲ引廻シタルノ近道ニ甚よく御座候。雨夜の燈と申書（○常山紀談の附録として刻し又弘化四年一月、木活版にて宣光堂出版ス）一冊著し、専戦国ノ諸將の上より御家御先祖様の咄し、三十条斗書付寿国公御部屋住の時、小森子徳ヲ頼指上申候。劉向説苑之趣意に御座候。其草稿も御座候へども、かさ高ゆへ此度得進不申候。此一冊ヲよく御服膺被成候へば治国ニ於て大かた事足ると申程ニ仕指上申候き。皆一蔭居州奈宋王何と申被成申候。何分右之所ヲ御主意ニ御書上可被成候哉。専古風ヲ御好被成候御ものずきとは承候。子業（○近藤西涯、名篤、字子業。藩の儒臣）ハ諂ニカタマリタル人ニテ何ノ御用ニカ可立哉。足下此挙於今難其人事にて御座候ニ、よく思召立候事千万目出度奉存候。私義も退役の事は非くと申義昨日心覚書付小仕主迄出申候き

返々人君之学問も文雅ニ過候とあしく御座候。只今詩作被成候諸侯たち、一円よき政治の咄も御座なく詩ヲ消閑ノ具と思召候と相聞へ申候。詩ヲ御す、め被成候は風雅ニ過可申と又わき分も可申候間、此一事にて大かた足下ノ封事御用アル間敷候か。こゝの処宜御料簡も可有御座候。朱子正心誠意之言ヲ高宗か被申候通にては何の用ニ

も立不申候。朱子之学問ハ丈夫ニ有之候へども、見識ハ至テ愚に御座候と存候。必保伝之手へ御かゝり被成ましく候。安東忠七郎何の用ニも立不申人にて御座候。其外浅野瀬兵衛など不辨菽麦、大アホウニテ御座候。広沢記室事ハ私竹馬の友にて三十有餘年之旧友ニ御座候。書物も少々よめ申候。日本之書物などハよほど能見申候。人品もアシカラヌヨキ者にて御座候。人ニ御見セ不被遊勿使人知と申事、成ほど御尤と奉存候。とかく人君ノ美事ハ愛レ土用ニ善人一開ニ言路ニ此二三条にて明君に成たまふべき事と存候。他ノヨキ事ハイラヌト存候。此処よりヲモニ書トリ被成候へかし。私義勿論存寄も御座候得共右之通退役申出候所存、是非くと申事故、来年帰藩之節ハいか様ニ成居可申としれず候。とかく今ノ人ハ直言少く御座候。私哭田子漢（○八田憲章。字子漢号龍谿。岡山人）詩七律数首の中一專其事を申候

白簡王門標縉紳。當年抗疏動龍鱗。風雪空恨安危策。肝膽仍懸日月新。魯館遺編餘直筆。中山書篋泣孤臣。千秋青史論應定。三黜何慚報國身。

コレハ最早三十有餘年已前、水野主計御作廻方ニテ半免五年ト変法ノ令ヲ致シ申節、子漢存寄被申候事ヲ申候

又申候封事ハ書とり大事と存候。君脩（○松崎）ノ父左吉名堯臣、字子允、平生諫ニ身ヲ委ネタル人ナリ。側用人ニナリテノ諫書ノ口ノ書出シに、私ヲ諫ヲ申サヌト云テ罪ニも仰付被下候は難有可奉存候。とかく臣下たるものハ諫ヲ申答の事なるに諫ヲセヌハ人臣ノ道

に非ズ。況や侍臣ノ長ニテ諫ヲ申サヌ罪ニ被仰付候は人々諫ヲ可申候。是大ナル御為ニ成候間罪ニ被仰付候事、御取たて家老ニ被成候よりも辱と申書出しニ候由、此事ハ私子允傳ニも書申候。尤之書出しと存候。入用ニハ無之と存候得共得御意候。北条早雲ノ主將務攬英雄之心（○六韜、主將之法在三務攬三英雄之心）と申一句を合点にて兵書ハ見ルニモよむニも不及、最早関東ハ吾物なりとて、関東八州ヲ攻とり被申候。人君の学問ハ一二句ニテ事足り可申と存候。古しへ半部ノ論語ニテ天下ヲ治メ候人、宋朝ノ趙普ニテ御座候。私存候ハ趙普ハ論語よみの論語よまず成べし。半部マデモ多過たり、一篇ニテ事足ルベシ。こゝの趣可有之候歟。御書とりの上能御考御書可被成候。私も一存寄御座候内、古より明君と申候人ニ英氣無之ハ一人も無御座候。堯舜禹湯文武ハ英氣の凝固タル人と見申候。道学先生ニ御成被成、英氣御失ひ被成候事なけかしくと私ハ第一条に書申度御座候。殷湯王ノ小ワラハラ殺サレタルトテ兵ヲ出シタル、謙信信玄ヲ始、日本ノスグレタル猛將ヲノコラズアツメテモ湯王ノ小指ニモタルマジ。禹ノ九年外ニ立スクミモイカナル人カ此英氣ニタテツクベキ

神祖ノ創業モ皆英氣ノワザナリ。其外明君賢臣英氣ニテスグレタルヲナリ。道学ヲ被成、英氣ヲ御失ひ被成候はナゲカシキト私此一条申上度存候。次ニ御国勢ノ危キヲハ士風ノ頹レニテ御座候。全ク礼義廉耻ノ四ツヲ取失候。此根本ハ有司ニ不善人多き故にて御座候。サスレハトカク用レ人ノ国ノ治メノ根本ニテ御座候。かく次第ヲた

て、申度御座候。国ハ貧クトモ士恥ヲシレバ先能御座候。恒心ヲ失ひタルハ士ニ非候。又其恥ヲワスレ候は久敷御引免ニテ恒祿ヲ褫レタルヨリ起リ申候。コレヲヲシ直シタマワンニ、クドクシタルヲニテハナラズ候。英氣ニテなくてハ不成候。足下ノ手ツキ委細ニ承候上私モ封事ヲ奉リ申度候御状昨日相届候、今日は町会所用日、殊の外忙しく候へ共御飛脚もし追はづしてはと相認候ニ付甚不次不倫、乍去一件決断の事ハ御承知可被成候。禎也徳矣雖然決断スルノ一事ハ不多讓古人候

十月二日

（○朱書）明善謹按明和元年十月

大変な長い手紙であるが力のこもつた物で、どこを抄畧する事も出来ないのので其のまゝを掲げた。近藤子業を諂にかたまつた人にて何の御用ニカ可立哉とこきおろしてゐるなどは手きびしい。此の西涯一派は松井河楽なぞと結んで備前国学の府によつて、常山なぞを入れなかつたのである。此の学派の争ひは随分と甚しかつたと察せられる。

本稿は穂浪だより（4）「先君子与仲龍書」（「土」第十二号所載）の御続稿である

（编者）

16 穂浪だより（16）  
先君子寄仲龍書（三）

明和元年十二月九日の書状には

播州赤穂之大川良平九月中旬御当地へ見え申訪敵廬、一夕致閑話申候。其子才子之由承申候。良平も中々博洽事御座候

と云ひ、「良平の子息、宋ノ王柏之書疑九卷刊<sup>ラ</sup>セ候由、私ニ跋所望ニ候へ共いそがしく得書不申候」など云つてゐる。

東涯ノ翰軒小録など申写本見申候。(○此の書は明治になりて活版になる迄写本で傳はつて板にはならなかつた)私も易會業仕候。八月夕左氏にて御座候。時々よみ申候。此節三分の一ほど濟申候。杜注も合点参り不申事多く御座候。此間外菴集(○明楊慎撰、楊有仁編)少々見申候。大かた丹鉛総録ニ出候と同じ事、博古とも可申候へ共奇僻ナル事多く御座候。

と学業の近況を報じてゐる。手許に赤穂に関する資料が無いから大川氏の事を調査する事が出来ないが、赤城風雅には此父子ともに所見なし。風雅は安永六年の開版である。

明和二年正月十四日には

藩は痘疫甚しく小児の夭亡不可勝計。野哭千家と古人之申候通に御座候。不遁者之中ニも数人夭死、自興国公(○利隆)已来未曾有之大変にて御座候。困窮貧乏いやましにて藩中騒然之体ニ御座候

と云つてゐる。種痘と云ふ事の無かつた時は実に天下の大事であつた事であらう。常山は荀子には余程骨を折つたらしい。享保刻の京都版本に、朱・墨の二程を以て頭書し、かつ批点を加へた本が伝はつてゐる。自家の説はもとより春臺や子迪の説なども書かれてある。奥に「安永七年戊戌二月九日卒業、禎。同四月望以子迪校本一閱。同八年三月一覽」と書

いてある。本状に

客冬讀荀子四冊浪華之書物や持来り少々致一覽候。誤字多く相見え申候

と云つてゐる。讀荀子は荻生茂卿撰。宇佐美恵校。寶曆に刊した。校者宇佐美恵が子迪のことで、此人の事は穂浪だより五の四家雋の処に云つて置いた。

本藩に而も今田彌助時々見え申候処殊之外才敏ニ御座候。書牘なども得て見え申候。又叙事之文なども書コナサレ候而悦申候。坂口ハ至而カタエタル才ニテ御座候上、とかくカワリタル事ヲ好ミ異様なル風ヲ悦甚私本意ニカナワズ候。其上学問を殊の外高上ニ覚申候等ト申候故、時々其事を申候へバ心ニ入不申、且性急ナル人ニテこまり申候

と云ひ送つてゐる。今田彌助の事を岡山県人名辞書で調べて見たが得る処が無かつた。処で此の人名辞書大正七年出版の本であるが、此の書はイマキセキ氏よりウエキゼスキの間に原稿が脱落したのかも知れぬと思はれる。ア之部、イ之部とやうに有るのが例であるが、此の処は直ちにウに移り、ウ之部と云ふ標示が無く、今田、今村など云ふやうな姓はかなり有る姓であるのに、直ちに植木是水翁になつてゐるから疑はるゝのである。編者高見君は親しい間柄であつたが、既に故人となり、花土氏(文太郎)は私のまだ知らぬ人であるから一寸聞き合せる事が出来ない。坂口氏はたゞ坂口とのみあるので名を缺いてゐるから知る事が困難である。人名辞典に坂口忠興と云ふ人がある。此人の子孫でも有らうか。我が県に

も何分文学方面の人名辞典はほしいものである。

曹源少将公（○池田綱政）之小田原にて波の音を被聞召

き、なれぬ物とて波のかしましやそれにはまさる世にはすめどもと詠まれし事を記して、「時々道中にて吟し申候へば格別の感情も出来申事に御座候」

と淀のわたりのまだ夜ふかきにの昔の歌話を思ひ出すやうな事を書き送つてゐる。蘭臺遺稿の事は書簡中にしばしば見ゆる処であるが、出版は中々困難であつたと見える。

再啓先大父遺稿刪定有度事に存候。用費之金の事、貴様御当地ニ御座候へば私当役にてはいか様とも相成申候へどもかけ隔申候義ゆへ御相談も成不申候

と云つてゐる。

寿国公（○池田宗政。宝曆十四年三月十日逝去。年三十八）御在世ニ御座候へバ、又私など存寄も出来御たりにも成候事も致方も御座候へども、只今ニ而其事も相成不申候。先刪定被成候上少々、刊行之御心がけに被成度御事が御座候。文人不遇ハ誰昔然矣（○詩経、国風、東門之楊）と申事にてさのみ不珍候へども、足下ニ於てハ甚御気毒致察候。去年御見せ被候内ノ文ニも先除ケ置申度も甚多く御座候。御考御覽可被候。詩ハ尚又精選ニ仕度御座候。古人四五首にて後世二名の伝り傑作と申人も多く候へば詩の多少にはかゝわり申間敷候

と云ひ送つてゐる。旧友の為に、また友の為に様々の心尽を述べてゐる。

常山の人となりをしるのぶにたる書簡である。才子必読は殊更先人帳中之秘であつたから借して呉れよとか、「小説雖不足道民間後世之人情愛態ヲ見申候ニハ学者之益モ有之と存候」とか猶書籍に關する事が出てゐるが割愛する。同年同月の状に「先便にた事に就て」先便に見えた「上流の途を被得恐悦此事足下大幸、禎踊躍三百」と云ひ「愚存別封認進候」と云つて常山の上書も其道から奉つて呉れとたのである。さて其の大意を述べ、「浄書して御出し可被下候」と云ひ、「但一字も換がたく」とことわつてゐる。「湯あみ礼服ニ而も認度御座候へども病中故不能其儀候。随分よく聞へ申様に書とり申候。至誠何卒天意に相〇候へかしと存候」と結んでゐる。正月廿八日付である。此状の次にどうしたわけか正月十四日付が編されてゐる。去冬から痲痢の病にかゝつてゐる事を述べ、其から上封事の成行を案じ「嘉納の事早く承度」と云ひ

畢竟一邦危ニかゝり申事故、私式一劍報国之心迄の身に候へども、君子ハ時を憂ルト申事、一飯之間も忘れがたく御座候ニ付早く御左右承度存居申候

と云ひ送つてゐる。子の明善の事を報じて

豚児武伎殊の外精出申候。文字なやみも嫌ふては差而無御座候と云つてゐる。東涯の「官制沿革図考」と云ふ写本を取出して写してゐる。日本の官制沿革の大概が知れる。百枚斗の本だと云つてゐる。此書は本朝官制沿革図考として二冊で今も写本で伝はつてゐる。上野の図書館にも静嘉堂文庫にも所蔵せられてゐるやうである。

同年五月の状に四明の子供の痘の見舞を述べた処で



私義も先年秋九月に妻致長逝、甚難儀至極之処、其冬子共兩人とも一度に庖瘡、其節私義疾来申、保養介抱ニこまり食少も得不被下、酒斗痛飲致し元気を養、やうくニ二子共無事ニ育申候事、今更存出申事に御座候

と往時をしのび感慨無量、常山の生活をしのぶに足る。然し、酒斗痛飲とはさてもく昔の養生法は變つたものだと思はるゝ事なり。其から一封の問題に対し色々意見を述べてゐるが、長い論であるから、全文を發表するまで御預りをして置く事とするが

学校之学者万波甚吉(○醒廬)ヲ矢部源右衛門始尊信候。既二大に国を誤り申候。されば無学の人によき人は可有御座候。これは激論にて御座候へども、只今学校学問にて人教られ候は毒ヲ藩邦ニ流シ可申候。これに付私ハ人ヲ教ル事ハ書不申候

と云つてゐる。常山が藩の文学達と合はなかつたのは周知の事であるが、常山が「私ハ人ヲ教ル事ハ書不申候」とは常山の著述を見てもげにもと思はれる。私が常山に私淑する点も亦こゝに存する。

○葭堂木世蕭、讀韓非子の事尋させ候処無之由、清人所著史類餘程珍敷もの御座候由承申候○近比清人所著日知録二帙卅二卷致一覽候。書ノ体ハ琅琊代醉などの様に御座候へども、実ニ古今ノ制度を考候為に作り、其中之經濟の存寄も多く申有之候。心学と申一条などには心学と申事、聖人之道ニ無之由申張候趣中、面白存候

と云つてゐる。前の官制沿革図考と云ひ、此処に日知録が「古今ノ制度を考候為に作り」と云つてゐて、常山は斯る方面に非常に注意してゐた

事を思はしめる。

私義も国朝文学伝撰申度存候。第一熊沢太夫(○蕃山)仁齋先生、東涯先生、徂来先生、鳩巢、周南、白石、春臺、南郭、此の人々の伝ヲ作り申、其中ニ自ら經学の論もこもり申様ニ致度存立候。金華、東壁などは周南か南郭かの内ニ附し可申候と存罷有候

と文学達の伝記著述のあらましを載けてゐる。而て經学の論こもり申様に致度と云つてゐるので、常山が抱負も察知する事が出来る。常山の手簡はどこにもどこにも常山が活躍してゐる(五月四日付の内の抄出)

17 穂浪だより(16)  
先君子寄仲龍書(四)

此の稿は書けば限りも無く長くなる、伝ふべき事、面白い事がとても満ちてゐる。然し此の辺でとめたいと思ふ。全部は何とかして世に出したく、研究もしたい。さて前回に書きもらしたが、常山が国朝文学伝を撰りたいと思つてゐるの条に「熊澤太夫」とある。此の伝は其の一部であるかどうかは問題であるが、とにかく「備前故執政大夫熊澤先生行状」と云ふのは常山が撰して経平にも見せてゐる。写本で世に流布してゐる。其の奥に「蕃山了介行状御借被下忝候。見合候而返進可致候」とあり、次に「手前ニ存候より御書之方くはしく御座候」とあり、以下は井上先生の統蕃山考に出し「土肥典膳経平覚書」と同じいから略して置くが、此の常山の蕃山伝は此の書の奥書に有る通り経平にも見せて相談もして

るるのである。以上の一事は書き添へて置くべきであつた。さて安永元年七月十六日の書状に此の伝の事が見えてゐる。

熊澤太夫行實ノ事故承知候。随分安き御用に存候。但カタカナニテ書記し置候。もと熊澤七郎方ニくわしく書付候が有之、それを借り、尙又承合とくと相認置候。然処此度熊澤家亡申候。其書付も散逸可致か如何成申候か、百介も讃州に罷歸先月十日に自殺致し物故に御座候。右書付もし道路に浮沈致候へば最早求出すべき方無之候間、一本あらくとたゞくざに成候も書留申候間御用に可立候。但飛脚便にはかさ高に成候間、秋冬迄之内便に可進候。熊澤七郎、父を七郎と申候。七郎父を八郎と申候、此八郎ハ熊澤太夫の妹の腹の子にて、了介の為にはおゐなり。此八郎書置申候志士清談にも大概熊澤太夫の事出居候へども、志士清談は写本散逸無心許存候。志士清談は井上藤介写し置たるとやらんも承候キ。何分好便之節可進候

とある。百介と云ふは正業（七郎）の子で正瞭と云つた。安永元年自殺した。母は岡山の江見平兵衛の女である。「たゞくざ」と云ふ詞、辞書どもに見えぬ辞である。岡山地方の其当時の方言ででもあらうか。（鳥村知章氏の岡山方言、其他二三の岡山地方の方言書を檢したが、何れにも見えない）常山が文會雜記卷五（日本隨筆全集本、隨筆大成本は卷三上）に「史記ハ前二モ云通り未定ノ書ナリ。タ、クサ、ニ古キ紀錄ヲトリアツメテ未ダソロヘヌ所ガ、今ノ世ヨリ見レバ結句古テイニ見ユル也」とある。どうもハッキリとせぬが徒ニとか卒爾ニとかの意とでも云ふ様な意に用ゐたもの可。とにかく常山が斯く度々用ゐてゐるから間違ひではな

い。○七郎父ヲ七郎と申候の処少し解しかぬるやうな文だが、熊沢七郎は父が七郎（父子同名）で其の七郎の父が八郎で、その八郎が蕃山の妹（萬女）の腹の子で蕃山の甥になると云ふのであるが、父子同名でや、こしいが、此状の頃の七郎（正業勝蔵）其の父が正路（七郎直之丞）で其父が八郎（正修）で、この父が猪太夫（正興、權八郎）であるのである。井上先生の蕃山考に文會雜記附録（日本文庫本）を引きて

熊澤七郎父ヲ八郎ト云。八郎ハ猪太夫也。幼名ヲ權八ト云

とあるを引き出でて「七郎父ヲ八郎ト云フ」トアルハイブカシ。正修ハ八郎、父ナル正興ハ權八郎トコソ他ノモノニハ見エタレ。と云はれた。然し此の日本文庫本の文會雜記附録には誤脱が有るので、正宗文庫藏写本の両種も隨筆大成本にも「八郎ハ猪太夫也」とある処が「八郎ハ猪太夫が子也」とあるので「八郎」即ち正修は猪太夫即ち正興が子なりと云ふのであるから、其はよくわかるのである。此の手紙のも八郎（正修）は蕃山の妹（萬女）の子で蕃山のおゐであると云ふに間違は無い。○志士清談は私はまだ見ない。又世に伝本あることをも聞かない。其から、辞祿、去國等の事を四明から尋ねて来たと思える返事が安永六年四月六日の状と見える。其に蕃山の事も有り、其他伝ふべき事が多いから掲げ

大藩（○岡山藩）にて辞祿の事、去國之事、御尋被仰聞候。熊澤太夫は痛所有テ執政ヲ辞シ申サレ、丹州公其時八之亟殿と申候ニ三千石ヲ譲り申度と願ニテ三千石八之亟殿ニ被下、了介ハ蕃山（シゲヤマ）ヲ隱居所ニシテ引コマレ、ツクバ山葉山シゲ山の歌ヲトリテ名

ヲツケカヘラレ候。其後又御斷申候て、芳野へ被參候由

此春はよし野の山の山守りとなりてこそしれ花のこゝろを〔○此歌三句、山守を山人と伝へしあり。結句、こゝろをを色香をと伝へしあり〕

とよみ申され候由、八之亟殿ハ其時々御番頭御勤被成候。古き書付八之亟と御座候ハ丹州公ノ御事也。于今丹州公の御家ニ熊澤ノ紋ノツキタル武具ヲビタシク有之由ニ候。丹州公の臣物語申候。〔○八之亟への讓狀は現に正宗文庫に其の原本を收藏してゐる。拙著蕃山全集にも掲げて置いた〕尤了介と烈公トハ明良ノ遇故非常ノコニテ今日ノ例證ニハユメクナラズ候。ソレユヘ祿ヲ辞スルトナレバ國ヲ去ルコト定リタル例ニナリタリ。但御定法ニハ其事ナシ。ソレユヘ近年山田盈科ガ養子ハ針ヲ幼少ニテ得稽古不仕、被下候祿ヲ只クヲヒ致候事迷惑ニ候御暇奉願候。讃岐へ歸リ針稽古仕、万一御用ニモ立申候ば其節奉願歸參被下候へと願ニテ願之通御イトマ被下候と承候。是又非常ノ事ナリ。辞レ祿ヲスレバ必去レ國ヲルコト只今の通例也。野村權六郎〔○尙房〕事モ非常ノ例ナリ。又推恩候ノ事ユヘアナタノ家ヲ出テモ備前ハアナタノ國ニ非ルユヘ岡山ノ市中ヲカクレテ禎ガ先君子〔○亦右衛門英〕扶持ヲラクリテ一生養タリキ。コレモ例ニハナラズ候。何分祿ヲサシアグレバ只今ノ人ハ國ヲ去ルヨリ外ノコナシト見ヘタリ。西九州ノ法ノコナカネク承及候。吾藩トハ大ニ異也。又吾藩ノコハイカニ七聖人ノ道ヲ行ルレモ人心付ズ。タトヘバ大罪人ハ即決左ナケレバ冬刑罰行ハシメ定リ候御大法ナ

リ。其外ヨク心ヲ付テ見レバ殊ノ外他國トハ異ナルコト多シ。然トモ四五年コナタハ大ニ數レタリ。其モト津田重次郎〔○永忠〕ヨリ起レリ。曹源少將公〔○綱政〕ノ重次郎ヲ御用被成候ハ宋ノ神宗ノ王荊公ヲ用タルト同ジコトナリ。コレヲコトハ面晤ナラデハ微細ノコト云ツクサレズ。自愛。四月六日

本書ニ辞祿之事申述候得共紛々として御覽被成がたくと存候。又書申候。とかく只今にてハ辞祿即去國申候。他邦とは殊なる事也。尤他邦ニモいろく有之と聞ヘ申候。吾藩ハ辞祿去國トタテ、暇ヲ請願書ハ出サヌガ通例也。是ハ烈公ノ時ヨリ如此。然ドモ烈公ノ御時ハ非常ノ人君故其人ニヨリ品モアリタルナルベシ。ソレハ例ニ援ズ候。

此の状は前述の如く井上四明が何か事が有つて進退を思ひ煩つた時の事であらうが、其の事は知れないが、常山が例を引いて懇切に返事をしてゐるのである。好い資料である。文中に見えた野村尙房の事は文会雜記附録に常山が書いてゐる。先妣〔○瀧氏。名は瑠璃子〕遺篋の中に京極中納言〔○定家〕小倉の山莊の軒端の松が一包ある。野村尙房が遊覽の日葉を採つて帰つたものなど記してゐる。市隱の歌を録し其高風を称へて「禎曰、高二於許由二等」と評してゐる。尙房の詠歌五十首ばかりも収録してある。其内に尙房が弟の身まかりし折の歌ども十首ばかりも掲げてゐる。さて元禎曰として

先生〔○尙房〕喪弟は享保十三年〔○六月二日〕ナリ。先生友愛極至、且弟氏甚不慧ナリ。衣食ノコトニ至マデ賜ルコト篤實也。小俸三口

ワヅカニ養ニタル。隱逸ノ志夙昔ヨリアリシ故ニ娶ラズ。弟亡テ後常ニ云フ。吾弟ヲミル<sub>レ</sub>ト先妣ヲ育<sub>フ</sub>ト思ヘリ。今喪失ストテ涙下リキ。亡何同十四年正月十七日下世。禎ガ先君子後事ヲ經記シテ禎ヲシテ其ヲツカサドラシム。十三年ノ歲暮ノ歌ニ「春秋トサキケル花ニヌル蝶ノネブラヌ夢ニクレシ一年」何トヤランイマ<sub>レ</sub>シキ体ニ覺キ。コレ其識トナリタルカ

と云つてゐる。而して尙房には妻も無ければ子も無いので著書も蔵書も皆常山の家に引き取られたのであるが、常山の家の莫大なる蔵書どもも四散してしまつた今日、其の歌集も文集すらも見ることが出来ないのは遺憾である。私は常山の旧蔵書や経平の著書や蔵書どもは多少入手して正宗文庫の至宝としてゐるが、尙房のもの数十年努力してゐるが何一冊も收藏出来ない。(尤版本の「三玉桃事抄」は無論有る)どんな亡びやうをしたものか。実に残念に思つてゐる。三玉桃事抄の引用書目、惣計百三十餘部で和漢書の外に仏書にまで及んで大変な書籍である。其の博學實に驚くべきである。今の世にしてもとてもあれだけの書籍は見る事も出来ない。

因云。常山の番山論が文会雜記附録(隨筆大成本六九五頁)にも出てゐる。参考せられたい。又湯土問答の附録にも出てゐる。ともに見合わせられたい。

次々抄出したいのが多くあるが長くなるので大切なのみ少し抜き出で、筆をおきたい。安永九年正月のに

○備藩典刑豚兎尙又外よりも尋出し次足シ申候○佩紘二字拙筆ながら書可申候。○子順大佐去秋も追かけあきなひに七貫目餘損致し、

兄もよほどワキマへ遣候由、譲リノ金子尽申候而始て目さめ、もとの心に成候而、兄申す言もよく聞入專舌耕致候。近比詩見セ申候。文字穩ニヲチツキタルハ蹈海集に近く御座候。右之通ゆへ兄ハ甚窘申由、元來富と申候ても数千金ヲ累ネタルニテモ無之候。然ども會計よく致候故飢寒の論ハ無御座候。近比ナリワタリタル後藤佐一郎など始至而貧、コモヲ卷て夜イネタレドモ父母にシラセズ候由、仁齋も始開講ナキ已前ハ正月ノモチ買ベキ錢モナクテ、帶ヲ解テ典當シ上下ノ下ヲキテヒボニテ帶ノカワリヲシテ夜を明サレタルト申物語モ慥に承候キ。中<sub>レ</sub>左様ノ事にてはなく候。禎モ家祿ヲ襲申候節借銀公儀の拝借十三貫目外に急成借銀十五貫匁ユズリヲ請申候。其後六七年の間の難厄申すに詞なく候。老父母ヲ侍養致し候に力を尽し申候。其中にどうも堪られぬハ冬炉の火無之、これほどつらき事はなく候。只今にてはそれニ比スレバユタカナル暮しに御座候

○禎所著常山樓筆餘は大坂の書物や河内や八兵衛と申もの刊申として写本も請取申候。序ハ子亮(○宮田明)ト國鸞(○赤松)と書賜り候。さて詩文集ヲモ同人刻申度と申候。中<sub>レ</sub>人に見せ候詩文ども至而少く御座候。詩も随分刪去りて四百首斗御座候。君脩に評を乞可申と存候内下世(○安永四年十二月二十三日歿。年五十一)ゆへ國鸞父子へ見せ乞評申候。評も禎が存念と不同候。又古体殊の外少く御座候。何とぞ作り足シ申度、又文も烈公世家又宝貨志世卿論春秋論長篠ノ記事など書申度、近年に出来候ば一集ニ仕、是ハ足下へ序ヲ乞申度存罷有候。禎寛延己巳東役、又宝曆元年東役諸君とも出合、

よほど学問之益を得歸候へば拙荊早世、稚子を養育に大にこまりは  
て病氣に成、やうく保養一兩年して快成候へば寺社奉行に被仰付  
それ今刀筆に苦み、閑居致候へば精力甚衰立言之志不遂、誠に草木  
と同じく朽可申と存候へば口惜事学問ノ上不仕合のみ、且少経國の  
志も有之候へば立朝不一年世の人申候。一モトラズ二モトラズト哉  
覽に御座候。せめて今二三年も存命右之著述など致し申度存罷有候。  
七言古詩八十首までも無御座候。モト至テ鈍才ニテ御座候。律詩ハ  
作り習より好候故、間には詩らしきも御座候。書ハ成ほど餘程廣く  
よみ申候へども記憶なく何の用にもたち不申候。あわれ今少し露命  
も御座候而文集三巻ほど出来候へばせめての事に御座候へども、此  
精神にては中々志遂申間敷と中夜危座大息筆にまかせ候  
病與年侵阻盍簪。涼風吹雨夜窓深。高歌一曲逢搖落。自是無人識此心。  
此の状はとても長々続いてみて面白いが余り長くなり過るから中断す  
る。○子順は三備詩選に江田忠、字子順、號拙齋、岡山人と出てゐる。  
此の人の事はあまり何にも出てゐないから其詩を一首のみ抄出する

### 寄子坤

(病カ)  
陋巷出無レ車、一飄還不レ虚、獨醒非レ止レ酒、多病爲レ耽レ書、才  
自ニ青年ニ拙、交因ニ白眼ニ疎、呂安堪レ命レ駕、潘岳正閑居

其他も出てゐるが略して其片影を留める事とした。後藤左一郎と云ふ  
は養菴と云つた名医である。諱達、字有成と云つて江戸の人である。享  
保十八年九月十八日京都にて亡、年七十五。伝は事實文編卷三十に香川  
修徳と子の省のとが出てゐるから読まれたい。仁齋先生が餅を買ふ錢が

無かつた談も面白いが、常山も中々會計に苦しんだ事の思ひ出ばなし  
を友人に書き送つてゐる。人世の行路難、山にあらず川にあらずで、昔  
も今も変りは無い。常山が今二三年も生き延びて著述もしたい、文章も  
書きたいがと歎いてゐるが、此状の翌年の天明元年一月十九日に此の世  
を去つたのである。既に余程身心ともに衰へてゐたと見える。私も常山  
に近い歳に及んでみて此の感が深い。実に斯る手紙は卒読に堪へない○  
常山樓筆餘は天明五年十月に上梓となつてゐる。書状は京都、東都、讚  
州高松、備前岡山となつてゐるから、此状の河内屋八兵衛では出なかつ  
たらしい。其の奥附に常山樓集は梓行としてゐる。序は宮田明が安永己  
亥(八年)七月既望に書いてゐるから此状より先に出来てゐる。赤松鴻  
の序と外に明和九年(即ち安永元年)七月の富士谷成章の序が添つてゐ  
る。成章の序は高田維亨が原稿を三つが一程携へてゐて依頼してゐる。  
此の高田氏は備前のと成章が書いてゐるが、私はまだ此人の事を知らな  
い。○常山の書簡中には濱田藩の小篠敏道冲の事なぞ珍らしく出てゐる。  
往来を始め諸家の評論や書籍の事多く、又日常の事から「とかく水氣之  
兆有之、宜と存候へば又兆々申候。老境にいやな事と専申候故只今は先  
第一に保養のみ致一絶句も不致候」などとも云つてゐる。残り惜しいが  
一まづ此書の事はとめる。

前回「先君子寄仲龍書(四)」に志士清談の事に言及して「又世に伝本ありと云ふことをも聞かない」と云つたのは、全く忘卻してゐたので、其の老耄を恥ぢ入る。今思ひ出したので追記する。

安田文庫発刊「椎園」第二輯の内、安田文庫書目に

志士清談 自筆校正本(写) 一冊

本書は戦国より江戸初期に至る志士の逸話百七十条を集録したもので、巻末に左の守重手識(墨書)があり、又全巻に守重が朱筆を以て自ら校正書人を加へてゐる。なほ「○」「○○」等を頭書してゐるのは、守重が読過の際に於ける感激の情を表した記号であらう。巻頭に「正齋藏」印記があり、表紙には正齋の手題がある。判紙本。

(巻末手識)

世に碎玉話ト云ヘル一書アリ。一名武将感状記ト云熊澤了介ガ著ス  
トコロト云ハ誤レリ備藩ニ吉田源之丞ト云モノアリ弓馬ヲ善スソノ  
家に古ク持伝ヘル古葛籠アリソノ中に古キ物語ヲ紙の切ル反故ノウ  
ラニ書アツメテ数卷アリシヲ熊澤伊大夫(一馬云、云ふ脱か)モノ  
取出シ文ヲ綴リ清書シテ書冊ヲナシ碎玉話ト題スソノ後ソノ古葛籠  
ノ底ヨリ数卷ノ物語ノ残リアリシヲ南条八郎ト云モノ見出シテ一冊  
ヲツ、リ志士清談ト題ス八郎ハ了介カ孫ナリト云コノ話池田山城守  
ノ臣森田勘九郎ニ聞テ西山翁(一馬云、大久保忠寄)ノトコロニテ

記シ置モノ也

寛政五年春二月 近藤守重

と出てゐた。

○

私は此の幼悟家書の事を本誌に依て紹介して置きたいとかねてから思つてゐたが、延び／＼に成つてゐた。此書の著者が我が県下の出身である処から、成るだけ伝記を知りたいと思つて年まねく心懸けてゐるが、少しも知る処が無く本日に及んだ。穂浪だよりも県下の事を離れて少し書いて見たいと思ふてゐるのであるが、とも角も此度は此の書を取り上げる心持になつて、本書を読み直したり、調べなどした。本書は元來間違ひから私は写真にとり、又其を自写したりしたのである。間違へば間違ふ物と云ふ諺が世間に在る。此の本の如く私は間違つてまごつて、筆を執る今になつて、手許の本に出てるのを発見するやうな馬鹿げた事はメツタに無い。然し此の紹介文を書かないで止めるのも業腹であり、世間もまだ知らない(少くも我が県人は知らなければならぬ)に知らない)其れで、其れが我が県下の学者で有る事を少くも県人は知つて、やがて其の伝記も業績をも探究して、其の人を顕彰する義務があると思ふので、筆を執る事にした。遼東の豕的であるかも知れないが博雅の君子の示教を得れば幸である。

私が昭和十四年の秋の頃、蕃山全集編纂出版の事業に著手して東上し、静嘉堂文庫に毎日通つて資料となるべき本を写したり、校合をしたり、写真にとらせたりした。同文庫には旧押小路家伝来の熊澤蕃山の著書が

沢山所蔵せられてゐる。是は松井簡治博士の所蔵本が同文庫に全部收藏せられた、其の一部である。蕃山の著述で未刊本も大抵に所蔵せられてゐると云つてもよい程である。其時に形が同一で内容も似通つてゐた為か、幼悟家書と云ふ五冊の写本を係の人が持ち出して見せてくださった。私は此書を見た事も聞いた事も無かつた。然しとても筆写する暇も無いと思つて、珍らしい本だなと思ひつゝ、写真にうつさず分に加へて置いて、外の仕事に専念した。処が中途で右手が非常な神経痛を覚える様になつて困つたが、兎に角仕事を片づけて帰宅したのである。其から此の珍籍が小さな写真になつてゐるのを読んで行くと、第一序文の処で蕃山の著で無い事がわかつた。其処で直ちに包むで繙読は後日の事として、折から忙しいので仕舞込んでゐた。蕃山全集も完了したから取り出して読んで行くと此の著者が美作の人で有ると云ふ事が知れた。其処で是れは郷土書として大切な本だなど思つて、小さな写真では保存にも研究にも困ると思つて、ひま／＼に写真から美濃紙へ自身で筆写し始めた。処がノドの処が写真に写つてゐない。郷土書の珍本の複写が斯くては用をなさじ、さりとて上京して取調べなどは、曾ては其れ位の事は出来もしたらうが、今の身分ではどうも成らないと嘆息してゐたが、幸なる哉、同文庫に勤務なさる、丸山季夫氏と御交りを結ぶやうになつた。其処で右事情を打明けて御助力を御願ひした処が、御承引くださつて丁寧な御取調べと御教示を給はつた。さて是れで我が県下の郷土書の一珍本が完全に複本がとれた。県の為にも我が文庫の為にこよなく善い事が出来たと丸山君の厚意を心に感謝し、誇かにも思つて楽しんでゐた。其処で穂浪

だよりで紹介しようと筆を執る氣に成つて、今一度読み直しつゝ、猶何くれと取調べて見た処が、何だ此の書は佐村氏の国書解題に出てゐる事も元祿五年の刊本だ。従つて大分もとの上野の図書館に在る本である事が知られた。(昔の古書籍目録どもをざつと調査したが其等には見当らなかつた。さうして見ると版本では有るが書林が取扱はなかつたか、版木が不幸にも焼けでもしたのか。兎に角古本販売目録でも見かけた事は無い) 前書が長くなつた。

先づ此本は始めは原本かとも思つたが、刊本が有る位だから無論原本では有るまい。美濃紙五冊本で本文ザツト百枚位有る。徳行之類・窮理之類・陰徳之類(以上一卷) 辨惑論(以上二・三卷) 順逆論(四卷) 辨惑論附警戒・警戒乃類(読書戒・名利戒・放心戒・自反戒・慎獨戒、各和歌一首を添ふ)(以上五卷)である。

先づ其の人が美作の人である事など伝記資料となる事を本書より抜書する。

愚も壮年の比は古郷美作にありしが、隣国備前には学校を設ケ聖学の興起せんとするを見て、其国に生れざる事を怨み、朝暮に其風を慕ひ、適々彼地に行て見れば、おのづから聖代に住むこゝちせしが、年をかさねて其国の友と交れば後は又故郷の友に益す事もなし。其後又京大坂に徘徊して一二の同志を得て交りしかども、皆好む所同じからず。利を求め名を得るに益なきがゆへに後は相談して別々になりぬ。一日自反するに得ては悦び、失ひては憂へ、其間に入出入する事既に久し云々

序文に本書の成立の事は出てゐるが後に全文を載する事として、時に貞享三丙寅冬月自習齋正甫、難波にをいて禿筆をそむる者ならし。とあるから名が正甫で自習齋と号した事は確である。静嘉堂の目録に「日比正甫撰」と出てゐる。日比の名字は何に出てるか知らぬが版本にでも有るのか、国書解題にも然書いてゐる。(補註) 辨惑論中に

たゞ、医術の暇には神明の道を以て真道を立む事を思ふのみ。易の觀に聖人以神道設教而天下服矣といへり。聖人の教も神道也。然とも全く習合するにはあらず

とあれば医を業とせりと見ゆ。所謂儒医と云ふ位の処であらうが、とにかく医が生活の道であつたか。

学友の云、貴丈の友に沙門多し。聖学を信じながら、何ぞ佛氏と交り給ふや。答云。人は天地を父母として生ずる故佛者も我れも同氣異形の兄弟なり。虫魚も群類を愛し、牛馬も形影相と依り悲鳴相応ずといへば、況や人として人を友とせずして禽獸と交るべきや

と云ひ陶淵明が廬山の慧遠法師と交り深く

法師は持戒なれども淵明がためにはみづから酒を酌ミ別れを惜みては二たび渡らじと誓ひし事をも忘れ虎溪の橋を踰たり

と云ひ、「淵明終に佛見にも惑はず、又遠法師も儒者と交りたりとて名もくだらず」と云つてゐる。正甫は神道にも出入し、儒佛をも併せて学び、何れをもしりぞけるなぞの褊狭なる考は持たなかつた人と見える。少し長いが序文を掲げる。

夫道は天下国家共に知る所耳に聞て口に発する事は易く、心に得て

身に躡する事は難し。愚少年の比より学に志ありといへとも家に群書の貯なく又師友を求めて其門に従ふべきいとまあらざれば是を歎ずるのみにて徒に年月をおくりぬ。適々有徳の名を聞は儒釈を不撰たづね慕ひ侍れども、其人或は愚蒙の信によつて高明の名をなし、あるひは威儀を専として達道の誉れあれば皆したふべきにあらず、と身の拙きを忘れて師範のみを撰びき。一日朋友責て云、子が志切なりといへども外に求る惑ひあり、書契以前に聖賢なきや、聖賢以前に道徳なきや。今の時に其人を得て心伝を期せば一生求ても得べからず。心は無極の真、聖賢の尊ぶ所(書)籍に存ずるの要顯然として我れにあり。一理渾融し充塞無間(ヘダ)。こゝに徹して皆道なる時は孺子の歌は滄人の恒言也。何ぞ性外に道を求むやと。愚其言によつて初て身の非を知り、誠は天なりといふに本づき実心の我にある者は天理にして、実理の天にある者は直に我が心なる事を默会し、是を受用して少く心に得るがごとく、年をかさねて又透悟に似たる事を覚ふ。爾来いとまの日は甕牖を窺ふ同志あれば臆見を論じて相切磋し、是を反故(ヘダ)の裏に記し已に年経て数十帙に及べり、其中無用の論のみ繁多なれば僅に其一二を摘てあらため写し、始に受用の類をなし、終に少々の警戒を附し、分て是を五巻とす。世の子弟己が過失を不責、他の長短を議し意に造次の驚きを抱き、顛沛の厄を懐がゆへに其俗習を懼て家童のために遺すのみ。他の見聞に及ぶべきほどのものならねば辞の拙きをかへりみず、世の贅々を書付題して幼悟家書とす。若道をおもふ志あつて経伝をよむべき便とし、萬



分の一助ともならば我が心をひて幸甚也。時に貞享三（以下は前に掲ぐ）

と有る。是れで本書の成立はわかる、又贅言を加へない。余り長くなるから内容の紹介は略する事とするが其二を掲げたい。

後漢ノ范式字ハ巨卿、少シテ大学ニ遊ブ、汝南ノ張邵字ハ元伯ト友トシテ交リシガ、二人各古郷へ帰ル時、范式元伯ニ向ヒ後二年何ノ日ニ子ガ家ニ行テ君ガ親ヲ拜スベシト。後其ノ期ニ当テ伯母ニ告テ饌ヲ設ケ待ベシト云。母曰、二年ノ別千里ヲ隔テ何ゾ信ズル事ノ審ナルヤ。伯對テ曰、式ハ我ガ信友也。必ズ違フベカラズト云、果シテ其日ニ来リ堂ニノボリテ母ヲ拜シ歡ヲ盡シテ別ル

世ニ信ナキ者ハ誓書ノ墨イマダ乾カザルニ叛ク事踵ヲ施ラサズ。式千里ノ□言其ノ期ヲタガヘズ、伯モ亦其ノ言ヲ信メ是ヲ待事朋友相信ズルノ実ヲ得タリ。古ヘノ君子ハ口ニ矢テ言ヲ成ス。故に其ノ言行相離レザル事形影ノ如シ。後世信ヲ失フ者肌ニ識シ骨ニ割テ其浮言ヲ省リミルベシ

と云つてゐる。是れに就て思ひ出さるゝのは西鶴の武家義理物語に「約束は雪の朝食。賀茂山の片かげに隠者有り、むかしの友の身上咄の事」と云ふ一条、石川丈山を或時小栗何がしが、「是もへつらふ世を見限り、形を替へて京都にのほり、東武にてしたしく語りし床しさにこの草庵に訪ねて」物語して、さて我は備前の岡山に行くと云つて別る、折に、命あらば霜月の末に帰り来らんと云へば、「然らば二十七日は我心ざしの日なれば是にて一飯かならずと約束し」て別れたが十一月廿六日の夜大

雪が降つた。「丈山竹箒を手づからに、心はありて心なくも、白雪に跡を付けて、踏石の見ゆるまでと思ふ折ふし、外面の笹戸を音信れし、嵐の松風など聞き耳立つるに、正しく人声すれば、明けわたる今、小栗何がし、たづね来るに」とあるを思ひ出した。備前の岡山へと云ふと懐かしくて書き添へた。今一つ例を引き出でて筆を止めよう。

一朋友憂て云、我れ常に父母に孝あらん事を欲といへども、身貧なれば心にまかせずと。答云。志は切なりといへども真に孝道をしらざるなり。それ孝は身を立道を行フを先とす。身を立る事は只道を行ふにあり。子榮達の時を期して是をやしなはん事を欲といふとも、若富貴を不レ得ときは虚く一生の孝を失せん。假令是を兼たり共又口躰の養ひのみ。保養のために富貴を貪り心を汚し身を危ふせば、日に三性の養ひをなすとも是天下の不孝子ならん。身貧賤にありといふとも分にしたがつて志を盡し、心洒然として汚なく、身堅固にして危き事をなさず、其心を安し意を楽ましめ是を大なる孝とせむ。樹静かならんと欲すれども風不レ停、子養はむと欲すれども親不レ待。往て不來者は年なり。再びみるべからざる者は親也といへり。只愛敬の誠を持し日を愛みて事べし。古へより孝子の至情は惟り貧窮の家に切なり

以上で内容見本も掲げたので筆をおく事とする。本書の研究は又其人あるべし門外漢の我等のよくする処に非ず。集義和書のやうな書き様であるが本書の方が少しきこちないやうに思はれるが、然し得難き著述で有ると思はれる（昭和二十七年十月二十二日）

(補注) 元禄五年版本の序には「時に貞享三年丙寅冬月。習齋日比氏正甫難波にをいて…」とある。

19 穂浪だより〔18〕  
菅沼斐雄歌集に就て

我が岡山県下の歌人で平賀元義・木下幸文に続く歌人に高橋正澄と菅沼斐雄の兩人がある事には誰れも異論はあるまい。正澄には塵室草露をはじめとして数種の家集があつて、然も版にも大抵はなつてゐるが、菅沼斐雄の家集は伝本が無い。佐々木信綱博士の編輯せられた統日本歌学全書第十編「桂園門下家集」中に斐雄歌集と云ふのが編入せられてゐるが、是は歌数も少なく、かつ好い歌も漏れてゐて、假初に誰か集めた物に過ぎない。其をあかぬ事と思つて私が若い折に井上通泰先生の指導の許に其の歌を集めて明治三十九年十月に発行した。明治大帝は桂園派の歌を御このみになると仄かに承つて乙夜の御覽にもそなへた事が有つた。然し若い折の事でもあり、短い月日のもとになし終へた事であるから行きとゞかぬ点もあつた。森鷗外博士が正誤表を自から作られて送りに給うた事など、今から思ふと嬉しい思ひ出での一つである。

元来斐雄の家集は編纂せられてゐた筈である。少くも編纂せらるべく門人達の間で計画せられた筈である。斐雄は四十九の若さで江戸で客死した。されば本人が家集を編纂する迄には至つてゐなかつたが、雅俗両様の日記があつて、雅の方には桂園翁をはじめ、幸文・直好さては正澄

などと同じやうな歌日記が有つた。天保六年(天保五年八月二十五日に斐雄は歿したのであるから六年は其の翌年にあたる)閏七月十一日に中西喜内(喜内は斐雄の弟で頼完と云つた)当時江戸にゐて国元の母及び元助〔北村賢次の事〕に宛た消息に

一兼て申上置候日記不残是は皆々社中ほしがり皆々御直筆にて御座候ゆへ急度金にても相成候品に御座候。是は兼々朝岡へ相断置母様へ差上候積りに残置申候。早々差上度候へ共当表にて菅沼歌集出来候積にて社中手分にて写取京都へ遣し點を取候心得にて此節一同へ手分にして写し居申間相済次第御直書本紙差上可申候間御一周忌迄には相写し候積りに御座候。何分十何箇年之日記にて御座候ま、餘程之本数大本にて御座候。

一俗日記是又不残差上可申積りに御座候。是は日々之他行其外内用共誠之俗日記にて江戸表へ御出之年より年々、是又本数多云々と有る。此の雅俗両様の日記も惜しい事には今に発見せられない。又其から撰拔される筈の家集も出来たか出来なかつたか、伝来のある事は聞かない。扱て其の後私が永年氣をつけてゐて見た斐雄の歌集に

桔梗舎和歌集

と云ふのが有つた。是れは多分倉敷の某氏が所有であつて岡山県立図書館でかつて郷土人の遺墨の展覽会が有つた時に出品してあつたと記憶する。斐雄の自筆で散らし書にして一面に三首書いてあつて、美麗なものであつた。其れを謄写版で志水主計氏が複製せられた。歌数が百九十八首の筈である。其から今一種の本がある。紙数は元本は幾葉なりしか調

べなかつたが私が写した本で七十枚ばかりであつて歌数は数へては見ないが八九百首位も有るであらう。是れは彌富浜雄君の蔵本で

はなの雫 草稿<sup>(本)</sup> 獨泊今居藏

と題せられてある。扉に

此はなの雫は鶴園のぬし年比かき集めしなり。そがうへにおのれまたうちきくま、にかきくわへはべりぬ

文政九年秋 藤原典寛

とあり、又朱書にて

此集、東にありける時、鶴園のぬしにかりはべれど、事繁うて夜る

く事静て後、床の中にてかきつれば、文字の誤少なからず。改記

までは人はよめぬ也

と書添てある。此の鶴園と云ふ人は本集の中に鶴園季良とある。多分江戸の人であらう。典寛は信州松本の人と見ゆ。此の歌集は歌数に於ては第一であるが、文政九年までの蒐集とすれば、死後まで九年ばかりの歌が缺けてあるわけであり、又江戸時代の歌が多いやうであるから、自然若い時の歌はもとより修業中の歌も大抵は缺けてゐると思はれる。江戸に下つたのが文政元年であるから、約十年ばかりの歌が大分に蒐集せられてゐるわけである。斐雄の歌の全豹を知るには物足りない。桔梗舎の歌集の方は自撰であるから其点はすぐれてゐるが、歌数も少ないし、何時頃迄の歌が有るかの点も知れない。かつ自撰と云つても一書として精選したか、たゞ自から思ひ出づるまゝ、氣に入つた歌を書きつけたのかは知る由もない。兎に角、此書と花の雫と私の編したのを合せて見れば

大畧斐雄の歌は知られるわけである。しかし前述の「花の雫」の出現は斐雄の歌を知るには缺くべからざる書である。正宗文庫に此を写本して置いてゐる。桔梗舎歌集（謄写版本）に斐雄のちらし書が読め難く思はれて、奥に親切に読みよく書き改められて添へられてゐる。其の内に少々誤記があるやうであるから、心付いた点を書き出して置く。傍に、の印をしてゐる処が私の考で改めたのである。幸にどなたか斐雄自筆原本とくらべてくださつたならばよろこばしい事である。（題は畧しておく）

ゆふがほの光り、くれ行垣根よりそよぎそめたる萩の上風（題ノ萩も萩の誤）

種のかれし垣根におのれさへありわびて鳴虫の声哉

糺がほ千鳥啼たつ跡みればいまだ氷らぬなみの上の月

をかのべの梅の立枝をたよりにてのぼると見ゆる山の端の月

村ちどり鳴たつみれば黒河のあし辺は浪に成るける哉（黒河の黒は

原本の写が墨の如く見ゆるが、墨江ならんかと思ふ）

暮待て花咲たれどゆふがほのつゆの契のあはれなるかな

我妹子（が脱か）とき洗ひ衣かわきあへずけふもゆふべに成にける

かな

遠近に一つふたつともし火の数（そふ）ころぞ旅は悲しき

紅の入日のなごり猶のこる豊幡雲に月ぞ匂へる

とけはかつうつろふ花の紐なれば露やをしてみて猶むすふらむ

木の間より海さへ見えてあかざりし今日の山路を夢に見し（かな）

山のはの雪にかゝれるすみかまの烟の末はまかはざりけり  
出てこんかごとばかりにすゑし鷹かりの契りとおもはざらなん  
敷島の道なかりせばうきことのはるけ所もなき身ならまし  
以上である。

因云。桔梗舎歌集に添へてある斐雄の伝に「伊達家に仕へて居つたのではな  
いか……伊達家の人々と一緒に北海道から千島の択捉・国後辺まで行つた様で  
す」と云ふのは誤で、そんな事は有りませぬ。或は児山紀成の事を混同せられ  
たのではありませぬか。蝦夷日記は明治廿四年十二月に桂園遺芳に收めて畠山  
健氏が版にしてゐられる。

花の雫の歌も少し抄録したいが長くなるから畧す事とした。

○ さる人から小神富春の歌を郷土の人々が集めてゐると云ふ事を聞いた  
事がある。正宗文庫に同人の歌集が收藏せられてゐると云ふ事を伝へて  
くださいと云つて置いたが其後何のたよりも無かつた。既に集が出来た  
のか、其とも外に家集が発見せられて用が無かつたのかは知らないが、  
文庫收藏の富春の集の解説をして置く。一種は

#### 芒園歌集

と題する本で半紙七八十枚位の本で歌数は巻末に凡九百六十七首と注し  
てある。元日の歌に始まつて祝の歌で終つてゐて四季恋雑と大躰順序よ  
く整理せられてゐるやうである。奥附に

嘉永五年壬子春閏二月下浣写於翠陰居士学房窗下

と書いてある。先づ家集と云つたやうな形をと、のへてゐる。今一種の

方は名は同じく「芒園歌集」と有るが本は全々別である。弘化三丙午年  
と注し源富春と署名してある。而して

富平が淡路州の画かきたるを見て、  
と題して

けしきはも世に類なき淡路しまなて児の数に入れずや有けん

で一応終つて「右五十二首、弘化四とせやよ廿日あまり四日書終ぬ。  
芒園源富春」とあり、次に二枚ありて「北野聖廟奉納千首和歌第一。百  
首」とありて歌あり、同第二百首と有つて秋の部「蜚」をのか音の夜  
ことよはるきりぐすあきもすゑ野の露や寒けき」にて中絶してゐる。  
是れは詠草の写しのやうである。但し自筆ではあるまい。假名遣の誤ま  
である。とにかく此二本があるが、前掲の分が家集として保存せらるべ  
き性質のものであらう。

私は過般目の手術を受けてまだ全治せぬ。或は小さな文字には別れね  
ばならないかも知れない。高橋正澄が目を病で、晩年はほとんど盲に近  
かつた。大きな字で著述をしてゐる。短冊は行もゆがみて乱れがちであ  
つた。私達は「さぐり書だ」など云つて嬉んで愛蔵したりした。自らが  
今此原稿もさぐり書であるが、悲惨である。しかし何時失明するか知れ  
ぬと思ふと、さぐり書でなりと書きつけて置きたい事が多い。此のたよ  
りも行とゝかないが御ゆるしを願ふのである（昭和二十七年十二月卅日）

垂雲軒澄月の事は今改めて云はなくとも誰も知つてゐる事であるから云はない。其の家集と云ふのは二種と外に千首と云ふのがある。澄月法師千首と云ふのは二冊本で版になつて世に流布すくなくないから今彼是詞をつくす必要もあるまい。文政五年武者小路実統徹山の序、寛政二年十二月、七十七叟澄月識とある自筆の跋が付いてゐる。寛政二年の跋から序の文政五年迄三十三年は版にならなかつたと見えるが、其の文政五年も版になつた年かどうかは知れない。澄月が年齢は少々不審があるが寛政二年が七十七歳とすると、寛政十年五月二日死んだとすれば八十五歳が正しい事になる。私が小供の時に書いて山陽新報に投じた澄月伝は〔注二僧澄月上人伝カ〕年齢を垂雲軒和歌集の宮下正岑の序によつて考證して八十二歳としたが、本人自筆の澄月千首の跋文によると、やはり八十五歳になるから、〔以下二字新カ〕やはり八十五歳になるから、宮下正岑の序文を誤と断ずる外はない。歿年に就ては、「年老ぬれば命あらんほどにとて夢宅をよびのほせ、跡の主とさだめ、いくほどもなく寛政十年といふ年の五月二日といふに八十あまり二つにて此世をさりたまひぬ」とある、此八十二は誤であつても、歿年は確に書かれてあるから、是によつて八十五とすべきである。

## 澄月上人歌集

此の歌集は写本にて伝はつてゐたが井上通泰先生が信州の桃沢家でもとめ出られて写して蔵してゐられた。佐々木信綱博士も同じく桃沢家の

を借り出されて続日本歌学全書の小沢蘆庵翁全集に附して出版せられたが、其れは抄出せられて歌数が極めてすくない。今正宗文庫には其の全本を蔵してゐる。井上先生から借りて私が小供の時に写して置いた本である。先生の写して蔵してゐられた本は多分東京の大震災に焼亡した筈だから、其の原本は猶桃沢家にありはするであらうが、先生の方のは亡んだ。とにかく私の文庫に写し留めてゐたから今日直ちに見る事が出来るのである。文籍は案外に亡び安いものであるから、なる丈複本を作つて置くべきである。殊に郷土関係の本は勉めて其郷土郷土に複本作製に御互に努力すべきである。さて此本は佐々木博士の調査によると歌数五百九十五首とある。序文は前述の如く天保二年辛卯三月、自然亭宮下正岑であり、奥書は天保九戊戌十一月匡逸八十歳の老眼にて写候間落字又はかな、ど書ちがひも可有之御察御覽可被成候 匡逸写之置 桃沢〔匡逸〕とある。そうすると正岑本を桃沢氏が写されたものであらう。是れが一応編纂せられた形のと、なつた家集であるが、其の他に今一種類ある。

## 垂雲集 四冊

是れはもとより写本であるが、美濃紙で春夏、六十三枚。秋冬、六十四枚。恋、四十五枚。雑、六十枚合計二百三十二枚であるが、此本は一枚十八行で題は大抵上に書いて、下に歌を書いてゐるから、ほとんど一行一首の割合であつて歌は多い、ざつと算用して四千百から百五十位あるで有らう。奥書は

此写本斎藤齋翁之筆

校合男寒齋翁

為遺物讓受

時文政七年秋八月

花押

とあるが其の人々の事は私は少しも知る処がない。とにかく歌数が多く、先づ全歌集とでも云つて宜しい本である。どうも文字にくせがつよく、かつ写誤らしい点もあり、読みづらい本であつて、善本とは云ひ難い。私は今一度写して読みよい本を作り度と考へつゝ、年をとつて、今は氣力も乏しく、目もわるいから其の事は断念せねばならなくなつたのは残念である。澄月の歌は私はさほどすかないが、我が県下としては大切に保存せられねばならぬ本と思ふ。澄月の歌は今こゝに掲ぐる必要もあるまいが、吉備愛國百人一首が撰ばれた時に、私は社頭風の題で

岩なみもこゑうちそへていすがは絶ぬ恵の神かぜぞふく

と云ふ歌が出したかつたが、入れられなかつた。今でも惜しい心持をもつてゐる

○

高橋正澄は木下幸文に繼で菅沼斐雄と共に桂門十哲の一人であり、言靈派では屈指の大家であるのは周知の事である。此人の歌日記は文化

（高橋大日記）

十一年十二月二日、親類丸山とよゝしが訴へたので龍野に出かけて行く事から筆を起して、五日舟にのると書いてゐる。此巻を「龍野」と名付く。奥書に「此日記文化十一年戊十二月五日より十二年亥七月廿四日迄」の事あり。此次『狙公』あり、十二年子十二月迄の事あり。時松彦輔が

もとにありと覚ゆ。其次『朝霞』とある。「狙公」の巻はどうなつたか、私の手許にはない。「朝霞」は文化十四年正月五日から十月廿六日迄の事が記されてゐる。奥書は「此次七賢人。文政卯八月十四日迄の事有紛失。其次心やり」とある。さうすると文政寅・卯の八月十四日迄が無くなつたのである。次「心遣」は文政二年卯の年の八月十五日夜から記されてゐて、三年十二月廿六日に及んでゐる。此次「若みづ」と奥書にある。此次浪花とある。浪花の巻は十月十一日から筆を起してゐる。いよく国を離れて大坂へ移住したのである。「十月十一日よるになりて船出す。今はと出るほどの事書もつくすべからず。伴ふ人は田中光遠なり」とある。廿四日灘波の河口に入り、廿五日に「医師西山陽がり先とふ。此たび我難波にきつるは此ぬしの催しなればなり」などある。奥書は「文政六年十二月晦日迄」此次「初花」文政七年中、終り近く、正月廿七日備後の国福山へ行、日和峠にて。金崎にて、の歌あり。終に「已下百二十二首、長歌一首反歌二首之中家集外之歌四十二首次記。」とあつて其の歌どもが有つて終になつてゐる。以上が樗園叢書後集本で、其本を井上喜復翁から借りて写した。其以外にも有つたであらうが見る事が出来ない。所謂歌日記であるが、種々の事も知られる。何としても正澄に取つては大切な本である。家集は

（蘆室草露） 三冊

天保甲辰夏発行。心月洞蔵とある。私版本であらう。甲辰は十五年（即ち弘化元年）である。弘所は江戸須原屋茂兵衛以下五軒ならべてある。序は天保十四年五月十日、門人大江喜尙である。此序文は正澄の伝記を

記してあつて、極めて必要な資料である。世の中かなり伝はつてゐるらしい本であるから掲げるのも無駄なやうだが、活版にも成つてはゐぬし、わが県下の大家の伝記の好資料だから、要とある処を抜き出でて掲げておく

吾清園大人は吉備の松山に平松正春といひし人の茶道を好て世を都に遁れて金龍水舎にこもりしほどにうめる子也。いにし天明の八とせ、まがつびの神の災ひ有て都残りなく焼失ぬれば、松山にくだりて後、おなじ国なる笠岡の浦人の高橋美啓の家をつぎて正澄となんいへりける。おほやけもわたくしもことしげかりし身におはしけれど、皇国に生れたらんもの、歌しらざらんはむげに口をしき事なりとて……おのが上、人の上哀と見聞給へるときは必うたひ出しておもひをやり給へりける歌多かりけるを、この浪速にのほり来給ひては、只一筋に月花に遊びて身も心もすが／＼として清園スガノと号け、頭おろして名を残夢とよばせて、いとしづかなるいとま、片糸のより／＼にあつめ置て、うき世の塵に交りし程の言の葉なればとて塵室草露と題して人しれず古郷に有つるほどのとしなみのなごりとなんしのび給へりけるを、今はよはひも七十にみつの浦わの有明の月、いつまでか世にのこりて、はかなき夢はみるべき。なからん後のかたみにも見よ、われしぬぶらん古郷人にもみせよとて、みづから写し出でて見せ給へるを、思ふどちはかり合せて板にゑらせしは、うつし取なんにあやまちあらんをおもひてなり

と書いてゐる。卷末に

塵室草露をかきをへて

ちりの中にひろひあつめしことのは、いまもちりとそ見えわたりける

と詠みそへてゐる。本集は雑躰の部を立て、長歌、旋頭歌、物名、俳諧歌、迄を集めてゐる（此稿未完）

21 穂浪たより(20)  
高橋正澄の家集（続き）

清園詞草 三冊

塵室草露の次に出来たのが清園詞草三冊で、是も版になつてゐる。此の書は塵室草露の奥の附録に「高橋残夢大人著述」とある処に四冊既刊となつてゐるが、此の時に既刊の筈はなく、「からにしき」の奥付の目録に三冊となつてゐる方が正しいので有らう。此の本は私が五十幾年もさがしてゐるが一度大阪の鹿田書店の目録で見かけたが逸して手に入らず、今以て見る事も出来ない。不思議に縁がない本である。「やまとにしき」の序に「この頃清園詞草梓にやどして一めぐりの御とぶらひにと人々思ひたてれば」云々とある。されば清園詞草は正澄の一周忌の手に開版の計画が立てられたのである。処が正澄の歿年は嘉永四年二月二十七日である。さうすると此の「から錦」の武田温親の序文はわけが分らぬ事となるのである。此の序が嘉永二年如月七日と書いてある。つまり正澄が死なぬ前から一周忌の手向艸の計画が立てられてゐた事にな

る。斯かる事も昔は有つたのであらうか。出版と云ふ事は非常な手間がかかるから、死なぬ先から一周忌の所謂記念事業計画を立てられてゐたのであらうか。其とも年を書き誤つたので有らうか。とにかく疑ふ余地の無い序文であるし、歿年は、大阪天満寺町浄土宗専念寺過去帳によると云ふのであるから（私は見たのではないが）是又間違は有るまいと思はれる。其に外にも證拠は清園後草が嘉永四年二月九日の兼題の歌があり、次に辞世の歌二首を男正純によつて書加へられ、正純の跋が嘉永四年九月六日となつてゐる。とにかく嘉永四年二月の歿は確実と見てよい。こゝで一寸正澄の享年の考證をせねばならぬが、正澄の年齢考證は私が若い時明治三十六年三月に發表した事がある。其によると七十七歳になる筈である。八十七歳と諸書にあるのは誤である。今は考證は省畧しておく。

大日本歌書綜覧に、「清園詞草 三卷 文政五年難波に出で、家号を清園と称へしより天保十四年までの歌を集む、」と見ゆ。其次の「残の夢」は文政十二年神無月十六日よりの歌がのせてある。正澄が眼病（白内障ならむ）にかゝつてからの歌、即ち残夢と号してからの歌の集である。されば、清園詞草の或る所（剃髮後しばらくの間の歌）が「残の夢」に編せられて別となつてゐるわけである。残の夢は佐々木信綱博士の続歌学全書第十編、桂園門下家集の内へ收められて版になつてゐるから今解題は畧しておく。其次が

#### 清園後草 二冊

で、是は写本で伝はつてゐたのであるが、私が井上喜復翁に借りて写し

て置いたのを明治三十六年十月に謄写版で刷つて頒つた。もと四冊である。此の本の事をざつと云つて置くと、此集は製作の順でならべてあるらしい。巻頭が「桂園大人初月の忌日に夏懐旧といふことを」から始まつて、嘉永四年二月九日兼題の歌及辞世の歌で終る事は前に云つた通りである。桂園翁の死は天保十四年三月である。さうすると「詞草」に「後草」は直ちに続いてゐるわけである。されば前述の如く「残の夢」は中間をぬき出した事となるのである。何分私は「詞草」を見てゐないから、ハッキリと云ふ事が出来ない。以上で家集は一応すむわけである。外に板本になつてゐる「やまとにしき・からにしき」の両書がある。是は嘉永二年の序があるが跋は「嘉永壬子（○五年）如月某日属大人小祥忌辰。因与同社謀上二百首於梓以伝世聊寄追慕之念云」とある。この跋によれば序の嘉永二年は五年の誤かとも見ゆるが何分不明の事であつて、此跋文はとにかく事実合つてゐる。「和漢人英豪中撰二百人咏以国雅以蔵箇中」とある。

やまとにしきは経基をよめる  
いはまくもゆかしかりけり掛まくもかしこかりける天の彦みこ  
に始まり公綱の

讓られて一度勝をえにけるもいのちかけたる功ならずや  
に終り、「からにしき」は秦始皇帝

生葉なき世語りを万代につたへおきてぞ雲がくれける  
に始まり、姜維

鳥の子にたとへし君が瞻きえて悲しかりける国のはて哉



に終つてゐる。此書の奥附に正澄の著述目録が出てゐる。よい参考となるから掲げる

- 塵室草露 三册 既刻
- 清園詞草 三册 同
- 心月詞花帖 二册 同
- 続心月詞花帖 二册 近刻
- やまとにしき 一册 既刻
- からにしき 一册 同
- 清園後草 四册 近刻
- 靈之宿 八册 同
- 国語本義 二十册 同
- 言靈古言考 三册 同
- 言靈名義考 二十册 同
- 記紀物名考 六册 同
- 万葉物名考 三册 同
- 神名考 六册 同
- 皇統称名考 一册 同
- 神詠製歌考 六册 同
- 古今六躰考 一册 同
- 国字定原 二册 同
- 假字直道 一册 既刻
- 石上枕辞例 五册 近刻

- 三代枕辞例 三册 同
- 万葉縫結抄 二十册 同
- 同詞林抄 五册 同
- 同東語考 三册 同
- 同国字抄<sup>〔字以下同〕</sup> 二册 同
- 同国字辞解 二册 同
- 同創解 三十册 同
- 古今六帖未考解 三十册 同
- 歌仙家集新正 七十册 同
- 言靈字義考 十四册 同
- 字音大辨 三册 同
- 字音大概 一册 同
- 縫結大概 一册 同
- 窓霰 三册 同
- 合鏡 折本一册 既刻
- 友鏡 同 一册 同
- 夕月夜 同 一册 同
- 記紀縫結抄 四册 近刻
- 万葉地名抄 五册 同
- 三代地名抄 五册 同

で終つてゐる。此書目は大體は原稿は出来てゐたのであらう。尤中々大部の様に思はれるが、其は晩年は眼病の為に大きな文字で書かれてゐる

から冊数ほど内容が大いには無いのが有ると聞き及んだ。假字直道、合鏡、友鏡、夕月夜は既刊とあるが見た事はない。正澄の著書の写しは井上喜復翁のもとに大半は有った。又片山重信氏のもとにあつたとの事である。原本は子の正純の許に有つたのであらうが如何になつたか聞きもらした。井上翁の分は静嘉堂文庫に入つたと聞いた。尤維新のどきくさで、もとのまゝに伝はつてはゐなかつたと聞いた。

心月詞花帖 二冊

是は六帖題詠草である。幸文と斐雄と三人で国に居た時に詠みそめしが、年月を経る内に兩人とも故人になつたから正澄一人が詠み終たのを門人どもが塵室草露を板に彫つる序に梓にのぼせたと片山重信が序に書いてゐる。弘化三年八月と奥附にある。

よき序であるから、子の正純の家集の事を申添て置く

園のたかゞや 二冊 写本

奥書に「こは文政の七年甲申のはづき此なにはにのほりしよりこなた、安政の二年乙卯の十二月迄の歌ども也。假に『園の高がや』と号けて三(〇二ノ誤)巻とせり。後あらためてものすべきものなり。安政三年二月正純誌」とあるので此の事はよく知られる。四季恋雜と雜牀として長歌、旋頭歌、物名、俳諧歌をいさゝか掲げてゐる。

せみがの 一冊 写本

有栖川宮熾仁親王に始まり野津少将道貫に及ぶ詠史歌集である。明治十一年七月廿一日講卒とある。

大和なでしこ 一冊 写本

北条氏綱に始まり、正永尼に終る詠史歌集である。

22 穂浪だより(21)  
井上通泰先生をしのぶ

今年とは思はぬ暑さのきびしい夏であつた。八月十五日は我が師井上通泰先生の忌日である。いつの時もいつの日も先生を忘るる日は無い。先生の事を口にせぬ日は稀れであるが、我れ老いて益々先生を思ふ情に堪へない。北小路石見が蕃山先生の初一周年の忌日に、早朝起、かゝり湯、(北小路提督)主税公の座敷で焼香して、廿四孝解(八解九)の一篇を読む。年々忌日に、床に先生の筆蹟をかゝげ時菓を供へ、先生の著書を読みなどしてゐる。私は先生を忘れる日は無いが、何分にも戦争、戦後のあわたゞしさに忌日忌日の拝はしかねた

先月(七月)東京の斎藤琳琅閣の古書目録が夕がたに到着した。其を見ると古今和歌集南天莊講義の精写本が出てゐる。私は直ちに注文書をした、めて翌日早朝に出岡する豫定であつたから、岡山の本局へ投函した。我が地方は岡山局廻りで郵書は集配せられてゐるので有るから少しでも早くとの考であつた。然し既に人に取り去られた跡であつて、其の返事を聞かされた時は実に残念だと失望落膽した。八月三日であつた、芦屋の親族の岡田真君が久し振に訪ねて來られた。同君は私と同じやうな本ずきで、私以上によく本を蒐集してゐるのであるから、或は此人の手に收められてゐるのではないかとの豫感が有つたので、其んな事も家

族の者どもと云つてゐたやさきで有つたので、同君に逢ふと此事を開口第一番に切り出した処が、豫想通り同君の手に入つてゐた。薄葉紙の上写本、表紙は各冊色変りの洒落た本で有るとの事、而して私が遅れて逸した談を聞かれて、氏は別に井上先生に關係あるわけがなく、私は先生の弟子で先生の著書をはじめ其關係書類の蒐集に骨を折つてゐる事はよく承知してゐられるのであるから、其では譲つてあげませうと云はれて私を驚喜せしめた。帰られて早速郵送せられた。私には此上なき珍籍である。愛翫手を放ちがたかつた。而して此の書の成立の事を調べて見た。先生が古今集を講ぜられたのは大正四年二月第二土曜日からで、萬葉集とかはるがはるに講義せられた筈である。其の筆記か、先生の手控の写しかであらうと思はれた。写した人は親友の外山且正君の筆蹟に相異なる。同君は先年物故せられたから何かの拍子に紛れ出た物かも知れない。少し読んで見ると大正六年四月十一日進講、大正六年五月九日進講など註記が見える。先生が皇太后宮・皇后の宮様達に歌の御講義を申し上げられた事は聞いてゐたから、此の筆記は其の方の筆記又は先生の手控の写しかと思はれる。私は近來日々うすく成つて来る眼を様々にして少々づ、読んで先生の御講義を拝聴する心地になつてゐる。さて八月十五日十四回目の御忌日がめぐつて来た。私は北小路俊光の輦にならつて先生の御肖像の幅を床に懸け、供物は苦瓜の長い美事に赤黄の色せるをギヤマンの鉢に乗せ、香をくゆらせ瞑目した。(苦瓜を供へたのは先生は苦味が御すきで有つたからである)私は先生に歌の上のみならず、学問の上も、人たる道も教を受けた。我が七十に餘る齡迄大過なく世を

過し得たるは全く先生の示導が有つた為である。私は感謝せざるを得ないのである。此の穂浪だよりにふさはしくない記事になるかもしれないが、少々先生と私の上を書かせて頂き度い。本月は土肥経平の自筆本の事など書き度いと思つてゐたので有るが其は次回にゆづる事とした。

先づ先生の肖像の事で有るが是は先生が岡山を去られる少し前に大森柳江が書いたもので絹本の半身像である。先づ水彩画と云ふので有らうか。私は此の肖像の出来た時に似てゐないとは云はないが、どうも先生の品格が出てゐない、と思ふまゝ、を率直に云つた。其から先生が官を辞されて上京せられるのを送つて有元稔君と二人先生に従つた。龍野中原氏へ一泊し、其から御郷里の吉田村で一泊して姫路駅で御別れをしたのであるが、御郷里で此の肖像を持ち出された。其には

三十あまり六とせのすゑになりにけりすむべきさともさだまらずし  
て(三十六歳は満の年)

の賛が書かれてあつた。是れで間違ひないことが證明せらるゝ、で有らうと仰せられた。私は苦笑した。処で先生は正宗は悪口を云つた方だから有元に形見としてやらうと云ふ事で有元君が貰つて帰つたのである。有元君は吉田家へ養子になつてゐたので同家に在つたが、有元君は其後離縁になつて外の人が吉田家を続がれ、此の肖像は吉田家に残つたのであるが、吉田家の養子家が家財の売立をせられた時に私が求めて、とうとう悪口を云つた者の手に大切に保存せられるやうな事になつた。先生の像は晩年東京で立派なのが書かれた、其には筆を執るのが少し不自由だから歌は書かないと云はれた。此の画家は肖像画に妙を得た人で先生も感

心してゐられて、私にも書いて貰つてはどうだと御すゝめになつたが、私なぞに何の肖像が入りませうと云つて先生を苦笑せしめた。私には斯う云ふ事がよく有るので、正宗は有りのまゝ、に行動する自然人だと褒められるのか誇られるのかわからぬが其んな評を人にせられたとか

思はず肖像で長談になつたが、此の肖像を床に懸けて古今集の御講義を読んで、さて往事を回顧して時を過した。先生は昭和十六年八月十五日午后私の姓を呼ばれつゝ、人事不省に陥り給うたのであるが、其の数日前

誰もくな百とせばかり在りてみて住みよかりなばつかひおこさん

と云ふのが歌の御詠みじまひで有つたと聞いたが家集には出てゐない

先生は誰も来たと仰せに成つたが、奥様と御嬢様が引続いて御発病で神ざり給うた。後でわかつたので有るが先生の御病気が腸チブスで有つたのが誤診せられた為に感染せられたので実にとんだ御災難であつた。

私が先生に始めて御目に懸つたのは岡山市東田町の御宅で明治三十一年晩春か首夏の頃であつたが記憶が確でない。其れから御逝去になる昭和十六年迄御教を受けた

私は青年時代は父の云ふまゝ、に物品販売業をしてゐたから、仕入れに岡山へはよく出懸けた。其で先生にもよく御目に懸つた。いつかラヂオでも申した如く土埃で汚れた足袋を気が付かないで其のまゝ、あがつて先生の御帰を待つて居た処が先生が御帰りになつて、廊下に土の足跡がベタ／＼と付いてゐるのを御覧になつて、奥様に是はきたないではないか、どうしたと御小言である。其は御客様ので今来られて待つてゐられると

の御返答である。私は二階の先生の御書齋で此の問答を聞いて恐縮して今更に及ばぬが我が足を見た。いつかの夏であつた。午后とても暑い時御訪ねすると先生も堪えかねられたと見えて越中褌だけで机の前にあぐらをくむでゐられる。オイ正宗御前も裸になつてはどうだと云はれた、私は其頃は夏も手首まで有つて私は其旨を御談しすると其は困つたからだなど起すやうな身体で有つて私は其旨を御談しすると其は困つたからだなど云はれた。其から私は色々工夫して鼻カタルは避け得る身となつた。其んなぐあいで殆吾が児の様にして頂いた。今でもハッキリ覚えてゐるが、或日罷出た処、東京からよい菓子が到来してゐた。是を少し頒けてやらう。此の分の菓子はとても甘くて御前も食べかねるか云はれつゝ、煙草で少し染つて紫が、つた前歯で食い切て半分くださった。私は甘い程結構ですと云つて頂戴して先生と共に食べた。全く親子の様なことであつた。東京へ御移居後は先生も大分格式ばられた形で門人どもにも接せられた様で有つたが、私はいさゝか別のやうで昔のくせが抜けきらないで畢つた。門人で私のやうな無作法者は東京では見かけなかつた。

先生著の萬葉集新考の話を少し記録しておきたい。元来先生は桂園の歌を非常にすかれ桂園翁の伝記を研究せられた。自然歌は古今集を重んぜられた。私は萬葉集がすきであつた。明治三十一年七月に古義(二帙)が活版で縮刷された。本らしい本を購求したのは是が初めてであつた(其の前に国歌大観があつたと思ふが)丁度先生を初めて御訪ねした年である。先生は古今集から作歌の範を取るやうにと御話しが有つたと思ふが私は萬葉を固執した。先生が古義を読まれたのは御上京後である。さて

萬葉集の講義を南天荘で始められたのが短歌は明治四十三年十月十八日である。長歌は四十五年二月である。(先生は初は短歌と長歌とは別々に講ぜられた)いつで有つたかよく覚えぬのであるが上京した時に、先生に私は云つた。在京の人は先生の講義を直接聞きもし、其の筆記を各自写すなり写さすなりして学問を進めてゐる。田舎では学問のし難い上に其んな便宜も無い。是は御考慮を願ひ度い。私自身が第一に困る。何とか刊行の道を開くか、筆記の転写をゆるさるゝ、かして欲しいと強硬に懇請した。先生は筆記の公開は出来ないが、つまり新に稿を起すから御前が活版にせよとの事となつて私が印刷して非売品で同志にのみ頒つ事とし、一卷稿なる毎に印刷すると云ふ約束にした。先生も原稿の出来次第一卷々々版になれば張合も有つて次々筆がとられるし、原稿保存にもなるからと云ふのでいよくやらふと相談がまとまり大正三年十二月から植字印刷にかゝつて大正四年五月に第一巻の発行を了した。校正は先生が自ら一校せられた。昭和二年六月廿日に卷二十下を配本して全部三十八冊が出来あがつたのである。田舎の事とて表紙張り製本迄凡て自分がしてとにかく十三年間を無事で過した事の幸なりし事などをしのびつゝ、暫くの時を過ごした。(思ひ出づる事も多く書置きたい事も有るが後日に譲る。八月十五日稿)

23 穂浪たより(22)  
土肥経平の著書ども(一)

今日は経平の著書の事に就ていさゝか書く事にする。経平の著書は余程多いらしいが今日の便にしるさんとする所は彼の自筆又は手沢本どもにて当文庫に收藏されてゐる物に限つての事とする。

先づ第一に春湊浪語の事から始めよう。経平の著書で天下に著名な本は春湊浪語三巻である。当文庫に在るのは経平自筆の清書本で鳥子様の紙に渋引した表紙で題号は自筆で題箋は張らないでじかに書き付けられてゐる。其書名の上には上巻には可軒校本と二行に割つて書いて有る。然して之は可軒(池田)自書であるらしいが何を校して居るのでは無い。中巻には柴徴史料。下巻には吉備史料と書いて居る。実にたわいもない楽書をしてゐるのである。表紙裏には浜和助の蔵書票が添附せられてゐる。蔵書印は土肥経平の柏葉の十文字になつてゐる印で、他に池田可軒の印が押されてゐる。可軒の手を経て大阪の蒐書家の浜和助の手に入り、次に有元稔君が鹿田書店で求め、其を私が譲り受けたのである。申分の無い本であるが惜しい事には補写が有る。其事に就ては当文庫に今一つの同書の写本が有る。塚本吉彦翁の旧蔵本である。其奥に押紙をして

春湊浪語者我藩故土肥経平君之著也。明治十五年十一月二十日東都浅草書肆ニ於テ購求。明治十七年十二月土肥氏所蔵経平秘函中原本ヲ以テ校合朱書ヲ加フ。且中巻六ヶ所原文ヲ缺ク。池田氏可軒公借覽中発狂引裂タルヲ我所蔵本ヲ以て又原本ヲ補フモノナリ 明治

十七年十二月廿九日 源吉日子

と書してある。是れで可軒校正とかの楽書したり、原本に新写が交つてゐる事の故も判明する。惜しい事であつた。とにかく十四五枚が破られたので其処はあたら原本が消えた事となる。然し塚本本もかなり善本で有るから大差は無いであらう。当文庫に今一本富岡鉄斎旧蔵本が有るが、是れは形の上にも文字の上にも異同が有つて原本を遠ざかつてゐる。是を見ても思ふ事であるが、古写本ども手を経て行く程原形を善悪にか、はず遠離つて行くと思える。されば古典研究の復原作業は成るべく古い本に拠る事、余り大家の手を経ぬ方が良く、従つて版本よりは古写本を尊重せねばならぬ事を痛切に感ずる事である。国歌文方面では定家は随分典籍保存の功労者では有るが、一方定家の手を経た本は実は古写本に拠つて復原作業をする必要が有るので有らう。然考ふる時に定家の手を経ざる其以前の国歌文の書籍の保存は大切である。話が横道にそれて行つたで、もとに戻して春湊浪語は名著でも有るが種々の叢書に收められて活字になつてゐるから内容に就ては云ふ必要は有るまい。

○ 備前名所記 一冊 白筆

是れは宝曆十三年中冬のはじめ土肥経平記と奥書にある。御野郡の笠目山に筆を起し新井白石の虫明八景の詩を掲げ、其の名所の考證めけるものをいさゝか記して筆をおいてゐる。此本は大正十五年東宮殿下（今の陛下）の台覧にもそなへた本で早田元道氏の蔵書印も有り、岡山にとまつてゐたのであるが、其れが売られて一度東京まで行つて来たのであ

る。私が或時さる岡山市の古本屋へ立寄ると経平関係の本どもが少々有つた。まだ何か無いかと聞くと備前名所記等が有りましたが先日東京のさる本屋へ売りましたと云ふ。其は惜しい事をしたが、あとの祭ではだめだなと残念がると、本屋は平気なもので何いづれ目録に出ますよと云ふ。其もさうだが、其内に誰かにさらはれねばよいが、と氣に成る物の売主から交渉させてもうまく行くかどうか知れぬ。とにかく運は天まかせとして目録を待つ事にした。餘り月も経ないで目録が来た。東京の本屋さんは白筆とも何とも考へなかつたと見えて、大した口銭も取つて居らず無論高値では無い。電注にしようかと思つたが、安い本を電報などで騒ぐとスツコメられる例が有るので、平氣を無理によそはつてハガキで注文して又天運任せとした。若い時の事で有るから実に心配でたまらなかつたが、日ならずして手に入った。之は私としては大成功の方で有る。珍籍良書は中々田舎者の手に落ちるものでは無い。若い時から今以て実に一生懸命の努力をしてゐる。金が無いからでも有るが今に良書にはめつたにめぐまれない。当文庫の貴重書として此の名所記は保存されてゐる。殊に斯る郷土関係の貴重書が我が県下に保存せられてゐる事は何よりの幸と思つて愛護してゐる。

○ 大鏡、増鏡目録

と表紙の題箋にあつて、内容は

大鏡目録並系図

と有つて系図と目録がしるされてあり、増鏡の方は卷々の目録を記して

内容の見出しになる様にして記事の年月などを書添へてゐる。無論自筆である。

大した著書では無いが、著者が座右に置いて利用した物と見える。表紙は彩色の絵模様が書かれて有つて美麗なる本があるが、古本屋を転々する間に少しよごれてゐるのは惜しい事だ。半紙本五十枚ばかりである。

○  
窃窈 一冊 自筆

宝曆十二年の冬竹里館の燈のもとに漫に書。

とあつて巻頭に

○窃窈ヲニホヒカト読「何ニモトツキタルニヤ。ユホヒカラ誤レル成ベシト元喬云キ

とあるに筆を起して「窃窈を文選遊仙窟などにたを、やかと訓じたりとしニホヒかはたゞ此関雉の篇斗りなり云々」と考證してゐる。斯る類を初めとして、「髣髴子ヲシテ家ヲ相続スルハ頼朝卿ヨリ始ル法家ノユルサレシ所ナリに就て此説甚だちがへり。昔は髣をとりて家を渡す事大様ならはし也。江次第にも髣取と云事はありて嫁取といふ式はなし。又髣に我姓までもつがす事又例多し。月並藏人は橘姓を藤原に改、河野四郎親清は源姓を越知に改む。みな髣養子にせし。是等古物語又家譜等にみゆ。みな頼朝卿よりはるか前の事也」など様々の事が載せて有つて経平の博学なるを物語るものである。此の書は多分まだ世の中に出てゐぬ本で有らう。

○  
経平自筆詠草 一冊

是は「宝曆六年四月九日、土佐左京亮入道常覚五位上藤光芳を以烏丸中納言光胤（五月拜任大納言ノ傍書有リ）和歌之門人の事望申入同十一日御許容同十三日常覚同道にて中納言殿へ參上雑掌牧監物（正俊）荒木大舍人（榮承）乞兩人を以詠草進上候処則御対顔太刀折昏を以て御礼申候」とある書き出しで

仰に、入門候事先和歌は誠を先として正風体に可有其正風体といふ事は、其題により事にふれて云出す和歌、其ことの能きこえて誰にもよく心得る様によむ事なり。読習ひにはいかにも聞え安く、又題もむつかしからぬ題にて、詞もむつかしからぬ事を聞え易くよむ事第一の心得なり。読候歌に添削を加とも得心なき事は幾度もたづね、其外にも不審の事何にても書付候て尋可有候。詠草に則添削加筆候由にて直に被下候

寄道祝

経平上

ゆく千世に  
ゆたかなるめぐみを四方にしき嶋や大和こと葉にあそぶ民草  
わかぬ浦や波しづかなる時に逢てけふもよりきぬあまのもくづも

是は御門弟に入初て御添削を申上候時必此題にて詠草指出候由常覚物語故如此

是が第一紙で次に「四月十五日持參牧監物へ相渡置廿五日御点濟御直被下」として次の詠草に移つてゐる。是は大切な経平の伝記資料である。此の詠草は、点を乞ひたる原本では無く、経平が其詠草を次々に写し取つた本であるから添削はもとより光胤の自筆では無いが原本通りに

写して添削も良く分る様に見せけちにしてゐる。又此の用紙は経平の署名が裏面に有つたり印が半分うつつて居たりしてゐる反古である。窺書を書いてゐるのも有るから窺書の包紙らしい。其を裏返して用ゐた物で有る。昔の人のつゝ、まじやかな事をしのぶよすがになる（因云。西山拙齋が門人達から年末などの謝礼の包紙を裏反して写本したのが当文庫に在る。何れもなつかしい物だ）

四月（○宝曆七年）廿五日御対面の節

一 懐帯に万葉書はなち書上句ヲ二行書留ル事此三つ御伝授有候事也。二字三字宛所く続べし四字は不統

一 詠草墨次上句と下句と二墨次也

一 十首以上は二行に書統詠草折詠草心次第也

一 君の字用捨如何 答に主人又貴人へ対して君とよむくるしからず。恋歌にはよまず。君が代、吾国もくるしからず。禁庭にかぎらず尊みて貴人の園を云ふ也。園庭壺といふ。園は広く草木を植わたり、庭は築山等をして園より狭し。壺は四方に家有中の小庭也。花園は花壇又花の木などならべ植たるを云也

など色々の事がしるされてゐる

一 歌書何れを見申候て宜候哉。三代集は自素の事近代詠格何れを見習可申歟。答に、三代集大体空にも覚候位可然候。其外百人一首、

新勅撰、続後撰集、為家家集、草庵集、聰雪集一名雪玉集是等宜也

などとも見えてゐる。其頃の手本とする集どもの事が知られて面白い。伺之条々と云ふのも輯められてゐる。宝曆八年七月朔日差出したる詠草、

七月廿日に差出したる詠草が、何れも「八月に断にて被返候」とある。是れは案ずるに宝曆八年に光胤が永塾居を命ぜられた為と思はれる。其為人に教へたりなどする事は出来なくなつたのであらう。此の宝曆の事は彼の竹内式部に關係するので、公卿どもが式部の学説を聞いた。其公卿達が桃園天皇に式部の学説に従つて日本紀や経史の進講をした。つまり政權御恢復運動に進展せんとした。関白近衛内前、前関白一条道香が此の事を知つて驚いて進講を差止めた。其からごだくがあつて関白は式部門下の公卿を君側から除かざれば危険だと思つて強ひて天皇に奏請して先づ東久世通積、徳大寺公城を罷免し、次で式部門下の公卿を処分せんことを奏請した。大に逆鱗にふれたがとうとう正親町三条公積、烏丸光胤等八人に永塾居を命じ、其他十餘人に遠慮を命じた。其が宝曆八年七月二十四日である。此日式部父子も獄に投じられた。此の為に詠草が其のまゝ返却になつた事と思ふ。其から二枚余白で「明和九年六月廿三日始而日野中納言資枝卿へ遣候。七月四日加點来ル」として寄道祝の歌が有る。是から資枝の点を乞ふやうになつたと見える。其から九月に遣はすと云ふ詠草の内に岡山を離れて上道郡宇治の郷といふ所に隠栖せられし由の歌どもがあつて、其で此詠草は終つてゐる。資枝に入門しからは伺ひ奉る条々などは無くなつてゐる。日野資枝は光胤の義兄にあたるのである。其で添削を乞ふやうになつたのであらう。



24 穂浪だより(23)  
土肥経平の著書ども (二)

土肥経平自筆入本／紀伊夜話集 壹冊

美濃紙六七十枚位の本であつて巻末に

右者尾畑勘兵衛尉物語ヲ紀伊大納言頼宣公書紀サセ玉フヲ号夜話集

ト云云

と書いてゐる。表紙には「紀伊」の二字を冠してゐるが内題は夜話集とのみ書いてゐる。南紀徳川史によると南龍公(頼宣)御言行と云ふ条下に「求賢」の目ありて、其内に例の蕃山と由井正雪と出会ふ所の事などが見えてゐる。其の終の処に

以前 頼宣卿不寐の御病氣にて古參新參の古兵共番替り毎夜御伽に  
相話候に云々

と云ふ事が見えてゐる。以前とはいつの事か知れないが言行録(大君言行録ならん)に拠つたとしてある。此の折の夜話を誰かに筆記せしめられて置かれた物かと思はれる。此書の内容はこゝで述べる必要もあるまいから全く省略する事とするが、ざつと云へば常山紀談のやうな古武士どもの物語を書き集へたものである。其へ経平が色々と考を自ら書き加へたもので、例へば

一、御陣之前方(○前に冬之御陣と有れば大阪の冬の陣の時の事なるべし)大野主馬、天下を望むと申何れが左様に有之かと被仰、少も御にくみの御意も無之、其後仰には、天下を望むも不理にてはな

し。武辺達たる斗にては不成、定て其生性在之、我は天下ころびか、る故御取被成たるなり。信玄(○イニ謙信)武辺(○勇)は達し候へ共不成生れ合有儀なれば誰にはよらず主馬が望も無理にてはなしと被仰聞候。名将之御詞至極之理奉感

とあるに對して経平は

古今トモニ天運ノタスケナケレバ天下ヲ得ル事成ベカラズ。シイテ  
天下ヲ取ントセバ其身ヲ亡シ命ト貧福ハ天ニ有ト聖賢言之

と頭注を加へてゐる。「家康が腫物を煩つた時外科の医師に薬を付けさせたが痛みが止らず困つてゐた処へ本多作左衛門が来りて唐人医者の薬を御付けなさいと申上げたがはや然る薬を用ゐて痛が増して困つてゐるから見合すやうな御意であつたが、長閑(補)が薬を用ゐられる事を作左衛門が強て云ひ張つた。其が云ふやうにして痛が止まつて本復して命拾ひをした。」「其方不男にてちんばなれ共御為を大切に奉存故御心にさかひ申にもかまはず強申上ると御悦被成候」(○大意を述ぶ)と云ふに頭書して

作左衛門申如ク達テ申上能候時褒美ハ世ノ常ノ事也。達テ申処ノ是非真実ヲ察シテ其病其事ヨロシカラズトモ褒美スルハ一段高上ノ人也。悪トテ立腹スルハ下愚ノ人也。タトヘバ医師ノ病ヲ治セザルトテ科ニ行フヨリモアヤマチ也

と書いてゐる。此の頭注は多くも有り面白くも有るのであるが経平の考か其とも誰かの考かと云ふ事は判然せぬから一二を抜出て置く事とする。頭注が自筆たる事には間違ひが無いが経平が説である確證は無い。

さるからに其説どもも余り多く引き出でずにして置く。経平の自筆の奥書に、「享保十二歳次丁未秋八月廿二日書畢」と有る。享保十二年は彼経平は二十一歳である

書畢が書写畢と有るならば其の頭注を写した事と断ず可きだが「書畢」とあるから彼が書いたのかどうか、問題になるのである。本文はもとより経平の書では無い。此の書は塚本吉彦氏の旧蔵で、氏は明治四十四年に東京で求めた由である。とにかく類本を見て此の頭注者の問題は決したい。

○ 経平自筆書入本／新版大系図 三十一冊

此の本は明暦丙申（〇二年）中秋、洛陽、永田調兵衛開板本で別に珍籍でも何でもないが、経平が自筆を以て種々書入れをしてゐるから私が文庫としては大切に保存せられてゐるわけである。先づ三十冊の版本の外に経平が自筆にて「大系図目録」壹冊を編して附してゐる。是れは彼が此の系図を用ゐるのに便利なやうに目録を編して一冊としたもので大した著述と云ふ程のものではないが其でも彼の学者が座右に置いて朝夕史学の参考にしたものであるからなつかしいものである。

第二卷十丁位から大変な書人であつて訂正もしてあれば補遺も書入れである。元明天皇の処あたりからは満紙書入れである。例へば「諸兄」の処に「初葛城王」と書し、頭に「橘氏元祖」とし上の線をつぎて「正三位、牟漏女王、天平十八正廿七薨」と書くとか次丁「池邊王の下に線を引いて「淡海真人三船、宝字二年賜姓、文学あり。刑部卿従四位下兼

因幡守延暦四年七月卒六十四」と云つたやうに増補をしてゐる。大鏡を引いてあつたり続紀を引用したり、日本紀略を引き、又附箋をして「右源善成河海抄二見タリ」などある。大鏡今鏡などを参考にして訂正してゐる処も多い。彼の最も得意であつた平安朝時代は補訂が多い。盛衰記（注：堀河朝記）や親長記までも引かれてゐる。今其等の事を考證する必要もなく時も無いし、学問の進歩は今日其等校補を参考する必要も有るまいが、とにかく彼の努力は推稱すべきで有らう。とにかく経平と常山とは我が県下の篤学者でもあり、假字で以て著述をなまし、国歌文にも通じた点などもた、ふべきであるから、彼の人々の手沢本、校本なども県下に蒐集して保存を計るべきであらう。

25 ふぐらにこもりて(1)  
〔雪の下芽〕・玄賣上人の泥仏

蘇峰老云く、「予は平生から金が欲しいと思ふことはない。但だ稀書に対する毎に、我が貧乏を悔いた。正直の所、予が財囊の軽きが為に、大なる獲物を取り逃がしたことは一再ならずであつた」と嗟歎してゐられる。まことに同感である。私の愛書は少年の頃からの癖で有る。然し私の蒐書は極めて貧弱である。悪条件に恵まれ過ぎてゐる。第一に金に乏しい。第二に地の利がない。第三に見識に乏しくかつ大胆でない等々。たゞ五六十年間ねばりぬいた事は、いさゝか書庫を満たさしめた原因と云つてよからう。私は穂浪だよりで県人の著書等の事を書き続けて来た

が、是れから私が愛玩する書籍を主とし書画等に及んでの解説めけるものを書いて見る事とする。老人自慢録めける事に終るかも知れないが、私は今白内障が進行を続けてゐる。いつ書籍も愛撫するの外なきに至るかも知れない。今の内に書いて置き度い気持がする。其の貧弱と不文とを咎むるなく読んでくださつて、かつ御教示を給はらば幸である。

#### 雪の下芽

私は今県医師会の委嘱をうけて備作医人伝を編纂中であるが、俳書に「雪の下芽」と云ふ一冊があつて芭蕉翁の五十回忌の追悼句集であるが其の編纂者は「安養軒玄隆」である。此の書の跋に「粵矢懸之医伯、安養軒主叟、医業之暇好短歌之風騒伴古翁之門人故促追慕之実情特為雪下芽集」とある。矢掛の人で医を業とし、和歌及び俳句を好んだ事が知られる。然し私は此の書の著者に就ては外に知る処が無い。吉備和歌集にも吉備国歌集にも見えぬやうである。有松氏(雄)の吉備歌林名鑑に玄隆(岡山)〔横井〕、永珍、岡山藩医菅沼斐雄の門とあるが、斐雄門人では今我が云ふ玄隆では時代が合(補注)はない。「人々といさないて雄琴の里にまかりし時よみ侍し」とはし書して

とはねども雄琴の里の名もしるしまつの木すゑの風のしらへに

と云ふ和歌を出し、弥高山雄琴の上の山と題して金葉集として「雪降て弥高山の梢にはまた冬ながら花咲にけり」の歌を載せ、

鷗江神社神名記 玄賓僧都旧跡

鷲峯山 吉備大臣小社

穴門山神社神名記 光助霊神

#### 舟木山

右いづれも矢懸より一里の内外

と名所案内を載せてゐる。「追加」と云ふ部に

そのかみ古翁の門人此里に旅寝せられし時ほ句あり。反故となしはてむ事本意なければ此集のすへにしるし侍り。巻の数々は悉しするすにいとまあらねば、只前句と宗匠の付句ばかりを書あらはして人々の一覽に備ふ 四季混雑をいとはず

矢懸観音寺に宿りて

鐘の声暁寒し夏木立 支考

此句梟日記には 夏の夜の夢や菅家の詩の心と出たり。西華坊矢懸の里にやどられし時、夏木立の発句にて五十韻ありし。その巻観音寺のぬし松堂秘蔵有しが、松堂身まかりし後、彼卷行方知らずなりぬ予幼年にて末席に侍りて聞伝へたる句ども多かりし。老衰に及び空しく忘失し侍り。

平生吟翫に残りし一兩句爰にしるし侍る

部屋住る盃ひとつさびしげに といへる句に

(中畧)

医師玄隆のもとにて

菊作る隣は持てや宿の秋 野坡

この句有し五とせのちの秋、又やつがれかもとに行脚の杖を

寄られければ

菊の香にまねくしるしや旅の笠 と申侍しに (下畧)

今西華坊梟日記を見るに「元祿戊寅（〇十一年）之夏四月廿日津の国や此難波津に首途して」と書き出して、五月五日あやめふく日に岡山に六日吉備津宮に詣で、某社家に一宿して歌仙半に及ぶとしるし七日岡山に立かへり八日雲鹿と舊白を連れ出して倉敷に行く

狂客三人除風庵にこみ入。あるじの僧は外にありておどろき帰る。そのよるこび面にあらはれて、心ざし又他なし。茶漬の冷飯を露堂のぬし、行水の湯は誰かれといふより、とうふ、蒟蒻の施主も有て、わかき人老たる人さまぐに行かひさゝやきて、あるじの僧はいきもつきあへず……此里の東南に山あり。この山に小堀遠州の汲捨給へる井ありて、今なをしたゝり絶る事なしと。露堂曰、この水又酒によろし。一荷汲ときは底をつくせども、たちかはるほどありて又一荷出と。まことに清浄の水にこそありけれ。西華坊かつて姫路を過し時、何の藤三郎とかやいへる少年の、我に初白の茶一ふくろおくりて、たびねの風情をくはえられしが、此里に来てこの茶ある事風流やむ事なし。水汲は雲鈴法師、茶挽は除風とさだまりて、客は尚雪、青楮の二老人、あるじは露堂にもあらず、我にもあらずたゝのみてなむやみぬ

余り文章が面白いので長文を載せたが倉敷俳諧史の参考ともなるべきか。十日……十三日に倉敷から矢懸に除風、雲鈴の二法師をいざなひて観音寺に宿した、さて「夏の夜の」の句を記してゐる。句は後に改作せしものか。雪の下芽に「藤井大炊のもとより写し給はれしほ句並卷」の内に齋宮 高吉と有るや。宿の主であつたのか。此書寛保三癸亥初冬日

と自序の終に在り。出版は京寺町の井筒屋庄兵衛と同宇兵衛で重寛板と記してある半紙形一冊。表紙は唐草模様なのつかしいもの

序に記して置く。我が文庫に秘蔵せるものに玄賓上人の泥仏が数體ある。即ち本書巻末の名所の処に玄賓僧都旧跡とあるに關係があるので、玄賓谷から出土したものであつて、其内の二體はツゲの木の臺に彫り据ゑられてゐて、臺木に彫られた銘は

大日如来不動明王土佛者玄賓僧都作実所得松山玄賓谷也

寿仙蔵

玄賓僧都の事は元享<sup>を</sup>積書、古事談、発心集等に出てゐて著名である。謡曲三輪にも取り入れられて人々によく知られてゐる。続古今雜上「備中国湯川といふ寺にて」「山田もるそほづの身こそあはれなれ秋はてぬれば訪ふ人もなし」と云ふ歌が載せられてゐる。湯川寺は川上郡<sup>チカウ</sup>近似村（今は高梁市）に在つて玄賓谷とよばれる所があるが、其処で土仏を一十鉢を作つて何かの供養をした事が有つたと伝へられてゐる。昔から其所らの畑などに素焼の泥仏が出て来る。好事家が其を拾つて仏壇に祭つて黒光になる迄煤を付けたのもあるが、出土さながらのものも有る。私が持たる前記の二鉢は出土さながらの味があつてなつかしいものである。此泥仏を得たる時の口ずさみ

ふくさよりうやくしくも取り出し我に拜ます土の御仏

木にほりすゑ二座ならびます土仏古しなど云ひてたゝにあわれむやこれやこの玄賓僧都作らして土に埋めし仏にやはあらぬ

静座せる大日如来いかめしき不動明王肩ならべたつ

あら／＼と作らしましし御仏のあらしながらに尊きろかも

旧作が拙作で恥ぢ入るが、其折の心持を歌たものであるから書き添へて記念とする。玄隆の伝記を御承知の方は御示教をこひねがふ。

(補注)『備作医人伝』に「追記」として「通称は松右衛門、本姓は天野。其祖父は六右衛門。父は平右衛門。医術を修め矢掛中町に住して医業を開き、中西玄隆と改名した」とある。

26 〔俊休夜話・学窓割記・名所百首(鳥居小路経厚)の解題〕

前回に玄賓の事を書いて、湯川寺は川上郡近以村(ツマ)に在つて玄賓谷とよばれ云々と書いたのは誤りで、岡大の脇田秀太郎君から「湯川寺は阿哲郡草間村大字土橋に在り。所謂玄賓谷に庵を結び示寂せるものか」との教示有りき。私は地理にうとく、今の目では地図もさがしかぬるが、湯川寺と玄賓谷とは別で、所謂玄賓谷に住まれしやの点も不明。たゞ玄賓谷から泥仏は出でるが何か供養でもせられしか其辺の事は知れず、泥仏の出づるより結び付けしやもはかり難く、御教示によつて訂正をして、氏の厚意を謝し奉る。安養軒玄隆の事は誰か御教示を給はらば幸甚。

萬波俊休と云ふ学者が有つて藩校の教授で有つた。有名な学者醒廬の父である。此の醒廬には天明四年より天保十四年十二月朔日迄の日記が十二冊現存してゐる。此の日記はもと「以国字録」と有るから假名交り文で有つたのを、簡略にちゞめて漢文にしてゐる。事実を知る為には惜

しい事であつた。此の元本の影写本は我が文庫に在る。此の巻末に近く十一月廿六日「家大人大故」廿八日「葬送」と有るが、是れは俊休の死ではなく醒廬の死であつて、日記の終に末尾数条諒補記とある。俊休は寛政七年三月十二日家君病篤。十八日家君大故とある。廿日葬石井山とある。俊休の伝は石井山の墓でも調査したらば碑文でも有るであろうから知る事を得るかも知れないが手近な物には見えない。やつと醒廬日記で歿年をさがし出したのである。大平忠叔、龍岳、又思学亭と号した。此忠叔は写本がすぎであつたと見えて多数の写本をのこしてゐる。わが文庫にもかなり多く收藏してゐるが其内に「俊休夜話」と云ふ一冊が有る。熊沢了介を被召抱問もなく御加増を思召されたのを池田出羽(由成)が諫談なども出てゐる。小原大丈軒の事をして豪傑人の知る所なり、としるし、京都で浪人の節、万艱難云斗(バカ)なし。古本の中の朱を小刀にておとし用ひけると也。是にて可察とは面白い逸話だ。「光政公常に学問打論有之事英才可比者なし」。とも書いてゐる。色々面白い話も有るが其はさて置いて我が伊里町に赤穂義士の談がたゞ一つ有つた事を伝へてゐる。義士の研究は私はした事は無いので既に世間周知の事かも知れないが、とにかく我町のはなしで有るから其を抜書して留めて置く事にする。

義士勝田新左衛門伯母和氣郡入中村門徒宗何寺(武苑)(○浄光寺なるべし)と申所へ嫁して居ける。新左衛門其寺に寓居して有ける報仇の前方、大石令通(マ)有之哉、俄に伯母へ申けるは、永々預御役介恭存候。然るに始終此分にも不相濟義奉公に出可申と存候。幸同道の者候。問今日罷立可申。伯母云けるはいかにも尤也。随分奉公励み可申候。

責て益を可致とて益を致し、其方何方へ參候共故君の義を辱しめ其身をはづかしめば、七生迄も義絶たるべきと申ければ、新左衛門とかく不申、頗に落涙して頭を下げ、無言にて罷立ける。其後報仇の聞へける、伯母歎て云、彼が其時返答に困り頭を下居たる事、今思へば、云はでもよかりける事を申たるとて涙にむせび、且は悦、且は歎けると入中村の人近比語りて落涙に及ぶとなり。予聞て涙を落としぬ

とある。わが里では今頃誰一人此談をする人も無いから、全く忘れられては残り惜しいと思つて、斯くは専門外の事では有るが記し留めて置く。

俊休の事を書いた次手に、わが文庫に俊休自書の学窓割記と云ふのがある。同文を醒廬の書いたものもある。其奥書に云く

右割記一通先人所嘗論著也。大平氏（○忠叔）家藏之、貼壁有レ年文字頗爛敗、乞レ余改ニ写之。一二文字有ニ可疑者、豈伝写之誤耶。今遵三旧文ニ不三敢改ニ一字ニ云。萬波俊誠敬書

と書いてある。所で世の中の事は知れぬもので、壁に貼したと云ふ方は多少いたみは有り、す、けては有るが全いが、後写の方は前が少々破損して文字が無く成つてゐる。幸に両方とも我が文庫に収まつてゐるから共に愛護して後に伝へたいと思ふ。

孟子曰道在レ爾而求三諸遠ニ事在レ易而求三諸難ニ人々親ニ其親ニ長ニ其長ニ而天下平。至哉言也、人能明ニ五教、則百行皆脩。萬事悉卒矣。高屋建三瓴水ニ勢豈不ニ愉快ニ哉。夫子誦ニ大学ニ文公揭ニ学規ニ其意蓋在ニ于此ニ矣。余竊有レ見常為ニ同志ニ稱レ之時学レ之徒事ニ記章詞章一

遺信ニ異説ニ遂為ニ輕薄子ニ可レ勝レ嘆哉。間避ニ近野人ニ曰吾郷有レ人其為レ人俗ニ利善ニ書画ニ文固文也然游手好閑鬻三視礼俗ニ殆墜ニ父祖之業ニ又有ニ一人ニ其為レ人質朴而不レ識ニ二丁ニ野固野也、然昼茅霄索不レ緩ニ民事ニ既立ニ子孫之基ニ矣其不レ省哉。余點頭而去。其事レ学之虚実頗相類故記レ之然後生豈廢レ学哉。子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎愛レ衆而親ニ仁行ニ有ニ餘力ニ則以学レ文又曰質勝レ文則野文勝レ質則史文質彬々然後君子。可レ不レ勉哉可レ不レ勉哉、要ニ求知力行ニ而已矣

○ 我が文庫に珍藏する書の一に

名所百首 一卷

がある。鳥居小路経厚の自著自筆の本と思はれる。奥書は

右百首者以ニ師説ニ所ニ申入ニ之御聞書也。一覽之処大方雖レ無ニ相違ニ、短才之言上非レ無ニ恐憚ニ、深被レ制ニ外見ニ而已

享祿元年十月廿八日

法印経厚上

とある。此名所百首は、群書類従巻第七十一に収められたる、内裏名所百首建保三年十月廿四日（○イ本十）四日トアレドガガ正シキナラン明月記には廿三日の条に見ゆ）の内の定家の歌のみを書き出して注を加えたものである。経厚は顯伝明名録によるに「鳥居小路経柔子、依レ為ニ器用ニ自ニ堯恵法印ニ和哥一流悉相伝。童名慶玉（王イ）丸、自ニ延徳二年四月十八日ニ至ニ翠年辛亥三月五日ニ一流源底令ニ相伝ニ矣」とある。堯恵は堯孝門弟法印也。号南坊。天台荷担哥道伝授とやはり明名録に出てゐる。

本書の見本に「玉嶋川」の歌を掲ぐ

梅が、や先うつるらむ影きよき玉嶋川の花のか、みに

古年をへて花の鏡となる水は散かゝるをやくもるといふらん。

此古今歌者水ノホトリノ梅ノ花ヲヨメリ。ソレヲ今玉島河ノ底ノ鏡ニ事ヨセテ春ノ題ナレバ梅ノ花ヲ詠セリ。此川ノ鏡ノ事肥前國風土記曰、大伴狭手彦ノ連、任那ノ國ヲ静メントテ此村ニ至リヌ。篠原ニテ弟日姫ヲ娉<sup>イスト</sup>。別レ去日、鏡ヲ取テ与<sup>アツフ</sup>レ婦ニ。妾悲レ別テ玉嶋川ヲ渡ル時彼鏡ヲ懷テ河ニ沈ミ畢。是ヲ鏡ノ渡ト云。

しつめけん鏡の影や是ならむ松浦の川の秋のよの月 為相

片カナには古假名も交りてなつかしい巻物である。

〔27〕<sup>ふぐらにしもりて(3)</sup> 〔蕃山先生の集義外書の残簡その他〕

前稿に引き続きいて当文庫の愛護珍藏品の事を書いて見たい。相當の人の自著自筆本位貴い者は無いと思ふが其れが中々有るものではない。又古い時代程無いのは是れは云ふに及ばぬ。小々無駄口めくが、古鈔本の上を考へて見る事とする。万葉集時代の万葉集は断片も無い。奈良朝の筆と見える歌で其の時代に書かれてゐるのは正倉院文書続々修第五帙第二卷に收められし天平勝宝元年八月二十八日裝潢手実紙背短歌

□□□家之韓藍花今見者難写成鴨

初句の文字が缺けてゐるが「妹」字をかりに補へば

妹が家の韓藍の花今見ればうつしがたくもなりにけるかも

と云ふのが有る。万葉時代の万葉書きの歌がとにかく残つてゐるのは是れ位の事である。以て古い時代の物の現存する事の稀なるを知る可きで有る。平安朝に成ると種々伝はつてはゐるが、其も中々筆者の確實に知れる本で自著となると、めつたに無いらしい。古今集でも貫之の筆だと云はれる高野切は世の中に大分有りはするが、今日これをまことの貫之の筆と信ずる人は有るまい。かつて本誌で述べた事があるが、貫之著の土佐日記は自筆が鎌倉時代の初め頃京都の蓮華王院に伝はつてゐたのを定家が手写した其の本は幸に現存してゐるが、其の自筆の方は今は行方不明である。定家と云ふ人は人として崇拜してはゐないが、日本文学の愛護者としては心から頭を下げてあがめ尊んでゐる。彼が「老病中雖二眼如<sup>レ</sup>盲不慮之外見<sup>レ</sup>紀氏自筆本……不堪<sup>レ</sup>感興<sup>レ</sup>自書<sup>レ</sup>写之<sup>レ</sup>一昨今二ヶ日終<sup>レ</sup>功。」と奥書をしてゐる。卿の目は今の私のやうであるらしいが二日にて功を終れるとは実に感服する。眼盲の如きで然も壯者をしのぐの概がある。猶然のみならず、貫之の真蹟を臨摹して添へ其奥に為<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>三其手跡之體一如<sup>レ</sup>形写<sup>レ</sup>留<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>。謀詐之輩以<sup>レ</sup>他手跡<sup>レ</sup>多称<sup>レ</sup>二其筆<sup>レ</sup>一可<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>奇恠<sup>レ</sup>一

と書いてゐる。定家様が少し加味してゐるかも知れないが貫之自筆の面影をも留めて後世を益する事甚太である。

因云。貫之自筆本は三條西家藏土佐日記に「故將軍家御物希代之重宝也。今度密々自<sup>二</sup>小河御所<sup>一</sup>申出云々」明応壬子（〇元年）仲秋候重槐藤臣御判」とある此の大

納言実隆の奥書によれば其頃迄は將軍家に有つたもので有らう。（蓮華王院本が貫

之自筆と云はれてゐても、其の本が現存せぬのでハッキリはせぬが、先づ其として置くの外はなく、実隆本に云へるをも、先づ蓮華王院本として置く。

自筆と云ふ事は中々六ヶ敷もので、例へば前田家の清輔の校本古今和歌集の如きも自筆と称せられてゐるが私は信じかねる。斯る類は多い事である。名著の一つ方丈記の大福光寺所蔵本など今も学者間で長明自筆だ、否々然らずと論ぜられてゐる。中々自著自筆は古いものには有るので無い。徳川期からは無論有るが、好愛者心をあはせて愛護すべきである。そこで

#### ○蕃山先生の集義外書の残簡

蕃山先生の集義外書が自著であるとか、否とか云はれるが、是は自著で有る事に間違ひ無い事は蕃山全集の解題でほゞ明らかにして置いたつもりである。私は先生が自身で編纂もせられたものと思つてゐる。岡嶋可祐が纂録したと云ふ事も信ぜられないが、かりにさうであつても先生の命を受けて、先づ整理でもした位の事に過ぎまい。其事は扱て置き我が文庫の收藏に外書の内の一章、先生の自筆一卷が出来た。巻一の十八丁の初行より二十丁裏四行の終迄である。(全集一七頁七行、一來書略、其身正しければより十九頁十行迄)

本文は終の処に異同有れど外は大差無いが、其をあぐると七行(全集の行数)「行はるゝこと」が「行ると」不従者の下「有之」の二字あり。十一行「不覚」が「不知」。十二行「臣は正耳目」の「耳」の字無し。十三行「楽正を得ての楽に「ガク」の振假字がある。十八頁六行「大國」を「大身」とし、同九行主従の下「は」あり。十九頁八行「事をなさゞ

るものなり」を「事を不知善をなさ、れは淫行悪事になる、者也」とあり。自筆本の方がよろしからうと思ふ。猪鹿を「いのし、かのし、」と假字書にせられてゐる事も書添へておく。

此の卷子本、紙は美濃紙大で五枚に書し、著者の原稿本ではなく、先生が誰かの為に書いて与えられた物と見ゆ。(但し。來書略、返書略とはあれど假りに設けて書かれしと見ゆれば、此が答書の原本なりなど思ふべきではない)先生は門人の書を乞ふにあたり、かゝる文の一節を書して与へられしと見える。正楽寺の一幅も易の小解の一章であるが本の原稿では無い)

此巻物、「熊沢蕃山和文二章」と題箋し、下に朱書「海舟手澤跋文在」とし、巻の奥に

熊沢先生之手翰所送或旧侯也。明治二年初秋、勝安芳誌印

大正丙寅臘月初九購焉以有海舟先生跋語耳。

蘇峯六十四叟 於山王艸堂誌印

各自署である。海舟翁は旧侯に送る手翰としか見られしものか。

我が里は蕃山隱栖の地にて、極めてゆかり深き處なれば先生の著書は版本の総てを集め写本の古くしてよきを集めんと心懸け苦心慘憺数十年を経過したれども、地の利を得ざる為でもあるが、中々思ふ様に蒐集其の功を奏せないのは残念であるが、今此の一卷を獲得せしは近來の快事であつた。其外に少し得たる本の事を述べよう。

○湯浅常山自写本の源氏外伝二冊が有る。常山が松崎堯臣の書写本によつて写したもので、奥書は



右源氏外伝得諸丹波国篠山松崎神童之所」延享元年甲子夏五月廿七日  
日 湯 元 禎 印 印 印

とある。私が蕃山全集を出版する時には此本はまだ入手出来なかつた。其の後松崎堯臣自筆も出現した。私の親族の岡田真君の蔵する処となつた。此の上は三輪執斎の自写本が出て来れば此系統の本は揃ふわけだ。全集編纂後に收藏した本に夜会記の古鈔本が有る。次手を以て一寸紹介しておく。夜会記は写本と版本との相違は「夜会記禮式」が写本は二巻の初めに在り、版本は八冊の終に在る。此事は全集の解題に書いて置いたが此本も第二巻の首に載せてある。やはり写本の方の形が原形で有らう。此度の收藏本は大駄其の時代を余り隔らない頃の写本と見えて極めて丁寧親切なる写し方である。カナの傍訓なども注意して書か、れてあり、熟語には中央に一々——を引てあり、古鈔本として尊重せらるべき形を具備してゐる。思ふに蕃山先生門下の公卿の内の人の写になりし物か。書も美事である。私は独り其事をよるこんである。蔵書印は村井蔵とや、大きな、少ししたて長の印であり、其上へ奥井蔵書とたて長の小さい印が捺されてある。

○因云。先年名古屋の学者の人見磯邑と云ふ人が書入せる夜会記が目録に出た事があった。が残念ながら逸した。此人の書入れは見たかつたので、老人の忘れ勝ちなるにもか、はず今に時と思ひ出す事である。

○草加定環筆写本論語小解 蕃山先生著の論語小解は版本なれど稀観本で有る。わきても巻下（十一より二十迄の解）は甚だ稀なる者である。其が為にや草加定環（蕃山先生の六世の外孫で先生の著二十四孝評を上

木した人である）が此の小解を自ら写し、諸家の説、時に自説を頭書してゐる本が我が文庫にある。其の版本の稀なりし事を證するに足る。此の本は版本よりの写しと見ゆるから学問上さ程大切なわけは無いが、頭書と云ひ、かつ定環の自写と云ふ処に愛翫に値すると思ふ。次手を以て附記しておく。

28 ぶぐらにこもりて(6)  
正宗文庫設立二十周年に因みて

我が文庫を財団法人組織として永久に保存したいと考へて其の認可を得たのは昭和十一年で有る。今年で二十周年を迎ふるわけだ。紀念に何かと事業を考へぬでもないが、先だつ物を持たぬ我は今の処何も出来さうにもない。先づ二十年間の事を振りかへつて見るのであるが、何としても戦争、インフレは大に苦しかつた事に相違ないが、そんな泣言を並べても面白くもない。其んな事は心に秘めて置き、あとを續ぐ文庫長に伝授すればよい。其処で今日は此の文庫の蔵書に協力してくださつて文庫の光（螢程の光かもしれないが、私としては自慢に思つてゐる本）を得せしめ給うた人の事を述べて見たいと思ふ。元來我が集書はいつも言ふ事だが地の利が全く無く、かつ私が採集旅行をせぬのであるから、極めて無理な立場に在る。只だ目録を送つてくださるのを見て注文して、人の見落しを拾ふに過ぎぬ、其んな事でめつたに良書珍籍が得られるものでは無い。過日仙臺旅行の途次、東京に寄つて一誠堂へ立寄つて同好

の人々に御目に懸つたが、慶応図書館の阿部<sup>（五七）</sup>さんが云はれるのに、毎週神田の目ぼしい古典籍をあつかふ店を次から次へと廻る事にしてゐると云ふこと。其で親の敵でもさがす気で、然も金棒を持つて廻られては奇書珍籍は先づ以て当方なぞへは来ぬ事言を待たずである。然し良書あながち珍奇書のみでは無いから、良書を蒐集して後世の学徒の利用を待つのも文庫としては意義なしとせず、良書は今も出版されてゐると、方針の変更をせざるを得ぬ氣もする。閑話休題。私の文庫に一番協力して呉れたのは秋山三六二君であつた。君はわが文庫の恩人で有る。岡山市を中心に各方面の古本屋を覗きまはつて、私が好きさうな本を残る隙なく探し尋ねて私の来るのを待ち、又私の方へ持つて来て呉れた。此の篤志家が先年物故したのは私に取つては取返しつかぬ損害で有つた。君がわが文庫に收めて呉れられた秀れたる本の上の一端を述べやう。

#### 饅頭屋本節用集 一冊

先づ其の一は饅頭屋本節用集である。此の本の解題は申述べるに及ぶまいが、とにかく慶長以前刊行と見ゆるもので、天正十八年版と共に節用集刊本の最古のものとせられるもの。此の解説は橋本進吉君の古本節用集の研究、川瀬博士の日本書誌学の研究に出でゐるから今は云はぬが、此本には二種類ある事、而して近く今一種出現したとか、私はまだ何れも見ざるを得ぬが、とにかく我が文庫のは第一に刷られた本で、世の中にある普通本である。（そして俗名用第二葉、九十三枚より九十八枚迄五枚を缺いでゐる。）此本を法外に安く求め得た。斯る事を幸とするな

らば私に取つて此の事が第一位である。或る日早朝出岡した。時間の都合上、すこしいとまが有るので立寄つた処が、何か古いらしい節用集の横本が有りますと云つて高い棚の上のをバラ／＼と鱗がへしてゐたから、饅頭屋本は其頃私が宮内省の本を允許を得て複製してゐたので、手に取つて見ないでも凡その見当は付く、其れはほしいが、いくらかと聞くと拾銭でよろしいと云ふ。其は呉れなさいと云つて、手にも取らず見もせず、包むで貰つて所要の方へ出かけた。私の見当通りの饅頭屋本で有つて中々私なぞの手に入り安い本では無かつた。私は今此の本に箱を作り弟得三郎に画を書かせて愛蔵してゐる。我が文庫には節用類の蒐集には骨を折つてゐるが、此本は天が我に恵んだ物と考へてゐる。秋山君にも事情を云つて其の幸の神とあがまへて君が好きな酒を奉らうと思つてゐたが、其をなし得ぬ間に神ざりましたのは実に残念であつた。文庫の二十周年記念祝賀会が催さるゝならば君を第一賓客として催すべきであるに。

#### 光政公筆、源三位頼政家集 二巻

箱の蓋に松平新太郎少将御筆とある。外には光政を證する何物も無いが、文字は相違はあるまい。寛文元年の刊本と奥書は等しいが、右近衛権少将藤原在判迄凡て同じく「于時元龜二季三月十八日云々」の文は無い。天地に銀の罫を引き美事に書かれてある。本文と異本とに少し出入りがある。我が県下としては大切に保存せらるべきもの、一つで有らう、此の巻物は戦時中に秋山君がわざ／＼持参して呉れられた。

曹源公東路記

此の紀行は寛文三年九月二十一日江戸發駕十月七日岡山へ帰城ありし折の日記である。

三とせあまりわづらふこと有て江府にすみ侍りけれども敢ておこたるさまにもなければあまたいしにまみえてやうくふみ月の頃よりやまひかろくおぼえければ又しる国に遊ひてますらをかいとなみに身をなし野山になれては、なを心もはれなましと長月末つかたかれこれいとまこひし、名残がちにて立出ゆくの書き出しで

八島むろのみなど、ひるのうちに過て、くれかゝるほどに虫明のせと、かくいしまなといふ我国のはしくうちわたりて、うしまとのみなどにつく。人あまた船むかひに出るも舟路のさまたけ、むつかしければみなわか里にかへれよといひて、猶こきいそくほとに夜半過るころにおかやまのしやくわくにつきぬ云々

と我が里の前の海あたりを帰りたいそがる、様子が書かれて、やがて岡山城に帰り着かれた記行で奥書は

此一巻はわが君備陽の太守綱政の君そのかみしるしたまへる道記也。言葉の花の色香ふかく玉のことの葉かずくに光をまし侍る。たとへは吉野山のはなのあけほの、龍田山の秋の夕はへにもいろ貞まさり侍らんかし

およはしな此ことの葉にくらへ見よ花も紅葉も色はいろかは

元祿六癸酉仲冬中旬記之 備之前拙士

水仙花の露を滴て玄龍を楮国に走らし津伯子の需に答る者也

大丈軒 印

蕃山先生のあとで学者として召された大丈軒小原氏の写されたものがあるが、津伯子は誰であるか、或は津田永忠位では有るまいか。とにかく県下では是又大切に保存せらるべきもので有らう。

其他、永正拾六年書写本の「御成敗式目抄」壹卷。「王弼注、周易」六卷二冊。室町期の写本である。傍訓、頭書の訳註ともに言語学上大に参考となるべきものである。黄石公三畧の抄物（室町期）など其他皆秋山君のたまものである。君はかゝる書物を得る毎に私に示して我が文庫の目的達成に協力を惜まなかつた。或日早朝ゆくりなく来られた。何か善本を発見せられたのかと思ひつつ茶の間へ迎へた処が、君は云ひにくさうな面もちで、そして率直に飯を食はして欲いと云はる。どうしたのだと聞くと実は昨日姫路の妹（と云はれたと記憶する）の処からの帰りを日生に寄つて宿を乞うたが、とめる事はとめて上げるが飯は無いと云ふ。夜の事で有り、とめてもらはざるを得ぬから、とめてもらったが、昼から何にも食はないので、早朝空腹をしのいで、へ来たると云はれる。其は氣の毒な事であつた。とにかく飯は今たいたのが有るから差し上げやうと云つて進めた。君は遠慮するらしかつたから、今一杯も食ひ給へ。遠慮は入らぬとす、めると君は嬉んで其ならと云つて食つて是で満腹しました、辱ない。其内又珍籍を持参しますと云つて帰られた。是れが此世の別れとならうとは露思はなかつた。従つて文庫随一の協力者を失は

うなどとは思ひかけぬ事であった。ほんに世の中のはかなさを思はせた。私は折に触れ時につけて今も君を思ふ事が多い。

29 ぶぐらにこもりて(7)  
正宗文庫設立二十周年にあたりて(2)

○古写本節用集

桂又三郎君が文献書房と云ふ看板をか、げて古本屋をせられてゐた時の事であるから、戦争が始まつてはゐなかつた時で、昭和九年の十月の頃で、当文庫の設立を心がけて彼を考へてゐた時である。早朝同君の店へ立寄ると、一かさね抱へ出して、御出でになるのを待つてゐました。古写本でもです、どうですか、と見せられた中に此の尤物があつた。岡山でかゝる書物を見付ける事はめつたに無いから驚かされたが、君はさ程にも思はれなかつたのか、とにかく安く僕に譲つて呉れた。外の古写本も総て譲つてもらつて帰つた。何分にも是等は秘蔵して余り吹聴もせずにあつた。山田忠雄さんが節用集の研究をせられてゐられるので見たいと云はれたが、此の本を直ちに御見せする事は文庫の規則にも差支へるし、かつ又珍書を手放す危険をも感じたので自ら影写して差出した。此の本は縦八寸五分、横六寸五分位で表紙は別の紙を用ゐて一枚白紙をあてたので有らうが表紙は失せて、其の一枚の紙の表裏ともに一面に楽書がせられてある。本文の第一紙第一行二字程下げて伊と書し二字弱下げて節用集巻と書し、次行欄外にあたる所の上に天地と小字横行に書

し其から伊勢と書き出してゐる。

橋本進吉君の所謂「伊勢本」の形をしてゐる本である。墨付六十二須の部人倫の一行裸ヌハ以下缺てゐる。多分本文二丁。巻末に附録が他本の如く有るとすれば今一丁。即ち二丁が缺けたもので有らうか。元は和本の本綴りで有つたと思はれるが、今は紙縫で二所つゞられてゐる。一面八行、一行二行より一五字迄で本文一筆と見ゆ。傍訓のカタカナは古形を存じてゐる。山田君は此の書を研究して「部名は四四、オ・キ・エの三部をヲ・イ・エにあはせること他本のとほりである。門名をシ部によつて代表させるに、天地、時節、草木、人倫、身体、官名、人名、畜類、財物、衣服、飲食、言語の一二門ヲ、マ、コの三部が身体を人体に、イ、口の二部が言語を言語進退につくるのみで、門名の異同はきはめてすくない。特徴はア部衣服門と飲食門とのあひだに色字をいれ、(イ)、カ、(サ)、ヒの諸部、飲食門と言語門とのあひだに、数量門をのせることである。みぎの諸特徴はすべて既述した大谷大学図書館本に一致するのであるが、さらに両書所収の語を直接比較することによつていよく積極的にこれを断言しうるのである」とせられて実例を示されてゐられるが、あまり専門的研究になるので今は省略する。同君の研究によれば大谷本は当文庫本と一致度はきはめてたかといせられ、猶研究の結果当文庫本の方が古色を存するといふことは成立するであらうと云はれ、かつ「一体橋本博士の研究においては伊勢本の類化がきはめて困難視されたのであるが、こゝにみぎ両本が以上のごとき親近性をもつことが証明せられるにいたつたことは伊勢本の系統研究のうへにひとつの光明を点するもの

といはねばならない。」と結ばれてゐる。とにかく貧弱な田舎の文庫に斯る本を獲させ給うた桂君は我が文庫の協力者の大関である。唯だ惜しい事には君が古本屋をやめ給うた事は当文庫に取つて此上もない損害である。此の節用と同時に獲得した本どもには良書もあるが後日に譲る事として、此度は秋山書店の主人を回想し、桂君の功績を称へて筆をおく。

○ 正 宗 敦 夫

雑音を下に聞きつつ高き屋の夕のゆあみこちよかりき 神田の一誠室に宿る二首

床の間の白川切をながめつつわれはねむりに入りけるかも

松島の遊覧船を飜弄す太平洋の波はかしこし 仙台にて二首

経文を書きしは知れど青々としげれる多羅葉七十五にて見つ

わが耳はねざめてぞ追ふ遠寺の絶え聞えする鐘の餘韻を 津山森本慶三翁の許にやとる

比庵翁わが写真を見て「鳴神の音にはききし君が顔尊くおはすかくのごとく尊く」とよみて給はる

なる神の音の遠音に聞し君に尊き顔といはれて恥ち入る

30 ふぐらに「もりて」(8)  
池田綱政公筆のト養狂歌

我が文庫の愛蔵書に「ト養狂歌巻物」壹巻が有る。箱の上に「故御数寄方」「綱政卿筆」と二枚の小紙片が添付せられて箱の内側に「歌は御手跡也。絵は素閑」とある。曾て此の巻を入手せる時に鑑定を乞ふ

べく池田家の事務所に持参した事が有つた。其の時要点を私が小書してゐる。「歌は池田綱政筆蹟に相違なき旨池田家事務所づとめ蔵知氏も談られたり。又池田家の旧蔵の品に相違なしとかたられぬ」と。絵かきの素閑の事は今一寸分明せぬがとの御談であつた。扶桑名画伝巻四十一に素閑。姓、詳ならず、狩野氏、名は玉信、素閑と号す、假名志磨之助、殊牧の孫、徳庵の子なるべし、慶長頃の人、(扶桑名画譜百五云)自朴孫、徳庵男、狩野玉信、俗名志磨之助、号三素閑一、玉楽四代。按ふに、この素閑、画譜に、自朴の孫、徳菴の子とし、玉楽四代と見ゆれど、諾ひがたし、自朴といへるもの、他書に所見なし、推考するに寿卜とその唱近きより誤れるなめり自朴の条併せ見るべしかく見る時は、寿卜より三世の孫にて玉楽四代とはいひがたし」とある。慶長頃では合はぬが多分此人なるべし。絵は狩野派なる事うたがひなし。此の巻物、我が県下としては大切に保存すべき品で有る。用紙は奉書で有るが少しのいたみも汚れも無く、所謂時代色黄ばみがほんのりと匂ひ、えも云はれぬ美はしさである。画はかなりな彩色で極めて上品にかつ密に書かれてゐる。二十七枚が続がれて有る。惜い事には只だ統一で有るのみで裱装がほどこされてない。但し巻軸の外に五分ばかり紙がウゲてゐるから巻軸は外づされた物と思ふ。箱も軸受けがして有る。水晶の軸端位は附いてゐたので有らうし、巻物の裱装は金欄で背は金銀の切箔位で有つらうが、今は何も無い。私は是れを追剝に懸つたのだと云つてゐる。其は扱て置き、巻頭は「当世のよしはらた、きじよらた、きこのとりんほは岩た、きかな」に始り巻軸は島臺松竹桃の花と果と鶴亀を書き、松竹や、の歌に終

つてゐる。扱て「庚戌寛文拾年臘月上旬」と書かれてある。さうすると  
綱政公三十三歳の時の筆である。歌は二十九首ある。一枚一首づゝ、有  
るが同じ題で二首続きでよめる物なども有つて紙は二十七枚である。

さて今世に伝はれるト養狂歌と云ふ本は私は元版はまだ見ないが成篁  
堂の複製本によると奥書は無い。国書刊行会翻刻本にも奥書が無い処を  
見ると（他書の刊行本に奥書の有るは皆刊記を印刷してゐる。露伴翁の  
編纂だから有るのを略すやうなへまはずまい）多分原本が無いのであら  
う。延宝の末年に江戸の鱗形屋にて発行せり。此の挿絵は菱川師宣の筆  
に成れりとして世に珍賞する所たりと野崎左文さんが云つてゐられる。さ  
うすると此の巻物の書かれた寛文拾年から約十年ほどして集は出版せら  
れた事となる。其処で版本を見て綱政公が書いたのでは無いと云ふ事に  
なるから校勘上にも有意義な物で有り、かつ版本の集に無い歌も有り、  
異同も有るので、其点又大に役立つ物と思はれるので少し煩瑣で有るが  
調査して見る。

版本の集に無い歌は

惠宗か書ける烟雨芦雁をみてわれを瀟湘洞庭に座せしむると黄

山谷かいりしことまで思出られて讀る

もろこしのその名所かとおとろきて手を八景とうつしゑのあと

疱瘡を煩ひける人のもとへ菊を送るとよめる

菊をなめて八百歳をふる人にその名もおなしほうそ疱瘡

くもりたる日池の中嶋にあそひて弁才天のたち給へるをよめる

降もせずまたてりもせず中ふらりへんさいてんとすまぬ雨かな

或人ふしをなるほとちいさくよめと有ければ

ふしのたけゆき、の人のめにいれはこれそ眼裏のちりひちの山

蓮淤泥のうちよりいて、泥に染らす花の君子なりとも叔可

ひとみなきかたる（版本）  
一ついないひ出したると心おこりしたるもにくやく／＼つらに

くや然あれと我はそのいきすかぬえたもなくすらりくとも

きあけて水のたるやう成よそほひたとへていは、きよくなる

わかきしゆのとりなりをよくつくりたてたるに似かよひ侍け

れはその心をよみけるとなむ

枝もなく……此の歌は集にあり。

はし書版本誤るか。次に

荷葉にも見事なものはまたとあらし弓八あたこ白れんのはな

○

つれなさの君かこ、ろはおにゆりのひとくちにかみころせんく

つんほたいくのつはきといふことをおり句によめる

つはきさくむかひのやまのほの見えつたよりしあらはいさたおるへ

き

牡丹たんと富貴を、のむおこりものはなさへよくのふかみくさかな

むはらの花をよめる

いにしへは恋をせうひとおほしめせむはらは今も花をやりそろ

臺の物に松竹鶴亀桃のつくりもの有をみて

松竹やつるかめはちよ万代をなをも、とせはめてたいの物

以上九首で有る。其から集に有る歌との異同を掲げるが端書は全くこ

となる書き方になつてゐるから略するの外は無い。傍書せるは版本である

には鳥といふもことはり親二つさて子の名をおみつとやつけん  
から人も小哥ふしてやながむらんせねむてふうしく

筆者云ふうじトふじトノ差ナリ

しぶ口をくり通する五音信ことはのはちをかきくけこかな

みつかんあむすくろ豆を題にして人の狂歌よめと侍りによめる  
題はみつかむにたえたる御所望にうたをあむすのは身はくろうまめ

筆者云。此ノ端書集ノ方ハ「或人ちやくはしにみかんと杏仁と

くろまめと出して歌よめとありければトアリテ「題はみかんに  
たへたる御所望の歌をあんする。みはくろうまめ」トアリ。版本

ノ如クニテハ歌ヲナサズ。蜜柑ヲ「みつかん」ト云ヒシナリ。

古名録ニヒク朝倉亭御成記曰御引物みつかん、金銀之露トアリ。

綱政本ノ方端書モ「みつかん」ト書キ歌モ「題はみつかむに（感

に）」ニテ句ヲナスナリ

うへかしたとくらいらそひす、め子は竹のふしくれいさかひそす  
る

みたよくあらみたよみたよさきからすおもしろいそのおもくろい  
ぞの

し、といへとかそへて見れば六そあるいつれの山へとをのきぬらん  
ちとせとはかきり鶴殿そりやかたあいつかいつまでもいきの松原

やり梅を小たちのつはきうけとめて花の命はいけてこそ見ぬ

世をのかれ竹のはやしにすむきしはこゑもけんく賢人となく  
何ゆへにみを墨染の山からす柳にやらせあたしうき世に

花ちりし跡にも梅のみのならはすからすからすからすからす  
以上で有る。綱政本にて訂正すべき点があるとと思ふ。野崎氏の文に墓

の事を記して「官医家譜に品川東海寺中定慧院に葬る」と記しあると云  
はれ、墓は其正面には牧羊軒法眼雪嶺宗松の九字、背後には牧羊軒法眼

雪嶺宗松者本国生国共撰津境之人前牧羊軒奇雲云也、居士之嫡子也雪嶺  
始而仕幕下特賜官祿居地行年七十二而物故とあり其右側に和氣末流半井

卜翁土葬墓、左側に延宝戊午十二月二十六日と刻せり。と云はれた。猶  
一話一言に此人の事蹟見ゆ。又野崎氏は或る秘書にとして「元祿四年七

月二十六日奥医師半井卜養不屈の儀これあるに依り三宅島に流罪伴卜仙  
大隅守へ御預け同年八月六日卜養並に下人市場吉兵衛今日出船三宅島へ

さしつかはさる」云々とあり。

31 ふぐらにこもりて(6)  
本といふもの 胡沙ふく千両

本と云ふ物は不思議な物で有る。蒐書を趣味にすると云ふと道楽者の  
様だが、書籍は学問だけに用ゐればよい訳で、稀な珍らしいと云つて集  
めるのは外道には相違ない。然し世の中の物で著作位本気で作られた物  
はない。尤明治からは金貫けでした本も多いらしいが先づ徳川時代迄と  
して、とにかく大方の本の出版は著者に利を付ける本はめつたに無かつ

たから、本気で無ければ出来ぬ仕事である。従つてどの書籍でも時有りて用が有つて見度い事が出て来る。さうなると是又中々有る物で無い。東京京都なら又工夫も有らうが、田舎ではどうにも成らぬのが実情である。そこで珍書稀書蒐集もたゞ道楽であると云つて笑つてもゐられぬ。本と云ふ物は有る様で無く、無い様で有る物で、実に不思議千万なものである。今日は其の談をして見たい。昔平田篤胤が本居宣長の玉かつまを読んで出定後語の勝れた本で有る事に驚かされて読まねば成らぬと気が着いて即刻本をさがした事が委しく手にとる様に面白く出定笑語に談られてゐる。此書は所謂篤胤のゴザル本（口語躰の講釈本）の内で木活版で佐久良東雄が出版した。又後に野々口正武が明治二年の序を添へて薄葉、美濃半形の縮刷本もある。長いから掲げかねるが、「先づ富永伸基と云ふ人有て俗名を道明寺屋吉右衛門とて身は町人ながら甚だ筋のよろしき学風で、始は彼の人も知たる三宅万年と云ふ其頃の大儒に従つて漢学を致し大に儒学の御国に害有る事を發明し、説蔽と云ふ書を作つて万年に見せた所が万年は漢学者の事故大に立腹して相用ひず、依て富永伸基は万年の門人を相断り」云々と云つて夫から仏書をくま無く読んで仏経は釈迦の直経でなく後世の偽作なる由を研究した。篤胤が此後語を讀み度くて矢も楯もたまらず「即刻に本屋を詮議しよう」と存じ西へかけり、東へ走りて江戸中の書林を残らず駆歩て尋ねたる所書名をさへ知た者が無い」そこで知人に借らんとしたが玉勝間の記事にも注意してゐる人が無く、本居の家へも聞き合せたが其れも知れぬとの事、京大阪にも見つからなかつた。これが本が出版せられたのが延享二年の事であるか

ら篤胤の搜し廻つた時から二三十年前の出版本の事である。後に大阪で版木を見つけて刷つたのが篤胤の許へ五六部も来て閉口した笑ひ話もあるが、此本は其れから後刷、改版、明治に活版までも出来てゐるが、其はさて置き、篤胤の話を読んで其程の稀観本なら元刷本を一本見付けてやらうと持ち前の癖が出たので有るが、今はよく覚えもせぬが日ならずして田舎でゐる苦勞もせず手に入つて今も文庫に在る。こんなに楽々と、無いと云はるゝ本に逢ふ事も随分有る。そんな話を二三して見よう。橋本進吉博士とよく本の話をした物で有るが、朝日社の契沖全集の編纂より少し前かと思ふが、契沖の勢語臆断に二種の版本の有る事を談つた。元来此本は享和三年刊行の五冊本。伴高蹊、田山敬儀等の序文の有る本が流布本で臆断と云へば此の本の事のみの方に普通では思つてゐた。今は契沖全集が刊行せられ、其本の解題も細かに書かれて誰も知つてゐるが、其の当時は所謂研究家か、書誌学的の興味を持つた人で無ければ余り注意はしてゐなかつた時である。私が臆断の四冊本即ち享和二年版の初刷本と見ゆるよい本を手に入れてゐた頃の事である。其の話をして版下の筆蹟も契沖に似通つた本なる事など話した。橋本君は其の臆断は稀観本で知つてゐる人も少いと位の本だと聞かされた。其が其後も目について一二期求めて置いたが、其分は形も少し小さく版の刷りいたみは無いが紙はやゝ劣つてゐる本である。或は同時に特製本が有つたのかも知れない。何分そんな事で稀観本と云はれる本でもわけも無く出合ふ事も有る。備中の拙齋西山先生詩鈔の事であるが明治四十年頃の事である。自分で活版の機械を据て菅沼斐雄の家集などを出版した時の事だ。



小野節君が遊びに来られての談に、大家と云はれるやうな人に本を情す物ではない。自分は拙齋の詩集をさる人に貸したが返して呉れない。彼の本は中々無い本で困つてゐる。此本を翻刻して呉れる氣は無いかと云はれたから県下の名家で有り、さう珍らしいのなら刷つてもよろしいと云つて、然し詩集は中々活字が面倒だから活字を先づ集めて置きませうなど云つて、小野君から同書の欠本を先づ借つて字を集めたりしてゐた。

然し其の事業は其儘に止んだが、其の詩鈔は珍本として岡山の人から買はされた。是れは刷立てたまゝの様な善本で有つて嬉んで今も文庫にある。処が斯く長生をして目録を見てみると時々見懸ける、一、二部尚求めて置いたが無い様でも出て来る物は本であるとも云ひ得る。処が又無いとなると平凡の本のやうで五十年以上熱心してゐても見懸けぬ本も有る。其の談は又後日の事として其次に弘決外典鈔くわつげんしやうの事を云はふ。此書の事を今更云ふ必要も無いが、山田孝雄先生が云はれた。

本書は具平親王の撰にして、その成るや之を彼の名高き増賀聖人に呈して是正を請はれし所の者なり

尚先生は云はれた。「本書の伝本極めて稀なり。その宝永の刻本の如きも余廿年前に某所より借りて多少之を研究せしかど、之を架中に蔵することを得ざりき。而して世多くはこの宝永の刻本をだに伝へず、甚しきは刻本の存知をも知らざるを證せる著者あり」と。私は本を知つたので一本を架蔵したいと思つた。程なく古本目録で見付けて安々と手に入れた。さう珍籍ではないのかなとさへ思つてゐた。山田先生が御来遊の折に文庫ではは珍らしいと手に取つて見られた。私はさうでも無い様で

す、先生の御解説を読んで間も無く求めましたと語つた。先生は不思議な面もちでサウカネイと云はれた。然し其の後数十年見かけぬから稀観本で有るには相違無い。徳富蘇峰翁は「若し世に奇書と云ふ文字に恰當させる書籍ありとせば其一は具平親王の著弘決外典鈔であらう」と天下の書籍通が云つて、其本其の物が価値ある奇書である事の證明をしてゐられる。

此書に就ては云ふ事、書く事多いが余り専門的に成るから略する。其処で一応筆をおきたいが、今一つ談を添へたい。是れは貧乏な私の心持をさらけ出す様で恥ぢ入るが老日に加はり目もうすいので思つた事は書いて置き度い。談つて置きたい。近來西鶴の著書が非常に流行して高い事、我々は、もう高嶺の花と思つてあきらめるの外は無いが、又其の研究書も中々高い、高い事は学徒を困らす。殊に田舎の学徒を困らす事甚しい。処で横道にそれずに話を進める。近來西鶴の俳諧方面の事も知りたいと思つて「西鶴俳諧研究」を求めた。四六版三百五十頁位の本で取り寄せて先づ千円、高いなアとケチな考も自然頭の内に。処で忙しい内を夜々寝られぬ時の枕元で読で様々の知識を得たが、とにかく分らぬ事が多い。是は是れから大分骨を折らぬと西鶴の文章の理解も出来ないの感を深くした。其はさて置き「けぶり立つ夷が千鳥の初やいと」の講義の処で昔からの問題「こさふく」の事が山田先生が紹介せられた講義でハツキリして嬉しかつた。夫木集 西行

こさふかば曇りもぞするみちのくのえぞにはみせし秋のよの月と云ふ歌が有つて解きわづらふたのである。其の事を書くとき長くなるか

ら極略記すると、岡田正夫と云ふ人が「いけまの霧」と云ふ記事中

昨昭和八年九月下旬北海道日高国沙流郡平取村字荷負村ホビゴエ  
(幽霊)コタン(部落)(墓地の在る処)に於て骨髄蒐集の為に墓を  
数個掘つた時の事ですが、既に仕事を了へた墓穴の辺に集つた五六  
人の見物人の間から不意に白煙が濛々と立昇るのを認めて大に驚き  
何事かと走り寄つて見ると一老婦が口中一杯に泡沫を含んで居てこ  
れを空中にブーツと吹き上げるのであつた。而かも餘程粘稠だとみ  
えて空中に散乱した微細な泡沫がなかく消えない何時までも漂つ  
て居る。之に太陽が射して白雲の様に輝くから実に美事なものであ  
る。手に枯草の様なものを持つて居て、之を噛んで居る。これが口  
中の泡の素であり、白雲を吐く種だと知れた。之は何かと尋ねると  
イケマ(一名コサ)の根だと言ふ。魔除けの御呪として墓地等に用ゆ  
とある。又云はれた「魔除けの御呪であるが、もとはと言へば雲隠れの  
術、今日の煙幕戦術つまり敵から吾が身を隠すのがその第一義ではな  
かつたかと思はれる」との岡田氏の説が掲げられて有つた。くはしくは此  
書一九二頁―四頁迄を見られたい。山田先生は「平安朝時代から和歌の  
学者から今日にまで伝はつた難問はまことに胡沙の煙の消える如くに消  
え去つた」と云はれた。実にかたじけない。千円は高いと思つたのも隠  
れてしまつた。今はどこへ行つたやら。松浦武四郎が西蝦夷日記に

たちこむる胡沙より上にさし出て雲井のものとしりべしの山

と云ふ歌が有るが多少胡沙の事を知つてゐたのか。さて私がこのコサの  
事を書いたのは外では無い。宣長が玉勝間で出定後語の事を云つたの

を篤胤が問題にする迄は知られなかつた如く、世の中の本の内容も中々  
人に知れ渡らない物である。私も此の本で見たが其本も出て二十年、(雑  
誌に此の研究も発表になつたのかと思ふが)其を知らなかつた。恥しい  
事だが、さて今頃の辞書は此説に改まつてゐるかと思つて最近出版の新  
村博士の広辞苑はどうなつてゐるかと思つて岡山の図書館へ出かけて行つて目  
が見えかねるので渡辺司書に見て貰つたが在来の説通りで有つた。其で  
此事を書き添へて少しでも人に知れるやうにと斯の如くである。

32 ぶぐらにこもりて(9)  
大文軒譜は談る

我が文庫に大切なと云ふか、自慢にしてゐると云ふか、とにかく私が  
愛護してゐる本の中に小原大文軒の自筆の年譜やうの本がある。書名は  
大文軒譜と有つて草稿と書してあり、こよりで綴つたなりの本であり、  
消したりくしてしてすこぶる訂正はほどこされてあるが全くの草稿本  
で有つて六十三歳迄にて完結はついてゐない本である。清書本が世の中  
に有るのかも知れないが、未完の本で有るから草稿で終つた本かも知れ  
ない。兎に角彼を知るには此の上もない本で、なつかしい、そして面白  
い尊い本である。私は此の本を以て彼を談らしめることゝする。先づ巻  
頭の一行小原弥次平正義と書いて弥次平を墨黒々と消して善介としてゐ  
る。彼の六十三歳迄の正しいことが知られる。殊に嬉しいのは勤め向き  
の事を主としたもので無くて彼の心持が自序伝的に書かれてゐる。実は

是れをさながらに掲げた方がよいのであらうが、さうも行くまいから物語にもなつたり拔書にもして書いて見たいと思ふ。

先づ彼は寛永十四丁丑年閏四月十八日の未時（午後二時頃）濃州加納で誕生した。幼名は石松、諱は正義、弥次平と称した。又庄太郎と改めたが後善介と改めた。字は伯実である。

九歳従レ師読レ書、十三歳従レ父移レ肥前国唐津一。十五歳賦レ詩以贈三唐人林応昌一。有レ和章一、自レ是後五<sub>二</sub>有<sub>二</sub>贈答一。

と其の生立を記してゐるが、十五歳にして所謂唐人と詩の応答をしてゐるとは全く天才で有つたか、何れ人から神童と云はれた事で有つたらう。

承応元年十六歳の時に彼は奮然として志を立てた。

一曰、持<sub>レ</sub>心以<sub>レ</sub>正。〔静存<sub>二</sub>虚灵一、動従<sub>レ</sub>理〕。二曰、奉<sub>レ</sub>身以<sub>レ</sub>儉〔衣服食物不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>好、食以<sub>二</sub>三時一為<sub>レ</sub>常。夜則解<sub>レ</sub>帯振<sub>レ</sub>衣、又結<sub>レ</sub>帯、而寢。枕用<sub>二</sub>三木端一以<sub>二</sub>三藁席一為<sub>レ</sub>褥。〕三曰、応<sub>レ</sub>事以<sub>レ</sub>勤〔卯〔今の午前六時〕而起、雖<sub>二</sub>三寒甚一盥必用<sub>レ</sub>水。盥了速自結<sub>レ</sub>髻觀<sub>レ</sub>書之間有<sub>レ</sub>事則速応、有<sub>レ</sub>客則速迎<sub>レ</sub>之〕四曰、交<sub>レ</sub>人以<sub>レ</sub>信。

と云つてゐる。衣服食物好みを求めずには我等は七十にも近くなつて漸く其に近くなり得た。枕の木端は今の人には出来がたい。藁席は俗に云ふゴザで有らう。藁筵であつたのだらう。明暦二年、二十歳の冬父とともに唐津を去つて京に上つた。洛僧真教坊（此人は洛人原貞子とあるのを消して改めてゐる。）に逢つた処が正義に訓へた。云く、子の父は官祿を捨てしまった。（○肥前唐津の大久侯の臣であつた）子は嫡男である。父母に事へ弟妹を養の責は子に飯してゐる。学を勤て懈つてはいけ

ない。且病気をせぬやうにせぬばならない事を要とするがよい。若し夫れ病に臥すときは則ち畜に己が苦しむのみでなく、父母の心を傷ましむ。百事皆廢矣。と教へられた。正義は答ふる事が出来なかつた。父が曰く。丁寧の告戒、謝する所を知らないのかとたしなめた。談話良や久しく続いた。時に彼は手を束ねて謝して云ふに、向きに教誨を辱うし、此の上もない恩恵にあづかりました。夫れ学を勤める事は我が好む所である。固に懈る事のない事を欲してゐますが、只其の病に臥せぬやうにするのは難いことと考へます。其で速答を申し上げかねました。熟ら思つて得る事が有るやうです。請ふ今より十五年は病にかゝりませぬ。其から以後は年を経る事が久しいから予期し難いと答へた。真教坊が大に驚て曰く「我之言是告戒之常言也。子之所<sub>レ</sub>聞甚深厚。夫常言之間不<sub>二</sub>敢輕答一嗚呼実哉。及<sub>二</sub>其答<sub>レ</sub>之則七十餘歲之真教坊未<sub>二</sub>嘗聞<sub>レ</sub>之也。嗚呼奇哉。嚮<sub>二</sub>我告<sub>レ</sub>子以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>臥<sub>レ</sub>病然実未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其要<sub>レ</sub>愧<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>餘、願亦教<sub>レ</sub>我。正義云、請待<sub>二</sub>他日一。真教坊曰、我老矣、難<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>他日一。正義曰、父在前、故有<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>言而已。正休（○父なり）曰、何憚<sub>レ</sub>之有、只據<sub>二</sub>其情一以就<sub>二</sub>正<sub>三</sub>其可否<sub>一</sub>則豈無<sub>レ</sub>益乎。正義曰、熟思<sub>二</sub>所<sub>二</sub>以致<sub>レ</sub>病有<sub>レ</sub>之色欲飲食七情也。夫腎水者人以<sub>レ</sub>之生、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>先天之元氣一於<sub>レ</sub>是不<sub>レ</sub>警則猶<sub>二</sub>根抵之腐<sub>一</sub>所<sub>二</sub>以致<sub>レ</sub>病也。飲食者人以<sub>レ</sub>之成可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>後天之養一、於<sub>レ</sub>是不<sub>レ</sub>節則猶<sub>二</sub>斧刀之戕所<sub>二</sub>以致<sub>レ</sub>病也。於<sub>レ</sub>是能謹則風寒暑湿亦有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>侵。我謹<sub>二</sub>此二者一以欲<sub>レ</sub>守<sub>二</sub>教誨一且夫七情亦能生<sub>レ</sub>病。然我平生用<sub>二</sub>正心之工夫<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>得而七情之累亦寡。是其所<sub>三</sub>以答<sub>二</sub>以三十五年不<sub>レ</sub>臥<sub>レ</sub>病也。期以<sub>二</sub>將來之久一、固不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>輕言之罪一、然於<sub>二</sub>我心一決然。

且省<sup>レ</sup>此言<sup>ニ</sup>以為<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>之杖<sup>ニ</sup>而已、仰請亦賜<sup>ニ</sup>教誨<sup>ニ</sup>、真教坊魯然正<sup>レ</sup>坐曰、子夫神明之降誕乎。抑仏陀之再生乎。我過<sup>ニ</sup>七十歳<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>空生<sup>ニ</sup>。今遇<sup>ニ</sup>此人<sup>ニ</sup>豈不<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>壽考之大幸<sup>ニ</sup>乎。我雖<sup>レ</sup>老猶健、將<sup>レ</sup>保<sup>ニ</sup>數年<sup>ニ</sup>。我未<sup>レ</sup>死之間若有<sup>ニ</sup>子之糧絶<sup>ニ</sup>、則我必給<sup>レ</sup>之、以使<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>子之學<sup>ニ</sup>誓以不<sup>ニ</sup>敢食<sup>レ</sup>言。只恨我生之不<sup>レ</sup>久而不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>子之所<sup>レ</sup>成也。正義曰、過蒙<sup>ニ</sup>稱譽<sup>ニ</sup>我豈當<sup>レ</sup>之哉。唯其恩意之厚感荷多甚也。」と。

彼れ二十の青少年正義が一丝紊れず理路整然として論をやるに對し、七十の老師真教坊が神明之降誕、仏陀之再生と驚歎し、糧絶なば之れを給せんほどに學に邁進せよと激励した。其の眞實紙上にあふる、思ひがする。其れに付けても我が二十にも満たざる少年の時より井上通泰先生の懇なる教を受けたのであるが、其の魯鈍、師に齒がゆさを歎せしめしのみなりしを今以て悔ゆるのである。嗟。

正義は書生に遇ふ毎に京師の鴻儒は誰ならんと尋ねると僉曰く、李斎と永菴ならんと答へた。又天下の書生はそこに輻湊してゐるとも云つた。問。今何書を講じてゐられるか。答て曰く。今既に臘月で講習する者は休んでゐる。其れ又明年の春の事だ。

明暦三年、正義は二十一歳になつた。京都で始めて春を迎へたのである。丁酉元旦の作詩がある。

今日雖<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>春已至<sup>ニ</sup>、雪山却有<sup>ニ</sup>老翁姿<sup>ニ</sup>、回<sup>レ</sup>頭欲<sup>レ</sup>下問<sup>ニ</sup>明證<sup>ニ</sup>去上、  
捧出江南梅一枝、

○ 原立仙烹<sup>レ</sup>茶次出<sup>ニ</sup>筆硯<sup>ニ</sup>遍請<sup>ニ</sup>詩於客<sup>ニ</sup>、予又関<sup>レ</sup>之(○此の原立

仙即ち真教坊かも知れない)

主人賞<sup>レ</sup>客烹<sup>ニ</sup>青茗<sup>ニ</sup>、一三濺枯腸<sup>ニ</sup>清味濃、商<sup>ニ</sup>畧挿儲音律惡<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>堪<sup>ニ</sup>強写<sup>ニ</sup>玉川風<sup>ニ</sup>、

但し此の詩は年譜に在るのではない。大丈軒集から抜き出た私のいたづらである。

正月の下旬に或人が告て曰ふ。李斎は論語を講じ永菴は大學を講じてゐる。正義は試に往て之を聴いたが共に心に愜はなかつた。其から書を読む者に遇ふと則ち老師宿儒は誰であらうかと問ふた。然し其趣を考ふれば誰も謁を請はんと欲する人が無い。そこで家に籠つて書を觀る事にした。書生が數輩來つて学んだ。

或日自から思へらく、儒者は經濟を事とするが軍を考ふるも亦其の一事であると思つて畧は軍書を涉獵した。「凡姦雄之所<sup>レ</sup>爲其情狀可<sup>レ</sup>知也邪譎齷詐而行<sup>ニ</sup>暴虐<sup>ニ</sup>、何以足<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>之乎。我道有<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>戰、戰則必勝、彼何知<sup>レ</sup>之乎。」と云つてゐる。又一日思へらく。親に事へ身を保つには亦医を知つて置かねばならない。そこで畧は医書を觀た。若し貧賤の者が病に係つて薬を用ゐることが出来ない時が有つたら彼は則ち薬を調へて与へた。皆効を奏した。然し其は皆其の病が輕症で有つたからで有らうと云つてゐる。

万治元年廿二歳、正月八日から大學を講じ日々講ずる事一会、論孟に及び中庸に終るを例とした。只佳節を以て休日とした。毎年其を常とした。間ま孝經、小学、近思録を講じた。是れ皆書生の急務である故である。「於<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>熟<sup>ニ</sup>講習<sup>ニ</sup>則<sup>ニ</sup>六經亦無<sup>レ</sup>益。故雖<sup>ニ</sup>六經<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>急。其餘雜書

何暇講レ之乎。平生嚴三乎師弟之礼一、無三敢輕言動二者、雖三貴者之子弟一亦不レ得レ挾レ貴。凡來則頓首而就レ席、去則亦頓首而退。同学之士以三相敬一為レ則。」と教育法針を明記してゐる。書生の來り従ふもの日に日に多くなつた。

万治二年、二十三歳、一老翁が卒中風を患ひて昏倒して人事を知らぬやうになり、痰喘壅盛のありさまであると其子が來て告げて藥を求めた。撰生飲を調へて与へた。明曉どうだと問ふた時は既に死んでゐた。昨夜既に救ひ難きは知つたが、而も救ふ可からざるを知らなかつた。是れ我が過である。「天下豈三必無三救レ之者一乎。自レ此不レ医三人之病一。」と云つてゐる。蓋し是れは醫術進歩せる今日でも仕方が有るまいが、斯く考へては一日も医は出来まい。医のごときは責レ己重也以周き彼が如き人では思ひ切つたがよかつたので有らう

二十四歳。書生來学益盛と彼は云つてゐる。今年三月十二日に弟逸正が歿した。(未完)

33 ぶぐらにこもりて(10)  
大丈軒譜は談る(二)

二十六歳(○寛文二年)壬寅の元旦に

一年三百六旬餘、今日乾元先資初、物各新時何不レ勵、架頭正有二活人書一、

又

寒風追レ曉去、淑氣從レ晨伝、揚レ目山林麗、回レ頭景象鮮、鶯歌声喜々、蝶舞翅翻々、彼有三花顔醉一、此看三柳眼眠一、時哉可三遊賞一、自起把三杯捲一、

是れは大丈軒集によつて加へた。

この年伊勢の龜山の城主石川主殿頭昌勝が馬を以て迎へたので龜山に遊んで七十日逗留して飯つた。龜山にての事は何の記載も無く集にも何も見えてゐない。

年譜に

有レ時遇三真教坊一、則曰、得レ無レ臥レ病乎。答曰、然。真教坊感三称之一。今年夏病レ疹、三日臥床。真教坊聞三正義臥レ病驚曰、此人不レ臥レ病久矣。忽臥レ病、是或不レ救乎。促レ駕來問レ病。答曰、疹発也、恥三前言之或不レ能レ蹈。真教坊曰、無レ傷也、我聞、疹之為レ病受二之於有生之初一、然則非三子之所レ致也、而疹愈亦速。是亦平生謹レ病之力也。凡剛健之人忽臥レ病、則多不レ救。故向者聞三子之臥レ病、且驚且恐我今而大悦。今年冬真教坊没矣。我與三真教坊一約而十二年於茲二而已、何其不レ待レ終レ約而没乎。真教坊者非三庸人一、寡欲而無三邪曲一人尊健。且夫昔日教戒之一言、亦我師也、惜哉。

真教坊に死なれて大に力を落した事であろう。集に「書懷」と題して星曆七移暑又寒、小軒纔占一枝安、襦衣堪レ慙菜公服、蔬食屢空顏子簞、少弟可レ憐窮巷簞、腐儒自識仕途難、不レ辞百歳長流落、何日庭闈見三喜歡一

彼が京へ移住してから七年になつたが苦しい生活を続けてゐたと見え

る。有感と題して

灯下見レ書過ニ半夜一、窓前黙坐又多時、靜中意味説ニ明月一、明月不レ言独自知、

又同じ題のもとに

坐到ニ深更一、心自平、靜中和レ月小詩成、幽懷信レ口不ニ模索一、豈レ要人間耳目驚、

彼が詩の上手であるか否かは私にはわからない。たゞ彼が読書人としての日常の生活をしのぶに足ると思ふ。二年前に亡つた弟を想つて

神思惘然清涙下、起居髣髴觀ニ爾容一、秋天漠々悲懷切、烟雨不レ遮

古寺鐘、

と吟じてゐる。明月に對して

何となくたゞ哀さぞしられるひとりふけゆく夜はの月影

と国風に思をやつてゐる。

二十七歳（○癸卯）大坂城の留守板倉内膳正重矩に迎へられた。板倉重矩は申す迄も無いが父重昌が鳥原城を征して戦死したので甲合戦として城中に攻め入り奮戦して頗る功が有つた事は人々のよく知る処である。萬治三年に大阪定番となつてゐた。彼は年譜に云ふ

館ニ于数奇屋ニ居十餘日而飯。」

以下の談は重矩には関係ない事である。

一日講ニ孟子一、至下一郷之善士斯友二一郷之善士一、一国之善士斯友二二国之善士一、天下之善士斯友中天下之善士上。慨然嘆曰、我無二良友一可レ愧之甚也。何以輔レ仁於レ茲求ニ良友一、若夫博識之士不レ

寡、而守レ道之士甚稀也。茲有二隱士一、氏三米川一諱一貞、号三操軒一、

審ニ其行実一蓋正士也。抛ニ階梯一以請レ謁、既而相見。操軒曰、子

之名声藉甚、何以扣ニ華門一乎。答曰、読ニ孟子一云云、我無ニ善友一

何以輔レ仁、我愧レ之。願不レ棄レ我而誘ニ掖之ニ則幸甚。操軒曰、子

求ニ善士一、子則善子也。而於レ我不ニ敢當一之事也。然切々偲々固

所レ願也。正義乃問所ニ与語一為レ誰。操軒曰、我亦良友少、近間有ニ

中村七次一号ニ楊齋一。博識而着レ実、以為ニ益友一、有ニ宇保俊直一、

謹厚而好レ学、有ニ川井正直一、無ニ文字一然信レ道甚厚。只此二三輩

而已。正義云、我聞、川井与左衛門居ニ父喪一三年、居ニ母喪一三年、

其此人乎。曰、然。正義云、中村宇保未レ聞レ之。操軒曰、中村雋傑也。

宇保秀才也、共隱者也。正義曰、今知ニ其名一、既為レ得レ幸。操軒

云、有ニ三宅道乙一知レ之乎。答曰、聞ニ其博識而好人一也。操軒云、

有ニ山崎柯右衛門一、鳴ニ于世一知レ之乎。答云、聞レ之久矣。然其行

実有レ所レ疑如何。操軒云、我亦疑レ之。又云、子今講ニ何等書一。答曰、

四書小学近思録而已、未レ及ニ六經一。操軒曰、諸子註解如何。答曰、

諸子註解忽見レ之則有レ悦レ心者一、熟思レ之則漸覺ニ其非一、今亦不レ

暇レ考レ之、專信ニ朱文公之解一。操軒曰、朱文公之解無レ所レ疑乎。

曰、無レ所レ疑。然泰伯章註、大王翦レ商之志一段未レ能ニ通曉一、夫

朱文公註レ經義極精密。況於ニ其大義一豈有レ所レ忽乎。是只我智有レ

所レ塞也。措以竅ニ他日有レ所レ開而已。操軒云、悉与ニ我意一暗符合、

其於ニ大王翦レ商一段一亦然。相約他日有レ所ニ發明一則相告以正レ之。

彼が烈々たる儒者たる心状を赤裸々に談り尽して餘蘊がないではない

か。山崎柯右衛門は闇齋の事であるが行実（まこと）に疑うべき所があると兩人とも云つてゐる。垂加神道（たかかみかみち）を起した事は人の皆知る処であるが、たゞの朱子学の徒でないから、彼是議論批判せられたのであらう。是れ又凡人ではない。

他日操軒の所に立よつた処が偶、中村、宇保、川井の三人が来てゐた。そこで相識となつた。是れより互に往来して益を得るやうになつた。

二十八歳（○寛文四年甲辰）集に（此の集、牧思集と題して大丈軒の別号也と注してゐる。牧思の号を聞いた事が無い。伝に補ふべきである。）甲辰元旦の詩を収め続いて読書の詠を載せてゐる。

映々残燈影、読レ書眸（まなこ）子明、丹心清一寸、此日不（な）空生（くうせい）、  
書懷と題して

萬卷非（な）五志（ごし）、六経窺（くわい）二斑（はん）、時々諳得好、内省転無レ顔、  
と思をのべてゐる。彼は斯の如くして読書にふけり、行を正しくくと  
励んだ事であらう。空海を詠じた詩が二篇集には残されていて「昔日  
有（あ）空海（くうかい）、妖術惑（まど）二人間（ににんかん）」など云ひ又「枉（まが）取異邦鬼（いっぽうき）、強欺（つよこ）此土神（このちのしん）」  
など云つてゐる。其の当時の儒者の心持を述べたもので有るが今載せな  
い。杜少陵之韵を假つて諸將五首を作り家康・秀吉・信長・尊氏・正成  
を詠じ又同諸將賛五首を収めてゐる。尊氏を詠せる一首を掲ぐ。

尊氏依レ専レ抽（ひ）武標（ぶひょう）（一） 塵連（ちんれん）三南北（さんなんぼく）一久難レ銷（しょう）（二） 胸中霜  
氣傾（きけい）銀漢（ぎんかん）、眼裏電光輝（がんりでんこう）碧寥（せきりょう）（三）、萬夫悦  
樂挾（らく）孤貂（こじう）（四）、子孫世掌（しそんせしやう）征夷職（せいゐしやく）、三百年間護（さんぱねんかんご）帝朝（ていぢょう）、

昔の儒者の尊氏觀を聞く事が出来る。此年は詩文が多く作られてゐる

が畧しておくが、除夜の作の一首は書き添へたい。

今歳風光今夜尽、工夫内省未レ加レ新、日餘三百（いち）已空過、更有（ふた）二何  
顔（さん）又遇レ春、

いかに彼がつとめたかは知り得られる。（以上は年譜には関係ない事である。）

一日訪（ま）操軒（そうけん）曰、去年有レ約我今作（し）二翦商問答（しんじやうもんたう）、願一覽了賜（ご）二慈斧（じふ）、  
操軒曰、幸々、乃披閱了曰、議論明決義理精到、蓋与（ご）二朱文公（しゆぶんこう）二神会  
乎。諸儒紛々之議、迎レ又解去、豈（いか）二畜有レ功（しゆ）二朱文公（しゆぶんこう）。実開（ま）二後学  
之惑（ご）、請使（ま）二介（けい）一郎（いちろう）操軒（そうけん）子瞻（し）二写（しや）之一（いち）以得（よ）二朱文公之意（しゆぶんこうのい）、且（かつ）不（な）レ惑（ご）二  
諸儒紛々之議（しよじゆふんふんしやくのぎ）。

此の稿は現存してゐるか、いないかは知る事を得ない。

二十九歳（○寛文五年乙巳）又龜山城主が馬を以て迎へられたので  
龜山へ再遊して二十餘日で皈つた。（因云。大丈軒集は寛文五・六年は伝本が無  
いやうである）

34 ふくらにこもりて(11)  
大丈軒譜は談る(三)

追記。前稿に書き漏したから追補する。

米川操軒。崎門学脈系譜によると

闇齋—米川操軒—小原大丈軒

市浦毅齋—窪田空軒

篠岡謙堂

と出てゐる。米川操軒。名貞一、字幹叔、称儀兵衛、京都人、延宝六年八月十九日没。年五十二、葬東山黒谷と記されてゐるが大丈軒の年譜によると学友と見える。其の伝は事実文編二十四（国書刊行会本第二冊、三十七頁）に中村之欽が「米川幹叔実記」に出てゐる。之欽即ち惕齋で示蒙句解を著して人々によく知られてゐる人。今其の伝は実記に譲つて書かない。

川井与左衛門は名は与、字正直、自ら東軒翁と号す。通称を与左衛門と云つて大阪の人である。先哲叢談後編卷の二に伝が出てゐる。家業は茶商で有つて五十才として学に志したと云ふほどの晩学で有つたがよくつとめて大家となつた。崎門学系譜に「川井東村、名正直、称布袋屋与左衛門、大阪人、住京都、延宝五年十一月三日歿す、年七十七」とある。

前号大丈軒の別号を牧思と書いたが牧旦の誤で有る。茲に訂正する。

○

三十歳（○寛文六年、丙午）一日訪ニ操軒<sup>シウケン</sup>少頃小倉黄門来臨矣。正義将レ避レ之。操軒云、黄門好レ学其趣亦正、請勿レ避レ之。正義退在ニ席末一既黄門入。操軒謝ニ来臨之辱。且曰、席末在ニ一学士二名正義、号大丈軒、聞ニ光臨ニ将レ退、僕留レ之。黄門云、我聞ニ其名ニ久矣。

今幸而相見、請進レ席近前而共語。正義頓首。黄門問ニ操軒ニ云、仁

者楽レ山、智者楽レ水。自思且問レ人、未レ能ニ釈然ニ、如何、操軒詰

ニ朱子之註ニ以開説。黄門云、示教固詳、然未レ能レ解レ疑。仁者必楽レ山、智者必楽レ水乎。聖人之言何其判然如レ此乎。操軒顧ニ正義ニ云、子<sup>オモケル</sup>以ニ為如何ニ。正義云、高論明備。黄門云、此疑久、願勿レ辞ニ一

言ニ。正義云、察ニ公之所レ疑、蓋以下公之意在ニ楽山楽水上ニ、而不

レ在ニ仁者智者之上ニ乎。夫仁者豈無レ義乎。然仁者意味氣象必寛裕

溫柔、故凡所レ楽此類居レ多、於レ物亦然。義者豈無レ仁乎。然義者

意味氣象必発強剛毅、故凡所レ楽此類居レ多、於レ物亦然。所謂仁者其

徳全而天下之物不レ能レ動ニ其心ニ、其意味氣象渾々而尊、淳々而厚。

朱子所謂厚重不レ遷之謂乎。夫天下之物、厚重不レ遷只山為レ然。有

下似ニ仁者氣象一者上、所<sup>三</sup>以為ニ仁者楽レ山乎。因ニ聖人之言ニ以思ニ

仁者所レ楽、則凡仁者動靜語黙、心事接物之體可レ知而已。智者其

智明而、天下之物不レ能レ惑ニ其心ニ。其意味氣象洪々而達、漸々而通。

朱子所謂周流不レ滯之謂乎。夫天下之物、周流不レ滯只水為レ然、有

下似ニ智者之氣象一者上、所<sup>三</sup>以為ニ智者楽レ水ニ乎。因ニ聖人之言ニ以

思ニ智者所レ楽則凡智者動靜語黙心事接物之體可レ知而已。聖人之言

判然不ニ亦宜ニ乎。黄門大感云、数年之疑团今而消化不止、於レ茲且

如ニ親遇ニ仁者与智者ニ何悦加（○一字切ラレタルカ）操軒亦称レ之。

黄門云、約下某之日屈申操軒於我堂上、惕齋亦将ニ来会ニ。願子亦拄レ

駕乎。正義曰、幸甚。及レ期会話終レ日。黄門之待ニ学者ニ不ニ敢挾レ貴

所<sup>三</sup>以足ニ共講レ道也。

黄門は突起で有る。突起は蕃山先生の琵琶の師である。寛文二年十一



月七日蕃山は愛玩の琵琶浜庇を携へて小倉実起とともに深草の元政の庵を訪ねて雅会を催した事が有つた。元政庵には蕃山の詩稿一幅今に伝はつてゐる。蕃山の詩歌の自筆の真物は全く伝はらない。茲に其詩を写しておく

鶴楼中秋作

飛雲送<sub>レ</sub>雨過<sub>二</sub>江城<sub>一</sub>。步出<sub>二</sub>西郊<sub>一</sub>傍<sub>レ</sub>水行。露霑草間幽径滑。烟開林外遠山明。滿堂華月中秋色。帰路涼風十里程。向<sub>レ</sub>夕將<sub>レ</sub>辞餘興在。桂香携<sub>レ</sub>処薄衣輕。伯繼稿

三十一歳（○寛文七年丁未）文集によるに元旦に

雙親同喜々、衆弟共怡々、家内一春色、滿腔我意儔。

と詠してゐるから、両親も弟達もすこやかで心長閑な新春を迎へたと見える。示好詩者と題して

後進当<sub>レ</sub>知謹戒<sub>レ</sub>、詩人即是巧言人、吟<sub>レ</sub>花咏<sub>レ</sub>月多非<sub>レ</sub>実、貧<sub>レ</sub>景釣<sub>レ</sub>興鮮矣仁、

と詠じてゐる。又謾吟と題して

牧且散人時賦<sub>レ</sub>詩、一生未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>新奇<sub>一</sub>、常嫌鍊<sub>レ</sub>句勞<sub>二</sub>心志<sub>一</sub>、信<sub>レ</sub>口縦横写<sub>二</sub>所思<sub>一</sub>、

是れではよい詩は出来まい。

京の二条城の留主鈴木長左衛門が数々請ふたが数々辞して逢はなかつた。一日使者が来て明日行つて逢ひたいが閑暇が何れの時と云ふ事が知れないから敢て問ふと云ふ事であつた。大丈軒は尊長が駕を任せ給ふには敢てあたらざると云つて、明日門に距て使者を給はつて辱なかつた事を

謝するであらうと返事をした。翌日往て謁した。或日鈴木の処で蕃山了介に逢つて共に語つて日没に及んだ。大丈軒は次の如く記してゐる。

蕃山了介者始在<sub>二</sub>備前<sub>一</sub>号<sub>二</sub>熊沢助右衛門<sub>一</sub>者也。穎敏而無<sub>二</sub>邪曲<sub>一</sub>。慕<sub>二</sub>王陽明<sub>一</sub>高士也。然無<sub>二</sub>学力<sub>一</sub>、故於<sub>二</sub>聖人之道<sub>一</sub>背馳多矣。

と云つてゐる。朱子で固まつた所謂儒者と、治国済民を事とする所謂活学者とは其れは凡てが合はぬ所は有らうが穎敏にして邪曲無く高士なりと大丈軒の目に一度の会談で映じた蕃山先生であつた。高士なりと評せる大丈軒も偉人である。蕃山先生が世間の所謂儒学者で無い事は之又尤なる評であらう。此の一条は甚だ面白い。大丈軒は蕃山先生の跡に光政に仕へたが、是は学究としてで有つて経綸家では無いから無事に勤められた。

三十二歳（○寛文八年戊申）には年譜に記す処が無い。文集に元旦歌

婉而賀<sub>レ</sub>春、愉而猷<sub>レ</sub>寿、恪兮弟兄、樂兮父母。

又（嘗從<sub>二</sub>俗之弊<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>髮日久矣、去年晚秋以後不<sub>二</sub>復難<sub>レ</sub>之故歌及焉）

麗日嘩兮、東風習々、草木暢兮、吾髮將<sub>レ</sub>及、

三十三歳（○寛文九年己酉）

一日操軒語曰、近間有<sub>レ</sub>詰<sub>レ</sub>我、曰、凡請<sub>二</sub>相見<sub>一</sub>者子固辞<sub>レ</sub>之、然拋<sub>二</sub>大丈軒接引<sub>一</sub>者無<sub>レ</sub>辞<sub>レ</sub>之何乎。我答曰、数十年來請<sub>二</sub>相見<sub>一</sub>者甚多、然交久者不<sub>レ</sub>衆、実好<sub>レ</sub>学者甚寡、却將<sub>レ</sub>汚<sub>レ</sub>我者或有<sub>レ</sub>之、是以知<sub>レ</sub>我之不徳而無<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>於人<sub>一</sub>亦無<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>我、所<sub>二</sub>以固辞<sub>レ</sub>之也。若夫大丈軒所<sub>二</sub>接引<sub>一</sub>者数人皆篤実久而益厚。学亦益進起<sub>レ</sub>予者多矣。是我所<sub>レ</sub>欲也。客曰、何以不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>大丈軒<sub>一</sub>。答曰、大丈軒有<sub>二</sub>知<sub>レ</sub>人之明<sub>一</sub>、

有三化レ人之徳<sup>一</sup>、我之所レ不レ及也。正義聞レ之曰、子之徳高。故人難レ親且謙遜不レ任<sup>二</sup>師道<sup>一</sup>、故人所レ憚或少矣。我之徳低、故人易レ親、自高任<sup>三</sup>師道<sup>一</sup>、故人有レ所レ憚、遷レ善改レ過、我恥為レ人之厚而、為レ己之薄也。

文集に「書格銘」田精次郎求  
之、十月三日

君子為学、其心在義、夙夜読書、日明且至、小人為学、其心在利、夙夜読書、日昏不愧、義利之誦、以是其志、志定乾乾、聖賢可冀、

三十四、五歳は年譜に記す処なし。文集には齋谷先生に謹呈せる書簡を始めとし諸家に呈せる書が多い。伝記資料になる事が多々有るであらう。川井叔三に寄せたる書中に「先日米川子為賢兄謀以<sup>二</sup>備陽郷学之職<sup>一</sup>」云々など見えてゐる。

### 35 「金葉集の研究」についてふぐらにこもりて(12)

此の秋は親しい友の著述、二三十年もかゝつた研究の著述を身近に置く事が出来て嬉しい年である。其れは一つは前野貞男君の萬葉書誌学であり、一つは松田武男君たけおの金葉集の研究である。「文庫にこもりて」の「小原大丈軒は談る」は今数回を要するであらうが、編輯者より金葉集の研究に就て一文を寄せて呉れまいかとの注文が有つた。此の金葉集研究には多少正宗文庫と関係が有るので此の研究を讀する一文を書いて見るも大丈軒年譜の息拔もなつてかたがたよからうかと考へて筆を取る事とし

た。

松田君は学生の時分から此の集に目を付けられて我が師井上通泰先生の金葉集の講義も聞かれたとの事である。一昨年夏の夏の暑い折であつたが畏友西下経一君を介して当文庫の金葉集の一覽を申込まれ、わざわざ遠路をいとはず来庫せられて岡山市から通つて数日見えて研究せられた。此度君は金葉集の研究によつて学位を得られ、其論文を出版せられ、序を以て遙々と当文庫を訪づれられて楽しい談話に一夜を過ぎたのである。田舎の一小文庫が学究の篤志家に少しでも役立つたので、私としては日頃の目的を達成した嬉しさを覚えたわけである。当文庫の目的は当時流行の大衆の娯楽的気分は少しも無く、唯々国歌文方面の探究穿鑿に必要な資料を蒐集し、其に役立てるにあるのみであるから、其の利用者諸君が其を活用し給ひて成績をあげられ給ひなば此上ないよるこびである。

君が「金葉集の研究」を志し、真の初度本を静嘉堂文庫にて発見し、二度本、三奏本の古写本をあまねく探究して其の性質を闡明せられた努力は実に大したものである。君が自跋の内に、岡田希雄君の事が出てゐる。松田君が静嘉堂で初度本金葉集を発見せられしを伝へ聞かれた岡田君は病軀を押し上京せられた。其時偶然玉川電車内で初対面の挨拶を交はされた事が有つたさうだ。其が最初に声を懸けたのが岡田君で有つた。松田君は其際電車内で金葉集の校合本を開いてゐたので、岡田君の判断で「今どき金葉集の校合本など読んでゐる人間は松田氏以外にはない」と思つて声をかけたのださうだ。全く奇遇の一駒だが、其れ程金葉

集は人に読まれてゐなかつたのである。此の岡田君も金葉研究家である。私は金葉の事は談らなかつたが、君とは知合で古典全集の事では御世話にもなつた間柄である。金葉集研究家は極めて少ないが、井上通泰先生・岡田希雄君・松田君と何れも熱心なる研究家に私が値遇を得た事も不思議の縁であらう。過日松田君が談られるのに今時金葉を談ずるのは君と僕位のものだよと云つて呵、大笑された。

松田君の本研究が歌集編纂撰定の原則を探究して従来あまり問題にせられなかつた各作品が孤立せず互に緊密なる連鎖をたもち、一つの絵巻物を開展せる如き感じを得せしむるやうに撰述編纂せられてゐる其の過程を究明せられたるは、撰集鑑賞に対して劃期的の一大進歩發達であると言ふべきであらう。殊に金葉集は君が「歌集形成に関する研究に好都合な基礎的資料を多分に有し」と云はる、如く、初度、二度、三奏の三過程を経たる資料の現存により分析探究するに最もよろしいのに着目せられて、整然たる研究、細微を極めたる探究、実に近代的研究の礎石をすゑられたものと云ふべきであらう。

私は思ふのであるが、金葉集の撰定に対して俊頼は白河法皇の御意見を考慮に十分入れて撰定せねばならなかつた事は云ふ迄もないが、初度奏覧に及んだ所謂初度本は今全本は伝存してゐないが、とにかく在來の勅撰集の形を踏襲した平凡な保守的な態度が強く含まれて撰定せられたに違ひないと思ふ。是は誰しも左様に思ふ事であらう。白河法皇は巻頭の歌からして御気に召さなかつた。「貫之もめでたしといひながら、三代集にもれきて、あまりふりびたる。〔研究に「もれこで」とある或は

誤植か。流布本は「もれきて……ふりたり」とあり。今畠山本による）かくがほうしも、げにもとつゝきおほえず」（「今鏡」との抗議で却下せられた。そこで二度本の撰定に取かゝつた。此の方針は「研究」に細述せられてゐるが、とにかく俊頼は古い時代の歌を削つて当代の歌を以て編輯した。所謂現代派で固めて撰りに撰んだのである。是は法皇の御意志を忖度したのも有らうが、時世も古今集振があかれて新古今集振にうつり行かんとする所謂新派和歌の發生期であつたので、俊頼も其の一大決心をして仕事にかゝつたのである。其の間の苦心を物語るものは二度本の種類の多い事が是を證拠立ててゐる。松田君は二度本を三種類に分類せられて其第三類本を精撰本とせられた。大牀に於て歌数の少いのが精撰本に近いので有らう。而して松田君は伝兼好法師筆本が最も精撰本に近いとせられた。

俊頼としては大に努力して株守の態度を捨て思ふまゝに新氣運を取り入れて精撰したので有つたらう。八雲御抄によると「多は近世人。但六帖歌並道濟相摸等入レ之」とある。処が出来た本（即ち歌数の最も少ない二度本）其が又返却になつた。法皇の御意志によつたので有らうが其の御意志の指示は伝へられてゐない。引續いて第三度目の本、即ち三奏本が撰せられた。其に対しては、「金葉事第三度本乍レ草奏レ之。自レ待賢門院一実行申請書レ之外無レ披露。」（「八雲御抄」と云はれてゐる。三奏本は伝良経筆本の奥書に「今度奏覧本無レ左右レ被レ納了。以レ撰者之自筆一書二造紙二云々。件本者拾遺集玄々集等多以入レ之。当本即是也。可レ指南一歌」とあり。袋草紙に「件本（〇三奏本）兼盛・能宣歌、並玄々

集・拾遺集歌等入レ之。拾遺は柄にして称三弃置之由二入レ之也」ともある。俊頼も三奏本は草稿本をさながらに奏覽した位で自信は無かつた様子は推すべきである。松田君も巻頭の歌、重之の「吉野山峰の白雪いつ消えてけさは霞のたちははるらん」を撰出せるに就ては「これは二度本に於ける当代を中心とする考へよりは、明らかに後退した考へ方で」云々と論じてゐられるのは至言で有る。私は三奏本は保守と新派の鵠然たる妥協的なる集となつてしまつてゐると思ふ。其歌の詞や端書は改訂を経てよくなつてゐるかも知れぬから其は取るのがよいのも知れぬが撰集としては二度本の精撰本を取るのがよいと思う。

従つて流布本八代集本や正保版の二十一代集本は取らない。是等の本はつまり二度本ではあるが初期に近い本で、(第二類本)其から段々に取捨選択せられた歌数の少くなつた本が真の二度本の奏覽本であり、金葉集としてもすぐれてゐる筈であると思ふ。扱て餘談めいた事が長くなつたが、松田君が初度本二度本三奏本の選定の過程を一々に例を挙げて考證を進められたのは実に驚嘆すべきである。例をあげて讀へるべきであるが、引して云ふとなると長文にもなるし、研究家は何れも一本を備へ給はねばならぬ事故略して筆をおく。

36 大文軒譜は談る (4)

三十六歳、寛文十二壬子年冬春三豆鼓<sup>二</sup>とある。十一年の冬に味噌春

をしたのであらう。其折に左腋が微痛があつたのを強ひて春き了つた。其から痛みが甚しくなつて、大熱を發して腫大に起つた。粥湯も喉を下らざる事が七日にも成つた。諸医も手を束ね名医数人が薬を施したが寸効が無い。蓋病症が知れ難い故で有るか。是れは薬を止めて命を竝つにせず、乃ち薬を服さず又数日して熱が稍減じて少しく粥が食べられる様になり日を経て腫が亦漸く減じた。其後熱も腫も亦消散した。「病間嘆曰、与三真教坊二約<sup>シテ</sup>十七年于茲二昔日臥レ病レ疹三日、其他只此病而已。然自省我志有レ所レ懈而得レ鬼神之譴<sup>シ</sup>乎、久不レ失<sup>レ</sup>三保養<sup>一</sup>者、真教坊戒之力也。不幸而失<sup>レ</sup>三真教坊<sup>一</sup>之噫。」と真教坊を追想してゐる。

一日(○丑三十七歳、去年、寛文十二壬子年也を消して一日とせり。次に三十七歳。寛文十三癸丑年とせり。されば年齢をふと誤りたるならん。とにかく寛文十二年三十六歳にて一日(或日の意)の事有らう)三宅道乙が操軒に伝へて大文軒に備藩に仕へんかと相談が有つた。此の事は大文軒伝としては重大なる資料であるから、長文では有るが其のま、掲げる事とした。病氣の事は諸氏へ贈つた書状の扣が文集に有つてくはしく知れるが今は掲げない。

操軒来語曰、我聞備前国主少将光政君其大賢乎。以三正<sup>レ</sup>己安<sup>レ</sup>民為<sup>レ</sup>心。其於三号令<sup>一</sup>於三举措<sup>一</sup>於三賞罰<sup>一</sup>、悉使<sup>レ</sup>評說衆詳議<sup>レ</sup>之、一版三于至当<sup>一</sup>而後施行、凡事不<sup>レ</sup>敢独断<sup>一</sup>、使<sup>レ</sup>三儒士講<sup>レ</sup>三經書<sup>一</sup>聞<sup>レ</sup>其細評<sup>一</sup>置<sup>レ</sup>三諫諍職<sup>一</sup>從<sup>レ</sup>諫如<sup>レ</sup>流猶且不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>之、設<sup>レ</sup>三箱於大門之外<sup>一</sup>号<sup>レ</sup>三諫箱<sup>一</sup>、欲<sup>レ</sup>諫者書<sup>レ</sup>以投<sup>レ</sup>三箱中<sup>一</sup>、每月自開以悉閱<sup>レ</sup>之、自抄<sup>下</sup>出其可<sup>レ</sup>三施行<sup>一</sup>者上、亦使<sup>レ</sup>評說衆議<sup>レ</sup>之。而後施行、新建<sup>レ</sup>廟以祭<sup>レ</sup>三祖考<sup>一</sup>建

レ学以教ニ諸士子弟ニ郷党州閭無レ不レ設レ学。於レ是万民靡然皈ニ于儒  
ニ而捨ニ仏法一。實是千歳之一遇也。凡学者不レ事則止。若夫欲レ事則  
非ニ此君ニ而誰哉。子夫不レ欲レ事ニ此君ニ乎。正義答曰、固所レ願也。  
我聞賢者任レ道、故人君迎レ之不レ以レ礼則不レ往。故人君之迎ニ賢者  
一必以レ礼、蓋客レ之而不レ臣レ之也。我之不徳也不ニ敢当ニ之事也。  
我欲レ事之者家貧親老、為レ祿者也。其職易レ勤而其祿足レ養レ親則我  
將レ仕也。然自レ我求レ之則所レ不レ肯也。少有レ意レ待レ価而已。操軒  
曰、善今自ニ備前ニ求ニ侍講之士ニ、以ニ子之名声藉甚ニ乎。執事者以  
レ子為ニ第一一。而問ニ三宅道乙一。故道乙問レ我云、大丈夫足レ為ニ三國  
君之侍講ニ乎否。我答曰、有レ餘。又曰、能作レ文乎。我答曰、未レ知、  
然嘗著ニ剪刀問答一篇一。我兎介一郎借以騰ニ写之ニ。道乙請レ之而閱  
了曰、作レ文不レ拙、而義理亦明確。夫備陽之需在レ明レ経、不レ在  
レ文。然作レ文亦儒者之一事也。闕レ之則不レ為レ具。今如レ此則於  
レ為ニ備陽侍講ニ為レ具。子夫薦レ之、故來問レ之而已。正義曰、如ニ  
我所レ欲則事之。操軒云。所レ欲可ニ得聞ニ乎。答曰、今世稱レ儒者  
皆剃髮、我不レ欲レ之。分則士職則侍講、一也。一年趨ニ備前ニ以事レ  
君、一年皈ニ京都ニ以事レ親、二也。講ニ四書小学近思錄一、其餘不レ  
講、三也。不ニ宿直ニ不ニ扈ニ從輿馬一、四也。不レ勤ニ他役ニ不レ使ニ四  
方一、五也。操軒以告ニ道乙一、々々曰、五者其四則或得ニ其所レ欲乎。  
不ニ剃髮ニ之一事為レ難。夫国君位貴而微祿之士不レ得ニ近前一、剃髮  
者雖ニ微祿ニ得ニ近前一。今天下為ニ侍講ニ者皆剃髮。若夫不ニ剃髮ニ則  
何以侍講。今之世不レ欲レ事則止。欲レ事則不レ得レ不ニ剃髮一。操軒云、

我知ニ正義ニ久矣。必不レ肯レ之。遂告ニ正義一。々々曰、人之不レ為レ重、  
我之為ニ一大義ニ闕ニ其義一以得レ祿我不レ為レ之。操軒云、我亦以為レ  
然。於レ茲其議止。

三十七歳、寛文十三癸丑年二月初三、操軒來告云、備前執事者寄ニ  
書於道乙一曰、正義所レ欲五者皆得レ之。且賜ニ年俸二百五十俵一如レ  
在ニ備前一則加レ之扶持米若干現在人数扶  
持倍之以之及僕一人、速來謝。期以ニ今  
月十五日ニ執贄。正義曰、諾。

斯くて十日に京を出て十四日に備前に至り国学の客舎に館す。十五日  
將君（光政）に拜謁した。（文集によつて拜謁の詩を掲げる）

拜謁二月十五日奉拜  
少將君

二月望之日 衣裳刷上城 入門躬自鞠 仰殿意持盈 再拜執臣節  
一言蒙特榮 銘襟長不忘 終世荷恩情

翌日侍講を命ぜられた。始めて大学の三綱領を講じた。君辞色を賜ひ、  
且つ美膳を賜うた。十七日又知止の節を侍講した。又美膳を賜ひ、十九  
日廿日亦同じやうで有つた。廿四日に少將君が国学を觀、亦侍講した。  
廿八日に少將君、発駕して江府に參勤せられた。正義に京に皈りて命を  
待つて江府に到れと仰せになつた。三月三日に正義は岡山を立つて京都  
に皈つて以て命を待つた。五月九日に京師に大火災があつて正義の宅も  
焼けた。少將君が此の事を聞かれて汝火災に罹つたと聞く、江戸に來る  
事勿れ、秋に又命ずるで有らうと告げられた。秋に至りて命ありて我近  
く皈国するから汝直に備前へ往つて待てと。六月十九日一条御殿に於て  
綱政公に贅見した江府より皈国なき  
る、時である（文集によりて拜謁の詩を添へる）

拜謁六月十九日奉拜  
伊予君(○網政)

六月仲旬日 我君入洛陽 儕々多士侍 肅々太夫傍 委質拜帰列  
解顔徐下堂 他時何所獻 只有野芹芳

九月八日正義京を出でて十一日に岡山に着いて少将君の賑らるゝを待  
つた。「九月廿四日入三小生組一属三岸織部二」と頭注してゐる。十月十日  
に少将君版国せられた。正義侍講す。「講畢細三評之或及古今之事理二  
正義以為我受レ祿為レ養レ親也。豈レ加三自奉二乎。糲飯菜羹与三奴僕一同レ  
之。故扶持米而足矣。其祿悉以贈三供于父母二」と云つてゐる。火災の事  
は、長沢氏に送つた手簡に

天宮仙洞女院新院悉炎上施迨市塵京兆尹司亦回祿、米川丈兄弟家亦  
燒事變至于茲不亦駭乎。拙寓居亦罹此災、奉老親引病弟而去。奴僕  
輩負書笈而出。豈是非不幸中之幸乎。其餘家財器物總燒失。

と云ひ、答一齋書に

先月京師之火。天宮仙洞女院新院悉炎上、市塵物故者百六十餘町、  
就中米川兄弟家罹此災、土藏僅免、宇保氏、八尾氏土藏亦滅。是固  
可憾。拙家財多燒失。然父母兄弟無恙。且奴僕負書籍而出。実不幸  
中之大幸也。

とも述べてゐる。学者が書籍を此災に失はなかつたのは大幸で有つた。  
三十八歳、延宝二甲寅年、正月十日夜京より使が来て嚴君の病の篤き  
事を告げた。故に版省の暇を請ひ翼日告を賜ひ、船で上つた。十二日夜  
明石湊に入つて船を下り馬に乗つて十四日に京に馳せ着いた。

四月廿二日に京を立て廿八日岡山に帰任した。五月朔日に少将の君

(○光政)に拜謁して「侍講於大学曾子曰節」とある。

八月に命有つて曰、「版レ京省二父母一、及三我参三勤于江府二自レ京従二  
東行一。」そこで十七日に岡山を立て廿五日に京に賑つた。十一月十四  
日に少将君は京に至られたから従つて東行して廿八日江府に着いた。文  
集に「武江麻布客舎前有二連理樹一因題レ之」として

人倫和合是人瑞、将謂我君饒自当、連理枝繁東海館、皇天后土降二  
禎祥一、

と詠じてゐる。

三十九歳、延宝乙卯三年の記事中に大丈軒は面白い談を記してゐる。

三月七日侍レ対。光政公曰、汝房舎甚狭。対曰、臣嘗在二陋室二二十年。  
故今不下以三房舎二為レ狭。曰、時々遊行以伸レ氣無レ禁三汝他遊行一。

正義拜謝而退以告三長臣山内権右衛門監官村井弥七一。凡諸士有レ禁  
不レ得二他遊行一、故諸士大羨三正義一。山内村井相議曰、諸士有レ禁  
不レ得二他遊行一者、恐三壯年士或有二不法之事一也。若夫正義遊行時  
従レ之而出入則可也。於是諸士大悦、時々従三正義一遊行。数日後  
村井問云、子所レ遊何処。答曰、寺之傍、社之辺、或畝或塘。曰、  
楽乎。曰、楽矣。与下振三衣富士巔一濯中足田子浦上同レ帰。曰、従レ  
子出遊者多乎。曰、今則甚少。村井笑曰、我聞壯年士、始悦二従レ子  
出遊一、然憚三子之嚴格一、故従レ子出遊者漸少也。

げに／＼と思はれて微笑を禁じ得ないが、もし余に遊行を共にする人  
有りとせんか、神田あたりのごみくさき古本屋めぐりで、大丈軒以上に  
今の人ならば閉口するで有らう呵々。

三月十一日には浅布館で命あつて伽羅を聞いた。御手づから名香を賜つた。初音ハツネと号する伽羅で有つたと記してゐる。光政公は九月十六日発駕、廿七日に京に到られ、卅日京出發版国になり正義は京都に留つた。侍従君綱政公が十一月九日に上洛せられたから正義に拜謁を賜はつた。廿五日に火災が有つたので大丈軒は従者十数人を帥ゐて一条姫君の殿に駆附けたが火焰が盛で救ふ事が出来なかつた。偶高野伝七に遇つて衣桁貝桶貝合の貝を、桶に入る、桶を湯次盥盤等の器を遷して販りて翌朝一条公別墅に至りて之を献つた。「姫君大悦遂使少納言局謝レ之。曰、是皆公方所レ賜而有二葵紋一、貝桶者女之重器也。衣桁等即今急用之物也。不レ憂諸物焼失、特憂二此等焼失一。然今得レ之何幸加レ之。侍従君忽来訪、故告レ之以称レ之云々。少納言局語曰、昨夜姫君不レ憂二諸物焼失一、只憂二公方之所レ賜焼失一。就レ中貝桶為二女之重器一、憾レ不レ能存二其一片一。今朝之言亦及二于茲一、今幸献レ之、姫君大悦云々。正義拜而退。」と大手柄をした事を記してゐる。延宝三年の年譜は是で終つてゐるが、文集を見ると是非伝へて置きたい事が有る。伊木頼母の事と諸友の事とであるが次回に書きつぐであらう。(未完)

37 大丈軒譜は談る (五)

延宝三年の文集に「伊木」と題してゐる文章が有る。云く

乙卯正月初八日与三淵本久五左二趨三水野三郎介之饗二、饗了、淵本

語云少将君家臣伊木頼母者可レ謂レ賢矣、請二問之、曰、頼母一日受二番頭之命一、即日悉記二組子之姓名一以懷レ之。逐日設レ饌以招レ之、他日在レ朝見二勤番之人一、而不レ見二当番之人一、則使二人問レ之、曰、得レ無レ病乎否。是以人々不三敢闕二当番一。又欲二組子之屑々至一、其致者必設レ饌雖二頼母不レ在レ家而又供焉。組子不レ至二一日、則使二人問レ之、有レ病者則日々遣二人問一、且自就以顧レ之、其招レ医、求レ藥等無レ不レ尽レ心者。又愛二組子之子弟一如二我子弟一、若新出仕者則与二之公服二領及衣裳一。一日少将君從二東武二坂、頼母率二組子一以迎レ之。令曰、行厨在レ我、相率以行、集レ店以供レ饌致レ心之類大抵皆然。是以其餘之為二番頭一者稍傲レ之。其故其死之日、少将君大驚以惜レ之。其為二組子一者皆發レ擊以大哭如レ失二父母一、他人聞レ之無二不レ含レ泣者一予聞レ之嘆二称之一。

とある。諸友と題しては

見レ利思レ義、見レ危授レ命、久要三不レ忘二平生之言一。我友有二塩見玄三経明一、近レ之。

有レ知而如レ愚、有レ功而不レ居。我友有二市浦清七惟直者一、近レ之。簡黙温恭、裁レ事不レ動二声色一。泉八右衛門仲愛。可二以為レ法也。

有レ才而果斷、剛直而不レ隱好レ善惡レ惡。我於二津田重二郎永忠一見レ之。

有レ忠有レ義、儉而不レ吝者、於二岸織部一見レ之。

と記してゐる。各友人の面目躍如たるものがある。問題の人、泉仲愛、津田永忠を教語に評し尽して餘蘊なしと云ふべきであらう。

四十歳、延宝四、丙辰年二月始、泉八右衛門仲愛、津田重二郎永忠が書を寄せて曰く、

少将の君が数々子の岡山に来る日が何日かと御問ひになる。子夫れ近日来らば則ち可也。と「正義曰、我既受レ禄為レ臣。君召而臣趨レ命義也。然今如レ此則君之遇レ我甚過レ分也。速趨レ命而已。父曰、汝之事レ君固所レ欲也。然其海陸往来之間勞三我意二而已。正義答曰、於三備前一受三居宅一奉レ迎レ之乎。父曰、久在三京師一任三意之所レ適。今往三備前一往三来諸士之間一、我之所レ倦也。答曰、請三居地於城外一以作レ家、日涉三菜園一以為レ樂、不三亦可二乎。父曰、諾」こ、で岡山に移住する決心を定めた。

八日（○二月）に平井安兵衛が一条姫君之書簡を托した。九日に京を出て十三日に岡府に着いた。西丸に登つて山内権左衛門に抛つて一条の姫君の書簡を少将の君に奉つた。忽に召出された。そして一条姫君が書簡中に火災の時の労事を悦ぶ事が認められてゐた事を告げられ、何時来たかとの御尋ねに対して「船着三京橋一直接至」と御返答を申上げた。「少将君曰、就レ舍以休焉」とあつた。十四日に侍講、十五日に侍従君（○綱政）に拝謁した。其から侍講の暇に城外の宅地を相てまはつた。五六十町の間を訪ね探つたが気に入る処が無かつた。或日津田永忠が御野郡北方村の中に好地があると告げた。そして明日共に往て其処を見せようと云つた。翌日永忠と共に実見をした。其横十七間餘、其経三十九間餘昔人見某が宅地であつたが、今は畠と為つてゐる。大文軒はまだ満足出来な

つた。再び加世次春、野田道直と共に往て見た。次春、道直等が皆好地であると云ふ。此畠は誰の地であるかと問うた処村翁が答に党正久次郎の地であるとの事であつたから久次郎を訪ねて問うた。

其地汝之祖父以来所レ伝乎。抑汝之所三自買二乎。答曰、買レ之既三年也。曰、然則与三之於我二我償三其価一。久次郎不レ肯。正義曰、旁相三宅地一無三加レ之者一、故将ト告三于 公二以作中我家上。若夫自レ公賜レ之則不レ可レ償レ価、我傷三汝之失レ地。故今欲レ買レ之也。久次郎拜謝曰、受レ命。遂償三其価二而後告三于 公一。三月晦賜三居地一。謂三久次郎二曰、麦及菜汝之所レ種也。麦熟而汝刈レ之、菜長而汝採レ之、而後我経三營之一。久次郎拜謝。

と其から八月に土を畳て基址を作り凡堂室庁房庫舎之規、悉く図以て之を父に獻して其意を聞いて悉く其の意に従ひて匠人に命じて十月の初旬に出来上つた。十三日に父母を迎へて岡山を發つて十七日に京に到り十一月二日に父母を奉じて京を出て十三日に岡山に到つて新宅に入つた。

凡家内百事従三父母之所レ欲、父母悦曰、有レ樂無レ憂、仏者所謂極樂世界也。一日父命曰、汝踰三強仕一、速迎三汝之助一。答曰、諾。於レ是扱レ配使三媒妁一告三女家二曰、我事三父母二自以如レ奴為三我妻一者事三我父母二自以如レ婢而可也。若夫不レ能レ然則我不三親三迎之一。女家曰、只命之従、遂約レ婚。

とある。屋敷の買収から結婚に致る迄、行きとどいた記録を見る事が出来るが、現代とくらべて其の相違の甚だしいのを驚かぬ人も有るまい。



此の年の文集には、自警と題して

占地継宮大文軒、神宮山下北方村、操心戰兢須増敬、悉是農夫我独尊、  
の詩が一首録されてゐるのみである。

四十一歳。延宝五、丁巳正月に結婚式をあげた。少しくくだしいが  
書き出して置く事とする。其当時のかたくな、儒家の家庭の様子を知る  
たづきとも成らう。

十五日納レ幣告<sup>三</sup>祠堂<sup>二</sup>、二月五日親<sup>二</sup>迎安藤氏<sup>一</sup>、及<sup>三</sup>其行<sup>レ</sup>酒警<sup>レ</sup>之  
曰、我甚宜<sup>レ</sup>之父母不<sup>レ</sup>悦、則必出<sup>レ</sup>之。我不<sup>レ</sup>宜<sup>レ</sup>之。父母曰、是  
善事<sup>レ</sup>我則終<sup>レ</sup>身行<sup>三</sup>夫婦之礼<sup>一</sup>敬以事<sup>三</sup>于我父母<sup>二</sup>可也。翌朝相共拜  
<sup>三</sup>父母<sup>一</sup>、少頃朝食出。乃使<sup>下</sup>安藤氏<sup>一</sup>供<sup>中</sup>父母之膳<sup>上</sup>而後就<sup>レ</sup>席。五  
日相共拜<sup>三</sup>祠堂<sup>一</sup>。

三月六日少将君が江戸へ発駕せられた。正義は北方の家へ皈つた。  
十一月廿九日冬至の子の上刻に寧が生れた。寧は元禄十年の処に二月  
二十七日藤岡に嫁するとあるから長女で有らう。十二月廿八日少将君が  
皈府になつた。正義は客舎に移つたと書いてゐる。つまり光政が岡山に  
在らせられて講説の有る時は客舎に在り武江にあらせらるる時は北方の  
家に皈つてゐたと見える。侍従綱政の時もさうで有つたと見える。

四十三歳。延宝七、乙未年二月十日に光政公が武江に朝せられた。其  
に従つて正義も東行した。八月廿六日に六言六蔽を侍講した。(〇六言  
六蔽は論語、陽貨にある語で「好<sup>レ</sup>仁不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>学、其蔽也愚、好<sup>レ</sup>知不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>  
学、其蔽也蕩、好<sup>レ</sup>信不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>学、其蔽也賊、好<sup>レ</sup>直不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>学、其蔽也絞、  
好<sup>レ</sup>勇不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>学、其蔽也乱、好<sup>レ</sup>剛不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>学、其蔽也狂」。とあるを講

じたので信濃君(〇池田信濃守政言)丹波君(〇池田丹波守輝録、光政  
の二男と三男である)側に侍りて聞かれた。講畢て細評が有つて後に退  
出したが忽に命が有つて召された。

正義則趨<sup>レ</sup>命拜而進。光政公曰、夫人之祭日在<sup>レ</sup>近、而綱政在<sup>三</sup>岡山<sup>一</sup>  
一執<sup>レ</sup>祭、我今在<sup>レ</sup>茲、亦祭乎。正義对曰、君夫人之神主在<sup>三</sup>岡山<sup>一</sup>故  
侍従君撰<sup>三</sup>其祭<sup>一</sup>、公在<sup>レ</sup>茲只祭日設<sup>レ</sup>位而致<sup>三</sup>祭之意<sup>一</sup>而可乎。曰、  
然則三日齋乎。对曰、公齡既七十宿齋而可乎。曰、祭前一日、晚炊  
之後沐浴衣<sup>三</sup>新服<sup>一</sup>焚<sup>レ</sup>香而静坐乎。对曰、可也乎。曰、祭日設<sup>レ</sup>位  
拜<sup>レ</sup>之乎。其拜如何。对曰、子以<sup>レ</sup>父為<sup>レ</sup>天、婦以<sup>レ</sup>夫為<sup>レ</sup>天、故父不<sup>レ</sup>  
拜<sup>三</sup>子之神主<sup>一</sup>、夫不<sup>レ</sup>拜<sup>三</sup>婦之神主<sup>一</sup>、只如<sup>レ</sup>揖則可乎。曰、鞠躬  
而已可乎。对曰、然。既而將<sup>レ</sup>退。公親書<sup>レ</sup>論語之中三章<sup>一</sup>以手賜<sup>レ</sup>之。  
正義拜<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>焉。遂表<sup>三</sup>繡之二箱<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>謹蔵以宝<sup>レ</sup>之。記<sup>三</sup>其始末<sup>一</sup>以伝<sup>三</sup>我  
子孫<sup>一</sup>。

家から通信が有つて十月の朔晩寅時恒が生れた事を報じた。多分次女  
であつたのであらう。十月十九日に光政公が皈府せらるるに御供をして  
皈つた。

四十四歳。延宝八年庚申。

嚴君召<sup>三</sup>正義<sup>一</sup>曰、我老勞<sup>三</sup>家事<sup>一</sup>、悉以還<sup>レ</sup>汝、々在<sup>レ</sup>堂以治<sup>レ</sup>之、  
我移<sup>三</sup>汝之房<sup>一</sup>以安靜。正義对曰、諾。於<sup>レ</sup>是請曰、有<sup>三</sup>餘財<sup>一</sup>、分<sup>三</sup>  
与弟妹<sup>一</sup>則可也。我有<sup>三</sup>常禄<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>之、嚴君悦以頒<sup>三</sup>与<sup>一</sup>、且曰、  
是非<sup>三</sup>我与<sup>レ</sup>之、实正義贈<sup>レ</sup>我之餘資也。正義養<sup>レ</sup>我有<sup>レ</sup>餘、汝輩無<sup>レ</sup>  
用<sup>レ</sup>養<sup>レ</sup>我。寧勿<sup>レ</sup>失<sup>三</sup>今所与<sup>一</sup>之財<sup>一</sup>。皆曰、不<sup>三</sup>敢忘<sup>レ</sup>命也。正義治

二家事一之始戒レ妻曰、于レ朝于レ晚膳部品味悉問ニ父母一以供レ之。凡百事勿ニ自專一、敬勿レ怠。

四十五歳。天和元年辛酉。文集に偶題 立春前二日に

秋深以往養黄鶯、暮々朝々甚有情、待得立春前二日、含和仄吐兩三声。の詩がある。大丈軒としては珍らしい風流だ。四月廿五日に光政公が久しく瘡疾を患はれて医薬未だ験なき為に酒折宮へ祈願の文を奉つた。文集に文は録されてゐる。十月五日に光政公が飯府遊ばされたので正義は客舎に移つた。十一月六日夜子上刻大蔵が生れた。この大蔵が長男の正長如瓶で有らう。如瓶の伝は県人名辞書に出てゐるが生歿年を記さず、五十三を以て歿すとあるが、岡山市史には天和元年生、宝暦三年十月十五日七十三を以て歿すとある。是が正しいのであらう。

四十六歳。天和二年壬戌三月廿九日に綱政公が出船して江府へ朝せらるるを拝送し奉つた。五月廿二日に光政公が逝去し給うた。行年七十四歳である。〔前に見えたる瘡疾がつまり原因になつたものかと思ふ。ただ私がさう思ふので證據をさがしたのでは無い。思ひつきである。間違つてゐるのかも知れない。蕃山も此の病でとうとういけなかつたと聞いた。〕

悉抛ニ文公家札一而不レ用ニ浮屠ニ葬ニ于和気郡和意谷敦土山ニ築レ墳建レ碑。又傍建レ表以記ニ其行状一。

富田元真、市浦雜直、小原正義相議以治葬事

と書いてゐる。其の墓表の文稿と清書と二冊大丈軒自筆のを正宗文庫に保存してゐるが碑に記されたのと異同があるのは調査してゐない。

七月、朝鮮人が来朝した。〔〇二十一日暮着。と文集にある〕。牛窓館

に就て正義が大学士成伯圭と筆談をした。偶、蒼浪子が傍に在つて詩を賦して正義に贈つた。正義が之れに和した。翠虚子、蒼谷子亦之れに和し、正義亦再び之に和した。翌日朝鮮人が出帆した。此使節は十月〔〇八日。文集による〕飯帆した。牛窓へ出かけて待つたが順風にして海上を往きて過ぎ去つたから再会は出来なかつた。正義は北方に飯つた。此時の事は大丈軒別集九に在るが今省畧する。

因云。大丈軒の著に二砭草と題して朝客詩砭と震沢詩文砭と附するに国学観菊詩集〔正徳辛卯（〇元年）十月〕合綴の自筆の稿本が当文庫に現存する。天和二年の朝鮮使節を牛窓に大丈軒が迎へたのが前述の分で正徳元年のは其の次の度であると思はれる。

「砭」と云ふのは大丈軒集詩脱漏十六に有る文章中「且有二唱酬 其間有二相敬 無二不敬之事一、其後聞二和韓唱酬集一、韓使吐二傲言一殆輕ニ日本一者多矣」とある。此の砭草は其の論評で有る。序を以てここに其著の有る事を注して置く。

猶云。正徳元年来朝の時にも牛窓へ大丈軒も出かけた事と思ふが、年譜には記事が無く、文集も缺てゐるらしい。和韓唱酬集を見たらば何かと知る事が出来る筈だが、今手許に此書が無い。

四十七歳。天和三年癸亥。九月廿五日に愛が生れた。

四十九歳。貞享二年乙丑。二月廿二日新院崩。此夜戌刻大星落。

五十歳。三年丙寅。正月廿四日酉上刻□生。

五十一歳。四年丁卯。五月廿五日綱政公飯府。正義移ニ客舎一。〔〇前々にも斯る記事が有つた。常に斯くするが例と見える。畧に従ふた処が多い。〕七月九日正義北方に飯つて父の病に侍した。七月十二日に愛が死

んだ。十七日に

嚴君死去。葬礼用<sup>二</sup>儒法<sup>一</sup>。葬<sup>二</sup>于御野郡半田山栗木林南岸<sup>一</sup>建<sup>レ</sup>碑。

五十二歳。元禄元戊辰年十月二日大藏八歳始入<sup>レ</sup>学。

五十四歳。三庚午年。二月朔日大藏十歳改<sup>二</sup>宗介<sup>一</sup>、始<sup>レ</sup>贄<sup>一</sup>、謁綱政公<sup>一</sup>。

十一日綱政公拜<sup>二</sup>聖位<sup>一</sup>。正義講<sup>二</sup>巧言章<sup>一</sup>而退。有<sup>レ</sup>命又講<sup>二</sup>三省章<sup>一</sup>。

五十五歳。四年二月七日夜子刻文次郎生。閏八月廿九日松尾助八伝<sup>レ</sup>

命曰、駕子御免。

五十八歳。七年三月三日有<sup>レ</sup>命為<sup>二</sup>学校奉行<sup>一</sup>、賜<sup>二</sup>役料米毎年四十俵<sup>一</sup>。

廿七日綱政公出船朝<sup>二</sup>武江<sup>一</sup>。正義臥<sup>レ</sup>病不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>拜<sup>二</sup>送<sup>一</sup>之<sup>一</sup>。

五十九歳。八年乙亥。十月十九日有<sup>レ</sup>命書<sup>二</sup>延養亭、觀騎亭<sup>一</sup>〔何れも後

楽園に在り〕之額<sup>一</sup>。十二月廿七日北堂拜<sup>二</sup>領鶴<sup>一</sup>。

六十歳。九丙子年。正月十六日有<sup>レ</sup>命、書<sup>二</sup>濂溪堂額<sup>一</sup>。九月二日宗介

元服。津田八郎衛門永守加<sup>レ</sup>之。名正方。

六十一歳。十丁丑年。正月十八日藤岡六衛門長盛納<sup>レ</sup>幣則告<sup>一</sup>、辞<sup>二</sup>于祠

堂<sup>一</sup>。二月朔。北堂八十五歳祝<sup>二</sup>正義六十一<sup>一</sup>。○二十七日嫁<sup>二</sup>寧於藤岡<sup>一</sup>。

○七月十日朝暁寅上刻忠三郎生。

六十二歳。十一戊寅年。六月十九日種死〔○此種が五十歳の正月に生

れた子の不明の文字の人かと思はれるが字形が違ひ過ぎる〕○八月十一

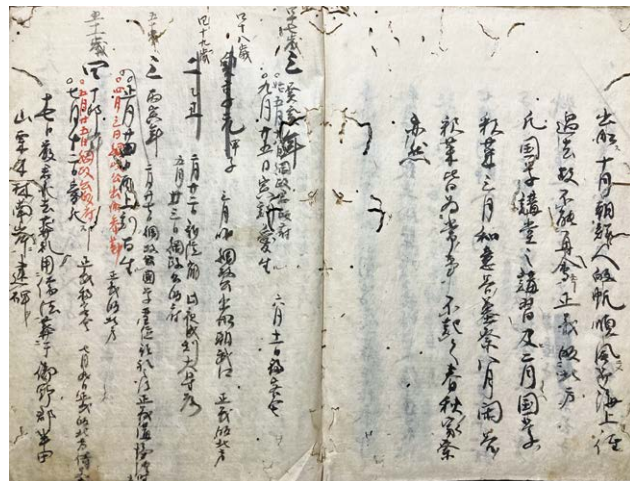
日北堂死去。八十六歳合<sup>二</sup>葬嚴君之墓<sup>一</sup>、下<sup>レ</sup>誌石建<sup>レ</sup>碑。

六十三歳。十二乙卯。五月十七日綱政公歿府。

以下白紙を存して記載無し。文集にて補は<sup>レ</sup>補ひ得る事も多かるべき

を文集の研究は又別にすべきものと考えらるるにつき年譜は年譜にて終とす

出<sup>レ</sup>十月朔日人船帆風海上  
過<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>改<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>正<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>彼<sup>レ</sup>方  
凡<sup>レ</sup>国<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>講<sup>レ</sup>堂<sup>レ</sup>、講<sup>レ</sup>習<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>、国<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>  
私<sup>レ</sup>學<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>、知<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>、冬<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>、南<sup>レ</sup>宮  
私<sup>レ</sup>學<sup>レ</sup>、皆<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>、不<sup>レ</sup>敢<sup>レ</sup>、春<sup>レ</sup>秋<sup>レ</sup>、家<sup>レ</sup>  
私<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>



大丈軒譜 (正宗文庫蔵)

るが正徳元年に正長即ち如瓶婚礼の記事が有る。是を掲げて一応筆をおく。

○

正徳元年辛卯年九月中澁我嫡男正長行<sup>二</sup>婚礼<sup>一</sup>、我告<sup>レ</sup>之曰、我元祖日臣  
補<sup>二</sup>佐神武天皇二勲功第一、故天皇特寵勅改<sup>二</sup>名導臣<sup>一</sup>。我則其五十世之  
後而爾則五十一世之孫也。久<sup>レ</sup>扱<sup>二</sup>配偶<sup>一</sup>、今而迎<sup>二</sup>村瀬氏行<sup>一</sup>、合<sup>レ</sup>卷<sup>二</sup>之礼<sup>一</sup>、我  
欲<sup>レ</sup>之無限也。爾既繼<sup>二</sup>祖宗五十世之後<sup>一</sup>、則豈<sup>レ</sup>非<sup>二</sup>三重之甚<sup>一</sup>乎。爾更為<sup>二</sup>  
子孫万世之宗<sup>一</sup>、則又豈<sup>レ</sup>非<sup>二</sup>三重之弥甚<sup>一</sup>乎。所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>二</sup>自宝自重<sup>一</sup>也。

敬哉々々。偶賦レ詩以与レ之

神武天皇東征日、勲功無レ比導臣公、二千餘歲伝ニ靈脉ニ、五十一孫  
在ニ爾赫ニ、苕菜采来既烹茗、瑟琴鼓処更和同、敬哉保ニ護謨明命ニ、  
世々緝レ瀝水不レ窮。

大丈軒

与ニ正長ニ

—此稿終—

38 高橋正澄の清園詞草獲得  
ふぐらにこもりて(15)

高橋正澄の清園詞草を中心にして今日は筆をとる事としたいのであるが、今日は丁度師の井上先生の命日に当る。高橋正澄等桂園門下の事を談らうと思ふと先づ先生の事が忍ばれる。私が幸文や正澄の伝記が聞き度いので先生を御訪問したのは明治卅一年私の数へ年が十八歳で有つた。其で其の伝のあらましなど承つたので有るが、正澄は非常に沢山の著述が有る事を教へて戴いた。先づ歌の本から求めたいと思つて古本目錄に注意する様にもなつた。私が大坂で有名な鹿田静七と云ふ古本屋で第一に求めた本が西行の類題山家集と高橋正澄の塵室草露で有つた。是れが私の古本道楽の先づ始で有つたと記憶する。其から段々古本道楽は進んで行つて病既に膏肓に入りと云ふ処であるが、正澄の歌集清園詞草には出合はない。一度鹿田の目録で見懸けたが取りにがして入手出来な

かつた。気をくばる事六十年に垂んとすといふ処に及んだ。正澄の歌集は塵室草露の外に今云ふ詞草と心月詞花帖、やまとにしき、唐にしき(以上木版)残の夢、清園後草と有るが、残の夢は佐々木博士の続日本歌学全書に収められ、後草は私が謄写版にして出して一応版に成つてゐるが、其最も重きをなす清園詞草が木版に成つてゐるのに此の本に出合はないので随分苦心をした。私の齢も傾いて、もはや蔵有は出来ないかと下心に残念に思つてゐた処が昨年の秋の松泉堂の目録に正澄の著述の写本どもと共に清園詞草が出てゐる。逸すべからずと豚兎に電話で注文させた。夜間の電話は案外にも早く通じて何れも在庫で有るから御送りするとの答であつた。有るときまれば一日千秋と云ふ程には無い。由来古本の来るのを鶴首して待つのは、はたして其が先方の云ふ様によい品か、其ともつまらぬ品か、所謂浄玻璃の鏡に照らして鉄札か金札かと鑑別せねばならないからだ。少し話が横道に逸れるが、過般古事記の中巻の古写経の裏へ筆写した古い卷子本で缺本だが高野山本に拠つて写したと云ふ事が巻首にあると云ふ事、古事記の中巻の古写本となれば是れは珍中の珍、先づ国宝級のものである。何としても実見に及びたいと其れこそ鶴首して郵便を待つた。古事記の中巻がなぜ其んなに大切なるかと云ふと、諸君も御承知の如く、真福寺本も中巻は藤原通雅写本が原本となつたので上下とは違つた別本系を以て補写したのであつて、中巻は鎌倉時代には鴨院文庫にのみ伝存せられた本が伝はつたわけ有るから、若し別系本でも有れば大変面白い本であるべきだと独り考へ込んで待ち楽しんだので有るが、来て見ると全く偽作した本で鎌倉期の古写経

の裏へ誰かが明治前後に書いた本と思はれるもので、馬鹿らしい事であったが、かゝる事は大物小物の別は有るが度々有る事である。其点きまつた版本は本の美粗は有つても、余り気にせいでもよい。有つて捕へたならば其で先々事はきまるのである。閑話は是れ位にしてもにもどり、着郵した本を見ると紙帙に納まつて高橋残夢大人集、清園詞草、心月洞藏と帙の上に印刷した紙が張つてある。されば帙を附して領布した物か、其とも袋の紙を張つて帙は所藏者が勝手に作つたのかも知れない。こはぜは竹製であるが、こはぜの紐もこはせ掛も鹿の皮でして有る。凝つた仕立て、題箋は黄紙である。序跋ともに無く、出版年月を徴すべき記載も無い、巻末の歌は俳諧歌で

おのが六十賀に、しきものをかめのかたにぬはせて、山にしよしひでがおくりけるをしきてよめる

よろづよのかめのうへにものりにけりわれやよもきが島とみゆらんである。門人浪速御民橋幸春謄写とあつて、もとより初刷本で然も大切に扱はれたと見えて刷立てたまゝのやうな、すつきりした本である。

さて此詞草は何時発行したものか云ふに、本書には前述の如く序跋無く、又何等徴すべき詞が無いのであるが、やまとにしきの序文に

この頃清園詞草梓にやどして、一めぐりの御とぶらひにと人々思ひたてれば、この錦の二むら〔○やまと錦、からにしきの二書〕も同じ手向にと西山道寧、中川俊景にはかり合せつゝ、かくはものし侍りしなり。嘉永二年如月七日、武田温親しるす

とあれば、此の詞草は師〔○正澄〕の一周年記念に門人どもが出版した

のである事が知られる。心月詞花帖の奥附に「清園詞草 四冊 既刻」と有つて弘化二年乙巳八月と有るけれど、其は出版する計画で既に着手してゐたから既刻としたのであらう。其だから三冊の本が四冊と書かれてゐる。とにかく嘉永二年春の刊行であらうときめて誤はまづ有るまい。其から此の詞草の内容は塵室草露につゞき残の夢、清園後草以前の歌の集と一応思はれるのであるが、残の夢の巻頭に

おのれ若かりしよし萬さちなき身にて云々

と書き出して小供も十人以上も死んだやうな次第で、三十から白髪が見えそめたが、六十ち近くなつてますく白髪になつたから剃髪せんと思つて、然る上は名を残夢と改めんなど思つてゐたが障る事が有つてはたしかねてゐたが、其後一年程経てうみぞこひに成つた。其から五年を経て夢より外にはさやかに見ゆるものも無くなつた。云々。文政十二年神無月十六日に妻子にも知らせず剃り落とさんと思つたが実行出来なかつた。十八日の暁に思ふまゝに払ひ果てた。とやうに述べてゐる。其からが残夢と名をよんだ。

見る事は夢ばかりこそ残りければ名あはれと月や聞らむ

と云ふ歌を詠んでゐる。さて詞草を見ると

髪おろさまくおもひ立ける暁、月さえたり

あはれけさはらはんとおもふもとゆひの霜に重なる月の影哉

かみおろして

はかなくもかはるわがみのかげみせてまづあさか、みおどかさばや名を残夢と改めて「見る事は」の歌等が載せられてゐる。然し是等は「残

の夢」巻頭の一文章の内の歌であるが、其の他の歌も少しは両方に編入せられてゐるのも有れど大躰、詞草、残の夢、後草となる順序であるが、翁の歿後に出来た「からにしき」の終に「高橋残夢大人著述目録」が添へられてゐるのには「残の夢」書目は出てゐない。清園後草が四冊として出してある。而して後草は正純の奥書に云へる如く「此一巻は上のまきまきの、みづからえらび置給へりしにはたがひていまだ草稿のまゝなりしを書清め侍りしなり」云々とありて巻頭は

清園大人初月の忌日に夏懐旧といふことを人々よみけるに

かはりけるかけにもある哉夏の夜の月の桂や若葉成らむ

とある。詞草に「桂園大人病いとおもく今度を限りとやおぼし定めけん『一筋に命まつまの春の日はかゝりてながきものにぞ有ける』とよませけるよしきこえけるゆふぐれに」とありて

一筋にいのちまつらんはるのひのくるるかげこそ悲しかりけれ

とある。此の命まつまの歌は景樹の日記によれば辞世として巻末に加へられ「右一首私に加え置侍り。正純」とある。(即ち残夢の子が書加へた事になつてゐる。)何分此の歌が詞草には書かれてゐて、後草には「初月の忌日」から始まつてゐる処を見ると形から云へば詞草に後草が続くので「残の夢」はある期間の日録やうのものを四季に分類したようなものであるらしい。そこで詞草のうちには残の夢の歌が重出してゐるのがあるのである。

清園詞草のうちから少しばかり抜出でてみる

わかなつみをとめまじりにかへるさの道なつかしき夕月夜かな

花のさくみにもあらずと任すらん風のまゝなる青柳のいと

にはかにもふく夕かぜにさそはれてあはたゞしくもちる桜哉

いもとぬるよどこあれぬとつばくらめ雨に濡てもつくるけさ哉

橘のつゆみえ初てほとゝぎすなくよはかなくしらみぬるかな

くさはみなつゆほしげなる日ざかりをさかりと匂ふ昼顔のはな

大井川山かげあかくなりにけりうふねのかゝり今やたくらむ

苅てはず門田の蘭草とりいれよ夕立さそふ山かせぞふく

露わくる岡べのみちは鳴やみて行先しげきむしの声かな

くるゝまで鹿のなくねもさそひこず空しくも吹秋の山風

よの中のうきにも今はなれぬらし月にむかへどおもふことなし

おもふこと橋のはしらにかきつけてゆかばやと思ふ月のかげ哉

夕月の匂ふころより降そめてくるまゝにもつものゆきかな

おと寒きあらしの中に年くれて雪ちる空もいそがしげなる

みやこ人やすき処とおもふらんわが山ざともうきよなりけり

あづまやのうまやくの夕烟にぎはふみよを旅にみるかな

たづのゐるゐなの松ばらかげみえて千代のなみよるこやの池水

其の一斑である。桂門十哲と数へらるゝ一人で備中国の人が此人の外

に木下幸文と菅沼斐雄が有るが、作歌幸文随一なるべし。学問は此の正

澄やすぐれたりけむ。号を心月洞と云ひけんは本集に

心月洞と名付たるかくれがに圓窓あり、あるゆふべ其まどにむ

かひて念仏となへながら

人しれずまどにうつしてわがめづるこゝろの月のかげぞこの影

とあり。いづことは知れねど難波にての事には相違ない。本集を讀みて妙におぼゆるはペラと云ふ詞をかなり多く用ゐてゐる事である。

詞草と共に求め得たる本は「三代枕辞例、三冊。靈の宿、八冊。国語本義、十五冊」であつて何れも板下本の如き本であつて、正純の浄書本らしい。詞草と共に高橋残夢の家の蔵本かと思はれる。斯る本を得たるは幸であるが、残夢の著述は多く既に国字定源をはじめ文庫に収蔵してゐる本も少しは有る。出来れば全集を編纂刊行したいが、少くも出来るだけあがない置きて我が県下の学者の努力を空しくせぬやうにしたいと念願してゐる。尤正澄の著書の大方は井上喜復氏の所有本が静嘉堂文庫（今国会図書館支部）に収蔵せられてゐるから先づ其の功は滅する事はあるまいが、県下にもとどめ置き度いと思ふのである（八月十五日稿）

39 ふぐらにこもりて(16)  
閑話雑録

我が岡山の池田の藩士に大平忠叔、龍嶽と号せる人が有つた。閑話雑録式冊を著はしてゐる。此の人は著書はいくら有るかまだ知る事を得ぬが、写本は多くした人と見えて今我が文庫にも沢山残つてゐる。学問に篤かつた人で有つたらうが、閑暇に恵まれた人とも思はれる。其処で此の閑話雑録と云ふ本も出来たと思はれる。此本は西涯、近藤篤が寛政九丁巳年孟春日として序文を添へてゐる。其序に「大平子誠幼而好レ学、前言往行聞レ諸人一則必筆レ諸書一以爲二冊子一、漸積以爲二若干一」と云つ

てゐる。又、田代直は跋を添へて「友人子誠講業之餘説二兵家之記一聞二良士之談一、至三於忠孝義烈之事一則慨然而輒記二之冊子一、書以三国字一授二子弟一、余説レ之嘆曰、物得二其養一則長、不レ得二其養一則消、童穉之学、養二其良知良能一、必主三先人之言一、欲レ達三其支一者之所三以必培三其根一也。子誠之意其在二於斯一乎。古語曰、遺三子黄金滿籝二不レ如教三子一經一、子誠在レ焉。寛政戊午（〇十年）十一月」と記してゐる。以上にて此の書の大略は知らるゝ、ので有る、今私は此の書の内容を紹介しようと思ふのでは無いが、此の書に泉仲愛（熊沢蕃山の弟）の事と小原大丈軒对仲愛、对津田永忠の事等のが出てゐて面白くもあり、其が伝記資料にもなるので、其れを御覧に入れたいので、此処に筆を執るのである。

烈公の御代に泉八右衛門（〇仲愛）と言人、大目附役被勤し。生付寛広なる人なり。或時在出の至て質くなる下女を遣はれしに、内室の氣に不叶して何卒暇遣し度と思ひ、八右衛門へ度々暇の事申せども、中々合点不致候ゆへ、何がな過あれかしと思ひしに折節八右衛門評定所へ出られ候御留守、かの下女座敷を掃除するとて八右衛門兼て秘蔵の焼物の花生、床に有しを打碎き、内室能折かな、是を申立にして暇遣すべくと八右衛門帰りを待居たり。程なく八右衛門帰られしが、早速に下女の過を言葉をかざりて申されける。下女は迷惑至極の躰にて部屋口に、思案せしに、八右衛門右の様子を聞、下女を爰へ呼べとの事ゆへ、内室は嬉敷思われ、下女を早く呼ける。下女はなくくいで、八右衛門前に手をつかへければ、八右衛門申さるゝは、其方事今日花生を碎き候よし、兼て其方麓忽なり。女と

いふ者は物事静にして柔和なるが女の礼法なり。此後は随分騒がしからぬよふにたしなみ勤べし。過なれば仕方もなしと言れし故下女は蘇生たる心地して弥慎奉公いたし、終に泉の家より外へ嫁したるとなん。是古へ劉寛の婢肉羹を翻、朝衣を汚せしとき寛神色不異、乃徐言曰、羹爛ニ汝手ニ乎。其性度同様なりし事なり。又或時八右衛門母公益祭するとして八右衛門留守に其拵をせられしを八右衛門外より帰られ、母に向ひ、何を被成候哉と被尋しに、八右衛門兼て文学有て徳有し人なれば、何事も儒法に取行はれ候故、母此事を隠されしに、八右衛門強て問はれしゆへ、無餘義益祭致し度よし咄され候へば、八右衛門申されけるは、世間にも致事にて候。夫はよき事を被成候。我も御手伝申候とて勇み進んで手伝致されしとぞ。只母の心にそむかん事を恐れてなり。是にて泉氏の孝心可祭也。夫孝天之經也、地之宜也、人之行也。故有天地人民以来斯道著矣。乃立レ身揚レ名之本、五常百行の先なり。父雖レ不レ父、子以不レ可レ不レ子、孝之至深尤可レ貴焉。

とある。猶本書の小原善介、津田左源太対談の終に追記して此八右衛門大目付役勤られし役中に御用の席へ出し時、言を閉て一言も云ざりければ、御老中を始め列座の諸士言けるは、八右衛門をば土人形を拵へて列座へ出せば八右衛門同様なりと云ひける。時に御老中宣ふは、然れども八右衛門出座有るときは窮屈にて何とやら恥かしくなり、銘々の私語はなり不申、座中締め居申と云われければ、一統其心持に成り申と云ひし也

と有る物語に裏書をするやうな逸話である。(尤此の話は古くより云ひ伝へられたる著名な談である。) 仲愛の事は其の伝ふる処多からず、たまたま此閑話によりて其一二を加ふるを得たるを私はよろこぶのである。

小原大丈軒の事は本誌に其の年譜によりてや、長くはしく記したが此の閑話に逸すべからざる物語が出てゐる。閑話に云く

小原善介大丈軒。南方の屋敷に居られし時、年始に一度づ、津田左源太(○永忠)を招請有しと也。其膳具の料理、鯛鱈に焼乳の煮物に花鰹入し也。毎歳不忘振舞はれける。或年始招かれし時、泉八右衛門手跡を懸物にして掛られしを左源太見られ、申されけるは、御自分は大徳なり、如何の思召寄にて八右衛門手跡を床に懸られけるやと尋られしに、善介答に、八右衛門は学力は指たる事もなく候へども、至て篤実なり。其篤実を其元へあやからせ度と馳走振り表粧申付、今日初て懸申といはれし也。

と云ふ事が有る。八右衛門の土人形の談は前述の如く有名な談で人々がよく知る処で有るが、小原大丈軒が津田永忠に御馳走に、床の掛軸に仲愛の書をわざ／＼表装させて掛けた談は珍談でも有り、大丈軒を知るにも永忠を知るにも、将又仲愛を知るにも重要な資料で有ると思はれる。大丈軒が南方に家を構へたのは延宝四年、四十歳の十一月で有つて、津田永忠が三十七歳で有る。仲愛は五十四歳である。而して蕃山は五十八歳で有つて明石にゐた。松平信之に従ひて大和国郡山に移る三年前である。光政の歿する六年前である。さてこゝに重大なる事がある。蕃山が



貞享二年八月に、贈池田丹波守書は蕃山畢生の力のこもった意見書である。「重二郎（永忠）を御用ひ、一国の事を御預け被成候へば殿様共に諸人そむき可申候、諸役人の事まで内々重二郎申候通りに成申候」と云ひ「老中初めて拙者を慕ひ被申候き。只今士民共に重二郎をにくまぬ者はなきと申候。」と云ひ、「如此御遠々敷事は不存御家中にて、息游は何として御諫を不申上候哉、可申上事、と申由に候。重二郎が悪事を可申上者は出羽（国老池田由成、その退隠せしは寛文八年七月）」と拙者故、出羽はいんきよいたさせ、息游をば讒言申上、遠のけ候とも申候。」と云ひ、「重二郎手よりかし候米銀不残御勘定所へ引渡候様に被仰付御役御免にて和意谷御幕守に成申候は、十分の仕合たるべく候。初より少将様へ申上候通に候。それにて先以御国中大に悦び可申候事」と云ひ放つてゐる。然して此の蕃山の諫書よりも先に国老池田主水由孝も書を奉つて綱政を諫めてゐる（池田主水由孝は前に註せる由成の三男で由成隠居後家督三万二千石を賜はつた。元禄九年十一月十四日地行所天城にて病卒。年五十六）二月十日（貞享二年九）近習大横目下濃宇兵衛あてにて上りし書の末に

三郎兵衛（水野にて年六十二にて番頭たり。蕃山の諫書中に三郎兵衛も重二郎と遠のき候は、今ほど悪くは申間敷候云々とある）重次郎え自分意恨有之色々と申上候様にも若可被為思召候哉。左様之義毛頭無御座候。言葉新義に御座候得共天も照覽、御為とのみ奉存、憚を不顧言上仕候。此外私存念之通宇兵衛に口上に申含候条被為聞召可被下候。

と云へり。されど綱政は二人を斥けざりき。（書簡集による）

是れによると其の当時、永忠の行の上には目に余るものが有つたと見える。蕃山と永忠は行政上に餘程の逕庭が有つた。其れは必しも永忠のなせる事を私は非とのみ断ずるのでは無い。今の世の中でも斯の如きあらそひは政事の上には常に絶えないのである。蕃山が一つの不義を行ひ、一つの不辜を殺して天下を得るも為さざるの人であるのと、尺を枉げて尋を直くせんとする永忠とは到底相入れぬものが有る。或る蕃山研究家が聖人に近づく事を念願する蕃山と、今の世の所謂現場監督の永忠とは一口に論ぜられないよ、と云はれたのは大に味の有る言葉である。少し談が横道に入り過ぎた、本にもどして小原大丈軒は蕃山を評して「無二学力二」と云つた。（本誌四十五号拙稿参照）又泉仲愛をも前に引ける談に「学力は指たる事もなく候へども、至て篤実なり。其篤実を其元へあやからせ度と馳走振り表粧申付、今日初て懸申」と云つてゐる。大丈軒が永忠に頂門金椎を加へたので有らうか。此大丈軒が仲愛の書の掛物をかけて年始にまねいた年は明記がないからはっきりした年は分らないが、大丈軒が南方に居を定めてから数年を経たと思へるから（年始に一度づ、招請有りし云々とあるによれば）大略其の時が永忠が諸方から攻撃せられた時の前後と思はれる。序に云はでもの事を云ふやうだが、大丈軒が年始に藩の重役を饗応するのに御馳走が鯛の鱠に焼豆腐の煮物花鰻とは、昔の事では有るが随分儉約であつたと見える。其はとにかく大丈軒は馳走振りに仲愛の掛軸を懸けて其元へあやからせると云つたとすれば、此人は学者たるのみならず、大丈夫の信念の持主で有つたと云つ

てよからう。かたぐ津田永忠を觀測するよい資料で有るとも言へよう。

泉仲愛書幅「孟子曰大人者不失其赤子之心者也」を床にかけて十一月廿四日文庫の閲覧室の茶の間で筆を執つた。

40 傷寒論圓機  
ふぐらにこもりて(17)

我が<sup>(補注)</sup>県人の著にかゝる医籍は、緒方洪庵とか、難波抱節とか云はれる著名な人々は別として、他は餘り多くは伝存せぬやうである。当正宗文庫に収蔵せんとして努力する事数十年、未だ志を達し得ざる書に、緒方惟勝の杏林内省録や戸田旭山の非薬選などは其の一二である。岡昌平の傷寒論円機も其の一であったが、期熟せるか、天幸を与ふるか、最近獲得して其の書に撰する事が出来た。此人の伝は山田方谷全集卷一(二五〇頁)「昌平岡君碑陰記(三島毅代作)」に出てゐる。我々が拙文で御紹介申すより其のまゝ原文を掲ぐるに及くなしと思ひて転載する事とした。

丹霞幽樓岡君歿矣。嗣子俊造克襄<sup>レ</sup>事。窆<sup>ニ</sup>柩于郷内津間山先兆<sup>一</sup>、乃請<sup>ニ</sup>余文<sup>一</sup>以記<sup>ニ</sup>碑陰<sup>一</sup>。以<sup>レ</sup>状從。依<sup>レ</sup>状。君諱魯。字昌平。源姓。

岡其氏。備前児島郡小川村之人。家世修<sup>ニ</sup>軒岐<sup>一</sup>(氏)之術<sup>一</sup>。(○)医学於柴岡宜全<sup>一</sup>(○)藩医<sup>一</sup>。又受<sup>ニ</sup>經於鶴鷄春齋<sup>一</sup>(○)浅口郡西阿知村の儒者<sup>一</sup>。後遊<sup>ニ</sup>于菅茶山之塾<sup>一</sup>。茶山之請<sup>ニ</sup>頼山陽<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>都講<sup>一</sup>也。君実迎<sup>ニ</sup>之芸<sup>一</sup>。是以与<sup>ニ</sup>山陽<sup>一</sup>親善。遂師事焉。山陽下<sup>ニ</sup>帷于京<sup>一</sup>

也。君亦從遊焉。因学<sup>ニ</sup>医於京人小石元瑞<sup>一</sup>。(○)元瑞名は龍)既而

君去還<sup>レ</sup>郷。山陽以<sup>ニ</sup>君追隨日久、且多<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>倚頼<sup>一</sup>也。惜<sup>レ</sup>別不<sup>レ</sup>置云、時仲神宇内(○)名は孚。通称右内、字以憐、琴溪は其号、近江の人)罷<sup>レ</sup>医。隱<sup>ニ</sup>于有王山中<sup>一</sup>。君聞<sup>ニ</sup>其名<sup>一</sup>。奮起往從。宇内未<sup>ニ</sup>三

遠談<sup>ニ</sup>医事<sup>一</sup>。先問<sup>ニ</sup>楠公之事<sup>一</sup>。君辨答鑿鑿可<sup>レ</sup>聽。宇内大喜曰、孺子可<sup>レ</sup>教矣。遂傾<sup>ニ</sup>授其術<sup>一</sup>。君頗有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>得而歸。不<sup>レ</sup>幾宇内來訪<sup>レ</sup>君。遂施<sup>ニ</sup>療于隣郷下津井<sup>一</sup>。蓋示<sup>レ</sup>君以<sup>ニ</sup>其实效<sup>一</sup>也。君於<sup>レ</sup>是業大

進。遠近乞<sup>レ</sup>治者。履恒盈<sup>ニ</sup>戸外<sup>一</sup>。而負<sup>レ</sup>笈來学者亦不<sup>レ</sup>絶。一日忽<sup>ニ</sup>感中風<sup>一</sup>。騎年不<sup>レ</sup>痊、終溘逝。实嘉永三祀商横淹茂黄鐘(○)十一月二十一莫也。得<sup>レ</sup>庚六十又一。君性磊落負<sup>レ</sup>氣。其於<sup>ニ</sup>医学<sup>一</sup>。最有<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>於長沙之說<sup>一</sup>。將<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>著述<sup>一</sup>。而病家延招。未<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>其暇<sup>一</sup>。

因鈔<sup>ニ</sup>傷寒論於榻扇上<sup>一</sup>。路頭誦讀久<sup>レ</sup>之。遂著<sup>ニ</sup>円機數冊<sup>一</sup>。其居<sup>レ</sup>家勤儉。產致<sup>ニ</sup>富贍<sup>一</sup>。闢<sup>ニ</sup>鹽田<sup>一</sup>十數頃。而旁善<sup>ニ</sup>琴及俳詞<sup>一</sup>。興來則彈咏以娛。恍有<sup>ニ</sup>羽客之高韻<sup>一</sup>。為<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>負<sup>ニ</sup>其号丹霞幽樓<sup>一</sup>也。而

又好接<sup>ニ</sup>文雅之士<sup>一</sup>。余亦屢受<sup>ニ</sup>來訪<sup>一</sup>。每為<sup>レ</sup>余說<sup>ニ</sup>山陽宇内之事<sup>一</sup>。夫山陽磊砢氣節之儒。而宇内亦杏壇之巨擘。而又頗得<sup>ニ</sup>陶倚之術<sup>一</sup>。(○)大に富をなす術)嗚呼君為<sup>レ</sup>人似<sup>ニ</sup>山陽<sup>一</sup>。而事業類<sup>ニ</sup>宇内<sup>一</sup>。可<sup>レ</sup>請<sup>ニ</sup>善学<sup>一</sup>レ師者<sup>ニ</sup>矣。是可<sup>ニ</sup>以記<sup>一</sup>矣。先配渡辺氏。先亡。後配大橋氏。

並無<sup>レ</sup>子。養<sup>ニ</sup>姉夫竹家某子<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>螟。即俊造也。名謹。医学産業皆克勝<sup>ニ</sup>堂構<sup>一</sup>云。中備松山本在山人山田球撰

とある。傷寒論円機は四冊であつて奥附に弘化四年丁未八月。書林は江戸山城屋佐兵衛より浪華、京都の若山屋茂助迄五軒である。享保以後、

大阪出版書籍目録に載せらるる筈で有らうが、天保十三年五月書林仲間停止に付嘉永四年十二月迄出版書目記録は缺てゐるから正式に出版せられたか私版であつて本屋の名は有つても餘り売り出しも無かつたのかも知れぬ。見返に「銀杏道士註解」「混成堂藏版」とある銀杏道士は著者の号なるべく混成堂は是れ又著者の堂号なるべし。くはしき碑陰記にも共に漏るゝ、処である。斯る事は常に在る事なれば其の著書は尊重せざるべからざる処である。序は小石元瑞が書いてゐる。其にも伝記を補ふに足る処もある上に、稀なる書なれば掲ぐる。

#### 傷寒論円機序。

長沙氏之書、文如三平易二而旨乃奧微、脉絡之所三起伏一前後之所三照映一未レ易二俄觀一也、古今和漢註解、雖二甚多々一拘二泥于字句一篇章之間而不レ能レ得二其円転活運之妙一、若夫任意取捨不レ細二咀嚼一遂併二骨辺之肉一而棄レ之者固勿論也、長沙氏謂自レ非二才高識妙一、豈能探二其理一致哉信哉言也、余壯年有レ慨レ於レ此熟読思繹、時有レ所レ得則考證以授二学徒一、時備前岡昌平適從二山陽頼翁一入京翁自介レ使学レ医二于余一未レ幾而有レ故郷レ郷、爾後隔レ居二十餘年、今茲忽來訪出二其所レ著傷寒論円機一見レ示レ余、繙而閱レ之向所謂起伏照映人之所不レ易レ觀者莫レ不レ尽二發揮一而左右顧応首尾循環円機之名不レ虚也、嗚呼余中年別有レ所二研究一不レ從レ事二於此書一者久矣、何凶昔年有レ志未レ果之業今日成二於旧社之人之手一也、昌平其以二余當時所説レ可所而多年自任二焉以至三于此乎、抑山陽翁亦以拘二泥章句一而不レ能二活用一為二学徒之戒一、則昌平之此挙有レ足二以證一其所三

嘗学二于翁一者也、余歎二美其有識有成一而為レ作二之序一若其就二各条一較二是非一吾既老矣、不レ能二復為一也、

#### 弘化丁未之夏日 平安小石龍撰並題

とある、弘化丁未は四年であつて元瑞は六十四歳であつた。此の序を書いた翌々年の二月に六十六歳で歿したのである。自序には著者が本書成立の心がまへが記されてある。其を掲げる事にした。此の拙稿は普通の読者に取つては一読に堪へない記述となるであろう。然し専門の書籍の紹介である上に其の専門の学に立ち入らぬ事で、只だ其の外貌を伝へんとするには已むを得ないのである。篤志家の手引となる時あらば望外の幸である。

#### 傷寒論円機自序。

読二傷寒論一猶レ読二一篇之文一也。読レ文者必先通二誦全篇一。輒識二其文法之要一。而後作者之意可二得而見一矣。張子之作二是書一。其要在丙設二許多冒首一以立二大綱一附以二證治一為之条目也。蓋傷寒之為レ病。不乙独其邪變遷二於六経間一而已。因二其治方一誤逆与二人身一稟質不レ齊。生二許多證候一。而是書兼併具論レ之。因題二自序一。謂二傷寒難病論集一。而其義終一章者非レ論也。故每章無二徒説一一證者。乃先立二冒首一。配レ之用二照応起伏一詳畧重複合論並説二対映抑揚幹旋倒序之法一。以関二涉前後一。議論證治。脉絡貫通。章々相応。竟成二一部書編一。此其所二以題名為レ論也。学者勉注二心目于此一。而後大綱条目。井然而彰。秩然可レ見。雖レ然運筆措辞之巧。神機妙筭。幻變恍惚。使二レ人目眩神昏一。其辞如レ断。而実相統。其意如レ

分。而実相合者。要使<sub>レ</sub>人熟觀繹思久而自得<sub>レ</sub>焉。故曰、雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>愈<sub>レ</sub>諸病<sub>一</sub>。庶可<sub>三</sub>以見<sub>二</sub>病知<sub>レ</sub>源。若能繹<sub>三</sub>余所<sub>レ</sub>集。思過<sub>レ</sub>半矣。然古來諸註家。徒舍<sub>二</sub>冒首<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>論。若偶議<sub>三</sub>其義<sub>一</sub>者。纔々取<sub>二</sub>一端<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>領<sub>レ</sub>會全義<sub>一</sub>矣。大綱未明。何緣覈<sub>三</sub>其条目<sub>一</sub>。況於<sub>二</sub>運筆措辭之妙<sub>一</sub>哉。是以往々固<sub>レ</sub>執<sub>一</sub>一<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>顧<sub>レ</sub>前後<sub>一</sub>。強事穿鑿。則亦不<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>管豹摸象之見<sub>一</sub>矣。故欲<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>者。無<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>誦全篇<sub>一</sub>而誦<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之。今審<sub>二</sub>通篇<sub>一</sub>於<sub>二</sub>其章句<sub>一</sub>相類似者務更變<sub>三</sub>其辞令<sub>一</sub>人易<sub>二</sub>辨識<sub>一</sub>。且語勢利便。猶<sub>三</sub>河走下<sub>レ</sub>流。玉軫<sub>三</sub>盤內<sub>一</sub>。是作者之意亦在<sub>レ</sub>使<sub>三</sub>學者自易<sub>二</sub>記誦<sub>一</sub>也。間有<sub>三</sub>後人所<sub>レ</sub>攙々入<sub>一</sub>。舌覺梗澁。由<sub>レ</sub>是判<sub>二</sub>真偽<sub>一</sub>亦彰々矣。余之不敏。素無<sub>二</sub>卓越發明之見<sub>一</sub>。豈有<sub>二</sub>意於伝註<sub>一</sub>哉。唯平生對<sub>二</sub>病苦<sub>一</sub>於見<sub>二</sub>證行技之難<sub>一</sub>。輒始有<sub>レ</sub>諳<sub>二</sub>記是書<sub>一</sub>之志<sub>甲</sub>。而延招來往。未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其暇<sub>一</sub>。因抄<sub>三</sub>書於摺扇<sub>一</sub>。路上誦誦。久<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>罷。髣髴如<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>文法之要<sub>一</sub>者。蓋務誦<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>解<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>。然而有<sub>レ</sub>時遊<sub>三</sub>心於<sub>二</sub>書外<sub>一</sub>。又從<sub>レ</sub>外窺<sub>レ</sub>內。從容玩<sub>レ</sub>索書中趣意<sub>一</sub>。是余積歲誦誦之法也。今也遂<sub>レ</sub>迹於<sub>二</sub>丹霞幽栖<sub>一</sub>。栞書送<sub>二</sub>殘年<sub>一</sub>。因顧<sub>レ</sub>念嘗所<sub>レ</sub>得。遂不<sub>レ</sub>忍<sub>二</sub>棄置<sub>一</sub>。試記<sub>レ</sub>之。以俟<sub>二</sub>高明之正<sub>一</sub>焉。非<sub>三</sub>敢謂<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>作者之意<sub>一</sub>也。且以余臆見<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>他人之說<sub>一</sub>不同暫存焉。以供<sub>二</sub>後進之參見<sub>一</sub>而已。書名<sub>レ</sub>円機者即標<sub>二</sub>縱横幻變機巧円転不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>窮之妙<sub>一</sub>也。

弘化丁未孟夏朔日備前岡魯昌平書<sub>二</sub>於兒洲丹霞幽栖<sub>一</sub>

跋は今略しておくが「岡君与余往来相驩殆三十年」とあり備前竹恵廬が撰する処である。此の竹氏は姓を脩したものとと思はる、が何字を脩せ

るの今知る事を得ぬ。此人も多分医家と思はるれど其伝を得ない。又山田方谷が物せる碑陰記によれば仲神宇内は下津井に來つて施療せりと見ゆ。而して「蓋示<sub>レ</sub>君以<sub>二</sub>其実効<sub>一</sub>也。君於<sub>レ</sub>是業大進」とある、此の事実を確かめたのであるが未だ其の時を得ない。もし知り給ふの君子有らば御教示にあづかりたい。以上にて終るのであるが、余りにも趣味索然たる心持がする。そこで当文庫に収蔵せる小石元瑞の消息が一通ある。浦上春琴に宛たものである。其の内容がかなり面白い上に元瑞、否當時の医者的心持が窺はれるので其を添へて置く事とした。

○

昨夜は清興例之深更に相成大分草臥申候。老兄如何。扱東都行画御謝菲薄に御座候得共呈申候。御落手可被候。東都へ御落手書遣し度候間一寸御認可被候。先は右迄草々頓首。十二月廿二日。

尚々飛珊校書（○飛珊は校書の名なるべくヒサと云ふを洒落たのであらう。校書は芸妓の異称）病氣診察頼度申候。僕は彼辺之治療不致は、老兄も御存之事に御座候へ共、可憐生、断も難申、診察之上薬相望候は、随分遣し可申候。診察計ナレバ勿論何之事も無き事ニ御座候得共治療致候得ば、何卒老兄之御頼に仕度候間今日校書が貴家へ参候而、野生も参ルト申様之事に御座候ハ、老兄が一寸見テヤツテクレと御申可被下候。ソレニテ宜御座候。随分治療ニテモ可致遣候。度々見舞ニ参ルナドハ得参り不申候。乍然野生分ケ様之事申上候様とは必々御申被下間布、但老兄之御心付ニ而之様に可被成

候ハ、所詮ゴテ、二而分り兼可申や。大抵御推量可被下候。勿論野生も昨夜見テヤロト約シ置候故、見テヤラヌハ悪ク御座候間若野生も今日貴家へ参ルト云ヤウナルナラバ野生之不参中ニ小石二見テモラウヤウニ聞タガ、頼デヤロカト御申置被下、野生之参候上ニ而御申出し可被下候。酒之上之座ナリニ而格別望ニモ無之候は、ソレニテヨシ。野生へ御申出し不被下候而宜御座候。又野生之参ルト云ヤウナリニテモナク時刻ガ早キカ、又ハ一寸参候事ニ而直ニ帰ルト云ヤウナリニ御座候ハ、御申越ニは不及、左様之コデ、モ何もなし。但昨夜何時ニハ手ガ明ク抔申居候故、若や野生も御話ニ参ルト云ヤウナリカト存候而例之精細ニ相成候。呵々。

春琴様 元瑞

御畧答可被下候

小石元瑞が度々芸妓の処へ往来すると評判が立つては困ると思ふ心づかひもこもれるなるべし呵々

(補注) この項「備作医人伝」を参考にして校訂した。

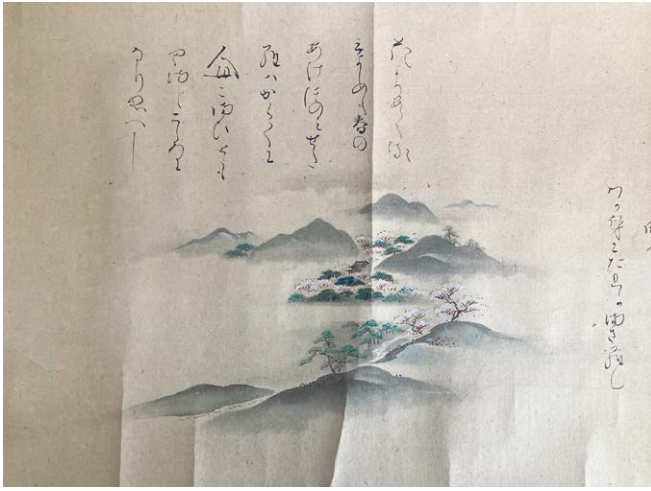
41 ふうらにこもりて(18)  
画賛二川相近今様歌絵巻

大東亜戦の初つかたにや有りけむと覚えるが日本精神の何とか云ふ表題の本を文部省が出版して配布した事が有った。其のうちに

花より明くる、みよしの、春のあけぼの、見たせば、もろこし人も、こまびとも、やまと心になりぬべし

と云ふのが載せられて、頼山陽作としてゐた。編輯の会議の折か、或は原稿を作製して、其の關係者諸先生に見て貰はれたのか、其の辺の事は聞きもしたが、是れは山陽の作では無く、二川相近スケチカの吟であるからとさる先生が注意せられて、少なくとも作者に就ては考慮すべきで有るとの事であつたが、世間では山陽の作として伝はつてゐるので、其点斯る俗書(少くも宣伝書)には名の通りのよい方を好む処から、山陽の作とふるとおぼめかせて載せる事になつて、其で世に出た。元来此の作者の二川相近なる事は知る人は知つてゐた筈であるが、明治十一年七月出版になつた加藤熙氏が編輯した「古今今様歌」と云ふ本に作者を山陽として載せられてゐる。此の書の出版人は吉岡保道と云ふ人で岡山県士族と奥書に有つて、発行所は東京神田の聚星館であつた。此の本も今は反古どもになつたと見えてさうざらに見受ける本でもなく、我が県人の出版で有るから少し解題めくものを書いて置くのも無用ではあるまい。先づ漢文の自序で、支那の「詩云、琴瑟友之、鐘鼓樂之」とか、禮記の「君子無レ故、琴瑟不レ離レ側」などを引きて、其の音楽の重んずべきを云ひ、「今也海外諸邦、亦皆有二樂曲、使二幼者必習之是亦自然之道也」と云ひ、日本大小学校でも此教が有る。日本にも催馬樂、朗詠等の遺音があるが幼学に施す事が出来ないから今様歌を採つて幼童に授ける。世に育兒弄翰之歌等有るが「過俚」と云ひ、其に代ふるので「足三以繼二先王之遺響、而美二天下之風俗」と水戸派の儒学者らしい考を以て編せられたので、本居豊顛の序も添つてある。猶編者の附言に昔かき集めおきし一卷が有つたが取り失つたので心に覚えしを書きあつめたから誤も有

らうと云つてゐる。扱て「抑今様の古事は紫式部の日記清少納言の枕草子大式の三位の狭衣その外体源抄百練抄建曆御紀古今著聞集梁塵秘抄口伝集萬葉集等にも数々みえぬれば猶本書に就て正してよ」と一寸今様史めく事を記し、空也和讃の類はあまり仏めき筑紫琴の曲、いたく煩しくなまめきたるは省きぬ。とことわつてゐる。猶跋を「知恩院主、古経堂主人」が添えている。此人天下の古書通、鵜養徹底で古経題跋の著者である事は申す迄もあるまい。



画賛二川相近今様歌絵巻（正宗文庫蔵）

本書巻頭は菅公の若菜の詠

そのふの梅の、追かぜに、我すむ山も、春めきぬ、かど田の雪も、むら消て、若菜つむべく野はなりぬ。

次は高野大師の「いろは歌」其から次々にて慈鎮和尚の四季曲に及び、

春

春の弥生のあけぼのに、よもの山辺を見渡せば、花かざりかも白雲の、かゝらぬ峰こそなかりけれ。

等々に及んでゐる。思ひめぐらせば私が七、八つの頃、丁度今から七十年程前に小学校で教へられて唱つた歌である。此れが六家集中の拾玉集に収録せられてゐる慈鎮和尚の今様で有る事を知つたのは和歌を研究しかけても其処迄たどるには随分年がたつた。斯る家集に今様歌として採録せられてゐるのは早い方であらう。蕃山先生の

雲のかゝるは月のため、風のちらすは花のため、くもと風とのありてこそ、月と花とはたふとけれ

人はとがむもとがめじ、ひとはいかれどいからじ、いかりとよくを捨てこそ、つねに心のやすけれ

と云ふのも採録せられてゐる。

さて前がきが長くなつたが、我が文庫の貴重なるものに二川相近の今様の絵巻物がある。絵は衣笠守由で賛の今様も序跋も相近翁の美はしい自筆でものされてゐる。此巻物の名は何とも書かれて無いから假に、「今様歌」として扱つてゐるが、「二川相近風韻」と云ふ書によるに相近の今様集に「鳴の羽根かき」と云ふ書がある。其れに近い物と思はれる。

然し此の今様集「鳴の羽根かき」の写真が一頁出てゐるのを見ると、歌の肩に六十二・六十三・六十四と三首が、一首二行に書かれて番号が打たれてあるから、是れは画と賛とになつてゐないと見える。(多分は歌のみと見える)、文庫のは衣笠守由の画であつて、其の画一つに一首賛せる形に成つてゐて、紙は唐紙半切を横にして書かれてゐる。おほよそ尺に一つ位の割である。巻頭に自序、其から歌、巻末に衣笠守由の落款と捺印が小書され、其次に自跋が有り、次に青柳種磨(此磨の字は、花押風で有るから必ずとは云へぬが、多分種磨ならむ。種磨の子に種春がある。其も相近関係者である)の奥書が有つて、立石氏に請はるゝまゝに添えたと云ふ事が記されてゐる。

時は文政八年五月末とある。相近五十九歳にあたるが、此奥書は或は後に書添えられた物かも知れぬ。「風韻」に「相近作画人、今様歌」と云ふ写真が一枚載せてある。其の様子が文庫の巻物と似てゐる。さて「鳴の羽根かき」は五十六首(石橋元啓本六十八首)と説明せられてゐるが文庫のは五十四首で有る。複刊「鳴の羽根かき」の歌は一首を除き文庫のと同じ歌であるが順序は、文庫の方で述べると

のきばの木々の紅葉々は、にはのにしきとちりはてぬ。枝もる(守)かき(柿)のいろはへて、夕の山こそあらはなれ

を巻頭歌として順序を追つて書いて行つて十八首

花よりあくるみよしの、春のあけほのみせたらば、からくに人もこまひともやまとこゝろになりぬべし。

迄行つて、其から

霞になれるおほぞらは梅の匂ひの行末、朝日にきゆるしら雪はきよ  
たきかはのなみの花。

の歌に戻つて逆に前へくと進んで行つて

ちよのふるみちふりぬれど、むかしのあとはのこりけり、は、ごす  
みれのひまごとに、さ、みづはしるせりかは

で終つてゐる。「鳴の羽根かき」の巻頭歌が文庫本の巻末に成つてゐるわけだ。その内で

武士よ、く聞け、し、ふんしんこらんじう、(○獅子奮迅虎乱入)  
もみちがさねや八重桜、しばしがほどもおこたるな。

の一首が無くて

やそとものをもいとまあれや、けふもゆみいりくらすなる。のどけ  
きみよの花ざかり、とものおとさへのどけき。

と云ふ一首が入つてゐる。又「花よりあくる三吉野の」以下十二首は文庫本には無い。集外雑詠はもとより無い。集外雑詠中に

嶺の風か松風か、尋る人の琴の音か。こまをひかへて聞ほどに、つ  
まおとしるき想夫憐

は古今今様集に作者不知として「尋る人の」が「こひしき人の」となり、「駒をひかへて聞ほどに」が、「駒をとめて、聞からに」と成つてゐる。

改作又は誤記せられて採録せられてゐる。又今様集に

おなしこといふ老が身ををかしと人はいふめれど、君は千代ませ  
チヨニ 八千代ませ、きみはちよませ八千代ませ

詠人不知の歌として採録せられてゐるが、是又相近の作にて傍に片假名

にて記したのが原作である。

此の相近の今様には結句の四言になってゐるのが多い。例へば

のべの秋風身にしみて、うづらなくなる。ふかくさや、ふけゆく秋  
の山のはに、むかしながらのみかづき

月まつほどのなぐさめに、のちのゆふぐれ見わたせば、す、きおし  
なみほにいで、をしかのこゑさやけき。

かすめる空になきつれて、今朝立かへるかりがね、わさだかりほす  
をやまだの、秋のちぎりなたがへそ

と云つたやうなのが五十四首の中に二十一首もある。かゝる例は他の人  
のにも有りはするがこんな多いのはめづらしい。相近が好んだ形なの  
で有らう。四句のはてる四字の句が多いのも注意すべきである。猶佳作  
と覚ゆるを数首抜き出て、御清覧に供へること、しよう。

こまのわたりのうりつくり、うりをひとにとらせじと、もるよあま  
たになりぬれば、うりをまくらについねたり。

しぐれの雨にぬれくゝて、あてなるいろのむらもみち、こんとちぎ  
りしみやこびと、あすのこはるなすぐしそ。

神の祭も事はつるやはたのさとの秋のくれ、月かけほそき山のはに  
いまこそきなけはつかり。

と云つたやうなものである。巻物は大体絵の上部にちらし書にして実  
に見事に書かれてゐる。さる斯道の大家が来庫せられて見られて、是れは  
未来の重美だ、愛護し給へと云つてくださった。序跋等も掲げたいが、  
余り長くなつたので略する事にしたが、写真を添て御紹介せぬので物足

らぬ心地をせられるであらう。相近風韻に見えたる伝記によつて翁の小  
伝を記して筆をおく事とする。

二川幸之進相近（十八歳頃までは相親）松蔭と号し、又嬰風洞主人と  
も云つた。父は相直。福岡藩士にして世々庖厨を司つた。相近明和四年  
十一月二十四日福岡榑木屋町の家に生る。聰明穎悟、六・七歳にして字  
を知り、亀井南冥の門に入り十歳にして詩文をものせりとぞ。二十歳の  
頃田尻梅屋の門人となり和歌を学ぶ。相近書道を研究し極めて巧みなり  
しを以て寛政六年（二十八歳）御料理人の家職を書字師に改められた。  
天保七年九月二十七日生家にて病死す。享年七十。歌道の門人に大隈言  
道ある事は人のよく知る所である。

（本文終）



索引

ア

- 青柳種春 41
- 青柳種磨 41
- 赤松勲(蘭室) 4
- 赤松鴻(國鸞) 17
- 秋山三六二(秋山書店) 4、28、29
- 浅野由隆(本左工門) 6
- 足利尊氏 33
- 安倍仲麻呂 11
- 阿部隆一 28
- 雨夜の燈 15
- 新井白石 4、23
- 荒木田久老 10
- 有元稔 22、23
- 在原業平 4
- 在原行平 11
- 合鏡(高橋正澄著) 21
- 安藤年山 12
- 安養軒 ↓中西玄隆
- 伊木頼母 36、37
- 池内奉時 7
- 池田可軒 23
- 贈池田丹波守書(熊沢蕃山作) 39
- 池田継政 15
- 池田綱政(待従、少将、曹源公) 4、16、17、30、36、37、39
- 池田綱政の紀行 ↓曹源公東路記
- 池田輝録(丹波守) 37
- 池田利隆(興国公) 16
- 池田政言(信濃守) 37
- 池田光政(烈公、芳烈公、少将、将君) 3、4、26、28、34、36、37、39
- 池田光政墓表(小原大丈軒自筆) 37
- 池田宗政(寿国公) 4、15、16
- 池田由孝(主水、國老) 39
- 池田由成(出羽、國老) 26、39
- いさらゐ日記(木下幸文著、文化四年) 7
- 『伊澤蘭軒』 7
- 移山亭 7、8
- 石川丈山 18
- 石川昌勝(伊勢龜山城主、主殿頭) 33
- 石丸定良 6

泉仲愛（熊沢蕃山の弟、八右衛門）		37、39
石上枕辞例（高橋正澄著）	21	
板倉重矩	33	
板倉重昌	33	
一条輝子（教輔室、池田光政女）	36、37	
一条姫君 ↓ 一条輝子		
一条道香	23	
一話一言（大田南畝著）	30	
一誠堂	28、29	
伊藤仁齋	17	
井上喜復	20、21、38	
井上金峨（立元、文平）	5	
井上四明（潜、仲龍、多仲）	4、5、6、16、17	
井上南臺（湛、子存、新藏）	5	
井上通泰	3、4、6、7、8、9、10、17、19、20、22、32、35、38	
井上蘭臺（子叔、通熙）	5	
井上蘭亭先生行状（井上四明作）	5	
今鏡	24	
今田彌助	16	
ウ		
初学（賀茂真淵著）	11、12	
鵜養徹定	41	
宇佐美惠（子廸、惠助）		6、16
宇保俊直	33	
浦上春琴	40	
工		
永菴 ↓ 小出永菴		
詠草奥書（香川景樹作）	12	
慧遠法師	18	
蝦夷日記（児山紀成著）	19	
江田忠（子順、拙齋）	17	
江見平兵衛	17	
才		
王元美	5	
應兵記（南條淡庵著）	3	
― 湯浅元禎自筆写本	3	
大江喜尚	20	
大鏡	24	
大鏡、増鏡目録（土肥経平自筆）	23	
大川良平	16	
正親町三条公積	23	
大隈言道	41	
大平忠叔（龍岳、思学亭）	26、39	
太平経忠（嵐夕、更月、翠園堂）	14	

大藤高雅	6	小野務(伯本)	7
大神眞潮	↓谷眞潮	小野達(泉藏)	7
大森柳江	22	小野久彦	7
岡嶋可祐	27	小野正雄	7
岡昌平	40	小野正邇	1
緒方洪庵	40	小野節	7、12、31
岡田眞	14、22、27	小原正休(大丈軒正義の父)	32、36、37
岡田正夫	31	小原大丈軒(正義、石松、弥次平、庄太郎、善介、伯実)	26、28、32、33、34、36、37、38、39
岡田希雄	35	小原正長(正義長男、如瓶、大藏)	37
岡爲直	14	沢瀉久孝	10
岡俊直	14	尾山篤二郎	14
岡西惟中	6	力	
岡本胤及	1	香川景樹(桂園翁)	7、8、10、11、12、21、22、38
『岡山縣人物傳』	7	香川修徳	17
『岡山縣人名辞書』	4、16、37	香川宣阿(梅月堂)	6
『岡山市史』	37	柿本人丸	2
『岡山方言』	17	学窓簡記(萬波俊休著)	26
沖森書店	14	―萬波俊休自筆本	26
荻生徂徠	5、17	―萬波醒廬筆本	26
小倉実起	34	画賛二川相近今様歌絵卷(衣笠守由画、二川相近自筆)	41
小篠敏(道冲)	17	糟谷長閑	24
織田信長	33		

加世次春	37	川井正直 (与、与左衛門、東軒翁)	33、34
歌仙家集新正 (高橋正澄著)		河内屋八兵衛	17
歌仙抄 (下河辺長流著)	2	河本立軒 (儼、子恭、忠五郎、又七郎)	5、6
—寛文六年西村三郎兵衛刊本	2	韓客詩砭・震沢詩文砭 (附、国学觀菊詩集、小原大丈軒自筆)	37
—萬治二年刊本	2	菅公	4、41
片山重信	21	官制沿革図考 ↓本朝官制沿革図考	
勝安芳 (海舟)	27	韓退之	5
勝田新左衛門 (赤穂義士)	26	鮑屠集	1
桂又三郎 (文献書房)	29	『関八州名墓誌』 (時山彌八著)	5
花土文太郎	16	閑話雑録 (大平忠叔著)	39
加藤熙	41	キ	
假字直道 (高橋正澄著)	21	紀伊夜話集 (土肥経平自筆書入本)	24
狩野玉信 (素閑、志磨之助)	30	記紀縫結抄 (高橋正澄著)	21
亀井南冥	41	記紀物名考 (高橋正澄著)	21
賀茂季通 (季通朝臣)	6	桔梗舎和歌集 (菅沼斐雄の家集)	19
鴨長明	27	机上日記 (羽田野敬雄作)	1
賀茂眞淵	9、10、11、12、13	喜撰法師	12
烏丸光胤	23	北小路俊真 (主税公)	22
からにしき (高橋正澄の家集)	21、38	北小路俊光 (石見)	22
川合元	4	北村賢次 (元助)	19
川井叔三	34	衣笠守由	41
川合春川	4	木下幸文	7、8、9、10、11、12、13、19、20、21、38

木下幸文の古今集の注	↓古今集愚案	
木下幸文の土佐日記の註	↓土佐日記	
木下幸文の日記	7	↓いさらぬ日記
木下幸文の百人一首の注		↓百人一首註釈
木下幸文の萬葉集の釈	8、9、10	
紀貫之(紀氏)	2、13、27	
紀友則	2	
木畑定直	1	
吉備愛国百人一首	20	
『吉備歌林名鑑』(有松埴雄編)		25
吉備國歌集	↓類題吉備國歌集	
吉備眞金集	↓類題吉備國歌集	
吉備和歌打聞(岡俊直白筆本)		14
吉備和歌集(浅野由隆編)		6、14、25
崎門学脈系譜		34
牛渚唱和集		5
堯恵(藤坊)		26
堯孝		26
『享保以後大阪出版書籍目録』		40
杏林内省録(緒方惟勝著)		40
銀杏道士	↓岡昌平	
近思録		32
『近世漢学者著述目録大成』		4
金葉集	25、35	
―三奏本	35	
―正保版の二十一代集本		35
―初度本	35	
―伝兼好法師筆本		35
―伝良経筆本		35
―二度本	35	
―流布本八代集本		35
『金葉集の研究』(松田武夫著)		35
ク		
空海(高野大師)		33、41
弘決外典鈔(宝永六年刊)		31
草加定環(蕃山六世の外孫)		27
楠木正成		33
窪田空穂		10
熊谷直好		7、8、11、19
熊沢淡庵	↓南條淡庵	
熊沢蕃山(伯継、了介、息游)		1、6、16、17、18、22、24、27、34、37、39、41
熊沢萬女(蕃山妹)		17
ケ		

桂園翁 ↓香川景樹

『桂園叢書』 7

経誼堂文庫（河本立軒の文庫） 5

契沖 2、8、9、10、12、31

『契沖全集』（朝日新聞社刊） 31

元亨釈書 25

言行録（大君言行録カ） 24

源三位頼政家集（池田光政筆） 28

源氏外傳（熊沢蕃山著） 5、27

―湯浅常山自写本 5、27

顯伝明名録 26

玄賓 25、26

源平盛衰記 24

玄隆 ↓中西玄隆

コ

小石元瑞 40

小出永菴 32

孝経 32

光孝天皇 12

幸田露伴 30

皇統称名考（高橋正澄著） 21

高野大師 ↓空海

小神富春 19

小神富春の家集 ↓芒園歌集

古経題跋 41

『古今今様集』（加藤瀨編輯） 41

古今集 4、11、22、27、35

―清輔本 11、27

―元永本 11

―高野切（伝貫之筆） 27

―俊成筆昭和切 11

古今集打聽（賀茂眞淵著） 11

古今集愚案（木下幸文著） 11

古今集正義（香川景樹著） 11

古今集遠鏡（本居宣長著） 11

古今集餘材抄（契沖著） 11

古今六帖 11、13

古今六帖未考解（高橋正澄著） 21

古今六帖考（高橋正澄著） 21

古今和歌集南天莊講義（井上通泰著） 22

国学観菊詩集 ↓韓客詩砒・震沢詩文砒

国語本義（高橋正澄著） 21、38

国字定原（高橋正澄著） 21、38

『國書解題』（佐村八郎編） 4、18

ゴザル本	31	西行	31、38
古事記	38	碎玉話 ↓ 武将感状記	
古事談	25	齋谷先生	34
語助訳辞 (松井河樂著)	5	才子必読	16
御成敗式目抄 (永正拾六年書写本)	28	左逸 (王世貞撰)	3
後藤達 (左一郎、有成、養菴)	17	齋藤琳琅閣	22
後藤省 (達の子)	17	坂上是則	2
言靈古言考 (高橋正澄著)	21	佐久良東雄	31
言靈字義考 (高橋正澄著)	21	櫻井兀峯 (元孟、夫右工門)	14
言靈名義考 (高橋正澄著)	21	鷓鴣春齋	40
詞の玉緒 (本居宣長著)	9	佐々木信綱	2、19、20、21、38
近衛内前	23	さゝのした柴 ↓ 亮々草紙	
『古本節用集の研究』 (橋本進吉著)	28	定直 ↓ 木畑定直	
古名録	30	亮々草紙 (木下幸文著)	7、8、9
児山紀成	19	餐霞館 (土屋秀明の館名カ)	6
混成堂 ↓ 岡昌平		三韓東郭 ↓ 李重叔	
近藤西涯 (篤、子業)	15、39	三玉挑事抄 (野村尚房著)	14、17
近藤守重 (正斎)	18	三代地名抄 (高橋正澄著)	21
サ		三代枕辞例 (高橋正澄著)	21、38
『西鶴俳諧研究』 (山田孝雄・阿部次郎・小宮豊隆ほか編)	31	山道紀行 (松井河樂著)	5
西華坊臬日記	25	三備詩選	5、17
西帰紀行 (松井河樂著)	5	三畧抄 (黄石公、室町期の写本)	28

シ

四大人の論(木下幸文作)	10	示蒙句解(中村惕斎著)	34
字音假名用格	2	下河邊長流	2
字音大概(高橋正澄著)	21	下濃宇兵衛	39
字音大辨(高橋正澄著)	21	周易(王弼注、室町期の写本)	28
四家雋(荻生徂徠著)	5、6	集義外書殘簡(蕃山自筆)	27
―湯浅常山書入本	6	拾玉集(六家集の中)	41
鹿田静七(鹿田書店)	21、23、38	集義和書	18
四季曲(慈鎮作)	41	寿国公 ↓ 宗政	
鳴の羽根かき(二川相近の今様集)	41	朱子	34
―石橋元啓本	41	出定後語(富永仲基)	31
子業 ↓ 近藤西涯		出定笑語(平田篤胤著)	31
蕃山了介 ↓ 熊沢蕃山		俊休夜話(萬波俊休著)	26
志士清談	17、18	荀子	16
慈鎮和尚の今様 ↓ 四季曲		―享保刻の京都版本	16
信濃君 ↓ 池田政言		春湊浪語(土肥経平著)	23
『澁江拙斎』	7	―塚本吉彦旧蔵本	23
詩法要略(松井河樂著)	5	―経平自筆清書本	23
島村鐵彦	4	―富岡鉄斎旧蔵本	23
島村知章	17	松翁 ↓ 貫名松翁	
志水主計	19	小学	32
清水比庵	29	傷寒論圓機(岡昌平著)	40
		招月亭詩鈔(竹雨斎詩鈔、小野達の詩集)	7



昭憲皇太后	22	新撰和歌集	11
常山紀談	3、5、24	震沢詩文砭（小原大丈軒自筆）	37
常山紀談の附録 ↓ 雨夜の燈		神典皇摸	1
常山先生聞書	5	新版大系函（経平自筆書入本）	24
常山文集（徳川光圀編）	4	神名考（高橋正澄著）	21
常山樓集（自筆原本）		ス	
— 自筆原本	4	垂雲軒和歌集	20
— 天明四年刊本	17	垂雲集	20
常山樓筆餘	4、17	随所師説（香川景樹著）	7
松泉堂	38	清園大人日記	20
昌平岡君碑陰記（『山田方谷全集』所収、三島毅代作）	40	清園後草	21、38
昭和天皇	23	清園詞草（高橋正澄の家集）	21、38
続古今集	25	菅沼斐雄	7、19、21、25、38
続日本紀	24	『菅沼斐雄歌集』（正宗敦夫編）	19、31
諸藩藏版書目筆記（東條耕編）	4	菅沼斐雄の家集	19 ↓ 桔梗舎家和歌集・花の雫
白河法皇	35	菅沼斐雄の日記	19
神詠製歌考（高橋正澄著）	21	鈴鹿三七	7
真教坊（洛僧）	32、33、36	鈴木長左衛門（二条城の留主）	34
心月詞花帖（高橋正澄の家集）	21、38	セ	
心月洞 ↓ 高橋正澄		静嘉堂文庫	21、35、38
新古今調（振）	4、35	勢語臆断（契沖著）	31
塵室草露（高橋正澄の家集）	19、20、21、38	— 享和三年刊行の五冊本	31

―享和二年版の四冊本（初刷本）			
井純卿 ↓井上金峨			31
成伯圭（朝鮮大学士）		37	
関松窓（脩齡、君長、永二郎）		5	
赤城風雅		16	
拙斎西山先生詩鈔（菅茶山編）		31	
節用集	28		
―伊勢本	29		
―大谷大学図書館本		29	
―古写本	29		
―饅頭屋本	28		
せみがの（高橋正純家集）		21	
仙覚	8		
先君子與仲龍書（湯浅常山書簡集）			5、15、16、17、18
ソ			
曹源公東路記（池田綱政著）		28	
曹源少将公 ↓池田綱政		16	
滄溟集（湯浅常山書入本）		5	
素閑 ↓狩野玉信			
続心月詞花帖（高橋正澄の家集）		21	
『続蕃山考』（井上通泰著）		17	
息游 ↓熊沢蕃山			

園のたかゞや（高橋正純家集）			21
夕			
大学		32、36	
大丈軒集詩脱漏		37	
大丈軒集 ↓大丈軒文集			
大丈軒譜（年譜）		32、33、34、36、37	
大丈軒文集		32、33、34、36、37	
大丈軒別集		37	
『大日本歌書綜覧』		21	
内裏名所百首建保三年十月廿四日		26	
高田馬治		4	
高田維亨		17	
高野伝七		36	
高橋残夢大人集 ↓清園詞草			
高橋正澄（残夢）		4、7、13、19、20、38	
高橋正澄の歌日記 ↓清園大人日記			
高橋正澄の家集 ↓唐にしき・心月詞花帖・塵室草露・清園後草・清園詞草・残の夢・やまとにしき			
高橋正純（正澄子）		4、21、38	
高橋正純の家集 ↓せみがの・園の高がや・大和なでしこ			
高見章夫		16	
竹内式部		23	

武田温親 21  
 大宰春臺 5、16  
 田尻梅屋 41  
 田代直 39  
 橋幸春 38  
 田中道磨 8  
 谷口重以 1  
 谷眞潮 8  
 玉勝間 (本居宣長著) 31  
 玉の小琴 (本居宣長著) 9  
 靈之宿 (高橋正澄著) 21、38  
 田山敬儀 31  
 澹齋 ↓長沼宗敬  
 澹齋先生畧譜 附佐枝氏傳 (藤本鉄石自筆) 1  
 丹波君 ↓池田輝録  
 親長記 24  
 竹雨斎詩鈔 ↓招月亭詩鈔  
 竹恵廸 (備前) 40  
 中庸 32  
 仲龍 ↓井上四明  
 澄月 (垂雲軒) 20

澄月上人歌集 20  
 | 信州桃澤家本の写し 20  
 澄月の家集 ↓垂雲軒和歌集・垂雲集・澄月上人歌集  
 澄月法師千首 20  
 『長流全集』(朝日新聞社刊) 2  
 塚本吉彦 4、23、24  
 津田永忠 (重次郎、左源太) 17、28、37、39  
 土屋秀明 6  
 経平自筆詠草 23  
 津伯子 (津田永忠カ) 28  
 鶴園季良 19  
 貞明皇后 22  
 荻徂徠 ↓荻生徂徠  
 徹山 ↓武者小路実純  
 田子漢 ↓八田憲章  
 天智天皇 12  
 田ステ女 2  
 陶淵明 18  
 東行日記 (松井河樂著) 5

東山日記（松井河樂著） 5  
 湯常山先生傳略（赤松勲作） 4  
 湯土問答 17  
 時山彌八 5  
 徳川家康 3、24、33  
 徳川頼宣（南龍公） 24  
 讀荀子（荻生徂徠著） 16  
 徳大寺公城 23  
 徳富蘇峰（蘇峰老） 25、27、31  
 土佐日記  
 | 寛永版本（素本） 13  
 | 爲家轉写嘉禎二年本 13  
 | 貫之自筆本 13、27  
 | 実隆轉写本 13、27  
 | 前田家藏定家本 13  
 | 宗網轉写本 13  
 土佐日記（木下幸文の注） 13  
 土佐日記考證（岸本由豆流著） 13  
 土佐日記抄（北村季吟著） 13  
 土佐日記創見（香川景樹著） 13  
 土佐日記附註（人見卜幽軒著） 13  
 土佐光音（常覺） 23

土肥経平 4、17、22、23、24  
 土肥経平の詠草 ↓ 経平自筆詠草  
 富岡鉄斎 23  
 友鏡（高橋正澄著） 21  
 外山且正 22  
 豊臣秀吉 33  
 鳥居小路経厚 26  
 十  
 内藤中心 8  
 仲神宇内（以憐、琴溪） 40  
 中西玄隆（安養軒） 25、26  
 中西喜内（菅沼斐雄弟、頼完） 19  
 長沼宗敬（澹齋） 1  
 中村惕斎（七次、之欽） 33、34  
 『南紀徳川史』 4、24  
 南條淡庵（權八郎、猪太夫、正興、百介） 3  
 南條正興（八郎、權八、猪太夫） 3、6、17  
 南條正修（正興の子、八郎） 3、6、17  
 南條正瞭（百介） 17  
 南條正業（七郎勝蔵） 17  
 南條正路（七郎直之丞） 17  
 『南天莊雜筆』（井上通泰著） 3、6

難波抱節	40	野崎左文	30
南龍公 ↓徳川頼宣		野田道直	37
二		野々口正武	31
西蝦夷日記(松浦武四郎著)	31	野村尙房(權六郎、一枝軒)	14、17
西下経一	35	八	
西山拙斎	23	梅翁 ↓西山宗因	
西山宗因(梅翁)	1	萩原廣道(濱雄)	12
廿四孝小解(熊沢蕃山著)	22	橋本進吉	28、29、31
二十四孝評(熊沢蕃山著)	27	芭蕉	14、25
日知録	16	畠山健	19
二砵草 ↓韓客詩砵・震沢詩文砵		羽田野敬雄	1
日本紀略	24	八田憲章(子漢、龍谿山人)	5、15
日本古典全集	35	服部南郭	5、16
日本書紀(日本紀)	9、23	花の雫(菅沼斐雄の家集)	19
『日本書誌学の研究』(川瀬一馬著)	28	浜和助	23
又		早田元道	23
縫結大概(高橋正澄著)	21	原澄治(倉敷)	4
額田王	8	原立仙(真教坊カ)	32
貫名菘翁	7	伴蒿蹊	31
ノ		『蕃山全集』	17、18、27
野口寧斎	7	ヒ	
残の夢(高橋正澄の家集)	21、38	東久世通積	23

『備作医人伝』	25	平田篤胤	10、31
麥川師宣	30	フ	
備前孝子傳(湯浅常山著)	7	深草元政	6、34
備前故執政大夫熊澤先生行状(湯浅常山作)	17	袋草紙	35
備前名所記(土肥経平自筆)	23	武家義理物語(井原西鶴著)	18
一葉草(湯浅常山詠草)	4	藤井尙澄	6
人見璣邑	27	富士谷成章	17
日野資枝	23	藤本鉄石	1
日比正甫	18	武將感状記(南條淡庵著、碎玉話)	3
靡蕪園(井上四明カ)	5	藤原定家	13、17、23、26、27
姫井氏(鴨方)	6	藤原敏行	2
百首異見(香川景樹著)	11、12	藤原典寛	19
百首異見摘評(萩原廣道著)	12	藤原通雅	38
非葉選(戸田旭山著)	40	扶桑名画伝	30
百人一句	1	二川相近(幸之進、相親、松蔭、嬰風洞主人)	41
百人一首改観抄(契沖著)	11、12	二川相近風韻	41
百人一首解 ↓百首異見		夫木集	31
百人一首古説(賀茂真淵著)	12	附本 ↓土佐日記附註	
百人一首註釈(木下幸文著)	12	文會雜記(湯浅元禎著)	3、17
備陽記(石丸定良自筆)	6	―五冊本(卷五附録)	3、14、17
平井安兵衛	37	―四冊本(卷四拾遺)	3
平賀元義	7、19	『文学遺跡巡礼』	7

文法要略(松井河樂著)	5		
焚餘稿(湯浅常山の詠草)	4		
へ			
兵要録(長沼宗敬著、藤本鉄石自筆)	1		
ホ			
芒園歌集(小神富春の家集)	19		
—嘉永五年本	19		
—弘化三年本	19		
『北條霞亭』	7		
方丈記	27		
—大福光寺所蔵本	27		
芳烈公 ↓池田光政			
北窓瑣談(橘春暉著)	5		
牧旦集(小原大丈軒著)	33		
卜養狂歌集			
—池田綱政筆本(素閑画)	30		
—成篁堂叢書複製本	30		
細川幽斎	2、11		
発心集	25		
堀内傳右衛門覺書(藤本鉄石旧蔵)	1		
本多作左衛門	24		
本朝官制沿革図考(伊藤東涯著)	16		
マ			
本朝孝子傳 ↓備前孝子傳			
前野貞男	35		
伯繼 ↓熊沢蕃山			
正宗浦二	22		
正宗得三郎	28		
正宗甫一	38		
増鏡(ます鏡)	7、23		
松井河樂(七右衛門)	5、15		
松井簡治	18		
松尾助八	37		
松崎堯臣	27		
松崎君脩(惟時、才藏、觀海)	5、15		
松平新太郎少将 ↓光政	28		
松平信之	39		
松田武夫	35		
松村英一	7		
松村緑	7、8		
窓叢(高橋正澄著)	21		
丸山季夫(静嘉堂文庫)	18		
饅頭屋本節用集 ↓節用集			
萬波俊休(醒廬父)	26		

萬波醒廬(甚吉、俊誠)	16、26	萬葉代匠記(契沖著)	8、10
萬波醒廬日記 26		萬葉地名抄(高橋正澄著)	21
萬葉東語考(高橋正澄著)	21	萬葉縫結抄(高橋正澄著)	21
萬葉考(賀茂眞淵著)	8	萬葉物名考(高橋正澄著)	21
萬葉国字辭解(高橋正澄著)	21	≡	
萬葉国字抄(高橋正澄著)	21	水野宗直	6
萬葉私考(宮地春樹著)	8	三十輻(太田南畝編)	5
萬葉集 8、9、10、22、27		源実朝	13
—天治本 10		源重之	35
萬葉集拵解(香川景樹著)	8	源俊賴	35
『萬葉集講義』(山田孝雄著)	8、10	源眞金 ↓藤本鉄石	
萬葉集古義 8、9、22		木兔集	14
『萬葉集新考』(井上通泰著)	8、9、10、22	三宅道乙	4、36
萬葉集新考(香川景樹著)	8	三宅亡羊	4
萬葉拾穗抄(北村季吟著)	8、9	三宅可三(伯省、衝雪、尙三)	4
『萬葉集總索引』 8		宮下正岑(自然亭)	20
『萬葉集評釈』(窪田空穂)	8	宮田明(子亮)	17
萬葉集僻案抄 9		三輪(謡曲)	25
萬葉集畧解(加藤千蔭著)	8、9	三輪執齋	27
『萬葉書誌学』(前野貞男著)	35	△	
萬葉詞林抄(高橋正澄著)	21	虫明紀行(岡西惟中著)	6
萬葉創解(高橋正澄著)	21	虫明八景	4、23





吉岡保道 41

吉田某 (岡山市の書店) 4

米川操軒 (一貞、幹叔、儀兵衛) 33、34、36

餘齡長律集 (長律集、松井河樂著) 5

ラ

禮記集說補正 (湯浅常山旧蔵) 5

頼山陽 41

蘭臺先生遺稿 (蘭臺遺稿、天明六年序藤蕪園蔵板) 5、16

リ

李于鱗 5

李斎 (西山カ) 32

李重叔 (三韓東部) 5

柳子厚 5

了介 (芥) 先生 ↓熊沢蕃山

兩吟集 (延宝五年深江屋太郎兵衛板) 1

臨泉野草 (松井河樂著) 5

ル

類聚名義抄 9

類題吉備國歌集 (吉備國歌集) 4、6、7、25

類題山家集 38

レ

烈公 ↓池田光政

ロ

論語 32、37

論語小解 (写本、蕃山先生著、草加定環筆) 27

ワ

和歌題百首詩 (松井河樂著) 5

和韓唱酬集 37

協田秀太郎 26